
ジョジョの奇妙な冒険第6部 TO THE NEXT JOJO 「チェンジ・ザ・ワールド」

ガブリガブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョジョの奇妙な冒険第6部 TO THE NEXT JOJO
O「チェンジ・ザ・ワールド」

【Nコード】

N8750M

【作者名】

ガブリガブ

【あらすじ】

一巡した世界で、奇妙な冒険は次のJOJOに引き継がれる。

エンポリオと名乗る少年が、静の世界を変える。

これは、ジョースターの血を引かない、新しいJOJOの物語。

0話

2017年

全ては唐突に始まった。

あの日は雨上がりの空が綺麗で、思わず父さんも「死ぬには良い日だ！」と叫んだ。

冗談じゃない、と母さんが笑う。

いつもより…

そう、いつもより少しだけ気分の良い日。

私とそう年の違わない少年が家にやってきた。

少年はエンポリオと名乗った。

この日から全てを変えていく。

オデオのニキビも

ハイスクールのスター「ジョー」との関係も

いつもうるさいメイド達とも

お喋りなチアの友人と話す昨日のデイズニーチャンネルの内容も

星形のアザが無い私の身体も

全部さよなら。

エンポリオ君が帰った後、流れている筈のない私の血が、この数奇な運命を紡ぎ出すの。

私は部屋を出て、階下の父さんの元へ走った。

父さんはうつらうつらして、母さんがその頭を撫でている。

だから耳元で囁いたの。

「聞いて父さん。次の奇妙な冒険は…」

母さんが驚いた顔をして見ている。

父さんは耳を傾けてくれていた。

窓から差し込む光が二人を照らしている。

100歳を超えた二人は、天使みたいに綺麗だった。

母さんが「続けて？」と促す。

世界を変えるのよ。何も覚えていない父さん、母さん。

いつもより、少しだけ気分の良い朝に、私は宣言した。

「次の奇妙な冒険は、私が引き継ぐことにしたわ！」

0話（後書き）

登場人物

静・ジョー・スター

スタンド名「アクトン・ベイビー」

1話

米国某所

ジョースター家屋敷・書斎

「だから、何度言ったら分かるんじゃ！」

怒鳴り声が聴こえる。

だが声には暖かみがあり、決して人に不快感を与えない。

「誰が『今夜はビート・イット』を買って来いと言った！ワシが欲しいのは『今夜はイート・イット』のレコードじゃというのに！」

「すみませんジョースターさん。なにぶん40年も前のレコードになりますので…」

「ただまあマイケルも10年近く前に死んでしまったし…このレコードは供養と思うか…」

「本当に申し訳ありません。引き続き…」

突然書斎の扉が叩かれる。

続いて「ジョセフ？何怒鳴ってるの？」と、咎める様な声がする。ジョセフは声を落として「とにかく引き続き探してくれ。スピードワゴンの手にかかったらすぐじゃろ？頼んだぞ」と早口にまくし立て、受話器を置いた。

受話器を置いたと同時にギィ、とドアが開く。

一目で老齡と解る女性が入ってきた。

しかし老齢にも関わらず、凜とした佇まいは歳を感じさせない。

「ああ・・・スージーじゃないか・・・それで、どうした？」

悪戯が見つかった子供のように、ジョセフは妻の機嫌を伺った。スージーと呼ばれた妻は夫を鋭く睨み一喝した。

「あれほど財団を私用に使うなって言っただけでしょ!!」

とても100歳を過ぎた声には聞こえない。

先ほどのジョセフのどなり声よりも一回り大きな怒号だった。

「ほれほれ、美人が台無しじゃぞ？」となだめるが、これが更にスージーの怒りに火をつけた。

「80年以上連れ添っていて、まだ学習しないの!? 誰の所為で怒鳴ってると思ってるの!？」

「ほらあくまた若い時みたいにソバカスが浮きますよ?」

これには顔を真っ赤にして、スージーはとにかく手当たり次第の物を投げ始めた。

「こりゃ、辞めるスージー! それは大切なビートルズのレコード盤・・・違った、日本のずーとるびじゃったか、とにかく辞めんか!! ワシの大切なコレクションがッ! それはスリラーの狼男のマスクッ! 今のはターザンのヒロイン役のプロマイド! アあ... もう辞めてくれ...」

泣きそうなジョセフはスージーに懇願するが、未だ怒りの冷めやらぬスージーは、まだ物を投げ続けている。

「いい加減にしてよ!!」

スージーが開けたままの扉から、アジア系の肌をした女性が叫んだ。
髪は黒髪のポニーテール。

顔立ちもアジア人特有の平たい顔。

それにしてもかなり美人な方である。

まつ毛は長く、鼻筋も通っており、その瞳は茶色い。

身長は女性にしてはかなり高い。170センチ位だろうか。

しかしその美人には威圧感があった。

その目付きは鋭く、何かを攻め立てるように口は尖っている。

「二人ともウルサイのよ!!アタシが明日テストだって知っててや
つてるの!?!」

その金切り声は、スージーの怒号より遙かに上回っていた。

これに呆気を盗られた二人は、自分の娘をただ呆然と見ているしかなかった。

「ごめんなさい・・・その、あたし達つたら・・・」

「そんな、スージーみたいな声を出さなくてくれえ・・・」

この一言にキツとジョセフを睨みつけたスージーだが、娘の前では

何も言えない。

「アタシはもう寝るから！静かにしてよね！」

そういうと、ボタンとドアを閉めて、階下へと降りて行った。部屋に取り残された二人は、互いに顔を見合わせる。

「最近あの子も、お前に似てきてやせんか？」

相変わらず一言多いジヨセフを、スージーは音が出ないように、その頬をつねった。

「それにしても・・・」とスージーは呟く。

スージーは嬉しかった。

血の繋がらない自分の娘が、自分と似てきているなんて。

本当の親子以上に彼女には接してきたが、やはり何処かで血が流れていないことを負い目を感じることはあった。

そういう事情もあって、似ていると言われると、普通の親子以上に嬉しい気持ちはあった。

「娘は母親に似る、か」

スージーは噛みしめるように呟く。

娘は養子であることを、引け目を感じているだろうか。

私と似ていると言われても、迷惑がらないだろうか。

そんなことを気にしてしまう。

人間100を超えたって、未だに人の気持ちまでは解らない。願わくば、本当の母親に思っただけの欲しいものだが。

「なあスージー。あの子はいい子に育ったとは思わんか」

「そうね。そう思うわ」

ジヨセフは頬をつねられながらため息をつく。

「お前には悪いと思っている」

「いえ、あの年で子育てするのも楽しかったですよ」

「あの子を育てたのは君だ。ワシはオトモダチ程度にしか遊んでやることしかできなかった。自分で引き取ったと言っのに」

弱気な発言をするジヨセフに、スージーは優しく微笑む。

18年前、この人が日本から赤ん坊を連れて帰った時は驚いたものだった。

まだ隠し子が居たのか、と思わないことも無かったが、承太郎の話はそうではなかった。

以来、時折姿を消すこの娘を育ててきた。

もしかしたらホリイ以上に気を使ったかもしれない。

その娘は美しくなった。

性格は私に似ているという。

今日、部屋に入ってきた彼女を見て、もしかすると私の役目は終わったのかもしれないと思った。

きつと紆余曲折を経て、この娘を育てるために生まれてきたのだわと感じなくもない。

それはスージーにとって嬉しいことだった。

「ああそうだ」とジヨセフが呟く。

「どうしたの？」

「いやなに、明日のテストの答えを調べてやるうかと思って」

馬鹿なことを言うジョセフの頬を、ちぎってやらんばかりにひねりあげて、スージーは出て行った。

頬を押さえながら見送ったジョセフは、しばらくしてから受話器を取り上げて電話を始めた。

・ブツンッ

「ああ、もしもし？ジョセフじゃけれども。明日の娘のテストの解答を調べて欲しくてな。学籍番号がちと解らんのかなが・・・ああ、名前か。静・ジョースターで検索すれば一発じゃろう。いいやホリイじゃない。静だ。ワシの娘じゃよ・・・」

T O B E C O N T I N U E D

2話

アメリカ合衆国 某州

イングリッシユ・カントリー・ガーデン高校

放課後

午前中でテストが終わって、生徒達は教室からゾロゾロ出てくる。

その中を割るように、一人の白人女性が急いで出てきた。

彼女は右を左を見た後、小走りでロッカーへと走って行った。

階段を下りて廊下を曲がると、ロッカーが見える。

そのロッカーの前に、長い黒髪の女性がコソコソしながら立っていた。

それを見て、白人女性はまた小走りに彼女へ駆けよる。

彼女の姿を確認した黒髪は、如何にも見つかった、というような顔を背けた。

「シズカあ~~~~どうして先に行っちゃうのよオオ~~~~」

白人女性はローマの彫像を思わせるような整った顔立ちをしている。しかしその上品な顔立ちに反して、口調ははしゃいでうるさかった。静は彼女とは眼も合わせず、ロッカーで持ち物の整理を続けながら言った。

「シンディ・・・私が急ぎたいの知ってるでしょ？」

シンディと呼ばれた白人女性は、身をよじらせて「だってエエエ〜」と言いながら頬を染める。

静にとって彼女は良い友達だったが、時折その奔放さに疲れること

はあった。

今日なんかは特にだ。

「やあジョージ。送って帰ろうか？」

ホラ来たわ。

静は心の中でうんざりした。

静が二人で話していた後ろに、二人組の男性が歩いて来た。声をかけたのは短髪の白人男性だ。

見るからに自信タップリな佇まいで、夏なのに革パンをはいている。もう一人の男はスペイン系の顔をしており、背丈も声をかけてきた男性より少し高い。

「あらジョー！その……気を使ってくれてありがとう。でも大丈夫よ。ホント」

静は振り返り、ひきつった笑顔を張り付けながらそう言った。

ジョーは頭をポリポリ掻きながら、口をとがらせて言った。

「予定有るのか？それとも彼氏の車が気に食わない？」

「そうじゃないのよ、ただその……今日はシンディとテスト終了を祝うパーティーの打ち合わせが入ってて……ね？」

もう一人の男性と話していたシンディは、とっさのことにもかかわらず、「そうね！」と答えた。

ジョーはそのやり取りを、明らかにいぶかしみながら、視線を再び静に戻した。

「その……もしかして俺のこと、嫌いになった？」

ホラ始まった。そうやって自信の無いフリをしては、相手に負い目を感じさせてウンと言わせるんだわ。

「そんなことないわジョー。愛してる。ホントよ」

「じゃあ」とジョーは小声でささやき、顔を寄せる。右手を静の髪の下に手を入れて、顔を引き寄せた。それを静はジョーの胸に手を置いてこれを拒む。

「ジョー・・・みんな見てるわ・・・」

「僕たちは付き合ってるんだ。問題はないだろう？」

・・・そういう問題じゃない。

静は目を伏せながらジョーの手を振りほどいて言った。

「強引なのは好きじゃないわ」

するとジョーは意外にもこれに従い、ごめんと行って身を引いた。

静は「今夜連絡するわ。約束する」と言って身を翻し、シンディの片腕を引っ張って正門へ向かった。

腕を引かれながらもシンディは「今夜電話するわカルロス！」と叫んでいた。

中庭に出た静は、シンディに向き直って責めた。

「アンタの所為でジョーに見つかったじゃない！」

シンディは不貞腐れた顔して「だってああでもしないとカルロスに会えないんだもん」とボヤいた。

「知らないわよ！だってたらカルロスに直接会いに行ったらいいじゃない！」

「だってカルロスはジョーが好きだから離れないんだから仕方ないじゃない！」

へ？と問の抜けた声が静から発せられる。

「カルロスはゲイなんだって。この前のパーティーで話してくれた」

「じゃあ・・・勝ち目なんか無いじゃない・・・」

それでも好きなんだから仕方が無い、とシンディは言う。

思いもよらない所で話が複雑になったものだ。

静は呆気にとられて足が前に進まない。

人の触れてはいけない部分に触れた気がして悪い気がした。

そしてそれ以上に、それを受け入れているシンディの覚悟にシヨックを受けた。

「だ・か・ら。パーティーにはジョーを呼ぶのよ？」

「それとこれとは別でしょ！」

・・・どうしてコイツは・・・

静は怒ってその足でダウンタウンへと向かう。

シンディは待つてくれと言わんばかりに走って静について行く。

二人の歩は次第に早くなり、ダウンタウンまで競争ということにな

った。

いつしか静は、走ってるうちに先ほどまでの怒りも薄れ、テスト終
わりの解放感に満たされていく自分に気付いた。

2話（後書き）

イングリッシュカントリーガーデン

「the darkness」の曲から。

シンディ

ローパー

3話

朝目を覚ますと、いつもの見なれた部屋だった。

床にはポテトチップの袋が放ってあり、飲みかけのコーラのボトルが転がる。

屋敷の中では比較的狭い部屋で、壁には本棚の中にティーンズ小説が40冊、考古学の科学書が15冊ほど。

天井にはAvril Lavigneのポスターが貼ってある。

もう一つの壁に沿ってある棚には、ピラミッドの置物や、アステカ文明のジャガー人形などが不気味にそびえたっている。

とりあえず時計を見ると、まだ午前7時だったので、もう一度寝ることにした。

テストも終わったし、二度寝くらい許された贅沢だろうと思う。ところが眠いのになかなか寝付けなかった事と、外での人の話し声が気になり、結局起きることになった。

カーテンの外は、初夏の暖かい太陽が照らしていることであるが、静はカーテンも開けず、ベッドの脇から新しいポテトチップスの袋を取り出し、朝ご飯だと食べだす。

薄暗い部屋の中で、ベッドの上の布団の中からシャクシャクという咀嚼音が聞こえるのはなかなか不気味な光景だった。

ポテトチップだけでなく、コーラも飲み干した彼女は、ゲップをしながらようやく下へ降りてゆく。

まずは顔でも洗ってやろうかと、腹を掻きながら思った。

洗面所の鏡で顔を見て、静はガツカリした。
オデコのニキビが大きくなっていたからだ。

「うっげエエエ」

何が原因だろうと考えるが、夜中まで油菓子を貪っていたら当然の事だった。

とりあえずジョンソンエンドジョンソンの洗顔フォームで顔を洗う。顔をタオルで拭い、鏡の前でニツと笑う。

なかなか良い笑顔だ。

続いて「ハッピーうれピーよろピクねー」とニツカリ笑う。
なかなか今日も決まってるじゃないか。

「あー・・・静お嬢様？」

鏡に反射して、メイドが「見ちまった！」という顔をしている。
顔を真っ赤にして静は「どうしました？」と聞き返す。

「お食事の用意をいたしました。よろしければ下へどうぞ」

そう言って彼女はそそくさと立ち去る。

恥ずかしさで爆発しそうな静は、鏡の前でモジモジした後、やはり下へ降りて行った。

下の食堂へ向かわず、直接調理室へと向かう。

すると、コック達がおはようございますと挨拶をする。

それに答えた静は、そこで直接朝ご飯を食べはじめた。

「そっいえば父さんと母さんは？」

コックの一人が、ジョセフとスージーは早起きしてバルコニーで朝食を食べている旨伝えた。

ならここで食べていても誰にも文句は言われない。

それにコックの料理の話や、休業時代の笑い話は、朝のBGMとして中々気持ちよいものだった。

食べ終わった静は、食器が帰ってきてないことから両親がまだバルコニーに居ると踏んで、2階へ階段を上りはじめた。

バルコニーに顔を出すと、二人がゆっくり食事をしているのが見える。

静は寄りそうメイドにおはようと挨拶し、談笑しながら食事を探っている二人にもおはようと挨拶した。

「あら静。良い天気ね」

「ええ母さん。でもちよつと早起しちゃったかも」

「こんななにい天気は久しぶりだ。まるでこう、宿敵を倒したその日の朝みたいな、とにかく気持ちが良いわい」

ジョセフは嬉しそうに笑った。

静は100歳を超えた両親を見て、時々こんな朝を迎えられるのも、後何回くらいだろうと考えることが有る。

ジョセフは波紋という技術のおかげで、少しくらい長生きできるらしいが、スージーはそうではない。

老いた母親の首に、後ろから手を巻きながら、静は皿の上のブドウを一粒ねだつた。

「ホントに良い朝ね。こんな時がいつまでも続けば良いと思うわ」

静はブドウを頬張って言った。

それはなによりも、年老いた両親に元気で居て欲しいと願う故だった。

「失礼しますジヨセフ様」

使用人の男がバルコニーにやってきた。

3人は振り返って「何？」と首をかしげる。

その仕草があまりにもそっくりだったことに使用人は笑ってしまっ
た。

はたから見ても、実の親子にしか見えない構図だった。

「すみません・・・その、お客様が居らっしゃいました。アイリン様のご友人と名乗られておりますが」

「アイリンの？なんでアイリンの友人なんかが訪ねて来るんじゃない？」
アイリンというのは曾孫に当たる。何年か前に結婚して以来、親にも連絡が行ってないと聞いた。

「怪しいの・・・今日は朝早いし、もう一度改めてご足労願おう。その間にソイツの素性を調べられるか？」

「2時間もあれば」

「じゃあ午後にまたご足労願ってくださいか。ワシは執務中じゃと伝えてくれ」

わかりました、と使用人は出て行った。

静にしてみれば、甥の娘にあたる。

幼いころは遊んでもらったが、何年か前から駆け落ちして連絡がな

いと聞いていた。

スピードワゴン財団をもつてしても、連絡が取れなかったらしい。確かに今頃、どうして。

不安そうな色を浮かべる両親を見て、「アイリンお姉ちゃん、へそ曲がりだから友達に手紙でも託したのかも」と呑気を装って言うってみる。

この言葉に救われたのか、スージーは「あの子のやりそうなことだわ」と笑った。

まだ食事の終わっていない両親に、宿題をすると伝え、静は走って下へ降りた。

しかし行先は自分の部屋ではなく玄関だった。

玄関は少し広いホールになっており、玄関に立つと目の前には右左に階段が確認できる。

そこを上ると中二階となっており、そこから屋敷の生活圏内へ入れる。

いわゆるイギリス風の屋敷である。

静は訪問者を確認すべく、走ってその中二階のドアをバン！と開ける。

隠れることも無く、ひそむことも無く、静は堂々と玄関まで足音をたてないように走る。

「・・・誰か来たのか？」

使用人は呟いたが、再び訪問者へと向き直った。

静は今や、使用人が対応している脇から訪問者を覗いている。

しかしその姿は訪問者も、使用人も気付けない。

それは何故なら、彼女が全くの「透明」になることが出来るからだ。つた。

さて静が見た限り、訪問者は普通の少年だった。歳は同じくらい、背は少し高い位、痩せ形、目は伏し目がち、そして野球帽をかぶっている。

Tシャツに短パンという出で立ちだが、B系ファッションとまでは行かない。

至って普通の格好だと言える。

しかし何かを秘めたような目が気になった。

そこまで観察すると、使用人との間で話がついたのか、訪問者は午後にまた来ると言って帰っていった。

少々その後が気になったが、どうせ午後に会えると思い、彼女は「透明」であることをやめた。

「うあ、お嬢様いつからここに!？」

「さっきから。気づきませんでしたか？」

静はしらばっくれた。

突然現れた静に戸惑う使用人を置いて、彼女は階段を上って自室へ戻る。

午後まではプラモデルでも作って時間を潰そうと決めた。

部屋に戻った静は、先ず机に向かった。

さっきの訪問者はなんとかポリオと名乗っていた。

「なにポリオだっけなアーっと」

そう呟きながら、机の上に有るプラモデルを取り出す。

次に机のライトをベッドに向けて、プラモデルを抱えてベッドへ身を投げた。

これで完璧。

本当はコーラとポテチがあれば最高だが、朝食べてしまってもう無い。

「しまった、下にストックあったじゃん！」

そう言つて部屋の扉を振り向くが、今更立ちあがるのも面倒くさいので、そのままプラモデルに取りかかることにした。

プラモデルの箱を開けると、いくつかのランナーの下に、キャタピラ部迄は組まれた戦車が入っている。

静はそれを取り出しうつとりと眺める。

こういう今ひとつ自分の趣味に統一性が無いのは、ジョセフの遺伝かもしれない、と思う事がある。

勿論血は繋がっていないことは幼い頃から知っていたが、今更血が繋がっていればよかったと思うこともない。

何をどうしたって、私たちは強い絆で結ばれた親子である。

それが彼女のアイデンティティだった。

「それにしても似てない親子だね」

突然声がする。

今思ったことを口に出していたのだろうか。

明らかに相手は遺伝のくだりを把握して話しかけてきている。

静の背中に冷や汗が流れ、動機は早くなる。

「誰？ドアの向こうに居るの？」

「いえ、こつちなんだ。信じられないかもしれないけど。ベッドと床の隙間に居るよ」

さつきより身近に聞こえる。

静は動揺を隠すのに精一杯で、深呼吸をすることが精一杯だった。

「君のプラモデル、落ちちゃってるよ?」

静はとっさにベッドの下を見る。

すると人間の手が伸びてきて、静の体をそのベッドの隙間に引きこんだ。

・・・プラモ落ちてねーじゃん・・・

そう思った頃には、すっかり静はベッドの隙間へと吸い込まれていた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

3話（後書き）

波紋

血液を一定のリズムで刻み、生命エネルギーを活発にさせる呼吸法。血液は液体であるため、このエネルギーは体外の液体にも影響を及ぼすことが出来る（exコーラのフタを飛ばす等）。
生命エネルギーを活発にするものであるため、老化も有る程度防止することが出来、結果一般人より寿命が延びる。

4話

気付くと静は、古めかしい部屋に座り込んでいた。

部屋を見れば、考古学関係と思しき資料がいくつも見られ、本が沢山並んでいる。

そして部屋の真ん中にテーブルが置いてあった。

静にとってこの不気味な部屋よりも不気味なのは、何故この部屋に自分が居ることが出来るのかということだった。

「ごめんなさい。お邪魔しちゃって」

本棚の端に、男が立っていた。

Tシャツ短パン、そして野球帽。

髪はパーマがかかった金髪を、後ろでまとめている。
間違いない。

さっき玄関に居た訪問者である。

しかし静にとっては、そんなことはどうでもよかった。

「こうするしか無いと思ったんだ。僕にはマトモな戸籍は無いし、親も居ない。だけどどうしてもジョースターさんに会いたくって」

先ほどの訪問者は弁解するが、静が聞きたいのはそんな事ではない。だがとりあえず呼吸を落ち着かせるために、訪問者の話に耳を傾ける。

「だけどあんなにお歳を召しているとは思わなかったから、娘である君に話を聞こうと思ったんだ」

そう言うと、訪問者は歩いて静の元へ歩いてくる。

静は訪問者をきつく見据えるが、彼は気にせず静を引き起こそうと手をさしだす。

「私が聞きたいのはアンタの事情なんかじゃないわ」

訪問者は手を差し出したまま、一歩引いてしまった。

「アンタが父さんに何を聞きたいかなんて、私にはこれっぽっちも興味は無いわ。私が今一番知りたいのは、どうやってこの屋敷に入りこんだのかってことよ！それにこの部屋は・・・この部屋は10年前の火災で燃えてしまった筈なのに！」

静はピシヤリと言い放ち、訪問者は困った顔をした。

10年前、ジョースター家の屋敷は火災に見舞われた（原因は静）。静が今居る部屋は、元々ジョセフの祖父が集めた物を押し込んでいた部屋であったが、火災の際に燃えて無くなってしまった。勿論本や装飾物の類も全てである。

今現在その部屋が有った場所は改修した後、ゲストルームへと変えたはずだった。

「何て説明したら良いのかわからないけど・・・僕は物の幽霊を実体化する事が出来るんだ。今回は運が良かった。偶然この屋敷に、過去に燃えた部屋があったから、僕はこうして屋敷に入ることが出来た」

「・・・信じてあげるわ。だからとりあえず屋敷から出てってくれないかしら。今ならこの事黙っておいてあげるわ」

そうはいかないんだ、と訪問者は言う。

「そうすればお互いどんなに気持ちよく今日という日が送れることかかって思うよ！でも駄目なんだ！徐綸お姉ちゃんが・・・それだけじゃない。結局みんな死んじゃったんだよ！徐綸も！ウエザーも！アナスイもエルメスもフリー・ファイターズもみんなみな！」

「ちよつと待つてアナタ・・・今ジョリーンって言った？」

「そうだよ。でも一巡したこの世界ではアイリンって名前になってる筈さ。空条アイリン。君の甥の娘さ」

空条という名前を久しぶりに静は聞いた。

それは彼女の姉、と言っても歳は祖母と孫ほど離れているが、とにかく姉の嫁ぎ先の名前だった。

一人息子の承太郎は何年前前に交通事故で亡くなっており、ジョセフやスージー、そして姉のホリイも悲しんでいたのを覚えている。その承太郎の娘がアイリンである。

しかし彼女は承太郎が亡くなった後に駆け落ちしている。

「なんでアナタはジョリーンという名前で呼ぶの？アイリンじゃないの？」

「そうなんだけど・・・説明が難しいんだ。僕みたいな能力を持った悪者が世界をパラレルワールドにしちゃって・・・その時ジョリーンお姉ちゃんはアイリンって名前になって、それまでとは違う人生を歩むことになっていたんだ」

「じゃあ・・・本当はジョリーンで良かったのね・・・」

静の中で、ここ数年間の疑問が解決した。確かにアイリンは徐綸という名前だった。

まさかそれが第三者の口から語られることになるなんて思いもしなかった。

「幼い頃にジヨリンお姉ちゃんには良く遊んでもらったわ。それからお姉ちゃんが刑務所に入ったって聞いた。6歳の時だったかしら。ある日突然ジヨリンお姉ちゃんがアイリンって名乗り出して、刑務所にも入ったことにはなっていなかった。幼い頃だったから、自分の記憶違いだと思っていただけ。」

「ちよつと待つて！」

少年は静の話を遮って叫んだ。

「と言うことは・・・君は以前の世界の記憶があるってこと？」

「アナタの話信用するのなら、そういうことになるわね。まだパラレルワールドとか信じられないけど。」

訪問者の目に涙が溢れた。

そして顔をグシャグシャにしながら「会えた、やっと会えた」と一人こぼした。

静は目の前の素性も知らない訪問者が泣きだした事にギョっとした。見ず知らずの人間と個室に居ながら、しかもその相手が自分の手を握って泣いているなど気持ちが悪い。

今度は静は少年の手をありったけの力で握って、彼の独り言を遮った。

「それよりジヨリンお姉ちゃんが死んだってどういうことなの！？ 駆け落ちしたんじゃないの！？」

少年は涙を拭って、話し始めた。

「実は以前の世界で、悪者と対峙してお姉ちゃんは死んだんだ。でも世界が一巡して今度はアイリンというそっくりな人物として生まれ変わった。助かったと思ったんだ。でもお姉ちゃんは悪者と対峙すると言つ事情が無くても、結局死と言つ運命からは逃れられなかった」

「じゃあどの道助からないってこと？だとしたらジョリーンお姉ちゃんは死んだってだけ伝えてくれればよかったじゃない。なんでこうまでして屋敷に入る必要があったの？」

「・・・運命は変えられなかった」

でも、と少年は続ける。

「だったら世界を元に戻せばよかったんだ。その事に気付いたのは僕がお姉ちゃん達と別れて孤児院で暮らしてる時に出会った僕の友人の話で気がついたんだ」

いまいち要領が掴めない静は、次々と話を展開させる少年について行けなくなっていた。

痺れを切らした静は、訪問者に自分が答えてほしいことだけ尋ねることにした。

「アナタのお友達の話は後で聞くことにするわ。とりあえずこの話を父さんと母さんにすることは出来ない。あの通り高齢で、母さんの方は心臓も良くないの。だから私が。娘の私はその話を引き受けるわ」

「・・・ありがとう。本当にありがとう」

「それに当たって先ずアナタのプランを聞きたいわ。何をどうすれば世界を変えられるのか。私にプレゼンテーションしてちょうだい。ひとまず私はアナタの言うことを信じるから。私はシズカ・ジョースター。養子だけど、ジョースター家の子供よ。アナタの名前は？」

そうまくし立てて右手を差し出した。

少年はその右手をうやうやしく握り、これに答えた。

「僕の名前は・・・」

一瞬かつてジョリーン達に出会った時のことを思い出した。

あれは7年近くも前、グリーンドルフィンストリート刑務所でのことだった。

その思い出に胸を詰まらせ、そしてまたアイリンとして出会えた時の事を思い出す。

それだけで涙が出てきてこらえられなかった。

そして少年は涙で再び顔をグシャグシャにしながら答えた。

「僕の名前は・・・エンポリオです!」

- - また泣きだしたよ。やれやれだわ。

呆れた静は、先ずはエンポリオを泣きやませるのが先だとばかりにハンカチを差し出した。

静は立ち上がり、家族であるジョリーンを助ける為にと決意を新たにす。

私が家族を助ける。

幼い頃に引き取ってもらったことを負い目を感じたことは無かったが、ようやくジョースター家として、家に貢献できることが少し嬉

しかった。

一方で、足元からは未だに嗚咽が聞こえる。
受け取ったハンカチで拭っても拭っても泣き続けるエンポリオを見ながら今度は口に出してしまった。

「やれやれだわ・・・」

ジョリーンお姉ちゃんの口癖だあ、とそれを聞いて又涙に拍車がかかったエンポリオは、その後静にブン殴られるまで泣き続けた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

4話（後書き）

ンポリオのスタンド能力「バーニング・ダウン・ザ・ハウス」
「物」の幽霊を具現化できる。

5話(前書き)

毎回あとがきで元ネタの解説してます。主にスタンドとか洋楽の。

5話

ジョースター家屋敷 午前9時 バルコニー

朝食を取り終えた後、ジョセフとスージーがバルコニーでコーヒーを飲んでいると、使用人が「失礼します」と言って部屋に入ってきた。

「ああ、先ほどの人物についてわかったのか？」

「じゃあ私は失礼しましょうか、スージーが席を立とうとするのを制止し、一緒に聞きなさいと促す。」

「ここに資料を取り揃えました。要点だけ読ませていただきます。本名『エンポリオ・アルマーニ』、年齢17歳、孤児のため出自不明。現在は11歳の頃からモンタナ州の『第五マールン州立孤児院』に籍を置いて高校生活を送っています」

「中々苦勞人じゃのオ」

ジョセフは呑気に言いながらかんれん資料に目を通した。

気になる記述は一つも無い。

孤児という背景を持ちながら、麻薬にも手を出さず、新聞配達で学費を稼いでいるという。

確かに孤児だからと言って麻薬に手を出すのが普通かと言うと、実際そうでもない。

だが未だに黒人の子供の何人かは、地元のギャングに手を貸さないと生きていけないということがある。

そういう意味では恵まれた孤児ではないかと思うジョセフだった。そして素行も悪くなく、人づきあいも上手い。

現在は高校の傍ら、大学の研究チームに混ざって研究しているという。

来年は大学に飛び級で進学すると書いてある。

実に申し分の無い人柄だ。

アンダーグラウンドと通じている可能性も低い。不審な点はない。

しかしそれが不思議だった。

「なるほどスージーが許せば養子にしたいくらい良い子じゃの」

「ええ。財団で調べた結果、以上の結果となりました」

「ありがとうマイケル。スピードワゴンさんの曾孫さんにも良く言っておいてくれ。じゃがところでその・・・アイリンとの接点がワシにはちつとも見当たらないのじゃが？」

「ありませんでした」

ジョセフとスージーは眉をひそめた。

「つまり、エンポリオ少年とアイリンは知り合いではないと？」

「我々の調査結果ではそうなります。そもそも11歳迄の経歴が不明ですから、その間に会っている可能性も有ります。しかし孤児院に来る面会人も、彼に届く手紙にも、アイリン様と結び付く様なポイントは見つかりませんでした」

そうか、とジョセフは書類を机の上にバサリと置いて、椅子に深く座った。

至って普通の人間ではあるが、アイリンの情報は欲しい。しかし、しかしといくつも反論がジョセフの中で浮かぶが、そのどれもが徹底的に批判できるほどの証拠もなかった。

「こりゃあ・・・会ってみるかの」

スージーも横で頷いた。

ここまで情報量が少なければ、実際会ってみないとわからないというもの。

それにジョセフには【いつ死んでもいい】という強みがあった。

なんなら今日は稀にみる快晴で、こんなに気持ちの良い日も無い。

Today is the good day to die.)

今日は死ぬには良い日だ)

「じゃあエンポリオ少年が来たら、応接室の方へ通してやってくれ。あとマイケル、すまないが財団の方にボディガードを以来したいのじゃが良いだろうか」

「そのように手配いたします」

配置は後で指令する、と言ってジョセフは使用人と財団を部屋から出した。

スージーは不安そうな目でジョセフを見つめるが、ジョセフの目は若かりし頃のように、猛々しく、生き生きとしているのを見て少し安心した。

老いてなお誇り高き血統の頭首として在る旦那を見て、若き頃の闘いを思い出さずにはいられないスージーだった。

同時刻幽霊部屋

泣きやんだエンポリオから徐綸の最後を聞かされた静は、一言も聞きもらずまいと耳を預けていた。

ケープカルナベルでのこと、徐綸の最後、そしてアイリンとの出会い、アイリンの死、それら全てを聞き終わった頃には、約束の昼前となっていた。

「さて、じゃあ次に、どうして今頃ジョースター家に来たのかしら。アイリンお姉ちゃんが死んだのは6、7年も前の事でしょう？」

「あの時ぼくは運命は変えられないと諦めた。そして自分はお姉ちゃん達から託された希望を持って、自分で生きていこうと思ったんだ。何故だかそれがお姉ちゃん達の希望で有ったような気がして」

「そうかもね。お姉ちゃんならそう言うと思うしアナタは正しいわ」

「それからぼくはお姉ちゃん達と別れた最後の土地、モンタナで孤児院に入った。それから友人達も出来て、去年のクリスマスだったかな。孤児院に新しい子が入ってきて、歓迎会をすることになったんだ。それがぼくと『アレックス・ルイ・アームストロング』との出会いだっ」

「あら、どっかで聞いた事のある名前ね」

「そうだね。本名じゃないんだ。でもみんなそう呼んでる。そしてその彼が実はスタンド使いだと知ったんだ。それから僕達はほとんど仲良くなつて、一巡した世界の秘密まで共有することになった」

「信じてくれたの？」

「そうだね、とエンポリオは乾いた唇を舐めた。

「最初から信じてくれた。それは何故なら、彼が同じく重力を操るスタンド能力を持っていたから。つまり一巡させる可能性を持った人間だったんだ」

それって・・・

静の脳裏に、先ほど話で聞いたプッチ神父の姿が想起される。

自分達が生まれ変わっているのなら、彼もまた生まれ変わっていたとしても良いのだ。

「安心して。プッチは特異点としてこつちの世界に生まれ変わることなく飛び越えた。それをぼくが殺したから、生まれ変わっていることは無い。それに、実は彼がジョースター家と深いかわりを持つ、彼もまた誇り高き血統を引き継いだ人間だったんだ」

「ふうん。でもまだジョースター家に足を運んだ理由を教えてくださいなわよ」

「ごめん。ぼくがジョースター家に来たのは、今の事を伝えるため。そして、出来ればジョセフさんと共に世界を戻したかったんだ。僕達にはお金も支援も無かったから」

「ずいぶんずうずうしいのね、という厳しい指摘に、手段にかまっ

られないんだ、とエンポリオは答える。

つまり、ジョースター家の資産、財団のサポート無くして、これから起こすことを遂行できないと考えたのだった。

「一応アナタが忘れているかもしれないから言っておくと、父さんと母さんには今の話できないわよ」

「ああ・・・そうだね。僕もそう思う。」「高齢だし」

「だから私が協力するの。とりあえずお昼になるわ。アナタは予定通りこの家を訪ねて。多分父さんは会うと言っわ。後は私に合わせ
てね」

エンポリオはそうまくし立てられて、自身は無かったが、ここは静の言つとおりにすることにした。

正午 ジョースター家屋敷 玄関

リンゴーンと鐘が鳴る。

すかさず使用人がエンポリオを迎えると、当主が応接室で会つつもりであることを伝え、エンポリオを応接室へと案内した。

使用人が応接室の扉を開けてエンポリオを促す。

彼は右手と右足を同時に出しながら、通された部屋へと入った。

内装は豪華絢爛という訳ではなく、簡素ながら品の良さを窺わせるものだった。

部屋のレコードでかかっている音楽がマイケルジャクソンの『今夜

はビート・イット』であつても、不思議と合っていた。

エンポリオが少し口ずさんでいると、扉が開いた。

かなり大柄な老人が杖をつきながら入つて来るのが見え、エンポリオは緊張からか、椅子から立った瞬間椅子を倒してしまった。

「お・・・お初にお目にかかりますッ！！エンポリオ・アルマーニと申しますッ！！！！！」

「ほっほっほ。今日はわざわざ曾孫のご足労いただいて感謝するよ、エンポリオ君」

い、いえ！と硬直するエンポリオを椅子に座るよう言い、お茶とお菓子を給仕に運ばせた。

その始終エンポリオは何処へめをやればよいのか、給仕を見たり目の前のビスケットへ目を移したりと忙しかった。

何故なら一巡したこと、アイリンの死の事を言うなとくぎを刺された今、いったい何を話して良いのかエンポリオは困っていたのだ。

おまけに給仕にしては体格の良すぎる男がジヨセフの後ろに立っており、明らかに自分が警戒されているのが解った。

「それで、エンポリオ君。アイリンのことで何かワシに伝えてくれることがあると窺ったのじゃが・・・」

なんて人だ、とエンポリオは思う。

その物腰から、てつきり好々爺だと思っていたが、そんなことはなかった。

今エンポリオは、ジヨセフの腕から伸びた紫色の蔓にすっかり囲まれてしまった。

おまけにその何本かは喉元まで伸びており、変な動きをすれば、横のボディーガードより先に自分の命を奪うであろうことは容易に想像できた。

エンポリオは自分の喉元にナイフを突き付けられた気がして、口をパクパクするものの、言葉が出てこなかった。

その様子を見てジョセフは、思い切り自分のスタンド【ハーミットパール】で殴る真似をした。

するとエンポリオの前に細身の男性が表れ、そのハーミットパールを防ぐような形で防御態勢を取った。

「ほう・・・驚いたな。君もスタンド使いだったとは」

使用人たちはスタンド能力のことを知っていたが、自分の目では認知できないため黙って立っている。

「幼い頃から母の遺伝で・・・」

今エンポリオを守っているのは元々彼自身のスタンドではなく、友人のスタンド能力で有ったが、それを話すと一巡の話に繋がる為、これ以上は言えなかった。

「それはすまないことをした。しかし年寄りになると臆病になっ
な」

「いえ大丈夫です。アナタが僕を不審に思うのも仕方が有りません。どうぞスタンドはこのまま僕の話をお聞きください」

と言ったものの、何を話して良いのかわからない。

静は私に任せると言ったが、全く出てくる様子が無い。

これまでか、もはや正直に話す以外手は無いのだろうか。

その時ドカン、と扉が開き、静が走って入ってきた。
ジヨセフも驚いているようだった。

「エンポリオじゃない！！やっぱりエンポリオだわ！！本当に来てくれたのね！！！！」

そう言っただけで静はエンポリオに抱きつく。

椅子に座っていたエンポリオは、静のタツクルをモロに食らい、椅子から転げ落ちて悶絶した。

ジヨセフは驚いてその様子を見ていたが、突然の闖入者にどうしていいものか考えているようだった。

しかしエンポリオ少年が悶絶している今、静にりゆうを聞く以外ない。

「ああ・・・知り合いじゃったのかシズカ？」

「ええそうよ！去年私が学校のキャンプでモンタナに行ったのは覚えてる？」

そりゃあ覚えてるに決まっている。

あのかきは心配でボディガードを雇って、秘密裏に彼女の周りに配置させていた位心配していた。

「その時エンポリオに会ったのよ！彼もキャンプ中でね・・・ホラいい加減起きなさいよ情けない」

悶絶しているエンポリオを椅子に引き上げて、静は続けた。
エンポリオはまだ鳩尾を押さえてヒューヒュー言っている。

「それでそのとき名乗ったんだけど、アイリン・ジョースターという人間について知ってるかと聞かれたの。その時は私も半信半疑だったから父さんに言わなかったんだけど、もし本当なら家に来なさいって行つたのよ」

「それでこの少年は家に来てくれた訳か・・・遠いところを良くまあ・・・」

それでその、と言いにくそうにジョセフは続ける。

「彼氏じゃないよね？」

「ンもおーヤダあー！ー！違うわよ父さん！！そんな訳無いじゃない！！やめてよ恥ずかしいんだから！！」

そう言つて再びエンポリオの背中をバシンと叩く。

腹の次は肺をやられたエンポリオは、ゲホゲホしながら机に沈んだ。

「そうか・・・その、安心したからとりあえず少年の話を知りたいんじゃないが・・・無理そうじゃの・・・」

いえ、大丈夫ですとエンポリオは擦れた声で答える。

明らかに大丈夫じゃなさそうな彼は、アイリンが今イタリアに居ると伝えた。

ジョセフと静は驚いたが、静は驚いた事を悟られないようにし、エンポリオの話聞いた。

エンポリオはアイリンとの出会い、そして別れ、それから偽名を使つてお互い手紙のやり取りをしていたことを伝えた。

「シズカさんと出会つた事をアイリンさんに伝えると、彼女は凄く

驚いていました。それで大変申し上げにくいのですが、アイリンさんとしては今更家に戻ることはしたくない。でも静さんには会いたいから連れてきてくれと。そう言われて僕はそれを伝えるにきました。一応静さんではなく、当主のジョセフさんにご挨拶しようと思って今に至ります」

「じゃあアイリンおねーちゃんは元気なのね！会いたいわ！イタリアの何処にいるの！？」

「それは・・・その、ジョセフさんには黙っておけと念を押されたのでここでは言えません。でも一応言っておいた方が良さだろうと判断して、こうしてお話した訳ですが・・・」

「やれやれ・・・あの子のやりそうな事じゃわい・・・」

ジョセフはスタンドをすっかり引っ込めて、紅茶を啜った。なんとという人騒がせな孫なんじゃと思うが、元気で有ることは嬉しかった。

「それで、静を連れて行きたいと、そういう訳じゃな？」

「ええそうなんです。ジョセフさんのお許しさえいただければ」

「じゃが断る！！」

そう言うジョセフの目は鋭く光った。許しだと。

静と二人で旅行だと？

嫁入り前の娘を、何処の誰とも解らない男性に預けて、イタリア迄旅行？

婚前旅行？

そのまま二人で向こうに住む気じゃないだろうか？

もしかして二人の間には子供が居るのか？

出来ちゃった結婚？

それを許せと？

まだ17なのにな？

ワシの大切な娘をこの馬の骨はたぶらかして美味しく頂戴しましよ
うかということなのかッ！！

そんなこと絶対に許さない！！！！

「そんなのダメに決まっておる！二人はまだ17じゃぞ！！旅行が
したいなら国内にしなさい！！！！」

「なんの話してんのよ父さん！！」

静は父の過保護がまた始まったと頭を抱えた。

「旅行なんかじゃないわ！！アイリンおねーちゃんに会いに行くの
よ！！心配なのは解るけど私だつてもう17よ！！もうコココーラ
とペプシコーラの味の違いも解るし、ギャングに憧れるような年で
もないわ！！いい加減に過保護は辞めて！！だからアイリンおねー
ちゃんも会いたくないって言うのよ！！！！」

ジヨセフは突然金槌で頭を殴られたような衝撃に合った。

アイリンが出て行った理由はワシ？

ワシってそんな迷惑？

「まあまあ・・・ジヨセフさんの言うことももつともです。それで、
同行してくれるほどの友人がいるのですが、彼に会ってくれればそ
れなりに信用を得られると思うのですが、いかがでしょうか？」

「男二人じゃと！？そいつが本命なのか静！？そいつも連れてこい
！！！！」

「いい加減にしてよ父さん！！そんなんじゃないって言ってるでし
よ！！！」

更にヒートアップしそうな二人を、エンポリオは制し、窓際へと歩
いて行った。

すると、窓際の観葉植物の陰から、まるで吸い出したかのように一
人の少年を連れだした。

「彼が僕の友人です」

ジョセフはその顔を見て驚きを隠せなかった。
若きあの頃、イタリアでの修業の日々。

辛かった修業の裏には、いつも支えとなってくれる親友がいた。

今日の前に居るのは、その親友にそっくりな少年。

体つきこそ細かったが、決意に満ち溢れた眼、生意気そうな仕草、
その佇まいの全て親友と重なった。

ほら、と促されて少年はジョセフの前に出る。

相手を尊敬するでもなく、侮蔑するでもなく、その目はまっすぐジ
ョセフを捉える。

このスカした目線が、ジョセフにはたまらなく懐かしかった。

「さあ名前を・・・君の名前を教えてくださいないだろうか・・・」

気付けばジョセフの目には涙が浮かび、唇は震えている。

少年はジョセフに促されるまま名乗ろうと口を空ける。
運命は再びジョスターと彼の血統を結びつけようとしていた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

5話（後書き）

第五マールーン州立孤児院

Maroon 5

隠者の陰【ハーミット・パープル】

紫の波紋を帯びた？蔓。第三部参照。

全然関係ない補足

第二部が若干関係してきます。あと第7部も。ストーリーボード参照してください。
わからなくても大丈夫なようにはしています。

6話（前書き）

あとがきにて時代考証をしています。

6話

ジョースター家屋敷 応接間

一人の少年がジョセフを静に見つめていた。それに応えるようにジョセフもまた、目を細めている。その目に涙を浮かべながら、懐かしげに少年を見据えていた。

「まさかあの二人、ゲイってことは無いわよね」

静はエンポリオに声を落としてそう聞いた。

そんなことは無かったと思うけど、と問いかけに応える。

今や両者の間に存在する分がち難い、絆というものが場を支配していた。

両者は初対面であるにも関わらずだ。

すると全く突然に、物語を語るかのように、少年が話し始めた。

「・・・貴方の所為じゃない。僕はそう言われて育ってきました。僕もそう思います」

突然の告白に戸惑うエンポリオと静だったが、ジョセフはその言葉に対して驚いた顔をしてみせたものの、貯めていた涙があふれた。そうか、そうかと繰り返すジョセフを前に、少年は続けた。

「貴方にお会いしたら何よりも伝えたいことがあった。僕から、そして家族からのメッセージをお伝えしたい」

是非聞かせてくれ、とジョセフは涙を拭いて椅子に座りなおす。そして思わず背筋を伸ばした。

「シーザーの敵を討ってくれて感謝します。貴方が居たから今の地球がある。シーザーの魂も救われた。本当にありがとうございました」

ジョセフはこらえきれずに噎び泣いた。

人目をはばからずに泣いたのはいつぶりだろうか。

その嗚咽はしばらく応接間に響くことになった。

今ようやく、90年近くの時を超えて、ジョセフは足枷から解放された気分だった。

自身の左手を失ったあの闘いで、同時に親友を失った。

「もしかしてあの人・・・」

静は幼い頃より聞かされた、誇り高き血統の話思い出す。

そう、あの人の名前は・・・

少年はジョセフに歩み寄り、腰を落として目線を合わせる。

そしてその外見からはやや不釣り合いだが、穏やかな声でこう名乗った。

「私の名前はアレクサンドロ・R・ツエペリ。シーザーは大叔父にあたります。ジョセフさん、貴方にお会いしたかった」

ツエペリ家とジョースター家。

両家に絡まる運命のツタは、石仮面の因縁、そしてアメリカ合衆国を揺さぶったスティールボールランレースの時より両家を縛っていた。

その歴史の中で、ジョースター家を導き、支えてくれたのが、目の前の少年に流れる血であった。

ジョセフにおいてはシーザーという友。

その祖父ジョナサンにおいてはウィルという師。

大叔父ジョーキッドにおいてはジャイロという希望。

そして今、目の前の少年は、ジョースター家にとっていかなる存在となるのか。

運命のツタは、再び両家を引き合わせたのだった。

ジョースター家屋敷 ゲストルーム

「んだからあ、それどころじゃないんだってばあ。お客さん来ちゃって・・・そうじゃないわよ！勘違いしないで！後でメール入れるわ！バーイ！」

けたたましくまくし立て、静は電話を切った。

それから机の上のビスケットをつまみあげ、ベッドへと腰かけた。

ジョセフの申し出により、客人の二人は一泊していくことになった。今二人はゲストルームでくつろいでいる。

そこへ静も転がり込み、ツェペリ家とジョースター家の歴史、これからのプランについて話し合っているところだった。

「ごめんごめん。なんの話だっけ？」

「だからさ、とりあえず僕たちはイタリアに行かなくてはならない

んだよ」

そうだろ？とエンポリオはアレクサンドロに確認するが、アレクサンドロは静に頷くだけだった。

「えーと、アレックスって呼んで良いかしら。アナタはなんでそう思ったの？」

「・・・どうしてアメリカ人の女はそう慣れ慣れしいんだ」

アレクサンドロは面倒くさそうに呟く。
随分なごあいさつね、と静は応える。

「初対面の人間に皮肉垂れるなんてイタリア人でもするんだアー。
そんなのフランス人だけだと思ってたわア」

「俺はイギリス人だが？」

「あらア、フランス人の間違いじゃなくてエ？でも昔の栄光にしが
みついているあたりイギリス人っぽいかしらねエー」

よくもまあ初対面にこうまで言えたものだと思えば感心した。
しかし両者の関係が悪化するのには良くない。

すぐに止めようと間に入ろうとしたエンポリオだったが、それより
先にアレクサンドロが動いた。

「口だけは達者なようだなア。こんなのがジョースター家の末裔だ
って？その誇り高い血統は何処行つたんだア？」

いつのまにかアレクサンドロの身体から離れて、イタリアの彫刻像

の様な男性が静の顎を撫でていた。

静は相手のあまりの早さに、撫でられるまでそれに気付かなかった。

「やめるアレックス！彼女は養子なんだ！血統は流れていなくとも、その誇りは受け継がれている！！」

エンポリオは午前中、静の部屋で彼女の独白を聞いていた。

彼女が血について持っているコンプレックス、それに気を使って育てたであろうジョセフとスージーの思いやり、そして3人の絆は、たとえ冗談でもけなしてはいけないものだと思っていた。

「ヘエ・・・拾われたのお前。どうりでジョースター家に相應しくないツラだと思っただぜ。お前、ジョースター家って名乗るの失礼だと思わないの？」

これにはエンポリオも激怒し、アレクサンドロに取り消さそうと彼の肩を強く引っ張った。

しかし「辞める」という言葉をかける前に、異変に気付いた。静が居ない。

どこるか何故こんなに自分が怒っているのか、その意味すら忘れてしまったように、今自分が何をしていたのか思い出せない。

アレクサンドロも、今自分が何をしていたのか思い出せないのか、呆けて突っ立っていた。

ふとアレクサンドロは息苦しいなと自覚した。

あれ、と思ったかどうか、次の瞬間アレクサンドロはその身体を宙に浮かせて半回転した後、床に激しく叩きつけられた。

ドシャーンという大きな音と共に、アレクサンドロの意識は点滅した。

背中に激痛が走り、肺で呼吸が出来ない。

反動で打ちつけられた後頭部の痛みが思考を中断させる。かろうじて動く目玉は、自分の体をまたいだ静を捉えた。

その彼女が足を振り上げ、アレクサンドロの顔面に蹴りを入れるまでの0.3秒、彼は静のスカートの間から見えるパンツに釘づけた。

・・・ラッキー

そう思ったアレクサンドロの意識は、蹴りが入ると同時に飛んでいた。

エンポリオは我に返った。

そうだ、今自分は、アレクサンドロの暴言を止めるために静を庇おうとしたはず。

だがいつの間に静はアレクサンドロの上に移動したんだ？

エンポリオの目には、突然静が彼をまたぎ、右足を振り上げて、その顔面に蹴りを食らわせたように見えた。

それはつまり予備動作も全く無く、突然現れたようにしか見えないのだった。

「二度とそんな事言っんじゃない・・・命が惜しければね」

聞こえているはずの無いアレクサンドロに向かって静はそう吐き捨て、再びベッドに座ってクッキーを齧りはじめた。

横で目をパチパチさせ、事態の把握が出来ていないエンポリオは、どうしていいのかわからず、とりあえずアレクサンドロに駆け寄り、身体を引き起こした。

アレクサンドロの意識は未だ宇宙の彼方へと吹っ飛んでおり、帰還する予定は無いようだ。

彼は怖々と静を見上げ、恐る恐る声をかけた。

「今・・・君は何をしたの？その、まるで瞬間移動したように見え

ただのだけれど……」

すると静はエンポリオを見据えて言った。

「ほんの少しだけ時を止められる。それが私のスタンド能力。誰にも知覚できないし、認識できない。絶対的な時間の中を泳ぐことが出来る」

エンポリオの背筋に冷たい何かが走る。

まるでこれは……承太郎のスタープラチナそのものッ！！
それを彼女は習得していると言う。

静はエンポリオをきつく睨みながら続ける。

「それがアクトン・ベイビー。誓って良いわ……アタシ、最強なの」

その圧倒的な威圧感、承太郎のそれそのものッ！！

例えば血は流れておらずとも、その凄みはジョースター家のもの、あるいはそれを上回っているかもしれない。

とんでも無い人間が居たものだと言ふの念すら生まれたエンポリオだったが、怒る静を見て、どこか不思議と美しいと思ってしまうていた。

その様子を見ながら静は心の中でガッツポーズをとる。

- - あの様子じゃ信じたわね。
時を止める？

そんな非常識なマネ、承太郎さんにしかできないわよ。

そう思った静は啞然とするエンポリオと、やっと意識が火星あたり

には戻ってきたかもしれないアレクサンドロに興味を失ったように、
客人用のクッキーを貪るのだった。

- 客人用にこんな良いクッキー出すのに、ワタシにはクッキーケ
チってるのね。後で使用人に文句言わなくっちゃ。

それはアナタがポテトチップスしか食べたくないと言っからですと、
後で静は使用人に言われることになる。

「そうだったかしら？」なんて彼女がうそづく頃には、アレクサン
ドロの意識は戻っているのだろうか。

T o b e c o n t i n u e d . . .

6話（後書き）

基本的に一巡した後、歴史はこうした経緯をたどって静の時代へと推移してきました。

ステイールボールラン（アメリカに渡ったジョースター家）　ファ
ントムブラッド（イギリスのジョースター家）　戦闘潮流ジョセラ　以下そ
れまでどおり。

と、こうなります。詳しい事は物語に任せますが、大体全体的に繋がっています。

7話

ジョースター家屋敷

静を含め、5人で採った夕食は楽しいものとなった。

ジョセフにとつてもスージーにとつても、家族3人以外で夕食を採ることなどめつたに無く、よほど嬉しかったに違いなかった。

ジョセフは食事中にも関わらず自分のコレクション（スージーからすればゴミ）を自慢したがつたし、スージーは二人のプライベートについて興味津々とばかりに根掘り葉掘り聞いていた。

その様子を静はほほえましく見ていた。

ジョセフにしるスージーにしる、息子には恵まれることが無く、孫も他界した今、若い男子の相手など何年ぶりということである。

ジョセフはエンポリオと飛行機の模型について話しながらはしゃいでいるし、スージーはアレックスに「彼女は居るの?」「別れた理由は?」等、いわゆる恋バナというものに夢中だった。

その様子がおかしくて、静は笑っているばかりで夕食の味すら思い出せないほどだった。

しかし、当該客人の心中は穏やかではなかった。

エンポリオは静の事を若干恐怖しただけで、むしろジョセフとの会話が気晴らしになるとばかりに盛り上がった。

だがアレックスの方は、心神耗弱状態に有ったといっている。

先ほどのメモことから、実に一時間の間気を失っていたアレックスが起きた時に、静はこう言った。

「起きたわね。やっと続きが出来るわ」

するとアレックスは「辞めてくれ！」と叫び、自らの敗北を認めた。本能的に勝てるわけがないと悟ったのだった。静にしてみればこれも計算の内であって、相手の戦意を争奪するための最高のプランであったと自己評価していた。それからアレックスは夕食までの間、借りてきた猫のように大人しくなり、静の質問に淡々と答えた。

それから使用人に手当てをしてもらい（静は転んでぶつけたのだと説明した）、夕食への運びとなった。

当然アレックスは努めて明るくふるまったが、物を咀嚼するたびに痛む鼻つ面に、嫌でも先ほどの喧嘩を想起させずにはいられなかった。

ゲスト・ルーム

そろそろ就寝という時になって、エンポリオは無言の友人に「大丈夫か？」と声をかけた。

「大丈夫かだって？こんな屈辱を受けたのか！？」

見ればアレックスは泣いていた。

初対面の女性に、初めて敗北を期したことに對し、今まで味わったことの無い敗北感が彼をそうさせていた。

本来であれば食卓に着くこともしたくはなかったが、彼女への恐怖故彼女に従わざるを得なかった事も涙の理由の一つだ。

「死んだ方がマシだっと思うほどのショックをうけたことがあるかエンポリオ？今俺は人生において幸せというものがどういうもので

あつたかすら忘れてしまった」

そう独白する友人に、エンポリオはかける言葉が見つからない。

- - 次こそは、次こそは絶対に負けない。

- - 絶対にあのアマ、ブツ飛ばしてやる。

そう言うアレックスに対し、今後に一抔の不安を覚えたエンポリオだった。

やれやれ、と思った瞬間、フワリと良い匂いが鼻先をかすめる。

- - この匂いはシャンプーの匂いだ。それもさつき何処かで嗅いだ。
・
・

「アナタは絶望を味わったことはあるかしらアレックス？」

穏やかな声だが、温度が絶対零度に近いほど低い。

その声の主は、アレックスの右肩に手を置き、後ろから話しかけていた。

「もし味わったことが無いならそんなもの、これからの人生で味わえない方が良くに決まってる。でもアナタが私に牙を剥くと言うのなら、きつと絶望がアナタを襲うことになるわ」

アレックスは何も言わずに小さくコクリと頷いた。

「そう。良い子ねアレックス。おやすみなさい」

そう言っつていつの間にか現れた静は、アレックスの頬にキスをしてドアから出て行った。

いつから彼女はこの部屋に居たのだろうか。

今アレックスの頭の中は、彼女に対する恐怖しか無い。しばらくして硬直の解けたアレックスはベッドにのそのそと入りこみ、布団に縮こまって寝た。エンポリオの方も、今の出来事を理解するには脳が追いつかないらしく、大人しく寝ることにした。

翌日 ジョースター邸 食堂

「それで、イタリアには君たちが着いて行ってくれ。そういうわけだね？」

朝食の最中、ジョセフがエンポリオ達に訪ねた。

「ええそうです。アイリンさんには無事に連れて来いと。向こうの空港まで迎えに来てくれるらしいので、飛行機の中だけですが、責任をもって静さんに同行したいと思います」

「あら頼もしいこと」

ホホホとスージーが笑って、食卓に笑いがおこるが、客人二人の笑みは硬い。

「それなら安心じゃわい。なあスージー？」

「あら、心配していたのはジョセフの方でしょうか？私の所為にしないで」

そう言つて茶化す二人をホホホと笑いながら、静はエンポリオ達の方を見た。

二人とも笑みが硬く、静と目を合わせようとしない。

- - あら意外と意気地が無いのね。

静はそう二人を評価し、具体的にいつイタリアへ行くかという日程を聞くことにした。

「あ、それは早い方が良いでしょう。アイリンさんも仕事の関係で、再来週迄しか暇が採れないと言っていました」

- - なんて私に敬語なのよ。

「じゃあ早い方が良いわねえ。私もイタリアへ戻ってみたいわあ」

スージーがそう呟く。

彼女はイタリア出身で、ジョセフとはイタリア修業時代に出会っていた。

それから二人が結婚してイタリアを離れ、年老いてからは行っていない。

いつが最後かも憶えていないほどだった。

ジョセフは「スージーにローマの写真を頼む」と言つて気遣い、3人はこれに承諾した。

「私の支度はすぐに済ませることが出来るわ。パスポートもあるし。今夜からでも行けそう」

そうは言つたものの、航空券の手配などから、出発は2日後の朝と

いうことになった。

2日後の朝 シカゴ空港 搭乗

飛行機の中で、離陸する前から静はウトウトしていた。

なんせ朝は早いし、イタリア便はシカゴ空港指定だったので、前の日からシカゴに乗り込んでいた疲れもあった。

エンポリオとアレックスは、数日前のシヨックから立ち直ったように飛行機を楽しんでいる。

今は二人で飛行機が飛ぶメカニズムについて激論を交わしているところだった。

静の方は、シカゴ空港の免税店でお菓子やトランプを買い込み、すっかり満足したので、できればこのままイタリアまで寝て居たかった。

急に決まったイタリア行きだったが、全てが万事うまく運んだわけではない。

シンデイへの連絡。

ジヨーへの言い訳。

あと着いたら一日一回は連絡しなければいけないという両親との約束。

結構疲れた。

特にジヨーを説得するには骨が折れた。

そこまで思い出した時、そういえば、と静がエンポリオに訪ねた。

「ねえエンポリオ、イタリアに行って人に会って言うていたけど、それって結局誰なの？私も徐綸お姉ちゃんの事に頭いっぱい、結

構プランを聞き忘れていたのだけど」

エンポリオは頭をひねった。

何処から説明したものだろうか。

「ええと、この前話した時は、プッチがディオの骨を取り込んで世界を一巡させたと言ったよね？」

「ええ。骨が緑の赤ん坊になったという話でしょ？」

「そういうこと。だから僕達には、ディオの骨。多分それに準ずる彼の意味が籠った体細胞の一部が必要なんだ」

「じゃあ無駄足じゃない。私の父さんがカイロで彼は倒したって話は聞いたことがある？」

この言葉を聞いて、アレックスとエンポリオは顔を見合わせ笑った。これを見て静が説明しろよと脅すと、アレックスの方がこれに答えた。

「ディオが死んだのは事実だ。でもディオの体細胞を手に入れるのは簡単なんだ」

「だからどうしてだって聞いてるでしょ？アンタ達もつたいぶるのが趣味な訳？」

眠気もあつてかイライラし始めた静は、アレックスに当たりはじめていた。

数日前の記憶が反芻されたアレックスは、応えようにも口がうまく開かなかった。

アレックスに対し、静がこれ以上怒らないようにと、エンポリオはすぐさま助け船を出した。

「イタリアには、ディオの息子が居るんだ。彼の体細胞をもらいに行くなって訳。DNAが受け継がれて居れば、多分問題は無いと思うんだ」

- - 最初からその一言で済んだじゃないか。
だらだら話をするのが嫌いな静は、それを聞くと「あ、そう」と言
つて眠ってしまうことにした。

飛行機が離陸した後、静が寝たのを確認したエンポリオ達は、静を
起こさないように相談し始めた。

ディオの体細胞を手に入れなければ、恐らく世界を戻すことは出来
ない事。

そしてディオの息子はイタリアにおいて有名人であり、探すのに手
間はかからないこと。

しかし一番の問題は、彼がイタリアにおいて巨大な力を持つギャン
グスターだということだった。

その事を知ったら静はなんと言うだろうか。

流石にこの事を伝えるのは、自分が引き受けようと思うエンポリオ
が居る。

あれからアレックスは何かの度に静に小突きまわされることが多い。
これは、ここいらで自分も泥をかぶらないと、親友が可哀想だと思
う、エンポリオの優しさだった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

7話（後書き）

デイオの息子

黄金体験の人

8話

北大西洋上空 飛行機の中

「アレックス、それ貰うわよ」

3時間ほど寝ていた静はすっかり起きて、機内食を食べていた。

今はアレックスのビーフストロガノフの肉を食べてしまったところだ。

文句無いわよね？と更に肉へと手を伸ばす姿に、アレックスは何も言えないままだった。

そして、それも食べ終えた静は毛布をかぶり、今度は映画に夢中になっている。

その左に、アレックスが今にも泣きそうな顔をしてエンポリオに話しかけた。

「あのようエンポリオお」

経緯を知っているエンポリオは、アレックスに同情の念から食事を中断し、話を聞いてやることにした。

「ビーフストロガノフってなァ・・・ビーフが入ってっからビーフストロガノフって言うんだぜエ・・・」

「・・・ああ、わかるよ」

「じゃあよお、俺の目の前のコイツは何ストロガノフってえんだよオ・・・肉なんかこれっぽっちも無いんだぜエ・・・すげえだろオ

？ってこたアこれ世紀の発見だぜエ・・・ビーフストロガノフのビーフ抜きはよ、ビーフストロガノフって言わねえんだぜきつと・・・

コイツはだいが参っているようだな。

見れば精神的に疲れた顔をしている。

皮肉にも鋭さが籠っていない。

「なあエンポリオよオ・・・なんでこうなっちまったんだア？あの日親父達が死んでからアメリカに渡り、お前と出会った・・・それから毎日楽しかったぜ。同じ能力を持ったお前と高校生活を送るのも悪くねえかなって。でもお前の話を聞いてよ、親父たちを生き返らせる事が出来るかもって聞いた時アよ、俺死ぬほど嬉しかったんだ。世界を変えてやるんだってそう誓った。それが今じゃあどうだ？ビーフストロガノフのビーフを食われて何も言い返せない世界だ。こんな俺が世界を変えられると思うかア？ビーフストロガノフのビーフも食えない俺が、これからイタリアに行つて何するって言うんだよオ・・・俺のビーフ返せよオ・・・楽しみにしてたんだからなア・・・」

違う。

これは皮肉なんてチャチなもんじゃア断じてないッ。

これは・・・アレックスの魂の叫びだッ！

エンポリオはすぐさま自分の皿から肉片をいくつかアレックスに分けてやった。

もうアレックスの事が見ていられないほど哀れになってきたのだった。

肉を分けてもらったアレックスは、今まで抱えていた膝をゆっくり

解き、涙を流しながらエンポリオと抱き合った。
すまない、すまないと言うアレックスに、エンポリオは彼をギュッと抱きしめてやることしかできなかった。

しかし次の瞬間、映画を見ていた静は二人をしり目に、アレックスの皿の上の肉を再び平らげてしまう。

その様子は抱き合っているエンポリオにしか見えなかったが、アレックスには見せる訳にはいかないと、再び強く彼を抱きしめた。

- - 大丈夫だ。お前の絶望は、俺にも分ける。
そう思い、強く、強く抱きしめあった。

映画を観終わった静は、寝ているアレックスとエンポリオを叩き起こし、今後の予定を確認しようと持ちかけた。

二人はしぶしぶ起きながらも、これに対応してやった。

まずはホテルの部屋の事。

静が一部屋使って、アレックスたちが一部屋。

そして観光巡りのこと。

静は、少なくともローマで写真を撮っておきたいと思っていた。

そして肝心のデイオの息子の事。

デイオの息子は用心深いらしく、一般人はその姿を見たことが無い事。

でも自信はあるんだ、とエンポリオが言う。

「どづいこと?」

「例えば君は、ウォルト・ディズニー・カンパニーの社長を知っているかい?」

「名前くらいはね」

「じゃあ会いたいと思っただらどうする？」

「会社に行つて、社長に会わせろって言つわよ」

つまりそういうことなんだ、とエンポリオは言う。

それほど彼は有名で、所属している団体は、これから向かうネアポリスでは知らない人が居ないほどの巨大組織であり、そのトップがディオの息子なのである。

だからと言つて簡単に会えるとも、アレックスとエンポリオは思つていなかった。

それは何故なら、彼が実はギャングスターであり、ここにこそジョースター家を利用する理由があつたと言つて良い。

大きな力に渡りをつけるには、大きな財力が必要なのである。

しかし思い返せば目的はディオの息子の体細胞を採ること。

簡単に自分の顔も見せない男が、金の力で体細胞などわけてくれるだろうか。

やや無謀な賭けであつた気もする。

しかしなんのコネも持たない少年二人が、ギャングと渡り歩く等、不可能に等しい。

そういう考えもあつて、いささか無謀な今回の計画へと及んだ。

そして現在、ジョースター家による惜しみない助力が得られる鍵は、静だけにある。

加えて何よりも大きな力、「時間を止められる」能力を静は持つている。

事態は予想外だが、好転したと言っても良いだろう。

エンポリオとアレックスの間では、大まかにこのような作戦会議が

計られ、今に至った。

そろそろネアポリスに着くと、乗客へアナウンスが流れる。

未だ静にはディオの息子がギャングだと言ってはいない。

今一度、これからどうやってディオの息子が所属するギャング団【パツショーンネ】にコンタクトを採るか。それを考えねばならない。

何も知らない静という鍵の使い方。

これをどう上手く使うのか。

エンポリオとアレックスは、再び考え出した。

飛行機はネアポリス空港へと着陸する。

かつてディオの息子がネアポリス空港から冒険を始めたように、今また新しいジヨジョが、ここから冒険を始める。

奇妙な冒険は、ようやく語りはじめられた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

9話

3日前 ジョースター家屋敷 ジョセフの書斎

客人二人を部屋へ返した後、静はジョセフに呼ばれた。

静が部屋に入ると、ジョセフはスージーと何かを話していたようだ。静の姿が目に入った二人は、こっちこっちと手招きをした。鍵を閉めてから静は、ジョセフの方へと近づいた。

「静よ。聞いてほしい話があるのじゃ。ワシとスージーからな」

「ええ。いいわよ」

そう言って、ジョセフの机へと腰掛ける。

ジョセフとスージーは、二人で顔を見合わせ、どちらが語るか決めかねているようだった。

じゃあ、とジョセフが口を開く。

「あのエンポリオ少年とアレクサンドロ少年について少々調べさせてもらった。もっと詳しいことについてな」

静の片眉が上がる。

それで？、と彼女が促すときのクセだった。

「エンポリオ少年を調べてみたら、どうも彼は私生児だったようなのじゃ。それも囚人のな。彼の出身地とされているフロリダ州に、グリーンドルフィンストリート刑務所というものがある。そこに過去に同じ名字の囚人が居たようじゃ」

「同じ名字かもしれないわ。どうしてそう思うの？大体刑務所に問い合わせたのは何故？」

「彼との話で違和感があったのは、アイリンと出会った場所を語ってくれた時じゃった。彼はアイリンとフロリダで出会ったと言っておったが、詳しく聞くと、グリーン・ドルフィン・ストリート刑務所の近くのガソリンスタンドで会ったともポロっと言っておった。多分本人はその矛盾に気付いておらん。じゃから、ガソリン・スタンドというのが気になっておったのじゃ。つまりエンポリオ少年としては、刑務所近くで会ったという事実を伏せておきたかった。何故だかわかるか静？」

「自分が刑務所に関係ある人物だと知られなくなかったとか？」

「ワシもそう思う。自分が刑務所と関わりがあるなど、不名誉にも程がある話じゃ。だから、彼は刑務所近くで会った事を伏せて、フロリダで会ったと言っておるのではないかとワシらは考えておる。しかし彼自身が罪を犯したとして、あんな刑務所に入れられるはずは無い。それは彼の歳を考えれば当然じゃな。じゃから、同じ名字の人間が居らぬか調べた訳じゃ。そしたら女性囚人で、そういう名字の人間が居った。自分の親が囚人だと知られたくないから、こんなウソをついたのではないかというのが我々の見解じゃ。別に悪いことじゃない。彼にしてみれば可哀想な話なのじゃ。そうであれば、私はこのまま気付かないフリをしたいと思っておる」

静にしてみれば既に聞いた話だった。

別に驚くことでもなんでもないが、一応初耳と言っリアクションはとっておいた。

「まあ」なんて、自分でもよく言うよと思う。

「本題から逸れてしまったようじゃの。事態はもう少し深刻なのじゃ。」

ジョセフがそう言うと、スージーに続きを促した。スージーは遠い遠い目をしながら話を始めた。

「落ち着いて聞いて、静。アイリンは死んでいたわ」

静は冷水をかけられたような思いだった。

思わず背筋が凍り、口の中が渴いた。

なんで母がそれを知ることになったのか。

父は何故それを静に言おうと思ったのか。

両親は二人とも絶望に暮れた顔をして、静に続きを話し始めた。

現時刻　ネアポリス空港　タクシー乗り場

静は荷物を持ってタクシーへと乗ろうとしていた。

後ろを見ると、アレクサンドロは、空港のケンタッキーで買った骨付きチキンを貪っている。

なんたる浅ましい光景だと思うが、この年の男子つてのはこんなもんかと勝手に納得していた。

本当は早く荷物をホテルにブチ込んでおきたい静だったが、二人があんなモノを食べてちゃタクシーに乗れるはずもなく、目の前を通り過ぎるタクシーを眺めて食事待たすことにした。

アレクサンドロは、ケンタッキーのバレルに顔をうずめるようにし

て貪っている。

うめえなあ、うめえなあというアレクサンドロに、エンポリオは背中をさすりながら「お前の肉だよ。誰にも奪われちゃいけない、お前だけの肉さ」と語りかけていた

空港に降り立ったエンポリオが、先ず真つ先にケンタッキーへと走って、アレックスに買い与えてやったものだ。

二人は互いの友情を確かめるように、一口、また一口と食を進めるのだった。

一方静は空港のカフェでテイクアウトしたイタリアン・コーヒーをすすりながら、タクシー乗り場のベンチに座っている。

すると後ろの二人がようやくバレルを食べ終えたようで、満足そうな顔をしてこちらへ歩いて来た。

「満足した？」

そう聞く静に、アレックスは嫌味の一つでも言ってやろうと思いつてぶてしく頷いた。

「良かった。良い顔してるわ。素敵よ？」

静は「じゃあ、行きましようか」と続けてベンチを立った。

アレックスは何も言えず、もう一度頷いて突っ立ってしまった。

どうしたの？と聞く彼女に、まさか見とれていましたなんて言える筈は無かった。

さてどうしたものかという顔をしている静に、一人の男がヘタクソ

な英語で話しかけてきた。

後ろのアレックスに通訳でもしてもらおうかと思ったが、エンポリオと何かを話しているようだったので、静が用件を聞くことにした。

「チャオ！えーつと・・・何かしら？」

「タクシー、探していますか？」

身なりが悪かったので怪しんだが、タクシーの客引きだったようである。安心して。

自分の国のイエロー・キャブも、ブルジョワジーは絶対に着かない職だということを思い出し、男の身なりの悪さに納得した。

「そうね、街まで行きたいのだけれど、いくら位かしら？」

「僕も市内に用事がある。15ユーロでどう？」

これは渡りに船と言うやつかもしれない。

観光ガイドによれば、大体20ユーロ程度ということであったから、怪しむほど安いわけでもない。

じゃあお願いね！と荷物を渡し、二人の元へ駆けよった。

「ねえ、早くタクシーに乗りましょ」

「あ、ああごめん。どのタクシーにする？」

「任せて！あそこに止まってるタクシーの運転手さんが、まけてくれるんだって！」

そう言って静は、タクシー乗り場から少し外れたところに停まって

いるタクシーを指差した。

エンポリオも「じゃあ行くのか」と荷物をまとめ始めたが、アレックスがそれを制した。

「なあ、あのタクシー、動いてねえか？」

静とエンポリオが後ろを向くと、さきほど指差されたタクシーが、エンジン吹かして前を通り過ぎて行った。

「ありやタクシーじゃねえ。ここらへんのギャングに一杯食わされたんだよ」

距離が離れて行くタクシーに向かって、アレックスは呟いた。

エンポリオは愕然としてトランクを倒してしまう。

静の方はポカンとして突っ立ったまんまだった。

その二人を見たアレックスは、やれやれ、と言いたげに手をヒラヒラさせ、沿道に向かって歩いた。

イタリアではこういうことが良くある。

ここら辺を仕切っているギャングのボスが代わってからは、麻薬も犯罪も無くなったと思っていたが、三下が勝手にやっているのかもしれないと考えれば納得もいく。

だがこういった小さな犯罪も、またイタリアっぽくて悪くないとも思う。

自分自身はイギリス人だが、母親がイタリア人だった関係で、イタリアにも暮らしていた経験を持つアレックスにとっては、懐かしい下町のドタバタ騒ぎに思えている。

「だけどもあ……お姫様に手を出したっつたら話は別だ」

そう言うと、アレックスは沿道に手を置いた。

するとアレックスの背中から、体格の良い男性の幽霊のようなモノが浮かび上がった。

その風貌と形から、その男が生身という感じはせず、だが生命エネルギーだけは感じられる。

その幽霊は、アレックスと同じように沿道へ手を置き、タクシーが去っていく方向を見ている。

すると一瞬幽霊の手から糸のようなものが見え、次の瞬間タクシーは沿道をバックで戻ってきた。

それも、先ほど走り去ったコースと、全く同じコースで。

タクシーがアレックスの横まで走って来ると、その幽霊はドアをこじ開けエンジンを切り、再びアレックスの後ろに立った。

「それで・・・市内までいくらだったっけ？」

右のドアから覗きこむようにして、アレックスは男に聞いた。

ドライバーの男は何が起こったか理解できない出で立ちで運転席に座っている。

まるで今起きたことを理解していないようだった。

当然アレックスの言葉など耳に入っていない。

これにアレックスは、後ろの幽霊に男の四肢を抑えつけさせ、鳩尾ってやつに、きつついボディーブローをくれてやった。

四肢を解放してやると、男は苦しみながら左のドアから転げ降り、空港の外へと身体を引きずるように去っていく。

それを放っておいて、エンポリオと静はアレックスに駆け寄った。

「何が起きたのアレックス!？」

静は眼を見開いてアレックスに訪ねる。

アレックスは少し得意げに、幽霊を指差して答えた。

「こいつが俺のスタンド、【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】。物の軌跡を辿って、それを手繰り寄せる。それが俺の能力。誰もこの手繰り寄せた糸からは逃れられない」

逃れられない、という言葉には不思議な重みがあり、静はそこから彼の強さを感じ取った。

スタンド能力は、本人の性格を反映することがしばしばあると言うが、他人のスタンドを見れば、その人の本性を垣間見た気がする。静はアレックスの「逃れられない」という言葉を反芻する。

そして先ほど感じた重みからは、堅い決意と覚悟が秘められている気がした。

さあ行こうぜ、とアレックスに言われて静は我に返った。

「見直してくれた？」と言うアレックスに、「フザけた名前に呆れたたのよ」と返す。

これには流石に怒ったアレックスは、静を問い詰めようとスタンドで静を掴もうとする。

しかし静は消えてしまったかのように姿を消すと、いつの間にかタクシーの後部座席に乗っていた。

「あのね、アタシ達は世界を変えるの。残念だけど、あなたの素晴らしい世界をね」

これには何も言えないアレックスは、スタンドをしまって運転席へと座ろうとする。

その肩をポンと叩いて、エンポリオは助手席に座った。

9 話（後書き）

【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】

物の軌跡を辿って、対象を手繰り寄せることが出来る。近ければ近いほど強く手繰り寄せることが出来る。例えば今回のようにタクシーがそう離れていなければ、轍からタクシーを手繰り寄せることが出来るが、時間が経ってタクシーが遠くへ行っていれば、糸で自分達から手繰っていくしかない。

10話(前書き)

後書きはいつもの洋楽注釈です。

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 ロビー

結局アレクサンドロが運転することになり、ホテルに着いた。運転手は逃げてしまったし、自分たちで運転する以外に手は無かったことと、それよりもあの騒動の中留まっていることは危ないと判断したためだ。

幸い流れで運転席に座ったアレックスは、幼い頃の記憶から道を覚えており、なんとかホテルに着くことが出来た。

車はホテルの近くにあると居場所がバレてしまう恐れがあったので、繁華街の道端に置いたのち、鍵はホームレスにくれてやった。

アレックスがそれらの所用を片付けてホテルに戻ると、エンポリオと静は、ホテルの従業員と楽しそうに喋っているところだった。

「アレックス！おかえり！」

「おう。任務完了ってとこだ」

静の話によると、既に荷物は部屋に運び込まれており、後はフリーだということ。

3人は色々話あった後、今後の予定の確認をするため、夕飯を兼ねた会議を開くことにした。

そこで、従業員にオススメの店を聞くと、ネアポリス一のピッツアを出してくれると言う店があるので、そこに行くことにした。

ネアポリス イタリアンレストラン 【パール・ジャム】店内

従業員の話通り、皆で食べたピッツアは絶品だった。

値段もそこそこ手頃だったこともあり、先ずは祝杯を上げようと色々頼んでしまった。

アクアパッツアの魚にナイフを入れながら、エンポリオは本題に入った。

「それで、明日からの予定だけど。とりあえず『彼』を探す前に、観光でもしない？」

「いいわよ」

静はワインを飲みながら許可し、アレックスは子牛のイチジクソースがけを頬張りながらフゴフゴ頷いた。

「でも『彼』を見つけるのにこんなゆっくりしていいのかしら。彼は社長かなんかでしょう？会社に行った方がいいんじゃない？」

そら困った、と思う。

なんだかんだディオの息子の正体を、英語で「Boss」と説明したが、彼女はそれを社長と受け取って話している。

まさか本当は「ギャングのBoss」でした、なんて説明出来る訳無かった。

そんな事を言ったら最後、この計画はドボン。

明日から一文無しでイタリアを彷徨いながら『彼』を捜すことになる。

加えて一巡前の世界を知っている仲間を失うことになる。

なんとしてもそれは避けたい2人は、今まで静を誤魔化しながら、

なんとかやってきた。

今回も煙に巻いて、『彼』捜しは2人でやってしまおうというのが、エンポリオとアレックスの魂胆だった。

「逆にいえばそれは、『彼』のコミュニティに行けば、いつだって彼に『辿りつけ』る。だから明日位はゆっくりしてもいいんじゃないか？俺も疲れたよ」

そうやってアレックスは、再び目の肉と闘いだした。

それもそうね、と静も納得し、ワインを飲み干す。

それからは全く関係のないおしゃべりをして、日が変わる直前になつてようやく店を出ようとなつた。

外に出ると、ネアポリスの夜風が3人を包んだ。

静は酔いの心地よさから、夜風にもっと当たりたいと、高いところを探した。

するとレストランの斜め前に教会があつたので、屋根にでも上つてしまえと走つて教会へと入った。

焦つたエンポリオとアレックスは、彼女を止めるべく後に続いたが、教会の扉を開けると、静の姿は無かつた。

おかしいな、と外へ出ると、屋根の上から自分達を呼ぶ声がする。見れば、静が屋根の上で座っていた。

エンポリオとアレックスは顔を見合わせ、仕方が無いなど笑つて裏から屋根へと上つた。

「アタシ、こんな綺麗な夜景を見たのは初めてよ・・・」

静は髪をかきあげ、夜景を顎で指す。

二人ともそちらを見ると、美しいイタリアの街並びが、ランプの光によつて裝飾されていた。

「凄い綺麗だ・・・」

感心しているエンポリオと静を見て、アレックスは少し誇らしく思う。

母親が愛したイタリアを褒めてもらって、自分も悪い気などしない。だろ？とおちやらけると、二人からツツコミが来た。

そのままここで夜を更かしたい気分になったが、流石に神父に会うとマズイだろうということになり、教会の屋根から降りた。

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 303号室

静は部屋に戻ると、そのままベッドに倒れこんでしまった。

このまま電気を消して、寝てやろうかと思う。

シャワーを浴びなければという罪悪感があったものの、このまま睡魔に任せてしまおうかと、電気を消してしまった。

夜風が窓を叩く音が聞こえる。

外の明かりが部屋の中を少しばかり照らしている。いい街だ。

静は思わずそう呟いた。

「それはどうも」

突然ソファの方から声がした。

静はビクンと震え、声の方を見ると、カチツという音と共に、小さ

な炎が浮かんだ。

その炎は、暗闇の中、声の主の顔を照らす。

30前半というところの男性が、ライターを付けているようだった。

「タバコを失礼」

そう言うと、啜っていた煙草をライターに近づけ、再び炎を消した。暗闇には煙草の火が浮かんでいるようにしか見えない。男の顔も見えなくなってしまった。

「さて、シズカ・ジョースターさんですか？ いけませんねえパスポートを置きっぱなしで外に出ちゃあ。イタリアは盗人も多いんですよ？ ご存じなかった？ ホントよ？」

静は背筋が寒くなる。

全く知らない男が部屋の中に入り込み、自分の荷物を漁っていたようだ。

「さてと」と言うと、ギョッとという音の次に、煙草の火が近づいてきた。

もうすでに男の息遣いが聞こえるほどの近さに居る。

「今日空港でウチの三下がブチのめされたって事ですねエ〜」。犯人を捜させて貰った訳ですよ。そしたらこのホテルに居るっていうじゃないですか。ホント。」

まさか従業員が垂れこんだのだろうか。

自分の行動の軽率さに、今更反省する静だった。

「いやまあ別にね。理由が有ったならいいんですよ。ホント。ただ三下と言えども一応『ギヤング』って事なんでね、ブチのめされた

らブチのめ返すってことをしておきたいんですよ。ホント。まあメンツってやつですかねエ〜」

「お、おたくの三下が私の荷物を奪おうとしたから、友人が止めただけよ。悪いのは三下だと思っわ」

これはこれは、と言って煙を吐く。

男は状態をのけぞらして笑っているのだろうか。
火が動いている。

「お友達がおられましたかア〜。じゃあちよつとそつちをご紹介願えますか？やっぱり一応ね。メンツってやつがあるんですよ。ホント」

そう言つて男は静の腕を捕まえて力を入れる。

そう簡単には振り切れないだろう。

しかしチャンスとばかりに、静はその手に噛みついた。

男の低い悲鳴が部屋に響き、静はそのスキに部屋のドアへ向かうが、焦って上手く開かない。

「なんで！？鍵は開いてるのに！」

「逃げられないようにですね。さつき細工させていただきましたんですよ。ホント。すみませんねエ〜」

男はゆっくり窓際に歩いて、ランプに手をかける。

「まあこんな狭い部屋ですし。追いかけてこんなんでマネも出来ませんから諦めてくださいよオ。今電気点けますからねエ〜」

そう言つて男はランプのスイッチを点ける。

静はとつさにバスルームのドアをボタンと閉めた。

男は明るくなつた部屋を見渡して、静の姿が無いことに気付いた。

「まあ、バレバレなんですけどね」

そう言つてバスルームへ向かつて歩いて行く。

薄暗い部屋の中、男の影はランプの距離に反比例し、バスルームに近づくほど大きくなる。

その姿が悪魔のようにも見え、静は身震いした。

あんなものに捕まつては、無事じゃすまない。

そう直感した静は、男がギャングを名乗っていた事を改めて納得した。

堅気には無い凄味がある。

改めて男の恐ろしさを自覚するが、だからどうしたというのだ、という気分でもあった。

男はバスルームの扉を目指して歩いてくる。

まさか静が男の横で、イスを振りかぶつているとも知らずに。

男が「女性のバスルーム覗くなんて、申しわけないですねエ。ホント」と言つてドアノブに手を掛けた。

静の方は、確かな決意が静を冷静にさせ、心穏やかに男をブチのめそうと、椅子を男の顔に向かって思い切り振り抜いた。

バキヤヤヤン！

とてつもなく大きな音と共に、男は後ろへと吹っ飛び、そのまま悲鳴も上げずにダウンした。

「イチローも引退したし、マリナーズは私をスカウトするべきね」
心底そう思って、静は椅子を再び振りかぶった。
ぶっ飛んだ男は既に意識もなさそうだったが、容赦なく静はその足
に向かって椅子を振りおろした。

バゴン！！

見れば男の足は変な方向へ曲がっており、見るも無残な格好になっ
ていた。

顔は鼻血まみれ、足は折れてる。

こんなむごたらしい姿にでもしなければ、コイツはまた襲ってくる
かもしれない。

だが足を折られたと言うのに、男は一向に目を覚まさない。

呼吸はしているから死んでいる訳ではない。

ロープが無い今、動きを封じるにはこうするしかなかったのだ。す
まない。

そう思い、静は椅子を降ろした。

そろそろあの二人を迎えに行つてやろうかなと思い、部屋のドアノ
ブに手を掛けると、今度は簡単に開いた。

そこから椅子を外に向かって投げ、安全を確認した静は、そのまま
部屋の外に出た。

「それにしても・・・」

まだ姿を消したままの静は、一階下に居る二人の部屋に向かって階
段を降りながら、つくづく思う。

「やっぱりアタシ、最強かも」

フフフ、なんて笑いながら階段を下りる彼女の笑みは明るいものだったが、彼女が今男にした所業を考えると、何故笑えるのか一般人は不気味に思うだろうことは間違いなかった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

10話(後書き)

【トキオ・ホテル】
ドイツのバンド。

【パール・ジャム】
バンド。トニオのスタンド名も同じ。

11話 『ホテル・カリフォルニア』

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 203号室

静がノックをすると、彼らはすぐに迎えてくれた。

どうやら話しこんでいたらしい。

静はすぐさま今自分に起こった事を説明し、ホテルから出ることを求めた。

エンポリオとアレックスの二人は、急いで荷物をまとめて外へ出ようとする。

静は自分の荷物を上に置きっぱなしだと言う事に気づき、二人に動向を求めた。

二人は了承し、アレックスが護衛として、エンポリオは荷物番として部屋に残ることにした。

アレックスと静の二人が303号室に入ると、男はまだのびていた。部屋に入ると、男の惨たらしい姿に深く同情したが、当の静は彼を無視して荷物をまとめ始めた。

アレックスはドアを開けながら、壁にもたれて彼女を急かした。

「静、急いで」

「待つて。パスポートをコイツから奪ったらすぐ行くわ」

パスポートは男の上着のポケットに未だ入っていた。

静は男を起こさないようにそつとパスポートへと手を伸ばすが、深く入っておりなかなか取れない。

これは面倒なことになったと思い、ちょっと乱暴にパスポートを取ろうと、思い切り引っぱった。

「取れた？」

「ええ。手こずっちゃった」

「じゃあ早く行こう」

アレックスは壁から背を離し、静を早く早くと再び急かした。

静は手荷物を持って、急いでドアめがけて走る。

しかしその途中、ふいに静は部屋の中で転んでしまった。

「……いつてエエツスよホント。何してくれやがったんですかア」

見れば男は静の足首を掴んでいた。

男は低く冷たい声で静に話しかける。

足を掴む力はどんどん強くなり、静は払うことが出来ない。

とっさにアレックスはスタンド【W・W・ワールド】でその手を掴んで放す。

その瞬間、静は転がるようにして部屋の外へ出る。

男は驚いた顔をしてアレックスを見た。

彼の顔を見て冷や汗が走ったアレックスは、静を急かして先に階段へと促す。

ヤバイ、という焦りが、アレックスを速くより速くと突き動かす。

男は手を払った時、迷わず『アレックス』を見た。

『静』が蹴った所為であるとは考えず、自分の手は『アレックス』によって払われたと分かったに違いなかった。

それはつまり、男もまた『スタンド使い』であることを意味する。

「先に行け静！コイツはスタンド使いだ！」

アレックスは自分のスタンドを出して構えた。

静は一瞬躊躇った後、階下のエンポリオの元へと走った。

彼女が降りて行った事を確認すると、アレックスは男に話しかけた。

「俺たちは逃げる。追って来るなら、更に危害を加えるぞ！」

動こうとする男に向かって、動くなと警告するが、男はこっちへ這いずってくる。

その不気味さと、任務にあくまで忠実な彼の信念に、アレックスはうすら寒い思いだった。

「あんなア~~~~お前らア・・・これだけやられて引ける訳ねえだろオ~~~~？」

男は血だらけの顔で苦笑いしながら言う。

時折ゴホゴホと咳をする。

床に吐いた唾には血が混じっていた。

たまりかねてアレックスは、自身のスタンドで男を殴ろうと振りかぶった。

すると、アレックスの足元に有るカーペットが動き、ひっくりかえってしまった。

右半身をしたたかに打ちつけたアレックスは、相手のスタンド攻撃だと判断し、その無防備な体勢から次の攻撃に備えた。

「やっと俺と同じ目線に来たじゃないか。ホント」

ほぼ這って動く所為で、伏せている状態に近い男は、アレックスにそう言った。

「だがまだ高いな」

既に中腰にあつたアレックスは、『3W』で防御しようとするが、そのアレックスを掬いあげるかの様に、廊下に有った台がアレックスの後ろから迫り、足をからめ捕つた。結果今度こそアレックスはすつ転ぶことになった。

「ほオオらこれで同じ高さだアア」

男は眼を見開いて笑うと、アレックスにそう言った。

「クソツ・・・お前のスタンドは何処だ！」

そういうアレックスの顔の上に、廊下に有った花瓶が落ちて来る。とっさの攻撃にスタンドで防御するが、少し服が切れてしまったようだ。

そのアレックスに、次に次にと、部屋の電話器・花瓶・本・バスタオル、その他男の身の回りに有った物がアレックスを取り囲み、間髪いれずに襲いかかってきた。

アレックスは悲鳴を上げながら防戦一方という形で、予測できない痛み能耐えかねていた。

「お前、ポルダーガイストって知ってるか？怖いよなあホント。突然部屋の中の物が飛びまわって、人を襲うらしいぜ。今お前が襲われているようになアア」

ひやははははは、と笑う男に向かって、アレックスはある決意をする。

これで、このスタンド攻撃の正体が分かるはずだ、という確信を持つて。

アレックスは周りのアメニティグッズが襲ってくる中、防御を身ですることにし、自分のスタンドをしまった。

男がそれに気付いたかどうか、次にアレックスはスタンドを男の目の前に出現させ、思い切り殴った。

しかしパンチは、宙を舞うバスタオルに阻まれ、男には到達できなかった。

「危ないだろオホント。そういうの良くないぜエ」

「そうかい？じゃあもつとやってやるよ」

アレックスは中腰の体勢になり、再び『3W』でラッシュをかける。しかしこれもバスタオルや別のホテル備品に阻まれ、全く男に届かない。

だがこれでいいと思う。

現に攻撃している間は、アレックスを襲う備品は無い。

このまま押せば、勝てなくとも逃げることは出来る。

そう思って、射程範囲のギリギリ迄『3W』にラッシュをかけさせて逃げようとするが、再びカーペットに足を取られて転倒した。

すかさず身を守る為、『3W』が空中のアメニティを男に投げるが、直前で止められてしまう。

「無理無理イ。俺のスタンド、最強だからさア」

「・・・いや、それでもないぜ」

負け惜しみにしか聞こえないアレックスの言葉は、再びポルダガイストの攻撃によって悲鳴に変わる。

するとアレックスは、すかさず壁際へと身を寄せ、『3W』で防御態勢を取った。

確かにこうすれば、相手の攻撃は前方からしか来ないため、防御はしやすい。

少し余裕の出来たアレックスは、続けて男に喋り出す。

「お前のスタンド能力・・・俺みたいな人型ではないな・・・本当にポルダ　ガイストを起こすスタンドらしいな」

「あらまア~~~~おりこうさん。確かに俺の『ホテル・カリフォルニア』はポルダ　ガイストを起こすスタンドだぜ。だがこれが発動している限り、建物の中に有る全ての備品は俺の支配下に置かれる。能力を理解したところで、お前には勝ち目が無いのさア!!!」

その通りだ。

アレックスは納得する。

相手の能力を知ったからと言って、相手に太刀打ちできることとはイコールではない。

だが人型スタンドが無いということは、彼を守るのはポルダ　ガイスト以外には無い。

アレックスは防御態勢を取りながら、いくつかの重そうな花瓶やら台やらを投げ返した。

当然その殆どが男に当たる前に空中で止まり、再び襲ってくる。

これを何度か繰り返していると、次第に男も、受け取るだけではなく避けるようになってきた。

アレックスにとっては、この避けてもらうことこそ目的だった。

いくつかのグッズが男の後ろに落ちていることを確認すると、アレックスは高らかに叫んだ。

「今だッ!!!」ワット・ア・ワンダフル・ワールド』発動!!!」

今まで物を投げていた『3W』の指の隙間から糸が伸び、『3W』は腕を大きく回してそれを思い切り引つ張った。

途端、男の後ろに有つたいくつかのグッズが、先ほどアレックスが投げたのと同じ軌道を描いて飛んできた。

その内の椅子が男の頭にヒットし、今まで舞っていた家財は床に落ちた。

ポルダ ガイストは止んだようで、男も意識を失ったようだ。

アレックスは男を置いて走って階下に降り、エンポリオの居る部屋を目指した。

階段を降り切ったところで身体が痛み、一瞬うずくまってしまった。すると部屋からは耳をつんざくような悲鳴が聞こえた。

仲間の危機を感じ取ったアレックスは、痛む身体に鞭打つてそのまま部屋に転がり込むと、エンポリオと静の目前にある窓からは、とんでもない化け物が覗いていた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

11話 『ホテル・カリフォルニア』（後書き）

【ホテル・カリフォルニア】

自分が居る建物の中にある全ての無機物を支配下における。但しあまり大きい物は動かせない。せいぜいグランドピアノ程度が限度。その物体運動の軌道は本人の意思によるため、本人が意識したようにしか動かない。加えて、動かす物体が大きければ大きいほど集中力を使うため、より多くの物体を動かそうとするならば、その大きさは小さい必要がある。つまり「動かせる物」の「数」と「大きさ」は、「反比例」する。

名前はイーグルスの曲名から。

12話「ホテルカリフォルニア・2」(前書き)

おそくなりました

12話【ホテルカリフォルニア - 2】

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 203号室

「どうしたエンポリオ!？」

アレックスはドアを勢いよく開け、中へと転がり込んだ。しかし窓を見るなり、その勢いも衰えて、床にへたり込んでしまっそうになる。

中に居たエンポリオは、静を手で後ろへ下がらせながら庇っている。その二人の目線の先には、形容しがたい物体が、の外から見えた。アレックスはそれをなんと呼べばいいのか知らない。

エンポリオも静もまたそうであつた。

とにかくその小さな窓からは、獣の目が覗いている。その横の小窓からは、先が尖った生物の足のようなものが外から入ってきており、その足の形はさながら蜘蛛のようであつた。

それがガリガリと絨毯を貫いて床板を削っている。こちらへ入ろうとしているのは一目瞭然だつた。

「な・・・なんだあれ!？」

「イタリア名物じゃなくて!？」

「すくなくとも俺は見たことないね!」

こんな時にまで皮肉垂れる静の胆力には、ほとほと感心する物があるとエンポリオは思う。

とりあえず荷物を持って、外へ出ると指示を出す。これは危機的状況にあると、エンポリオは考えた。

恐らく自分達はギャングの襲撃を受けており、この眼前の化け物も、彼らのものと考えていいだろう。

そしてギャングとは……ここいらのギャングと言えば、【パッシヨーネ】以外にない。

思わぬところで彼らへの接触が図れたものだ。

敵対という最悪の形ではあるが、だ。

だが逆に考えるんだ。

これはチャンスだって。

まずは目前の化け物であるが、足が引つ掛かっているのか中々入ってこない。

で、あるならば、当面ここは安全なのかもしれない。

少なくとも荷物をまとめて外へ出るくらいは。

「二人とも良く聞いて。荷物を持って部屋から出るんだ。静はそのまま廊下に居てくれ。アレックスは一度戻ってきてくれるか？」

「お前逃げろよ！」

「アレックス……コイツら、パッシヨーネだぜ？」

エンポリオの考えを察したアレックスは、背中に緊張が走る。

いや、確かに彼の言う通りなのだ。

この危機は、先通しの見えなかったこの計画に光を指してくれている。

だが危険は大きい。

しかし、この先の、俺達の計画を遂行するには、絶好の機会とも言える。

「お前……えらくやる気じゃないか」

「世界を変えるんだろ、アレックス？」

静が後ろから「荷物運ぶの手伝ってよ！」と叫んでいる。アレックスは急いで荷物を持って廊下へ運ぶ。

エンポリオは【ウエザーリポート】を出して、警戒している。

怪物は黒眼の無い眼で、未だこちらを覗いたまま、ガリガリと床をひっかいている。

とんでもなく強そうだが、しかしこれもスタンド攻撃に達しない。幻覚型か、実態型か。

ガリガリやっているだけで、中に入ってこれないところを見ると、こちらを威嚇する為の幻覚型に見える。

アレックスが【3W】を出しながら、部屋へと入って来る。

額の汗を拭くと、アレックスはこちらを見て笑っている。

そうだよな。ここからだ。

二人は不思議と高揚感に包まれていた。

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 廊下

中に駆け込んで行ったアレックスを背に、静は荷物を下へ運ぼうとしていた。

これでも力はある方だと思っていたが、意外とトランクは重い。

一度に二つを抱えるのは無理だと考え、両手でトランクの取っ手を握り、ドタンドタンと引きずりながら一階へ降ろした。

ロビーには誰もいない。

これはどうやらホテルに謀られたな。

さつきまで楽しく話をしてきた従業員に怒りを覚えながら、玄関の外を見る。

そこには先ほどの怪物の下半身であろう身体があった。大きい。

全長で8メートルはあるのではなからうかと思う。

その遠くに人影が見えた。

ということは、これはスタンドなのだ。

静は上を向いている人影に見つからないように玄関のカギを閉め、また二階へと戻った。

二階への最後の階段を二段飛ばしで駆ける。

スカートなんか気にはしてられない。

急いで203へ飛び込み、二人に声をかけようとドアノブをひねる。

しかし一向に開く気配が無い。

中からは二人の怒号が聞こえる。

間違いなく戦闘状態にあることは間違いないのだが……

焦って何度もドアノブをひねりながら、ドアを叩いて叫ぶ。

「二人とも！！無事なの！？ねえ！！開けてちょうだいったら！！」

しかし中からは相変わらず怒号しか聞こえない。

これは蹴破るしかないと踏んで、後ろから助走をつけたところだった。

静の足に、こん棒で殴られたかのような激痛が走った。

反動で前にゴロゴロと転んでしまい、頭をドアにぶつけてしまった。なんなんだ、と足元を見ると、小さな机が転がっていた。

「あ……そのまま居てくださいねエーホント……」

静は冷水をかぶったかのように身体が寒くなる。

声の方を見ると、先ほどまで部屋でのびている筈だった男が居る。

「アンタ・・・なんで・・・」

「足を折ってくれたなアお姉さんかい？用意周等なもんだホント。お陰でここに来るまでに二回も呻いてしまったツスよ・・・」

静は唇が震え、顎はガタガタしだしている。

それを悟られまいと必死にこらえるが、どうもうまくいかない。へたり込んでヒザも笑っている。

「まあそんな怖がらずに、水でも飲んでくださいよ。ホント」

すると男の近くにあった花瓶が飛んできて、静の頭の上で静止した。静が思わず見上げると、花瓶は傾いて中身を全部静の顔面へとブチ捲いた。

男はさも愉快だと言わんばかりに、笑っている。

静は濡れた服を見ても、男への感情は怒りよりも恐怖の方が勝っていた。

殺される？殴られる？私はどうなるの？

ハッキリとしない漠然とした不安が静を包み込む。

おそらくこれは、他人の支配下に置かれることに恐怖を覚えているのだらう。

それはさながら死刑執行を言い渡されるまで拘置所で過ごす死刑囚の気分だった。

「ああそうそう。もうすぐ私の部下がアナタのお友達を拘束してくれることでしょう。ただ彼はスタンド使いだから、怪我くらいはするかもですけどね。ホント」

やはり仲間だったようだ。

恐らくこのズタボロの上司の姿を見た瞬間、その部下は男の代わりに私をブチのめすだろう。

いやそれだけじゃない。

最悪、女として最大の屈辱を味わうかもしれない。

そこまで考えると、もう静は自分が情けなくて、人目も気にせず泣いてしまった。

「泣いたら済むって話じゃないんですよ？足の代償くらいは償ってもらわないとお嬢さん。イタリアの男は怖いんですよ？ホント」

静は遂に声を上げて泣き始めた。

全ての恐怖を押し出すように。

全ての不安を流れ出すように。

更に声を上げて泣く。

大げさに泣く一方で、頭は冷静になってくる。

感情が自分でコントロールできない時の秘策といったところだ。

かつて父ジョセフが戦った相手から学んだ「泣く」という戦術。

男は今のところ、静が泣きやむまでは待つてくれるのだろうか。

そして部下をどう攻略しようか考える。

もし部下が上司のメンツを保つためなら何をしてくるか。

そうではなく、上司と言うカードがあれば、何処までなら部下は言うことを聞くだろうか。

静は泣いているついでに男を観察すると、彼は煙草を求めて自分の背広をまさぐっているところだった。

静は気付かれないように声を上げて泣くふりをしながら、徐々にクラウチングに近い状態へと身体を持っていく。

男がようやくライターを見つけたと同時に、静は男とは逆の方向へと走りだす。

男が止まれと叫ぶ声が聞こえるが、構わずまっすぐ走り、建物の反対側にある階段のスペースへと飛び込んだ。

「さて、もう勝負は付いたわ・・・」

静は心底ほつとした顔で一息入れた。

壁に隠れた彼女の横から机やら花瓶やらが飛んでくるが、相手が目測できない位置に居れば、怖くもない技だった。

静は少しストレッチをして身体をほぐし、自分のコンディションを整えた。

さて、と呟いた頃には、彼女の姿は【アクトン・ベイビー】によって透明になっていた。

そこから静は、実に悠然と、しかし足音も立てずに男の方へと向かって歩んでいく。

男はまだ静が隠れているであろう場所を睨んで、物を自分の元へ集めている最中だった。

これは面倒だなと感じた静は、更に自分のスタンド能力に集中すると男は睨むことを止めて、周りをキョロキョロしだす。

おそらくもう自分が誰を探していたかも忘れてのことだろう。

この能力こそ【アクトン・ベイビー】が最強であると自負する所以である。

静は今、男の背後に迄歩み寄った。

・・・これでも週末のWWE位は見てるのよ。

するとゆっくりと、慎重に男の首に手を回し、せーので一気に締め上げる。

・・・人間が気を失うまで、7秒だったかしら？

そう思う頃には、男は大した抵抗も出来ず、酸欠により意識は飛んでしまった。

「さて、と。あの二人を助けにでも行こうかしら」

静は男を引きずって203号室の前に立ち、ようやく救援へと駆け付けたのであった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

13話【What I'm Looking for】(前書き)

遅くなつてすみません。

あとがきで元ネタ紹介です。

13話【What I'm Looking for】

ネアポリス 【トキオ・ホテル】 203号室

今、エンポリオとアレックスの前には、形容できない異形の怪物がそびえたっていた。

これは、なんだろうか。

もはや既に壁は崩れ落ち、怪物は全身が見えるほどになっている。

頭は鬼のような角と獣の顔、身体は蜘蛛のような形をしている。

足は獣のように筋肉がついては居るが、先端は尖っていて蜘蛛の足のよう。

たしか西洋にミルコロメオという怪物が居たなと思いましたが、あれは胴体が蟻だった筈だ。

その怪物が建物の外から足だけで二人を攻撃していた。

「右だ！」とエンポリオが叫べば、アレックスがガードし、エンポリオが相手を攻撃する。

「左だ！」とアレックスが叫べば、エンポリオがガードし、アレックスが相手を攻撃する。

なかなかのコンビネーションだな、と静は感心した。

二人の息の合い様は、まるで決められた殺陣を演じているようで、緊迫した様子を感じさせなかった。

だが二人にすれば全然そんなことはない。

攻撃をしのぐので精一杯な上、防いだところでダメージの全てを殺せるわけではない。

その上、二人のダメージが相手に伝わっているとも思えないほど、相手はびんびんしていた。

長丁場になれば、確実にやられる。

そのような危機感を、二人は持っていた。

いや、遊ばれてるわね、と静は思う。

相手は長丁場を期待している訳ではないし、そもそも確実に私たちを殺すつもりでやってはいない。

見るからに相手の力の方が、単純に大きい。

相手の元々の目的は？

彼らのメンツにかけて、相手をシメること。

もし殺すつもりなら、長丁場に持ち込まずとも、あの大きな爪で建物を壊して私たちをなぶればいい。

防御のチャンスを与えているのは、敵が遊ぶつもりだから。

ただそれも、外で失神している仲間を見れば、態度も変わるでしょうけど。

やむを得ずさっきの男をボコボコにするにいたった静だったが、ここにきて相手の力の大きさに、自分の行いを反省した。

- アイツの容体がバレたら、それこそ殺されるわ・・・

静は、今自分が透明になっている事を考えて、この場を抜けるためにどうすればベストであるかを考えた。

しかしもう、男をボコ雑巾のようにしてしまった事を元に戻すことはできない。

- 仕方が無い。

ここはひとつ、人質くらいしか手はないかなと考える。

だが、ただの人質ということでは、相手は出し抜いてくるかもしれない。

なら芝居でも打ってみるか。

最悪自分は【アクトン・ベイビー】の能力で逃げ切る事が出来る。

その場合二人を見捨てることにはなるが、自分が逃げ切れれば、父を頼ることも、スピードワゴン財団を頼ることも可能となる。

そう考えれば、多少気は楽になり、大胆な方法もたやすく行える気がした。

静はドアから一回出て、先ほどブチのめした男の身体を丁寧に持ち上げ、今度は姿を現して再び部屋に入ってくる。光を涙に貯めた茶色い眼は、悲哀に満ちて男を見つめている。足どりは重く、葬儀に並ぶ未亡人のごとく悲しみに満ちている。静は男の体をうやうやしくベッドへと寝かせた。そして時々すり上げながら、呆氣にとられている3人に対し、よわよわしい声で話しかけた。

「ねえみんな聞いて・・・そんなことより早く、救急車を呼ぶの！早く！」

アレックスとエンポリオは青い顔をして静を見ている。怪物は動きを止めて、こちらの様子をうかがっている。

これはいけるかもしれないと、静は考えた。少なくとも3人は、静の二の句を待っている。つまり、この場の空気は静が現在支配している。

「この人が・・・この人が目を覚まさないの・・・そのアナタ、この方の仲間でしょ？」

怪物が爪をホテルの窓から引き上げ、その巨体をホテルから離れた。しかし、未だに眼だけはこちらを見据えている。すると、下から声がした。

「3人ともその男の身体から離れる。女は事情を説明しろ」

若い、冷たい声が聞こえた。おそらく下に居る能力者だろう。

「私が部屋で能力者に襲われているとき、この方が身を呈して助け
てくれたの・・・突然入ってきて、猛攻に耐えながら私を守ってく
れたわ・・・でもこの人、それから眼を覚まさないの！仲間を呼ん
でくれて私に伝えてから、死んだように動かなくなっちゃって・
」

「お前の部屋にスタンド使いがもう一人居たということか？」

「そうよ、ひげ面の大柄な男だった・・・いえ、そんなことより救
急車を呼んでツ！もう呼吸が浅くなってきたわ！」

怪物の眼が、壊された壁の穴越しにギョロリと動き、ベッドの上の
男と、寄りそう静を見た。

静は尚もヒステリックに叫んだ。

「私たちは旅行者だから、救急車の呼び方を知らないの！アナタし
か呼べないのよ！どうか、どうか私の恩人を助けてあげて・・・ッ
！」

「その襲ってきた男は何処へ行ったんだ？」

「この人が花瓶を頭にぶつけて・・・でも不可抗力なの！私と自分
を助けるために、仕方が無かったの！誰だって、殺されかけたら相
手の命を奪ってまで生き延びたいと思うわ！」

怪物の眼がギョロリと再び部屋を見回し、その身体を震わせた。
すると下から怪物の爪が上がってきて、そこに痩身の男が捕まっ
ていた。

男は3人に「動くな」と命令した後、ベッドの上の男へと近寄った。
冷徹そうな印象を受けたが、眼は真剣に仲間を案じていた。

その男が、仲間の容体を確認しながら静にいくつか質問した。その全てに静は答えながら、度々男の容体を気遣った。

瘦身の男は静に一言「運んでくれたことに感謝する」とだけ述べて、電話を取りだした。

その電話で、「トキオ・ホテル」に居る事、医者を用意させること、車を寄越すこと、そしてターゲット（つまり静達）を狙っていた人間が他にも居たことを伝えた。

この会話はイタリア語だったため、アレックスしか理解できなかったが、アレックスは動くと言われていた手前、それを二人に告げることが出来なかった。

静は瘦身の男が何を言っているかわからなかったが、とりあえず助けを呼んだのであることは間違いないと踏んだ。

そして、このままでは、何も状況が変わっておらず、未だ自分たちに対する落とし前は付けられていないことを予想していた。

静はそこを追求する為に、相手がこの後自分たちをどうするつもりか知ろうと、自分たちはどうしていればいいかを聞いた。

すると意外にも瘦身の男は「帰っていいよ」と言った。これにはアレックスとエンポリオも胸をなでおろした。

それだけでなく、瘦身の男は「それどころじゃなくなっただ。もうお前ら帰れ」と言って、荷物を指差して部屋から出て行くように指示した。

どうやら静の嘘が思わぬ方向に行ったらしい。

これはしめたと、アレックスは静を促して、外へ出ようとする。

静も名残惜しそうにベッドの上の男を見ながら腰を上げた。

瘦身の男は、3人には既に興味を失ったように、ベッドの上の男に向き直る。

エンポリオもアレックスに続き、歩いて部屋を出て行く。

二人が部屋の入り口近くに進んだのを、未だに涙がこぼれる瞳で確認した静は、急に瘦身の男の背中に向き直り、その力を込めた右腕を振りかぶって、容赦なく思い切り男の首元へ叩きこんだ。

ゴツという肉と肉がぶつかる音がし、エンポリオとアレックスは静の方を見やった。

すると、痩身の男は白目を剥いて、仲間の身体へ覆いかぶさっており、静は涙を拭ってこちらを振り返った。怪物もいつの間にか消えている。

「何びつくりしてんのアンタ達、逃げるのよ！」

「え、お前なにして・・・」

「もう一人の男に襲われたなんて嘘、すぐにバレるわ！それより早く出てよアンタ達！置いてくわよ！」

結局静としては、ギャング二人ともブチのめしてから逃げる算段だったのだ。

今、静は二人を置いて、ロビーへと駆け降りていく。

横切られた二人は互いに顔を見合わせて、ただただ静に着いて行くのだった。

外へ出た3人は、ホテルから2ブロック離れたところで、2台の黒い車とすれ違った。

直感で、というより朝5時に走っている不自然な車を見れば、誰もがギャングの仲間だと察する。

いよいよ来たかとアレックスとエンポリオは緊張し、足を速める。

「これからどうする!?」とアレックスが静を見て、走りながら問いかけると、「とりあえず逃げるのよ。アンタ達がアイツに勝てるなら戻ってもいいけど」と冷たく言った。

確かに自分達の力不足が原因だったことは認めるが、今逃げているのは静の行動に責任がある。

しかし、さつき以上に優れた脱出案は浮かばないため、彼女に対して腹が立つても、アレックスは我慢をするしかなかった。

とりあえず駅の電車の始発に乗り込もうと考えていたので、駅を指して走っていたが、意外とネアポリスの道は入り組んでいて、なかなか駅にたどり着けない。

それでもようやく駅にたどり着くと、ホームには、明らかにカタギではなさそうな人間が誰かを探していた。

「あいつら、意外と早いじゃない・・・」

静は唇を噛んでそう呟いた。

「意外とじゃねえよ！お前の所為でこうなったんだろ！」

そう投げやりに叫ぶアレックスの声に、先ほどのカタギじゃないオジサン達が気付いたようだった。

エンポリオがそっちへ顔をむけると、オジサン達はホームで指をさして仲間に合図をしている。

「ねえ2人も。見つかったようだよどうやら」

「アンタの所為よアレックス。責任とって囿になりなさい」

「なんで俺がなるんだよ！お前キツカケで起きたトラブルじゃないか！」

しかし仲間割れをしている場合ではないということは、3人も理解しており、既に身を翻した三人は、駅とは逆方向に走っていった。

そこから3分ほど走るが、角を曲がる度にギャングに見つかりそうになる。

土地勘が無い静達は、徐々にギャングの捜査網に狭められつつ、確実に追い詰められていった。

「おいどうする？もう何処かへ隠れるか？」

「そうだな・・・」

アレックスとエンポリオが会話をしながら角を曲がると、やはりそこにはギャングが待ち伏せしていた。

「やるか？」

「それしかなさそうだね」

今自分たちが居る細い小路は、今や両側にギャングが待ち伏せしている。

ギャング達全員が能力者ではないであろうから、もしかすると突破口を開けるかもしれないと、二人は覚悟してスタンドを出した。

「二人とも落ち着いて」

追い詰められているという危機感があるのかないのか、突然静はごく平坦な声で言った。

「二人とも、何も聞かずに私の身体に近づいて。今だけ触ることを許すわ」

唐突な静の申し出に戸惑うも、静の「早く!」という声に急かされ、

二人は静に身体を密着させた。

静の髪の毛からは、女の子特有のシャンプーの香りがし、なんとも幸せな気持ちになったが、「アンタ達臭いわね」という言葉にガツカリした。

静はアレックスとエンポリオが密着すると、精神を集中させる。

この能力は、意外とすぐには出来ないものなのだ。

静は小さな声で、「見つかりたくない、見つかりたくない」と呟き、眼を閉じる。

小路の両端からは、まさに今ギャング達が顔をのぞかせている。

もう駄目かと思ったエンポリオとアレックスの二人だったが、ギャング達は走って互いに合流した。

「居たか!？」

「いや、全然・・・」

まるで3人が見えていないかのように話すギャング達だったが、その様子がどうもおかしい。

「あれ、俺達何しに来たんですっけ？」

「それはお前、ペッシ兄さんから指令が入って・・・」

「で、あれでしょ、アントニオさんの命令で、あのなんか、なんでしたっけ？」

ギャング達は互いに顔を見合わせている。

まるで自分たちが、「何しに来たのか思い出せない」かのようにふるまっている。

しばらくすると、ギャング達は同じ方向へ向かって歩いて行った。

「・・・静、これは??」

今日の前で起こっていることが不思議とばかりに、エンポリオは尋ねた。

静は「仕方ないわね」と、説明したくはなさそうだったが、一応説明をしてやった。

「アイツらには私の姿が見えていないわ。それがあたしのスタンド、【アクトン・ベイビー】の能力。今のはその能力を一步進ませた能力で、あいつらの記憶から私達は消えたわ」

「それってつまり・・・相手は俺達を捜すことを忘れたってこと?」

「あいつら、じゃないわ。世界が私たちのことを忘れてるわ。このスタンド能力の発動中はね」

そうか。これなら合点がいく、とエンポリオは思った。

最初にアレックスをブチのめした時、彼女は時を止めたのではなく、姿を消してアレックスを攻撃したのだ。

しかも相手は自分の事を忘れるというから、ガードをすることすらままならない。

これは確かに、最強かもしれない。

「でも静、最初は時間を止められるとか言ってたじゃないか」

「そんな非常識なこと、出来る訳ないでしょ。アンタ達に能力を告げるのもつたいたいなかったのよ。だって私の能力、消えることができるだけよ?」

いや、とエンポリオは静の言葉に続ける。

「十分最強だよ君の能力は・・・その、【アクトン・ベイビー】の能力は」

すると静は少し嬉しそうに「ありがとう、エンポリオ」とほほ笑んだ。

「とにかく二人とも覚えておいて。これが私のスタンド【アクトン・ベイビー】と、その能力【What I'm looking for】よ」

そうほほ笑みながら告げる静の顔を見て、二人は息をのんだ。

その能力の凄さに驚いたと言っのも一つだが、一番は、朝日を浴びた静の顔が、あまりにも可愛らしかったからだった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

13話【What I'm Looking for】(後書き)

What I'm Looking for

U2の曲名。アクトン・ベイビーもU2のアルバム名。

14話(前書き)

再びネタを解説します。
いや、まあ一応・・・

14話

AM 0:00 アメリカ合衆国 ジョースター邸

スージーによる突然の告白に、静は驚きを隠せなかった。

徐綸が死んでいたことではない。

その事実を、この老いた父と母が知り得たことに、驚きを隠せなかったのだ。

ジョセフはうつむき、悲しげに眼を伏せている。

スージーはまっすぐ静を見据えているが、瞳と金色のまつ毛を少し震わせている。

「アイリンお姉ちゃんが死んでいるって、どうということなの？だってエンポリオはさつき・・・」

「財団が調べてくれたようじゃ。2011年、身元不明の男女5人が、刑務所近くで交通事故を起こし、うち4人死んでおる。そのうちの生き残りが、当時10歳のエンポリオ少年じゃ。身元不明の男は損傷が激しかったようじゃが、女性の一人に蝶のタトゥーと、星型のアザがあったようなのじゃ。勿論アイリンじゃと考えておる」

流石ジョースター家のトップだと感心した。

何処の馬の骨ともわからない人間と、その発言について既に裏を取っていたのだ。

これが一代で不動産王と呼ばれた人間の所以というか、だが静に言わせれば「笑顔の下で、人を疑う」卑しい行為であるらしい。

ビジネスや身辺の危険を感知するには必要なプロセスではあるうが、私人間に使うには、いささか感じの悪い方法であるかもしれない。

「じゃあどうしてアイツらをこの家に置いておくの？」

エンポリオが嘘をついているとしたら、ジョセフが彼をこの家にとどめておく必要はない。

スージーはジョセフを振りかえり、右手をジョセフの膝の上へ乗せ、ポンポンと優しく叩いた。

「決断したのはアレクサンドロ少年が居るからじゃよ。エンポリオ少年の話だけではお帰り願うつもりじゃったが、アレクサンドロ少年は・・・ワシが若い頃に背負った友の、友の死を許すと言ってくれた・・・ワシは死ぬまでシーザーの死を背負うつもりじゃったが、少しばかり荷が下りたように感じたんじゃよ。エンポリオ少年をこの屋敷の客人としてとどめているのは、そのお礼という意味もある。随分自分勝手じゃないかと笑うかもしれんが、ワシは本当に救われた気がした。今は素直に、この巡り合いに感謝したい」

静は父親の懺悔にも聞こえる語りを止めることは出来なかった。

静が目窓へとそらすと、窓の表面に水滴がついている。

歩み寄って見れば、雨がしとしと降っていたようだ。

- - 天気予報は雨だと言っただけにはいなかったのに。

急に振り出した雨に、両親の心情を重ねた静は、両親を見れなかった。

窓に反射した両親は、互いに手を握り合っただけで見つめ合っている。

おそらく続きをどちらが話すのか迷っているのだろう。

やがて、やはりジョセフが口を開いた。

「ワシの話をしてすまない静。アイリンが死んでいたことにシヨックもあるじゃろう。しかし、エンポリオ少年はそれをひた隠し、巧みにお前を誘い出そうとしておる」

「そうは見えなかったわ。本当はその死体、アイリンお姉ちゃんじゃなかったとは考えられない？」

ジョセフは大きく肩で息を吐いた。

目はやはり伏しており、悲嘆にくれているようにも見える。

雨が強くなってきた。

「その可能性も考慮しておる。ただ可能性は低いじやろう。一方でワシらはこう考えておる。アイリンの死を隠して、アレクサンドロと一緒にイタリアへ向かうという彼の計画に、意味があるとは思えん。つまり、彼らはまだ何かを隠しているのだと思う。しかしそれはきつと、ワシらジョースター家に損をもたらすものではないじやろう」

ジョセフは机の上の書類を手に取り、老眼鏡で確かめた後、静に渡した。

見れば、エンポリオのパーソナルデータと彼の学生生活が事細かに書いてある。

どうやら日記をつけていたようで、それも財団は参照したようだ。

- ・ ・ ・
- ・ ・ ・
- ・ ・ ・

「その32ページを見て欲しい。そこに彼の言動について報告が上がっている。」

学生生活についての項目の中に、ここ最近のエンポリオ達の言動が記録されている。

発言した日付はちょうど一カ月くらい前で、場所は二人の友人宅で

のパーティーで起きたことだった。

「悪趣味ね。どうやってこんなプライベートな情報迄財団は集められるのかしら」

「こういうスキャンダルのな情報は、スピードワゴンさんが御存命の時から財団は得意としておった。スピードワゴンさんもイギリス人じゃからのう」

「まさかダイアナ妃を追い込んだのも、財団じゃないでしょうね？」

「スピードワゴンさんの名誉に誓かおう。彼らは決してパパラッチはしない。卑近な例じゃが、MI6と似たようなものと考えて欲しい」

・ ・ 呆れた。007だなんて、余計に性質が悪いじゃない。

静はイギリス人につくづく呆れながら、ページに目を向け読み始めた。

・ ・ ちよつとどういうこと？彼らが飲んだドリンクの、グラスの色まで書いてあるわけ？

全くもって信憑性はあるそうだと判断した静は、下から3行目の言葉を見て心臓が跳ねた。

「これ、アイリンお姉ちゃんの話が載ってるじゃない。どういうことなの？」

静の問いかけに、ジョセフは目を細めて応えた。

「読めば解るじやろうが、つまり彼らにとって大切な人を生き返らせたい。その為に彼らは命に代えても”世界を変える”のだそうじ

「や」

文章には「こつそり持ち出したジントニツクに酔った二人は、仲の良い友人達に向かつて次のように熱く話した」とある。

その先はジョセフの話した通りだ。

・世界を変える。コイツらは本気だったんだわ。

静が彼らと会う前から彼らは本気で世界を変えるつもりだったのだ。彼らの覚悟を前に、静は自分が【退屈な日常から抜け出す口実】としてこの話に乗ったことを思い唇を噛んだ。

だが彼らが自分を必要とするなら、自分の覚悟は関係ないとも思う。
・私が本気で覚悟するまでは、コイツらに利用されてやるとするかな。

静はその先を読み進めるために、窓際のランプの下へと移動する。左肩を壁にもたれ掛けながら読んでいると、左耳から「ごうごう」と雨音が轟く。

物哀しげであった小雨は、静達を飲み込もうと空から濁流となって降ってきていた。

AM 5:20 ネアポリス 【カフェ・ド・オーク】

「ちょっと！いつまでくっついてんのよ二人とも！」

静は【アクトン・ベイビー】の能力を解いてもまだくっついていて二人をドヤした。

二人は「そういえば」という顔をしてそそくささと静の席から離れた。

追っては既に引き上げたようであり、目立たないカフェで朝食を済ませることくらいは叶うだろうと思っていた。

今はカフェの中、やや外からは見えにくい位置で朝食のサンドイッチを頬張っている。

席は高い丸テーブルを囲み、腰より上にある椅子に座って3人が食べている。

静は入っている具のエビをこぼすまいと、工夫しながら食べている。彼女は左前でアレックスがローストビーフサンドを頬張っているのを見て、少し羨ましくなった。

アレックスは勿論その視線に気づいており、用心深く一口一口噛みしめていた。

「あら、手が汚れちゃったわ。アレックス、ペーパーナプキン取ってきてくれないかしら」

「お嬢さんの方が近いよ」

「私、手が汚れてるの、見えるかしら？こんな手でペーパーナプキン取ったら、他も汚れちゃうわ。それとも口で啜えて取ってくれませんか？私に言う？」

「俺の肉を啜えるよりは、よっぽどお似合いだぜお姫様。そう言っただけが、しかしアレックスも紳士である。」

仕方なくサンドイッチを置いてカウンターへと歩き出した。

「やめときなよ静」

「アンタがそのサンドイッチを私に寄越すならね」

そう言っただけで静はアレックスのサンドイッチに手を伸ばした。

アレックスは2メートル程先をふてぶてしく歩いており、静達の様子には全く気付居ていないようだった。

そのカウンターで、アレックスがナプキンをとった瞬間、静はローストビーフを一枚くすねてやるうと、サンドイッチの中に手を突っ込んだ。

するとその瞬間、サンドイッチは静の手元から平行線上に宙を滑ってアレックスの腰あたりに飛んでいく。

それを後ろ向きでキャッチしながら、アレックスはナプキンをとって、席まで戻ってきた。

「ど・う・ぞ、お嬢様」

「わざわざありがとう。ようやく手が拭けるわ」

サンドイッチはトレーに乗せられて先ほど運ばれてきた。

アレックスはそのトレーの軌道上を【What a wonderful world】で手繰りよせたのだった。

アレックスは満足そうにサンドイッチにかぶりつき、勝ち誇った顔で静を見た。

「うん、ローストビーフにはバジルソースも合うじゃないか。そう思わないか静？」

静はアレックスを睨んだ。

バジルソースは静の手に付いていたものであり、静がローストビーフに手を出した時にわりかしベッタリと付着していたらしい。

その二人の掛け合いを見てフフッと笑ったエンポリオは、アレックスと目を合わせた。

アレックスも口角上げてエンポリオにウィンクし、二人は互いに笑いだした。

エンポリオは、アレックスの笑う顔を見るのは随分久しぶりだった気がして、なんだかおかしかった。

しかし突如ガッツという音がし、二人の向う脛を激痛が襲う。

二人は机にうつ伏せになって脛をさする。

「何がおかしいのよ」

拗ねたような静の声は二人に届かず、苦痛の表情を浮かべている。

- - 失礼な奴らだわ全く。

一人憤慨した静は、自らの空腹を満たすためにもう一つサンドイッチを買おうとカウンターへ歩いて行った。

ネアポリス 某アパート

やや短い髪の毛の上にセットした女性が、部屋でけたたましく鳴る電話の受話器を持ちあげた。

「はいもしもし？」

女性の声は若干ハスキーに近く、相手を安堵させるように聞こえた。

「ええ、居るけど。わかったわ、そのままちよつと待ってて」

女性は受話器に自分の声が聞こえないようふさぎ、彼女の夫の名を呼んだ。

しかし反応は無く、いつまでたつてもやってこない。

- - 困ったわね。

女性は電話の相手方に夫を読んで来る旨伝え、受話器を電話の横の雑誌の上へと置いた。

そのままリビングを出て、夫の書斎へと足を運ぶ。

中からはギャギャーと騒がしい声がドアを通して小さく聞こえ、女性のため息を吐いた。

- - アタシの声より拳銃が大切なのかしら。

女性は「入るわよ」と勝手に断り、その繊細な指でドアノブをゆっくり回した。

開けた途端ギャーギャーという声がるさく聞こえ、その中心に夫の背中があった。

「電話よ。待たせると悪いわ」

話しかけられた男は振り返り、誰からかと尋ねた。

「アナタの浮気相手から」

チツと舌打ちをしてから夫は席を立ち、取り次ぎありがとつと妻にキスをして部屋を出て行った。

リビングに入った男は、無精髭を撫でながら受話器をとると、一言一言交わした後に電話を切った。

それから窓辺に無造作に放つてあった、自分の頭がスッポリ入るような帽子をかぶり、再び自分の書斎へと戻った。

「ちょっと！この洗濯物いつのよ！こんなだから臭いのよアンタは！」

入るなり女性に怒鳴られる。

こういうところは、昔から全く変わっていない。

「ごめんって。それよりボスが来いってさ」

「ウソ、あんな声してたっけ？」

女性はちょっと驚いた声で尋ねた。

記憶にあるボスの声は、もう少し涼やかな声だった気がする。

「グラスパでも一気飲みしたんじゃねーの？」

女性は「それ傑作だわ」と笑い、夫も自分の冗談を反芻して笑う。意外と面白かったかもしれない。

しばらく笑い合っていると、夫の方が「違う！そんな場合じゃねーんだった！」と騒ぎ出す。

妻は「行くの？晩御飯はどうする？」とまだ笑いながら夫に聞く。

「いや、今日は作れないと思うよ」

「なんで？呼ばれたのはアンタでしょ？」

夫は唇を舐め、妻に向かって早口にまくし立てた。

「呼ばれたのは俺だけじゃない。ボスは俺。そしてもう一人はトリッシユ、お前にも来てくれってさ」

14話（後書き）

【カフェ・ド・オーク】

電気グルーヴの「カフェ・ド・鬼」の英訳。多分違いますごめんなさい。

え？邦楽じゃないかって？

まあ荒木先生もソウルドアウト書いたりしてるし、かんべんしてくださいよ。

【MI6】

イギリスの諜報機関。007の舞台。

【ダイアナ妃】

イギリスの元王妃。パパラッチが原因で死亡。元夫は現イギリス皇太子（2010年現在）

15話【パツシヨ―ネ】

AM 6:00 ネアポリス 駅に通じる大通り

流石に朝6時ともなると、人がそこそこ通りを行きかうようになる。大通りということ、車もいくらか走っており、ネアポリスの人々の一日が始まった。

多くのイタリア人が朝早い事を好まない訳ではない。

朝早起きをして、カフェで朝食を食べてから職場へ出かけようと言う人も少なくないのだ。

実際この日の朝も、多くの街角のカフェにある屋外テラスに座って、住人達は各々の一日のスタートを切る。

大通りにはカフェが2つあり、街角に面している一つでは、今朝も何人かの常連客が屋外テラスでサンドイッチを頬張っている。

常連客は、互いになじみがあるのか、「今日はどんな仕事だ」「今から取引だ」と仕事の話を交わしている。

ここは朝食をとる場所であると同時に、ネアポリスの人々にとって社交場と同じなのかもしれない。

そんな社交場の目の前を、怒鳴りながら静達は全速力で爆走した。常連客たちは目を見開き、啞然として言葉を失う。

荷物も持たず、トップスピードで突っ走る3人は、ネアポリスの町ではかなり目立つ。

それにも構わず、3人は走り続けた。

「エンポリオがなんとかしなさいよ！」

花屋の前を通り過ぎた時に静は怒鳴った。

シャッターを開けていた小太りの店主は、肩をすくめて見ている。

「静が寝たのが悪いんだろ!？」

「お前らそれより走れ!」

靴屋の前を通り過ぎた。

後方からは「待てこのガキ!」「許さねえぞ!」と罵倒する声は遠く聞こえる。

アレックスが後ろをチラチラ振り返ると、追っ手は100メートルほど後ろに居る。

このトップスピードのままなら、先ず捕まることは無いだろうが、駅がどんな状況になっているかは想像もつかない。

だが今捕まっては元も子も無いので、とりあえず今は走ることに専念する。

宝石屋の前を走り過ぎた。

3人はティファニーのポスターを無視して走る。

「おい、前から来てるぞ!」とアレックスが叫ぶ。

静とエンポリオが前を見ると、前方70メートルのコーナーから、怖そうなオッサン達がわらわらと出てきた。

「最悪うー」

「引き返すか!？」

静はオッサンの団体を注視した。

イタリア人らしい小太りの体系が2人、比較的若そうな痩せ形が5人。

全員こつちを見ており、7人のうち、いつでも捕まえられるように身構えているのが4人、痩せ形が3人こつちへ走り込んで来る。

向かってくる3人の内、一人は左寄り、二人は右寄りに走っている。静はこれを見逃さなかった。

――7人……行けるわ。

「二人とも、最初の右に2人、左に1人、スタンドで【流し】てちようだい」

走りながらで、瞬時には状況の掴めない2人だったが、こちらへ向かってくる3人を見て、各々スタンドを出す。

走っている位置に対応して、【ウェザーリポート】が手前の一人を左に、【3W】が続く2人を右に押しやった。

すると驚くほど滑らかに、2人と一人の間には溝が出来、3人はその真ん中をなんなくすりぬけた。

その間も二人のスタンドは、3人を脇へと押し続けている。

「次は4人の間、2-2に分けてドライブ。彼らはラインマン。私たちはランニングバックと考えて」

この表現は的確で、二人のスタンドは再び前方の4人の真ん中に割り込み、右に左にと押しつづける。

すると、やはり真ん中には、一人分が通れそうな程の隙間が空く。静は躊躇わずそこへ飛び込み、残る二人も続いた。

スタンドは最後のアレックスが通り過ぎた後もドライブ（両手で人の身体を押しすこと）し続ける。

こうして難なく団体をすり抜けた静達は、そのすぐ後、道にテーブルやら樽やらをブチ撒いて、追っ手の足を鈍くした。

3人は尚も走り続けながら駅を目指す。

タバコ屋の前を通り過ぎた辺りで、アレックスが「もうすぐ駅だ」と言うと、アレックスとエンポリオは二人、静を守るように先頭を

走った。

3人が駅に着くと、ギャングらしい人影は見えなかった。これはしめたとばかりに、3人はホームの電車に乗り込み、ネアポリスから離れようとした。

幸い貴重品は全員身に付けており、無くしたものは着替えだけである。

3人にすれば、命よりは安い代償だった。

エンポリオは人心地ついたように、肩を上下させながら、コンパトメントのシートにもたれかかった。

電車はまだ走りださない。

走りだしたら、いったいどのような景色が目の前の窓を流れるのだろうかと考えると、エンポリオは自分が列車に乗るといふ行為が初めてだったと気づいた。

- - 刑務所よりはマシかな。

他の二人もシートに深く座り込み、静に至ってはまどろんでいる。

エンポリオは二人に何処まで行こうかと尋ねると、眠そうに二人とも「どこでも」と言うのだった。

「おい二人とも真剣に考えてくれよ」

エンポリオは眠気からか、少しイラついた声で言った。

「アンタが考えなさいよ。少なくともアンタがカフェで追手の姿に気づいていれば、こんなことにはならなかったわ」

「じゃあ自分が寝ていた事には責任が無かったのかい？ 静が起きてれば、僕だってもう少し外を警戒する余裕は有ったさ」

つまるどころ、寝ていた静にどうやって機嫌良く起きてもらうかと

思案していたところ、追手の存在に気付けなかったのだ。

この時アレックスは列車の時刻を店主に訪ねており、騒がしいと思つて後ろを振り返ると、既に二人とも逃走の準備をしていた。

「不毛な会話はよそうぜ。エンポリオ、お前までイラつくとは珍しい」

「だって静が言いがかりを・・・」

これには反論したがった静だったが、アレックスは珍しく冷静に二人をなだめ、向かう先を指示した。

「とりあえず駅先に行けば、先ず追手は来ない。そこは別のギャングの土地だからな。それまで1時間半くらいか。寝て過ごそうぜ」

アレックスが言葉を切ったと同時に列車の車輪はゆっくりと回りだし、すぐに高速で回転する。

3人は自分たちの身体が、列車のモーターの振動によって小刻みに揺れていることを自覚した。

「- やつと出発か。」

アレックスはやれやれとばかりに腕を組み、窓際へもたれかかった。静は片ひじついで窓を見ている。

エンポリオはヤンキースの野球帽を目深にかぶって寝ようとしていた。

列車はいよいよスピードを増し、駅を後方へと置き去りにする。

静が窓の外を眺めているのを見て、自分も見ていようかとも考えたが、ガチャンというコンパートメントの扉が開く音に反応した。

「あー、ここいいかな？」

30代半ば程の男が、扉から顔を出して訪ねてきた。

静は知らん顔を決め込んで窓の外を見ている。

アレックスは困って、イタリア語で「どうぞ」とほほ笑むと、男は片側三つある椅子のうち、静の側に身を置いた。

「グラッチェ！」

男はにこやかに笑いかけ、アレックスはそれに眼だけで応えた。

どうせ3人で話すことも無いし、このまま寝てしまおうかと思ったが、今入ってきた男の恰好に目が行った。

男の方もアレックスの視線に気づき、なんだい？というように好意的に眉を上げた。

「あー、その、センスのいい帽子ですね。ブランドは？」

アレックスは大して興味も無かったが、男のかぶっている帽子に目が行った。

両耳を包むように、ともすれば頭巾のように見えなくもない派手な帽子は、アレックスは見たことが無かった。

「これかい？嫁には褒められなくてね。趣味が悪いと良く言われる」

「あー、ちょっとオランダ人っぽいかも」

二人は顔を突き合わせて笑った。

静は相変わらず無愛想に外を見ている。

無愛想だな、とアレックスはたしなめようと思ったが、静の眼が怖くなるほど見開かれているのに驚いた。

- - 触れない方がよさそうだ。

「奥さんはネアポリスに？」

「いや、この列車に乗ってる筈なんだけど、ちょっとサンドイッチを買いに行つててね。あ、だから嫁もいいかな？このコンパートメントに」

構いませんよと快諾し、それからイタリアの女性が如何に気性が激しいかを語らった。

男の話は面白く、時に下品さを織り交せてアレックスを退屈させなかった。

アレックスはこの親しみやすい男性がすぐに気に入り、昨日までのギャングとのひと悶着もあつて、この会話を楽しんでいたかった。

「ところで嫁が来ないんだよなア」

「アナタと同じ帽子を探してるのかも」

キシシつと二人で笑い、男はコンパートメントの扉から外を窺った。それでも廊下の向こうまでは見渡せないので、中腰になって扉から顔を出した。

アレックスもそちらに目をやると、右目の端で、恐ろしく素早く動く物体を目にした。

――ん？

突如何かを激しく叩きつけるような音がして、中腰の男がアレックスの足元、床へと転がった。

エンポリオはビクンと震え、目を開けて周囲の状況を把握しようとした。

男の上には、先ほどまで外を見ていたはずの静が、恐ろしい形相でまたがり、男の腕をひねりあげていた。

静の攻撃は容赦なく、ギリギリと音が聞こえる程に迄男の左腕をねじり上げ、今にも折れんばかりであった。

「何してんだ静！」

信じられないという顔でアレックスが英語で彼女を責め立てて、その身体を男から引き離そうとする。

そのアレックスに対して、静は英語で怒鳴った。

「黙って！この男パツショーネよ！」

エンポリオとアレックスの背に冷や汗が流れる。

・・・そんな・・・

今まで楽しく会話していたこの男がパツショーネだなんて。アレックスは呆然として中腰のまま動作を止めてしまった。

静は再び男の腕を見て、思い切りひねり上げる。

男の口からは悲鳴を押し殺したようにグググっとくぐもった声が漏れる。

どうしていいかわからず、エンポリオも身構えるが、いったいどうすればいいのか全くわからないようにキョロキョロしていた。

すると今度は、二人の左目の端から何か伸びてきて、気付いたら静は窓際に吹っ飛ばされていた。

バン！と強い音がして、静は窓際の壁に叩きつけられる。

今まで静が居たところには、ツルリとした顔立ちの半透明の女性型スタンドが、拳を振り抜いた状態で立っていた。

「ガイドお、なんだってそんな若い子とイチャこいてるわけエ？」

男は左腕を庇って上を見上げる。

するとそこには、品の良いロングスカートを履いた妻が、腕を組ん

でこちらを見下ろしていた。

助かった、と思う反面、この後のお説教が怖いなと思いつつながら、
ミスタは腰の拳銃を右手で抜いた。

第16話【パッション2】

AM6:30 ネアポリスから30kmの丘を通り過ぎるところ
コンパートメント内

エンポリオは混乱していた。

目を覚ましたら目の前に居る男。

そして吹っ飛ばされた静。

解るのは自分たちが、やはり危機にいるようだということだった。
素早くヤンキースの帽子の下から右目を向けると、静はかなり強く
叩きこまれたらしく、身体を動かせないでいるらしい。

左目には銃を抜こうとしている男と、女のスタンドが見える。

エンポリオは身構えずに素早く【ウエザー・リポート】を女のスタンドに突進させ、男の方を【幽霊の拳銃】で牽制した。

「動くな！」

エンポリオの尖った声に、我に返ったアレックスは【What a wonderful world】で男を拘束しようとした。

しかしガイドと呼ばれた男は拳銃を静に向けており、4人はこう着状態に陥った。

女はスタンドを【ウエザー・リポート】に拘束されて廊下の壁でもみ合っており、女は動かない。

男はエンポリオに【幽霊の拳銃】を突き付けられ、その男は拳銃を静に向けている。

そしてその男を殴りかかろうとしているアレックスの【3W】が、
右の拳を引いて宙に浮かんでいる。

エンポリオとアレックスは興奮状態で、目玉だけ右へ左へと動かし、
相手の動きを警戒している。

しかし相手は落ち着いた様子でこちらを観察しているようだった。このこう着状態が5秒ほど続いたのち、男が口だけ動かして話しかける。

「なかなかいい動きだ。俺はミスタ、そっちはトリツシュ。パツシヨ―ネだ」

「知ってる」

アレックスは短く応えた。

エンポリオとトリツシュは、彼らに会話を任せて警戒している。

「カツカすんな。礼儀さ」

そう言うミスタは口調とは裏腹に、拳銃の引き金にかけられた指からは、ドス黒い決意が感じられる。

この場の誰かが動けば、間違いなく引き金を絞るだろう。

アレックスは頭の中で冷静に恐怖した。

いよいよピンチかもしれない。

しかし一方で、ミスタは別のことを考えていた。

「おいおいなんだよこのガキ共あよ・・・俺達よりずっとプロフエツシヨナルって目をしてるぜ・・・」

このガキ共はミスタ達を殺しかねない。

流星に嫁まで犠牲にしたくはないと考え、ミスタは彼らに話しかけてみたのだった。

それに、当初の目的は、彼らを痛めつけることには無かった。

「あー・・・俺達の目的は、お前たちを痛めつけることじゃないんだ。俺達のボスがお前らに会いたがっている。なんでもお詫びをし

たいらしい」

- - 詫び？まさか。油断できない。

「空港の一件は知っている。パツシヨーネではああいう詐欺行為を許していない。本来なら罰せられるのは俺達の部下であつて、お前らじゃない。それを伝えたいと思つたのも一つだ」

「だったらボスの所に連れていく必要はないだろ。いい加減その拳銃をしまえ。もし撃てば、お前らの命は無いぞ」とイタリア語でドスをきかせる。「それに、嘘をついてまで俺と話している必要もなかっただろ」と、アレックスは続けた。

- - まいつたねどうも。

ミスタはアレックスの唇の震えに気付いていた。恐らく自分たちを恐れている証拠なのだろうが、それだけに暴れたら怖い。

慎重に言葉を選ばなくてはと考える。

「多分信用しないと思つてな。それにトリツシュが来るまで一人でスタンド使い3人を相手に出来る自信もない。ちよつとどんな奴かも興味あつたつてのものもあるかも」

アレックスは混乱していた。

相手の言う事を何処まで信用していいのかもわからない。

ミスタの言葉の裏に、嘘があるかどうかは到底見抜けなかった。

「これでも信用できないか？じゃあこうしよう。ゆっくりと今から俺は拳銃を引つ込める。お前らの銃はそのままがいい。トリツシュにも下がらせる。これで信用してくれないか？」

「いいよ。そうしてくれて」

ミスタは目で合図して、トリッシュにスタンドを下げさせる。自身も銃をゆっくり降ろし、ホルスターへとしまふ。

そして二人は両手を頭の後ろに回し、その場で立っていた。

アレックスはその様子をエンポリオに通訳し、警戒を怠るなど英語で指示した。

その間エンポリオはアレックスの方をチラリとも見ずに、集中して警戒していた。

「一つ条件がある」

アレックスは言った。

声を震わせないようにとは気を付けたが、試みは失敗したようで、若干恐怖の色が滲み出ている。

「ボスのところへ行くのは流石に怖い。ボスに來させることは出来るか？」

「あー、多分大丈夫じゃねえかな。アイツも楽しみにしていたし。それにアイツ引きこもってばかりだから、それもいいだろ」

「楽しんで？」

「そうだな。それが一番いい。今から呼んでいいか？」

どうぞ、とアレックスが言うと、ミスタはゆっくりとポケットに手を伸ばし、そしてまたゆっくりと携帯電話を取り出した。

「ただし俺たちにも聞こえるようにスピーカーをこっちに向けてくれ」

ミスタは「はいはい」と言っただイヤルをプッシュする。コンパートメントに、電車が線路を踏みしめる音と共に、とうるるるつと呼び出し音が鳴る。

やがてガチャっという音がして、相手が電話に出た。

「あ、もしもし？ ジョルノ？」

割と能天気な声でミスタは言った。

すると、大気を抜けるような、さわやかでやや高い声で、相手が話してきた。

「ああミスタですか。彼らは捕まりましたか？」

「それが、一応協力してくれるって言うんで、コンパートメントと一緒に談笑していたところだ」

すると不機嫌そうな唸り声が、小さくスピーカーから漏れた。

この経過を良く思っていないのだろう。

「なんでもいいですけど、怪我のないように連れてきてください。

大事な証人です。決して脅したりしないように」

- - もうおせえよ。

アレックスは呟いた。

しかし電話の相手、おそらくボスなのだろうが、それを納得させる落ち着いた声をしている。

あながち相手のことも信用できないってわけでもなさそうだった。

「それなんだけどさ、あんまり信用してくれてなくてさ。出来れば
ジヨルノ来てくんないかな？」

ジヨルノ、という言葉聞き、アレックスとエンポリオは心臓が高
鳴った。

ジヨルノ、それが二人の最終目標であり、それは目の前にある。

「行きませんよ。ボスは外を出歩くもんじゃない」

「でも来てくれなきゃ俺殺されちゃうかも」

「・・・ミスタ談笑してるんじゃないんですか？」

「そこらへん後で説明するよ。とりあえず場所を指定するから頼む
わ」

ミスタは次の駅で降りる旨伝え、その近くにあるパツショーネの
息がかかっているカジノで落ち合うことにした。

アレックスはそのやり取りを見ていて少し安心した。

ギヤングのボスと幹部という間柄なのに、長年の友達との電話のよ
うな空気が漂っている。

もしかしたら、信用してもいいかもしれない。

エンポリオに経緯を話し、どうするか尋ねると、一応信用してもい
いではなからうかと言うことになった。

スタンドを出したままではあるが、二人はミスタとトリッシュをコ
ンパートメントに座らせ、彼らの話を聞くことにした。

彼らは【パツショーネ】の幹部であり、今回の件は非常に申しわけ
なく思っている件謝った。

なんでも、今回の様な犯罪は【パッション】の規則の中で厳しく禁止されているらしかつた。

クリーンなギャング、というのはいはあまりにもお粗末なジョークに聞こえるが、ジヨルノというボスはそれを目指しているようでもある。「出来過ぎだ」とアレックスはイタリア語で呟いた。

勿論全ての犯罪から手を引いたわけではないが、許されるのは非合法力ジノと市民からの依頼による。『時として暴力を伴う』モメ事解決の類だけらしい。

それでもネアポリスの犯罪件数は、以前のボスが居た時よりも遙かに下がったらしく、ミスタとトリツシユはそれが誇りだと言つた。二人は勿論全てを信用した訳ではないが、ある程度の好感は芽生えた。

それに気を良くしたミスタは、自分たちが如何に素晴らしいギャングであるか、またそれが如何に光栄であるかをとうとうと語つた。付けくわえて、だから今回の様な事態は自分たちの監督責任であり、エンポリオ達には責任が無い事を告げた。

「しかしそれにしても」とミスタは続ける。

エンポリオ達がこれだけの大立ち回りをしている以上、身内の恥を晒したままで、メンツが保てるとは思つていない。

君たちに何らかの制約をかけさせてくれると嬉しいとミスタは申し訳なさそうに言つた。

それはきつと希望ではなく、そうなるのだという確信が持てた。

エンポリオ達は身体をこわばらせ、スタンドが構えた。

「だが聞いてくれ、自分たちがやり過ぎたとは思わないか？」

この言葉に思い当たる節が無いことも無かつた。

確かに自分たちがやってきたことは、滅茶苦茶を通り越している。

それにここでギャングの二人をボコしたとしても、追手が必ず制裁しに来るであろうことは、ミスタの口調から分かつた。

だが逆にここまでやっておきながら、自分たちが無罪放免と言うのもおかしい話であり、ある程度の制裁も受け入れなければならぬかもしれないとアレックスは考えた。

エンポリオはアレックスの通訳を聞いて、少し恐怖した。

如何に信用におけそうだとは言っても相手はギャングであり、彼らを敵にしたことには違いない。

また、やり過ぎているのはどちらかというところ、自分たちに他ならぬ。

アレックスは制約と訳したが、その本意は制裁に近い物があるのではないかと思う。

彼の話では、制約と言っても罰金やそこらでカタを付けるといふ話だが、それで済むなら良いとも思った。

だがここで二人にとって残念だったのは、心の何処かで「目の前に居るギャング達と仲良くなる事が出来なくもないのではないか」と考えていたことを、自覚したことだった。

この無意識の望みは崩れた。

少しばかりの寂しい思いと、急に背後から声をかけてきた虚無感が、二人を陰鬱な気分させた。

電車はそろそろ駅に着くと言う、車掌のやる気の無いアナウンスが流れる。

さてそろそろ、とミスタは立ち上がる許可をアレックスに求め、アレックスは少し沈んだ眼をしながら「いいよ」と答えた。

「なに、大した制約じゃない。悪いのはこっちだ」

「いえ、イタリアにはイタリアのやり方があります。理解しているので大丈夫です」

アレックスは自分よりやや身長の高いミスタを見上げ答えた。

そのアレックスの肩を「悪いな」と思っているように、ミスタはポンと叩いた。

それからエンポリオがコンパートメントから出て、続いてトリッシユが歩み出る。

アレックスはミスタを見て、首をかしげながら「お先にどうぞ」と会釈した。

ミスタは口元の左端をきゅっと上げて応え、アレックスに背を向けた。

その背中を寂しそうに一瞬見つめた後、アレックスは忘れ物が無いか車内を見渡した。

するとガサリという音がしたので、なんだろうと窓のほうを見るが何も無い。

- - 風かな。

そう呟いた時だった。

「ナマ言っでんじゃねえよクソ野郎がアアーッ!!」

女性の声で、コンパートメント内の全てを震わせるかの如き怒号が飛んだ。

それから骨と骨とがぶつかるような大きな痛々しい音がそれに続き、アレックスが振り返るとミスタが頭を押さえて昏倒していた。

ミスタの上には、なんということだろう。

今まで何処にもいなかった静が、青筋立ててまたがっていた。どうやら【アクトン・ベイビー】でその身を隠していたらしい。――えらく下品なジャンヌ・ダルクじゃないか。アレックスは呆気に取られながらそう思う。

列車の空いた窓からは風が入り、静の黒い髪が優しくたゆたう。それとは正反対の面持ちで、静はミスタの腰に手を伸ばして拳銃を奪い取り、ミスタの頭に付きつけた。

「テメエらから吹っかけてきた喧嘩をいなして制約とは言い度胸じやねえか！」

「ああ・・・今俺を襲ったところで、ギャングの手からは逃れられない・・・制約は重くなる・・・」

静の青筋はいよいよ怒気を増し、拳銃を持つ手に力が入る。

「ミスタやベエー！よう！このじょーちゃんヤル気だぜエエー！」

セックスピストルズ達が、弾装の中から出てきてミスタを守ろうと群がる。

「金ならいくらでもやるよ。だから好きに！あたしは好きに殴らせてもらっわー！」

そう言って静は銃のグリップで、ミスタの側頭部を容赦なく殴り続ける。

そのうちミスタは抵抗する力もなくなり、守りに徹し始めた。

「お、おい辞めろシズカ・・・」

アレックスが力なく止めるが、静は罵声に近い声で、エンポリオとアレックスに怒鳴った。

「なんでアタシ達がイタリアの田舎ギャングに制約なんかかけられなきゃいけないのよ！コイツらが撒いた種なんだから、育ったアタシの怒りは十分に収穫するといいわ！！」

それからミスタをボコボコにし始めた。

トリツシユは呆然として殴られている夫を見下ろす。

なんと言えば良いのだろうという顔をしている。

エンポリオも口を開けて、その様子を見ていた。

静の下では許しを乞うミスタの声が聞こえるが、静の暴行は全くもって容赦ない。

ミスタの悲痛な叫びがコンパートメント内を木霊し、もはや悲鳴しか聞こえない。

それも段々小さくなり、ようやくミスタは気を失った。

それを確認した静に、アレックスはようやく声をかけることができた。

「なあ静・・・ここまでやる必要はないだろう！？俺達は若いに向かつてたんだぜ！？」

「馬鹿言ってるじゃねエよ！」

静の怒声が響き渡る。

「たかだか犯罪者にビビってるんじゃないわよ！和解！？勘違いしないで二人とも。私たちは被害者で、コイツらは加害者。加えて私は

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第16話【パッショーネ2】（後書き）

なんかパッショーネがザコに見えてきますね。反省します。

17話【パッションネ】（前書き）

どうでもいいいつもの解説つけときます。

17話【パツシヨ―ネ】

AM6:50 ネアポリス郊外 駅ホーム

ホームに降り立った静は、次はどいつだというように拳を肩で回した。

先ほどミスタを静がブチのめしてからが大変だった。

まず静とエンポリオ・アレックスによる二対一の舌戦が繰り広げられる。

この間にも、静は何か文句を言っではトリツシュやミスタをつま先で蹴飛ばし、右手の拳銃は放さなかった。

拳銃を降ろすようにいくら説得しても、全く聞きはしなかった。

瞳孔まで開かれていますのではなからうかと思っただけで眼を見開き、口元だけで笑いながら「足りないわね」と呟く静の姿は、エンポリオがかつて【幽霊の部屋】で呼んだことのある東方の怪物、般若というものを連想させた。

やがて車体にブレーキがかかるころには、静のうっ憤も晴らせたように、すっかりいつもの調子に戻っていた。

とは言っても、眉間に皺を寄せ、常に誰かを殴る口実を探すように落ち着きなく歩き回っていた。

つまるところ、この静の姿がエンポリオ達にとっていつもの静であって、ようやく安堵も付けるのだった。

電車が着くと、静は【アクトン・ベイビー】で自分の体とミスタ・トリツシュを隠しながら電車を降りた。

車両の扉からミスタとトリツシュを降ろす途中で「ガコンガコン」という音が聞こえたが、エンポリオとアレックスは顔を見合わせて「これ以上彼女がギャングに危害を加えませんように」と祈るのだった。

今、改札へ3人で向かう。

改札のオジサンに切符を渡す。

ちよつと透明になつてゐる静が二人の身体を引きずりながら改札を通つてゐる時だった。

携帯電話が鳴る音がして、静はギクリとした。

改札のオジサンは、よもや自分の携帯電話じゃあるまいかと自らの身体を探すが、彼の携帯電話は沈黙してゐた。

静は急いでミスタとトリツシュを引きずつて改札から出ようとする。ようやく二人分を引きずり、誰も居ないベンチの近くに静が着いた。後ろではオジサンが、落ちてゐる携帯電話はないかと捜しまわつてゐた。

間一髪だったかもしれない。

とりあえずエンポリオとアレックスが大きな声で話している横で、静は透明のままミスタの身体から携帯電話を抜きとり、通話ボタンを押そうとした。

しかしボタンが小さく、爪が滑つてなかなか押せない。

- - これだからノキアは。

そう一人ボヤキながら、ようやくの思いで通話ボタンを押せた。

「はいもしもし」

はたから見ると、全く何もな空間から女の声が聞こえるのは気味が悪かった。

その光景にエンポリオ達は額に汗しながらも、周りの人間に感づかれないように大声で話してゐた。

「ミスタじゃありませんね？ 静さんですか？」

「そうよ。あなたがシオバナ・ハルノさん？」

途端電話の向こうで笑い声が聞こえた。
嫌な感じは無く、すかつとした気持ちのいい笑い方だった。

「その名前で呼ばれたのは本当に久しぶりですね。財団も趣味が悪い！」

「- そんなのとつくに承知してるわ。」

一方でエンポリオとアレックスは静が一体何の話をしているのか解らなかった。

電話の相手はジョルノ・ジョバーナではないのだろうか。

彼女が自分たち以外から、ジョルノの秘密を教えられていた？

「・・・まさか。」

構わず、エンポリオ達はケンタッキーの話で盛り上がることにした。

「何処にいるの？」

「ミスタが知っているはずです。案内してもらえばいい」

「彼はトイレよ。列車内で食べたトンノに当たったみたい」

再び受話器から笑い声が聞こえる。

面白いジョークを聞いたかのように、屈託なく笑うイタリアンマフィアのボスに、静は少し戸惑った。

「まあいいでしょう。きつとミスタの方に失礼があったに違いない。静さん、そこを出て右手に大きなビルが見えるのがわかりますか？」

「きつとわかると思うわ」

「じゃあ今構内なのですね？それでは・・・いいでしょう。【サンデー・モーニング】というカジノがあります。そこで8時に待ち合わせるといふのはどうですか？タクシーの運転手にそう言えば連れて行ってくれるとおもいます」

「わかったわ。ただし約束しなさい」

「言ってみてください」

「私たちに危害は加えない事」

また受話器の向こうで笑い声がする。

ここまで来ると、失礼な奴だった。

ジヨルノは「約束する」と言つて、電話を切った。

静は経過を二人に説明し、今からどうするか悩んだ。

「とりあえずさ、ミスタさん達は静が透明にしておくしかないですよ？」

「それは構わないわ。とりあえず8時にカジノへ着けば問題はない」

「じゃあそれまでこのベンチで適当に時間でも潰すかあ」

三人が思い思いの事を述べ、とりあえずこのベンチを占拠することにした。

途中アレックスがトイレへ行ったり食べ物を買ってきたりと忙しかったが、おおむね上手く時間はつぶせていた。

静がしばらくして寝たいと言いだし、スタンド能力は寝ている間も発動していることを告げ、勝手に寝てしまった。

アレックスとエンポリオは、その間ハイスクールで気になるチアガールの話や、気に入らない数学の先生の話をして過ごした。それから8時まで15分を切ったというところで静を起こし、タクシーに乗ることにした。

幸いなことに、タクシーの運転手は年配のジイさんだったので、多少エンポリオ達がタクシーに乗るのをまごついていても、さして不振には思わなかったらしい。

AM 8:01 カジノ【サンデー・モーニング】

店の扉は「close」の看板が下がっていたにも関わらず、バーテンダーの様な男が扉の前に立っており、エンポリオ達を中へと促した。

店内は朝にも関わらず電気が付いており、一応明るかった。

清掃員が何人か、カジノの床掃除や機械の点検をしている。

よく店内を見渡すと、意外と店内が狭い事がわかる。

縦10メートル×横25メートル程度の部屋だろうか。

スロットの類は一切なく、ポーカー台、ブラックジャック台、ルーレット台が一定の間隔をもって詰められている。

その一番奥のルーレット台に、銀髪の男性がディーラーとして立っており、椅子には金髪の男性がライダースーツに身を包んで座っていた。

顔は背を向けているため見えない。

こぎれいな格好をしたスピナーが「一人こつちへ」と呼んだ。

誰が行くかエンポリオとアレックスが迷っていると、静が身体を顕わして歩み出た。

残された二人は、ミスタとトリッシュのからだも視覚化されたこと

に焦ったが、ディーラーの「彼らをスタッフルームへ」という指示に、清掃員達は彼らを素早く運んで行った。

静はその間歩いてルーレット台の近くまで寄っていく。

横からフロアボーイが金髪の男が座る真左の椅子を引いて待っていたが、あえて右横の席に座った。

フロアボーイは嫌な顔一つせず静に近寄り「お飲み物は？」と聞いた。

「エスプレッソを頂戴」

「かしこまりました」

フロアボーイは下がって行った。

静が左を見ると、金髪の男は蓄えた顎髭を撫でながら、スピナーに「もうひと勝負したいのですが」とねだった。

スピナーは静の顔をチラリと窺い、仕方なしにルーレットを回す準備をし始めた。

「どつちがシオバナさん？」

スピナーの手が一瞬震えた。

静はそれを見逃さず、左を向いて「あなたがボスね」と聞いた。

「そうですよシズカさん。よろしくお願いします」

流暢な英語だった。

自分のRの発音にコンプレックスを持つ静としては面白くなくなり、先を急いだ。

「それで、どんな制約を受けるのかしら？」

「制約？ああ・・・それでミスタ達がああなっているのですね」

ようやく合点が行ったように、ジヨルノはポンッと手を打つ。
それから静に向き直り、ミスタと部下の非礼を詫びた。

フロアボーイがエスプレッソを運んでくる。

それを見計らうと、スピナーはルーレットを回し始めた。

同時に右手で小さなボールを投げ込む。

その手なれた技に静は見入ってしまった。

- 時間がゆつくりと流れている気がする。

滑らかに空間を滑るスピナーの手は、堅実さと柔和さを感じさせる。
ルーレット内を転がるボールは、さして音が無いこの店内において、
カーーツと静に響く。

「赤の14」

ジヨルノはスピナーの方を向いて、楽しそうに発言した。

スピナーは「どうかな？」とでも言いたげに肩をすくめている。

「全ては運命の輪のままに」
ホイール・オブ・フォーチュン

そう呟くスピナーの言葉は、人を人としめない深遠へといざなうか
のような深い声だった。

きつとこの言葉に酔って、だれしもが賭けに走るに違いない。

カランカランとルーレットが速度を落とし始め、ボールがポケット
に入った音がする。

静にはボールがどこに入ったかさっぱりわからなかったが、ジヨル
ノは既に悔しがっていた。

「また腕を上げましたね、フーゴ」

フーゴと呼ばれたディーラーは、ニヤリと笑って「このイカサマが解るのは君位だよジョルノ」とボスを称えた。

全ての会話が英語であることから、静に気を使つての配慮のようだった。

「ルーレットと私、どっちが大切なの？」

少しイラつきながら静が聞くと、ジョルノは正直に謝ってきた。

フーゴは得意そうにボールを指先で弄びながら、ボスを見ていた。

「改めて自己紹介します。僕がジョルノ・ジヨバーナです」

それから右手を差し出し、「よろしく」と言つて静の眼を見据えた。その目が黄金色に輝いたように見えて、一瞬静は目を疑った。

・・・とにかく、嫌になるくらい爽やかなゲス野郎ね。

静はそう思いながら手を握る。

ジョルノが静の手を引っ張つて挨拶代わりのキスといったところだが、それがエンポリオとアレックスは若干羨ましかった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

17話【パッションネ】（後書き）

【サンデー・モーニング】

マールン5の曲名から。

なんとなく曲からイメージ貰って書いているフシがあります。

そもそもこのシリーズも、ある曲がきっかけとなって書くことと想ったのですが、それ言っちゃうとネタバレになりかねないのでやめておきます。

18話【パッション】（前書き）

またト平日の更新です。

すみません感想へ返信送れています。

そして解説です。

18話【パッション】

AM8:23 カジノ【サンデー・モーニング】

「いい加減にしろ金髪クソ野郎がアアーツ!!」

- - ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイ

静の暴言にエンポリオとアレックスは絶望した。

死んだ。これは俺達死んだぞ。

二人に、そう直感が告げた。

静は右手のエスプレッソを持って、ジョルノにブチまけようとしたが、ジョルノのスタンドにそれを阻まれた。

アレックスとエンポリオは死ぬほどド肝を抜かれる。

冷汗は止まらず動機も激しくなり、唇も震えてきた。

しかし次に、静は悔しそうな顔をしながら左足でガツンとジョルノのスネを蹴った。

これは流石に防御できなかったようで、ジョルノはスネを押さええつてうづくまる。

ジョルノのスタンドは両手を前に出し、「もう辞めたげて」と言いたげにプルプルと静に向かって首を振る。

いよいよ彼らを遠巻きに見ていた従業員たちが駆け寄ろうとするが、フーゴが右手で制し、無言で「動くな」と意思表示をする。

「アンタ達どんだけ我儘なのよ!メンツが潰れたぐらいでネアポリスでハバきかせられなくなるんだったら、ギャングなんて辞めりゃ

いいじゃないのバカ！」

この一言にはフーゴが吹きだし、ジオルノも痛みの涙目と共にになりながら笑った。

しかし静にとつて二人の笑う顔は、ことさら彼女のプライドに引っかかったらしく、今にも一人で【パッショーネ】を潰してやらんと怒りを巻いた。

「アンタ達のメンツはどうだか知らないけど、私たちのメンツはどうなるわけ！？そつちばかり卑怯よ！」

【パッショーネ】のボスに会っても、結局は制約まがいの話をされ、静は怒り心頭といったところだった。

客観的に見れば、無罪放免とは確かに虫の良い話にも感じる。

しかし、静は仮にも命の危険を感じた身。

相手の要求を飲み込むことは、彼女のプライドが許さなかった。

加えて、何かあってもスタンドがあれば、という若い短絡的な考えがあつたことも原因と言える。

メンツという言葉も、その納得できないが故出てきた言葉だった。

これにジオルノは静の激昂に動じず、ただ少し笑いながら言葉を続ける。

「君たちのメンツを潰した？それはどういう意味ですか？」

息を吸い込み、静はジオルノを睨みつけた。

「私達ジョースター家を侮辱したのよアンタ達は。アナタの眼にはイタリアのマフィアしか目に入っていないようだけれど、世界のバラスでは小さいもんだわ。流石のボスも、ジョースター家とスピードワゴン財団はご存じでしょ？」

ジヨルノの笑みは引いて、今は「それが？」という涼しい顔でこちらを見ている。

もう静が言っている事に対してさしたる反論もせず、彼女のヒステリーに付き合っているに近い感情だった。

論は支離滅裂になり、とにかく相手の揚げ足取りやいちゃもんにやつきになっている。

しかしジヨルノは【パツシオーネ】の為に結論を持っていこうと冷静だった。

意外そうな顔すら見せない。

「アナタは今、彼らの懐刀に手をかけたってわけ。しかもアナ達からちよっかいを掛けてね」

「だから今回の件は本当に申しわけないと思っています。【パツシオーネ】も大きくなりすぎて、枝葉迄は目が届かない」

「それがこっちのメンツをつぶした理由になると!？」

ジヨルノは静の問答を気にしているのかどうかは周りから不明だったが、一応気は使っているようだった。

「ホテルを襲撃した件も、僕の耳に入る前の話でした。彼らには嚴重に罰則を言い渡します。君たちの荷物も保障します」

「でも制約は受けてもらおうと?」

ジヨルノは足を組み替え、一息ついた。

それから一瞬頭の中で言葉を選び、続けた。

「・・・あなたはミスタから何を聞いたんですか？」

「『イタリア流』のナシの付け方を巷説丁寧に教えていただいたわ」

ジオルノは頭を抱え、フーゴはやれやれという顔をして上を向いた。

「制約、とは、主にギャング同士の抗争の時に用いられる言葉です。手打ちをするときにのね。だから彼らは急ぎ過ぎたのかもしれない」

「そうでしょうとも。被害者は私達ですから」

静がそう言うと、ジオルノは一転、涼しい顔で続けた。

「そうでもないでしょう。被害をこうむった部下は、再起不能なほどに脚と手の骨を砕かれ瀕死だった。今も一人は意識不明だそうです。そしてミスタとトリツシユの容体も、なみなみならぬ憎悪を感じるほどにボコボコにされている」

「部下に関しては悪くないわ。アイツらは私を殺す気だった」

「ではミスタ達は？」

「彼の腰に銃が見えたわ。ギャングの追手と考えて当然じゃないかしら？だから危害を加えられる前に加えた。どころか、あのトリツシユって女には鳩尾を叩かれて気を失ったわ。その仕返しよ」

「なるほど」と短く応える。

ジオルノは一応部下がほぼ再起不能に追いやられたことに関し、いくらかの不快さは持ち合わせているようだった。

ジオルノの纏う雰囲気、すうっと冷たくなる。

それを知ってか知らずか、静は「知ったこっちゃない」の一点張りだ。
解決の歩み寄りは見れなかった。

「制約とまでは言いませんが、やはりメンツというよりも、アナタのやり過ぎたという問題があるのは本当です。いくらなんでも少年少女に幹部が殺されかけたんじゃないじゃあ陪審員の心証すら悪くなりますよ」

「でも相手がギャングならどうかしら」

エンポリオとアレックスは静の応答を聞いていて、膝が笑うほど恐怖していた。

彼らの談話が始まってから、スタッフルームから何人かの男が出てきている。

ほぼ間違いなくスタンド能力者と見ていいだろう。

エンポリオは「この数に勝つには」、と考える。

おそらく部屋内の酸素濃度を「ウェザー・リポート」で操る以外ないだろうが、もろ刃の剣過ぎる。

願わくば、静にはこれ以上暴れて欲しくは無かった。

「まるでギャングなら何をしたらいいかのような物言いですが、アナタがそう思うならそれを止める権利は誰にもありません。しかしこのままでは平行線を歩くだけ。ならばここは、互いが納得できる提案をしたいのですが」

静は鼻を鳴らして「どうぞ?」と相手に促す。

いつの間にかジオルノはその目を、追い込むように静に向け、いささか硬く言葉をつなげた。

「我々は財団と提携を結びたい。表向きで結構です。これならアタタ達が【パツシヨ―ネ】で多少ムチャをしても、目を瞑る理由になる。そうすれば互いのメンツがたもてそうなものだとは思いませんか？」

「いやらしい手に出たわね。」

財団は世界にハバをきかせている団体で、マフィアとしてその力を借りたいということだろうか。

表面上とは言っているが、協力関係を結ぶことにより互いに不干渉であることが出来る。

つまり情報漏れを防ぐというメリットも考えられる。

考えれば考えるほど【パツシヨ―ネ】にとっては美味しい話だった。静が頭を回し、相手にとつてのメリットを考えている間、ジヨルノは無駄に爽やかなツラを向けている。

その顔が無性に憎たらしく思え、静は彼の二枚目な面を、思い切りブン殴つてやりたいと思っていた。なにしろ到底飲める要求じゃない。

静は自分が養子ということもあつて、ジヨ―スター家を後盾として甘えることは良しとしなかった。

それは必ずしもジヨセフとス―ジ―の思うところではなかったが、静はわきまえるということを美德とした。

だから何とか、何とかこの【パツシヨ―ネ】に有利な交渉を、せめてイーブンに持ち込みたいと静は考えていた。

「それは少しアナタ方に有利過ぎやしないかしら？」

「他に案が？」

「バカね・・・無きゃこんなマネしないわよ。」

静はこの部屋に入ったときから、何かのことに使えるだろうと目を

付けているモノがあった。

今はこれを用いて勝負をイーブンに持ち込む方法を思いつき、心底しめたと笑った。

「アナタの要求は少し利が偏り過ぎているわ。なら互いに有利な要求を提示し合つて、運に任せるのはどう？それこそフェアだと言えないかしら」

「大胆な子だ。養子ではあるが、流石ジョースター家ということもある。」

ジョルノは少し感心し、ここは自分の親類でもある彼女（もつとも当の本人は知らないだろうが）に、ある程度の裁量は任せることも面白いかもしれないと考えた。

「面白い。今回のようにイレギュラーな事態では、神にその判断を任せるとは、なかなかイタリア人のロマンというものを分かつてらっしゃる。ですがその方法は？」

「・・・ホイール・オブ・フォーチュン」

「・・・フォルトゥナに任せるといふことか。」

如何にも子供らしい発想に、ジョルノはほほえましくなった。

今時こんな大事を、運に任せようと考える奴は酔狂な奴以外いないだが、彼女は理解していないのだろうかと考える。

ここは【パッションネ】のカジノであつて、スピナーはその幹部である。

到底イーブンになど持ちこめる勝負ではない。

年少者にいささかの罪悪感を感じるものの、ジョルノは意図を隠した驚く演技と共に、了承する旨を伝えた。

本当に良いのだろうかという顔をフーゴは一旦した。

カジノの空気が一瞬震える。
きっと誰もがフーゴと同じことを考えているのだろう。

今、このカジノで一番腕の良いとされるスピナーが、銀色の長髪なびかせ、ボールを手に取り準備をする。

彼が右手をスつと上げると、不思議と時間が止まったように感じるのだった。

「賭け方はオッドorイーブン？レッドorブラック？」

「オッドorイーブンでいいわ。」

では、とフーゴが静にベットを促す。

静はそれに「オッド」と確固たる意志を持って発言し、ジヨルノは「イーブンで」とフーゴに告げる。

しかしジヨルノの「イーブンで」という言葉を、「イーブンに賭ける」という意味なのか「イーブンに入れる」という意味の、どちらと採ったのかは、フーゴの顔色からは誰も分からなかった。

フーゴはいよいよルーレットを回転させ、ホイールを回し始める。
一発勝負だ。

しかも静にとつて、これ以上にならない位不利な条件での勝負。

ジヨルノも静も、フーゴの手元を穴が空くほど見ている。

その手は両者の心情を余所に、あっさりと振られ、ボールはホイールの内側を、じわりじわりと走りはじめた。

今や誰もがボールの行方を追っている。

・・・これは貰った。

ジヨルノは口の端をキュツと引き上げ、静には分からないように笑った。

実際のところ、フーゴがそれを意図してやったのかどうかは分から

なかったが、ボールの軌道は確実に偶数ポケットへと入る軌道を辿っていた。

この時点で偶数だとわかるのは、ジオルノが磨いた博才が、フリーゴ達のそれとは比べ物にならないであろうが、それでも一般人の常識を遥かに超えて秀でている証拠である。

チラリとフリーゴの方を見ると、彼と目が合う。

フリーゴは相変わらず無表情だったが、ジオルノは彼に笑いかけた。

困った顔をしてフリーゴもこれに応えたが、再びスピナーとしての顔に戻った。

そこに「甘さ」や「情け」は無く、「職務への忠実」だけが見てとれた。

ジオルノは右手でひじをつき、後はボールがポケットに入るだけだと見守ることにした。

カラン、カランとポケットの壁にボールが弾かれる音がする。

スピンの回転力が弱まり、遠心力がボールを外側へ引っ張ることを諦め、重力に従ってボールは中央のポケットを目指した。

ポケットとポケットの間にある、わずか1センチほどの壁に当たり、ボールはさも「何処に入ろうかな」とギャンブラーを弄んでいるようにも見える。

カラン、カランという音の感覚が短くなり、遂にポケットに入って、それ以上音はしなくなった。

ジオルノはフリーゴに向かい、「お見事」と言いたげにニヤッと笑うと、フリーゴはちらりと一瞥くれただけでまた見下ろした。ジオルノもつられて見下ろす。

- いや・・・なんだこの違和感は。

回転力は弱まると、動体視力が微弱ながら回転に追いつく。

クルクル回るボールを目で追う。

少し冷や汗が流れる。

喉が渴いてへばりつくという現象を長らく味わっていなかったせい
か、ジョルノは喉の痛みがそれとはすぐに分からなかった。

ボールは静かな音を立てて、「カラン」とポケットに入る。

未だにルーレットは回り続けているが、目を凝らせばボールの入っ
たポケットが見えそうだった。

しかしよっぽどの動体視力があればだが。

そしてやがてルーレットの動きは遅れ、人間の目でも見える程にゆ
っくりになった。

「私の勝ちね」

突然、凜とした声がかジノに溶けた。

誰もが一瞬圧倒ないし心の隙を付かれた。

静の存在に気付いたジョルノは、今まで彼女が横に座っていた事を
忘れていたことに驚く。

自分が一瞬でも相手を見逃したことに、言いようもない不安が喉を
滑り胃に落ちる。

しかしそんなことをおくびにも出さず、ジョルノは毅然として言っ
た。

「イカサマには心得が？」

「あら、いたいけな子供を捕まえて今度はイカサマ呼ばわり？」

肝が据わり過ぎている。

あの年にしては気持ちが悪いくらいに。

フーゴはそう感じていた。

既にボスは落ち着いているが、フーゴの心中は穏やかじゃなかった。流石、ボスの「親戚」ではある。

今確かに、ボールは一つ隣のポケットに入るコースを辿っていた。それはフーゴが仕掛けた罠である。

加えてルーレットには絶対の自信があった。

しかし「どのタイミングであったか」はわからないが、ボールの軌道は変わった。

それもジョルノとフーゴには感知できない瞬間に。

これを自分の慢心が故だと信じたいものだった。

ジョルノはフーゴと違い、一度だけこの違和感を覚えた事があった。今でも忘れない、あれはローマでの惨劇。

当時15歳だったジョルノは、信頼する仲間を犠牲にし、ボスという地位を獲得した。

あの凄惨な光景も、仲間がいなければ攻略できなかった。そう。

あの時の敵の能力。

キング・クリムゾンの恐怖を初めて味わった時と、同じ違和感を感じていた。

「・・・やられた」

一方で実にはすがすがしい気持ちもある。

それは静の人柄のあるのだろうが、悪意が感じられない能力だった。悪用すれば、ジョルノ達も静を取り押さえることは難しいだろう。

普段なら警戒心が芽生える程の重大事実であったが。

「異議は？」

金髪をかきあげ、ジョルノは「Nothing!」と答えた。

フーゴはジヨルノを気遣う表情をしていたが、ジヨルノの顔はすつきりしていた。

「ただし我々と同等の条件であるということには留意してくださいね」

静もこれに同意し、ジヨルノに改めて向き直った。

「紙とペンを誰か」

「用意させましょう」

すぐにボーイが紙とペンを持ってきた。

その間緊張した面持ちである。

これにジヨルノは「グラツチェ」とほほ笑みかけ、何も心配いらないと伝えた。

静はルーレット台の上で万年筆を走らせ、一心不乱に英語で何かを書いている。

ひと時して、書き終わった頃には5分以上経過していただろうか。カジノの全員がルーレット台に座る東洋人を見つめている。

「書けたわ・・・」

えらく長い文章の後に、ジヨルノがサインする欄がある。

英語は話せるが、読み書きには若干時間がかかるジヨルノは、文章を目で追うことに集中したが、静の一言で彼女の顔を見上げることになる。

「一言でまとめるわ」

先ほどよりやや大きい声でジオルノに話しかける。
場は静しか見ておらず、彼女の二の句を待っている。
その状況を見て「こうでなくっちゃ」と優越感に浸り、静は大きな声で言い放った。

「私たち三人を【パツシヨーネ】の幹部にすること！それだけよ！」

勝ち誇ったような顔でジオルノを見る。

こらえたような笑い声を発しながら、ジオルノはうずくまる。

その体勢から静を見上げると、椅子から立ち上がった彼女が自由の女神にすら見える。

- 確かにフエアな条件だ。誰も痛まない。誰も不幸にならない。
右手に万年筆を持ち、なめらかに筆でサインを走り書きする。

書き終わるとジオルノは下からうやうやしく静に手を差し伸べこう言った。

「ようこそ、【パツシヨーネ】へ」

アレックスは空気が固まったのを感じた。

何を言っているんだという顔をして、横に立っていたボーイと顔を見合わせる。

彼も「いったい何がどうなっているんだ」という目で見返してきた。

カジノ内で一人、ジオルノが拍手をする。

次にフーゴが。

そして場内の全員が拍手をし、新たな仲間を迎える旨アピールする。

「たった今からシズカ・ジョースター、エンポリオ・アルマーニ、アレクサンドロ・R・ツエペリの三名を我々の仲間として迎え入れる。歓迎する者は大きな拍手を！」

イタリア語でジオルノが言うと、さらに割れんばかりの拍手が3人を包み込む。

静は拍手で自分が迎え入れられたのだと分かり、気分を良くした。

「ところで静さん、聞きたい事があるのですが」

惜しめない拍手の中、ジオルノは静に話しかける。

「何？」という表情をして応えようと、ジオルノは言った。

「あなたのスタンドは、なんという名前なのですか？後学の為に教えていただきたい」

「私のスタンド？勿論、ボス」

そう前置きし、

「スタンド名はアクトン・ベイビー。父が名付けてくれたのよ」

と言った。

ジオルノはルーレット台に背を向けもたれかかり、「……ベネ！」と呟いた。

この得体の知れぬスタンド能力を、一度教えてほしいと思わなくもなかった。

あの悪意の権化とも言えるキング・クリムゾンの能力と同じ違和感

を味わったのだから、一代前のボス会いまみえた人間なら誰でも知りたいと考えるだろう。

しかしその気持ちも、彼女のスタンド名を聞いて無くなった。

- - ベイビー（赤ん坊）ときましたか。それは、それは純粹無垢なのでしょね。

悪意のかけらすら感じず、急に彼女の能力が神聖なものに見えた。

静は「まだなにか？」という顔でこちらを見る。

いやいや、と首を振り、ジヨルノは もう一度拍手をささげた。

そしてこう思う。

もし【パツシヨ―ネ】の誰かに子供が産まれたら、こうして拍手をするでしょう。

命が生まれ、新しい運命が動き出す、その祝福として。

ジヨルノは立ち上がり、弾けんばかりに拍手をした。

【パツシヨ―ネ】に誕生した、その新しい運命に。

t o b e c o n t i n u e d . . .

18話【パッション】（後書き）

キング・クリムゾン

とんでもなくこえースタンド能力。五部参照。

元ネタはイギリスのプログレッシブロックの神様の存在の「キング・クリムゾン」から。

プログレと一般的に言われますが、彼らは同じプログレ系であるピククフロイドとも違い、特徴がないように思われますが、彼ら曰く「常に我々はプログレッシブしている」という名のとおり、前進し続けているのでいつ聞いても「新しい！」となるんだとか。あ、僕は好きですよ。エピタフ以外。

19話【鎮魂歌1】（前書き）

今日が休日だって今朝知りました。

19話【鎮魂歌1】

PM11:22 静達が幹部入りした翌日 ネアポリス裏道

不意に背後に何かを感じたジヨルノは後ろをさりげなく覗いた。しかし誰も居ない。

ジヨルノは一度立ち止まって、懐をまさぐった。

ネアポリスの裏道は暗く、電燈の明かりは表道路にしかない。

八バ3メートル程度の小道の両脇には、ゴミ袋や誰かの食べかけが無造作に放られている。

寂しい情景であるとか、あるいは文明の無作為さが良く現れている。わざとその道をジヨルノは歩いているわけだが、そんなことは相手に感づかせないようにする。

「相手」とは、今ジヨルノが気配だけ感じるもう一人の人間である。どんなに身を隠すことに長けた人物でも、気配を消すことまでは出来ない。

人ごみに紛れるなり物に隠れるなり方法はいくらかもあるが、その「人気」の有無までは隠せない。

更にジヨルノのように、命を司るスタンドの持ち主は、不思議と「人気」というものに敏感だった。

「だから僕が気になったということは、それはほとんど確信に近いということだ。」

ガサゴソと懐に突っ込んだ右手を、荒っぽく動かす。

そしてジヨルノはようやく懐から出した葉巻の先をハサミで切り落とし、歩きながら無造作にそれを物陰に捨てた。

捨てられたゴミは、物陰で隠された暗闇の中みみると姿を変え、一匹の小さなネズミへと姿を変える。

ネズミは物陰に潜み、用心深く外を窺った。

ジヨルノはネズミの潜む場所からもう少し前を、相変わらずの調子

で歩いている。

- - 仕掛けてこないな。

単なる尾行であれば経験がある。

しかしその度裏通りの精肉店へ入り、尾行をそこで切る。

尾行する人間の素性は、ジヨルノの事を【パツシヨ―ネ】の【ボス】だと疑っているジャーナリストか、政府筋の役人だった。

彼らはジヨルノが精肉店へ入ると、しばらく張りこんだ後に帰っていく。

そのジヨルノがいつも入る精肉店は、【パツシヨ―ネ】の系列にある店であり、地下道が本部の近くまで伸びている。

これも襲撃されたときに用意していた幹部達の逃げ場である。

今日もそのつもりで、いつものように裏道を歩いて尾行している人数を確認し、精肉店で彼らの尾行を切ろうと考えながら歩いていた。

そしてまた3分程歩いたところ、ネズミの反応が消えた。

ジヨルノが生み出した命は、ジヨルノが感知しようと思えばその生命エネルギーを感じる事が出来る。

それが消えたということは、ネズミは死んだということである。

攻撃性の強い尾行者か、それともこちらへのアピールなのか判断は付かなかったが、警戒するのに十分な理由であった。

例えるなら蛇であろうかとジヨルノは相手を想う。

音もせず近寄り、ブラフも飲み込んで、ターゲットへと牙をかける。なによりうねるような気配がそれを彷彿させた。

- - 蛇・・・不吉だ、と迷信深く考えるのはミスタの影響か。

ジヨルノは後ろを振り返って路地を見渡す。

暗い路地が広がり、人影や人が隠れるところなどありはしない。

眼だけを動かして上を見るが、上にもそれらしいものは無かった。

ジヨルノはスタンドを傍に立たせて当たりを見回す。

黄金のスタンドが闇夜に輝いて見えるが、その周りに影を生まないことから、それが実体を持たない生命エネルギーであることがうか

がわれる。

ジヨルノの後ろに立つスタンドは、右手を前にして構えに入る。しかし彼と彼のスタンドには何も見えない。

というのは虚構で、本当は既に攻撃されているのだらうかと頭の隅でアラートが鳴る。

- - だがなににせよこの場を離れるに越したことは無い。

ジヨルノはこういった事態に対して、かつて【ディアボロ】と闘った頃に輪をかけて慎重になっていた。

いつもなら飲み友達に見せかけたボディガードを連れているが、今日は連れていなかった。

もしジヨルノだと解つて、一人きりのところを狙っているのなら。それは相手には覚悟があるということ。

ジヨルノは振り返ると、弾かれたように走った。

時折後ろを振り返るが、誰も居ない。心配だけが追ってくる。

ほどなくジヨルノは2mほどの壁に突き当たる。

そこでまた振り返るが誰も居ない。

袋小路だという絶好のチャンスに姿を見せないということは、よほどの手誰かジヨルノの勘違いか。

ジヨルノが壁まで1mというときに、彼のスタンドが宙に浮いて、彼を引き上げる。

するとジヨルノはその助けを借りて、壁をなんなく越える。

反対側に降り立ったジヨルノは、それでも追つて来ない敵を横目に睨みながら、身体は前を向いて走る。

ジヨルノと解つて追ってきているなら、精肉店は不都合である。

とにかく人の居るところへと、ジヨルノはいつもの帰り道を変更しながら、大通りへの最短ルートを走った。

2ブロック過ぎ、ゴミの溜まる汚い路地を抜ける。

そこから右に曲がり、あとは直線である。

もう目の前には車の往来が建物と建物の間から見え、ジヨルノは一

心不乱にそこへ向かって走る。

これで最後だ、そう思って後ろを振り返ると、もう気配すら感じない。

走る速度を変えずにジヨルノは安堵した。

- - やれやれ。

心の中で思ったか、実際に呟いたのかは分からない。

とにかく道路を目の前にして心底そう思った。

ジヨルノは壁に手を付き、ようやく大通りへ足を踏み出そうと、徐々にスピードを落としながら大通りへ一歩を踏み出した。

「Schuldigung」

耳元で声がする。

ハっとして首だけ振り返ると、そこには手があり、その手が自分の背中を貫いているのが分かった。

「・・・え？」

遅れてきたように、激痛が後からゴオつと身体を走りわたる。

その中で頭だけは冷静に、口から血が出ていないことから、内臓を傷つけられた訳ではないかと判断する。

ジヨルノは手を背中から食い込まされている間、全く動けず、身体を貫く痛みにひたすら耐えていた。

後ろに居る人物の顔は見えない。

「・・・Wu...Wunderbar」

ジヨルノは姿が見えない敵に向い、かすれた声で投げかけた。

「ドイツ語も堪能のようで」

暗闇から声がする。

相手はイタリア語で語りかけてきた。

若干「シュ」や「グ」に力が入るイタリア語ではあったが、ドイツ人の話すイタリア語というのはこういうものかと実感する。

痛みは熱さから麻痺に代わってくる。

それでも激痛は鼓動という波に乗り、ズン・ズンとした深い痛みが背中から脳へと登ってくる。

「死にたくなければ動かないこと」

どのみちジオルノは痛みで動くことが出来ない。

とにかく【ゴールド・エクスペリエンス】は振り返った状態で、相手の顔だけその目に焼き付けようと目を剥いた。

しかし闇夜に隠れ、人影すら見えない。

大通りから漏れるうす明りで、腕の袖の部分だけは見えるのが救いだった。

それを確認したのと同時だろうか。

ジオルノの背中から手が離れ、彼の体は床へと倒れ込んだ。

あまりの激痛に、スタンドを具現化させることすら難しくなっている。

とにかくこれでは殺されずとも、死ぬかもしれない。

【ゴールド・エクスペリエンス】は近くのゴミを触れ、ジオルノの腰から背中にかけて空いた穴に、それを詰める。

ゴミは詰める間に、ジオルノの身体のパーツとなって、彼の欠けた身体を埋める。

痛みは依然として残り、意識も朦朧としてくるが、出血は止まったことを知覚した。

だが痛みは取れず、息は浅くなり、努力して開ける目も霞んでよく見えない。

その傍に「ゴールド・エキスぺリエンス」が立ち、相手を警戒する。

「随分、礼儀正しいですね……」

ジオルノは浅い息を整えながら、うめくように聞いた。

犯人と思しき人物が今近くに居るかどうかはわからない。

だが律儀にも、犯人はジオルノの問いかけに応えた。

「一言断りを入れたことに対して？失礼をかける相手に一言謝るのは当然でしょう」

「良い子の見本です……が、それをどうするつもりですか……？」

「I ch w e i s e n i g h t .」

男は少し気分を良くしたように、おそらく母国語で滑らかに発音する。

「あなたは……財団ですか？」

ジオルノには確信とはないが、心当たりがあった。

財団の懐刀と自称する静は、ジオルノに幹部からの要請として、体細胞をねだった。

一旦は断ったジオルノだったが、「まあ親戚みたいなものじゃない」という静の一言に気押された。

それはやはり血の繋がった「家族」に育てられなかったという事実が、静にある種の同情を生んだのかもしれない。

ジオルノがベビーベッドで死にかけていた一方で、静は至れり尽くせりの生活を。

もう片方では、ジヨルノには血族が居るというアイデンティティと、それが無い静。

ジヨルノは今まで家族が居ないことを嘆いた事はなかったし、それが弱みになることも到底無かったが、静が語る義父母の話には、寂しさを孕んでいた。

それに胸打たれたという訳ではなかったが、なんとなく気になり、およそボスになって初めて「まあ髪の毛くらい」というアバウトな感情で渡してしまった。

「世界を変えたいのよ」という言葉が幼すぎて、つつい甘く出てしまったのかもしれない。

その当該静の動向が、財団と目的同じくするものなのかどうかはわからない。

だが静が最初から自分を狙っていたとも考えられなくもない。

一応、彼女と目的を同じくするであろう財団でないと考え聞いてみたが、どうだろうか。

もう頭がボーっとして、何をどう言って良いのかもわからない。

「それはSPW財団も同じ目的を持っているということですか」

「そうでしょう・・・？」

これは、と頭の隅で考える。

先ほどの攻撃と同時に、自白剤を打たれたようだ。

過去に打たれた経験がある為、脳が感覚を覚えていた。

頭は酩酊したようにふらつき、何を応えようか考える前に口に出てしまう。

「財団は何を目的にアナタの体細胞を？」

「・・・わからない」

「なんと行って貴方の体細胞を要求しましたか？」

「・・・世界を変えると」

もう意識を保っているのが辛いどころではない。

痛みと自白剤がジヨルノに与えたダメージは大きい。

後ろに居た男は、それから時間をかけてある程度の質問をした後、以後ジヨルノには一切触れることなく、「Wiedersehen」と残して気配は去って行った。

せめて一目でも姿を見ようとするが、【ゴールド・エクスペリエンス】は霞んで具現化も危うくなっており、意識の最後の糸が切れそうになる。

・・・せめてこの事実だけは・・・
ここでジヨルノは自分の意識を捨て、もう一人の自分に後を任せることにした。

横で構えていた【ゴールド・エクスペリエンス】は、膝を抱えてうずくまる。

・・・鎮魂歌・・・まだ歌われては困るがけど・・・
そのスタンドにジヨルノが触れると、ジヨルノの手は糸が切れたように床にピタンと落ちる。

触れられた【ゴールド・エクスペリエンス】は、その表面が乾燥したようにヒビ割れ、そのほとんどがパラパラと剥がれ落ちる。

それは脱皮か、古い皮膚を抜けたそうとしているようにも見える。
まだ身体の7割部分はボロボロの肌で覆われているが、剥がれ落ちた隙間から見える下地は先ほどにも負けない程黄金に輝き、柔らかな温かみが見てとれる。

その新しい、と表現しようか、【ゴールド・エクスペリエンス】はジヨルノの身体にそっと手をかけ、慈しむように身体に目を這わせた。

これ以上目立つた外傷が無い事を確認した【ゴールド・エクスペリエンス】は、すくつと立ち、ミスタへとジヨルノの携帯電話で電話をかけた。

ミスタに居場所を告げると、引き続き意識を張り巡らしながら、辺りの様子を確認する。

時刻は12時を回り、夏のネアポリスは活気が沸く。

人々の熱気があちこちの飲み屋から感じられる賑やかな夜、スタンドは一人、主人を死なせまいと守護していた。

AM9:30 翌々日 ネアポリスを走る車の中

あれから2日たち、【パツシオーネ】に新たな幹部が迎えられたという事実は、CNNで小さく伝えられた。

静達は幹部として籍を置くことにより、事件は部下への制裁、ミス夕達とのトラブルに関しては決闘という好意的な解釈で済まされ、お咎めも無しとなった。

しかし一方で、ゲスト性の高い幹部である事は否めず、実際に何かのチームを率いて仕事を行うと言う事はできなかった。

勿論願ったりかなかったりであり、静達はこのままマフィアとして暮らすつもりも無かった。

しかし一度マフィアの抗争に巻き込まれたら、【パツシオーネ】の為に働く事を要求されることもあるだろうが、現在縄張り争いもネアポリス付近ではなく、非常に安定しているため考えなくても良い事実だった。

だが今静達が車に乗っているのは、正しく彼女たちが【パツシオーネ】として働くことが求められる場面であり、フーゴはそれを先ほ

ど3人に伝えに来たのだった。

つい一時間前、3人はホテルの一室に泊って作戦会議をしていた。会議とは言っても、目の前にジヨルノの金髪を置いて、みな途方に暮れているだけだったが、この無力感是谁かと居ないと自分が変になりそうだった。

エンポリオの話によると、プッチという男はディオの骨からスタン드를生み出したということだったが、ジヨルノの頭髪からはそのような予兆が見えない。

何がきっかけとなるかも不明で、3人は頭を悩ませていた。

特にエンポリオとアレックスは、自分たちの計画が頓挫しかけていることに絶望に近い感情を宿しており、世界を元に戻すために必死な顔をしていた。

一方で静は窓辺に立ち、窓を開け、ネアポリスの風をあますことなくその身で受けていた。

- 世界は変わらなかったけど、不思議な出会いをしたわ・・・
そう考え、エンポリオが来てからの一週間程度を思い返していた。思えば徐綸を生き返らせるために始めた冒険だったが、いつしか自分が退屈な毎日から抜け出す口実になっていたのだと思う。

だから徐綸は死ぬ運命であって、世界はこれで良かったのだとも思わなくもない。

もつとも、エンポリオたちからすれば、絶望的状况だった。

信じていた道が閉ざされ、人生のすべてを否定された気になったのだろう。

エンポリオにしてみれば、幼き頃の命の恩人に対する絶対の信頼を、こつした形で裏切ることになったのは不本意どころではない。

エンポリオはなんとか何処かに望みは無いかと必死になって考えていた。

そこへ電話が鳴り、フーゴが迎えに来るといっているので、3人はフラフラと着いて行ってしまった。

そして今に至る。

フーゴの話によると、【パツシヨーン】は緊急事態に瀕しているという事だった。

幹部は集まるだけ集まるといふことになり、3人は呼ばれた訳だが、まだ内容については聞いていない。

危害が自分たちにも加わるのだろうかといふことを聞いても、「問題ない。危機は訪れて去った」とだけ言う。

とにかくボスの命令であれば行かざるをえないというのが掟だと言うが、少なくともフーゴの雰囲気を見る限り、楽観的なものではないだろう。

フーゴはそれきり黙って車を飛ばす。

狭いセダンは揺れながら【パツシヨーン】の本部へと向かう。

窓の外を、景色が煙のように流れた。

AM10:30 【パツシヨーン】本部 オフィスビル17階

フーゴが案内してくれた部屋に入ると、会議室には13人の幹部がそろっていた。

その中央にミスタが座っており、隣ではないがトリツシユも彼の近くに座っている。

他の席に座っている幹部は、静達も顔を見たことが無い。

だがマフィアという割には普通のスーツ姿をした中年男性が多い。

その顔ぶれを見て、アレックスは少し感心した。

- -なるほど、銀行の頭取を幹部に入れるとは、大した地域密着性だ。

おそらくアレックスが知らないだけで、他にも【パツシヨーン】の

フロント企業の社長が居たりするのだろうか、そこまで詳しくはない。
ただあの頭取だけは新聞で見たことがあったので、いささか驚いた
と言うところだった。

「座ってくださいか、その三人方？」

ミスタの声に静はハツとした。

いつになく穏やかな口調だが、その口調からは張りつめたものが感じられる。

ミスタは空いてる席を手で指し、丁寧に促す。

静はトリツシユの左隣であり、先日の事もあって少し緊張したが、
座ってみるとトリツシユの方から「この前はごめんね」と小さい声
で優しく告げられた。

今更この前の行いが恥ずかしくなり、静は「こちらこそ・・・」と
言って黙ってしまった。

「それではお集まりのようですので、始めたいと思います。先ず、
新たに幹部になった3人に配慮して、今会議を英語で進行させてい
ただきます事をお許してください。それでは先ず、今会議の目的をお
話しさせていただきます」

こう前置きしたうえで、ミスタは少し躊躇ったような低い声で続け
た。

「ボスが、襲撃を受けました。いや、みなさん落ち着いて。生きて
います。意思の疎通は困難ですが。そして今回はそれについての会
議です」

「犯人を捕まえるということですか？」

身なりの良い壮年の男性が発言した。
やや腹は出ているが、顔は悪くない。

「いえ、今回皆さんに申し上げたかったのは、犯人捜しはしないでくれということですよ」

一応幹部の耳には入れておくが、業務は今までもおりで良しということを示し、いくつかジョルノの容体を聞く質問もあったが、皆落ち着いた様子であったことに奇妙な感情を静は覚えた。

- - 自分達のボスがやられたと言うのに、冷静なものだわ。もっとも人間、冷静な怒りより怖い物は無いけれど。

「そういう訳ですので、今回の事件は【パツシヨーネ】を狙ったというより、ボス個人を狙ったものと考えても良いかもしれませんが。気を付けてください。内部犯の可能性もあります。一応警戒を。しかしこちらからはアプローチをしないように。何かあれば私かフーゴまで」

そうミスタが早口に言うと、それが締め言葉となった。

何人かの幹部が席を立ち、皆茶色いドアから出ていく。

ミスタは2人の幹部と小声で何かをささやき合っており、静達からはわからない。

すぐにトリツシュもその談義に参加し、何事か真剣な顔付きで話を聞いていた。

静の後ろには、先ほどまで対面に座っていたフーゴが立っており、しばらく待つようにと言った。

ミスタの話が終わったのは、それから10分もしない頃で、2人はミスタの頬にキスをして、やはり茶色いドアから出ていった。

トリツシュはミスタの右腕を掴み、二言三言交わした後、ミスタと

共に静達の席まで歩いて来た。

「来て貰ってすまない」

「いえ、いいんです。俺達一応、厚かましいけど幹部だし」

アレックスがミスタの謝罪に応えた。

車内での出来事もあり、ミスタには顔を合わせづらい静は二人の後ろに立ち、会話はアレックスとエンポリオに任せることにした。

「それで、僕らは？」

「ああ、犯人探しに協力して欲しいと思って君たちを呼んだんだ」

「…え？」

エンポリオとアレックスは顔を見合わせて、それから静の方を向いた。

静は冷静な顔つき、というよりはむしろ、珍しく感情の無いような真顔に、眉をひそめている。

二人が振り向くと彼女は顎でミスタの方を軽く指し、続きを聞くように促した。

ミスタは静に軽く頷くと、3人に声をひそめて早口に言った。

「犯人はジョルノのアバラ骨を盗んでいった。とりあえず看護室に来てくれ。【レクイエム】が話したいことがあるそうだ」

【鎮魂歌】という言葉に理解を寄せられないアレックスと静だったが、エンポリオだけが【骨】という単語を聞いて、全身の毛を逆立てた。

「…あの時僕は、奴にこそ、奴のために【鎮魂歌】を叩きこんだ筈

だ・・・甦ることのないように【鎮魂歌】を・・・
エンポリオは目を軽く歪ませ、しかしそれは誰にも気づかれない
ように心がけた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

19話【鎮魂歌1】（後書き）

レクイエム

シヨパンの曲だった気がします。僕は嫌いです。

あとなんか凄いオリジナルっぽさがなく、昔のキャラがバンバカ登場してますが、ちゃんとオリジナルっぽさを次回【鎮魂歌】シリーズから出して行ければいいなと思ってます。あ、つまりあれです。

【パツシヨーネ】編ってほどじゃないけどそれが終わって、今作から【鎮魂歌】編が始まります。がんばれンポリオ。

20話【鎮魂歌2】 修正案（前書き）

ありのまま今怒った事を話すぜ・・・

『おれはワードからコピーアンドペーストしていたら、いつの間にか右クリックが自由闊達だったんだ・・・』

訂正しましたすみません。

20話【鎮魂歌2】 修正版

AM11:16 【パッションネ】本部5階医務室

そのフロアは普通のオフィスビルとは少し違った作りになっており、フロア全体の壁も天井もが薄いオレンジ色をしており、床目一杯に敷かれた絨毯はそれより濃いオレンジ色だ。

その上を静ら3人と、フーゴ、ミスタ、そしてトリツシュが歩いている。

エレベーターを降りた静は、嫌味にならないよう気をつけながら「テーマパークみたい」と感想を漏らした。

だが不思議と落ち着くと感じていた。流石に余裕が無かった自分に気づいたミスタは、静の一言に我へ返った。

ようやく今日初めての微笑みが自然にこぼれる。

「気に入ったか？」

「嫌いじゃないわ。ホントよ？」

この素直なのかそうでないのか良く分からない最年少幹部に、ミスタは弱いようだった。

そりゃ良かった、と静に二度繰り返したミスタは、トリツシュから「殴られたのにえらく嬉しそうじゃない。アンタMだったっけ？」

と茶々入れられ、慌てて否定した。

その仲の良さそうな幹部を見て、アレックスは安心した。

大人同士が仲良いと、子供は安心するのだ。

というよりは、自分たちを気遣ってミスタ達は緊張感をほぐそうと

してくれたのかもしれない。
改めて良い人達だと認識した。

出来るなら自分たちも、いつまでもこうありたいと思うのだった。

- - ただエンポリオと静がくつつくとかそういうラブコメみたいの
だけは許せんがな。

しかし自分が静とくつついたなら、という妄想を広げつつあるアレ
ックスは、フーゴの言葉に慌てて我に返る。

「仲間の前でイチヤつかないくださいよ」

「イチヤついてないじゃん」

「やつかむなよ独身」

「デメエもいつペン言ってみろミスタアーツ!!」

「キレんなよフーゴオオ」

「そつよそつよ」

アレックスは急に不安になった。

何となくフーゴに自分を重ねてしまったのだ。

- - 自分は一応静が好きとかじゃないけど、もしエンポリオがくつ
ついたら、俺もこんな風に淋しい思いをするのだろうか。

ヒヤリとしたものが背中を流れ、アレックスは下を向いてしまう。
なんだか不安になってきた、というのが正直なところだった。

エンポリオはこの会話を聞いてどう思っているだろうと、アレック
スは親友の顔を見ると、素直にギョツとした。

エンポリオは唇をかみしめ、焦点のあつてない目を下に向けている。
アレックスは友人の、何かおぞましい一面を見たようで、心の中は

寂しさと恐怖で渦巻いた。

「まさかあいつ、俺と静がくつつくとも・・・？」

その時は殺されるかもしれないと、本気で友人と渡り合えるだろうか、アレックスは自問自答に入った。

「あ、みんなそこ右ね。とりあえず部屋に入る時は俺から入るから」

ミスタがそう言うと、先ほど迄怒っていたフーゴも、襟元を正して咳払いを一つする。

トリッシュも、「そうね」と言って、また真顔に戻る。

フーゴの咳払いでエンポリオは、自分が今どこに居るのか思い出した。

それまでエンポリオは少しばかり昔の事を反芻していた。

まだ自分が年端もいかないうちに決めた、【世界】への挑戦を。

特異点としてこの世界へやってきた自分のことを。

そしてもう一人の特異点である、世界の災悪【エンリコ・プッチ】の最期を反芻していたのだった。

「入る前に一言言わせてくれ。【レクイエム】は多分身内の誰かを疑っているのかもしれない。だから全員、【嘘】だけは言わないでくれ」

そう言ってミスタはノックし、ドアを開けて入って行った。

エンポリオは頭の中の違和感を置いておくことにし、スタに続いてドアへ入った。

「連れて来たぜ、【レクイエム】」

中は外と同じようにオレンジ色をした壁と、床は木材で出来ているようであり、外とは違って木材が壁まで浸食していた。

そういえば、とアレックスは思う。

イタリアの何処かにあった漆喰の壁は、木材の上に漆喰を重ねるの
で、このように木材が半分丸見えという風貌になっていた。

それをマネしたのか、同じような作りである気がする。

その部屋にジヨルノはベッドに寝ており、医療用の管が繋がれてい
た。

ミスタが【レクイエム】と呼んだ人物は、ジヨルノのあたりには見
当たらない。

ミスタも右へ左へキョロキョロしていた。

「こちらだ、ミスタ。そしてジヨルノからもう少し離れてくれると
私も安心する」

後ろからの声に、6人は振り返った。

その声の主を見て、静らは驚きを隠せない。

【レクイエム】とは、スタンドであった。

そのスタンドは黄金の身体をしており、額には矢じりの様なモニユ
メントを施され、体中が古代アステカの戦士が付けた装飾品のよう
なものを付けている。

とにかく人物ではない。

静はこれを自立可能なエネルギー体であると判断した。

「あなた方が財団の子供たちですか」

これには静が「財団の子というのは誤解よ。私たちは私たちの目的
で動いている」と弁解した。

「なるほど。では話を少し戻そう。我が本体ジヨルノが襲われた時
の話だ。私はジヨルノのスタンド【ゴールド・エクスペリエンス】
であり、今の姿は、彼が成長させた故【ゴールド・エクスペリエン

ス・レクイエム」と彼は呼んでいる。今は彼が意識を捨てて私に身体の全権を委譲したため、君たちと話している」

そう言つて【レクイエム】は、襲われたときの話をしだした。

基本的に記憶はジヨルノと共有しており、重要と思われる会話の全てを彼は話した。

その中で静達の目的が彼らと同じであること、であれば財団の目的は静らと同じではないかと言う事。

そして犯人の話す言語がドイツ語であつたことを話した。

「もう一度否定するけど、私たちの目的は財団は知りえないわ。誓つていい。そしてドイツに知り合いが居るかという話だけでも、これも居ないわ」

「だが一番怪しいのは君たちと、そのバックだ。世界を変えると君たちは言ったが、それはどういう意味で、彼らと同じ目的を持っているのかが知りたい」

エンポリオは少し躊躇つと、【パツショーン】には聞かれたくないから席をはずしてくれと頼んだ。

【レクイエム】はジヨルノの安全上を考え、それは許容できないと述べた。

しかしエンポリオが？ミスタを同席させること、？ミスタは銃を外している事、？こちら側は静とアレックスが席をはずすこと、の3つの条件を飲む代わりに、【世界を変える】内容を話すと決めた。静とアレックスはこれに素直に頷き、部屋を出た。

部屋には銃を外したミスタと、エンポリオが残った。

「僕たちが【世界を変える】というのは、その名の通り変えるということを指します」

そうしてエンポリオは、自身が11歳時に起こった悲劇と、運命の対決、そしてもう一度世界を変えるために自分たちが【ディオ】の体細胞を求めている事を語った。

【レクイエム】は用心深く聞き、次のように述べた。

「理解しました。はたして【プッチ】という人物が【ディオの骨】が原因でスタンドを発動させることが出来たのか、ある特定されないスタンドと融合することにより自分の成長を原因として【世界を変える】という能力を得たのか、その真偽は私が判断する事はできませんが、目的は理解しました。貴方の話には嘘も感じられず、また疑わしき所もなさそうです」

「問題はドイツ語を話す犯人が、財団かどうかは証明のしようがないことです」

そうでしょう、と【レクイエム】は応えた。

「ではこういうのはどうでしょうか。静と相談の上で、【プッチ】と同じ目的を持ちえた人物を、財団の力を頼って捜し出します。それで信用していただけませんか」

こうまでしてエンポリオが【レクイエム】の信用を勝ち取るうとする事には意味がある。

ひとつは、ミスタ達もが先ほどの話をいぶかしんで若干エンポリオ達を疑い始めた事。

二つ目に、おそらく信用を勝ち取らねば、自分たちはかなりの不自由をしいたげられること。

三つ目に、犯人の目的を知ること、現在停滞している【世界を変える】方法を探し出す手掛かりになること。

そして最後に、これはエンポリオの想像だが、おそらく静もアレックスマも自分と同じく、この【パツシヨ―ネ】のボスを襲った犯人を許せない、という気持ちがあった。

エンポリオはドアの外で静達と話をつけ、財団に調べてもらうことを決めた。

【レクイエム】はそれを聞き、表情の無い顔で感謝した。

「じゃあそういうことで、ジオルノの治療は引き続き医療班に任せる。その中にスタンド使いは外しておくから安心してくれ。また来る」

「その時は電話を一本頼む」

そう言って【レクイエム】は、目を覚まさないジオルノの頭に近い電話機を指差して言った。

P M 1 5 : 3 0 ジョ―スター邸 書斎

少しばかりジョ―スター家は慌ただしかった。

先ずおとといのCNNニュースでイタリアの【パツシヨ―ネ】というギヤングに新しい幹部が加わったというニュースが流れた。

それと同時にジヨセフは、乱暴に言っつまえば親戚がボスを務める【パツシヨ―ネ】の動向を報告させた。

定期的に【パツシヨ―ネ】の情報は得ている。

一度会った事はあったが、仲良く、という雰囲気にはお互い行かなかった。

ジヨルノとしては【パツシヨ―ネ】は何人にも邪魔されたくはない、ネアポリスの組織にしたかった。

反対にジヨセフは、自らの血統にまつわる【災悪】の血と【ジヨ―スターの血統】を持つジヨルノを監視の下へ置きたかった。

財団の仲介で両者が会った時は、互いに悪い印象は持たなかったし、ジヨセフも「彼がその父と同じく暴走する事は無く、彼もまたジヨ―スターの血統を引き継ぐ者である」と判断し、互いになるべく不干涉であろうと締結された。

だがそうは言っても、気になるところではある為、あれから不干涉とは言われども、半年毎に情報は仕入れていた。

と言つても、街で一般に知られているような情報で有る為、その真偽は疑うべきものが多かったが、動乱の一つもなく、ネアポリスの治安も向上していることからジヨセフは彼に信頼を置いていた。

それが一昨日のことである。

娘がイタリアに旅行していることからいつもの心配性を出したジヨセフとスージーは、急ぎで【パツシヨ―ネ】の新幹部についての情報を集めさせた。

その結果を伝えに来た秘書は、声を震わせて真っ青になり、その報告をした後、その場でへたり込んだ。

新幹部の名前を聞いたジヨセフとスージーは頭を抱え、スージーに至っては寝込む始末である。

ジヨセフは娘に問いただそうと何度も電話をかけるが、全く通じず、心配は募るばかり。

それでも断続的に「現在何処のホテルに居るか」「どんな大立ち回りをしかけたか」「実際のところ幹部として歓迎されている」等の情報を貰うたびに、今度は娘の破天荒さに気が抜けるばかりで、怒る気も失せ、夫婦のため息つくばかりだった。

そこへ待ちに待った連絡が静から入る。

ジヨセフは気の抜けた声で、こう聞いた。

スージーは、彼が持つ受話器のコードを握って離さない。

よほど心配の事と見える。

「静よ・・・ああ無事なのじゃな・・・。幹部になったと聞いた。それは本当なのか？」

これには元気に、静はいつもの調子で「色々トラブルがあつてね。でも悪い事は一つも無いわ。皆納得しているみたい」と、飄々として応えた。

久々の娘からの電話にほっとしたのか、ジョセフもスージーも「うん、うん」と頷くばかりで、心底安堵しているようだった。

「それでね、父さん。実は調べてもらいたい事があるの。とっても大切な事」

「言ってみなさい」

「あのね、【プッチ】が【ディオ】の骨を使った2011年当時、プッチと接触できたであろう【ドイツ系】の団体。多分ヤバイ奴よ。その存在の有無を調べられないかしら」

「いい加減にきなさい！」と言うのはスージーだ。

ジョセフから受話器をもぎ取り、我が娘を叱り飛ばした。

これには静も予想外に沈み、しょんぼりとした。

「アンタって子はいつまで人さまに迷惑をかけているの！？急に連絡を寄越してきたと思ったら、財団を使わせるですって！？財団だつてジョースター家が雇っているんじゃないわ！あくまでスピードワゴンさんの好意から、その必要のある時だけ協力してもらっているだけなのよ！？」

「……ごめんなさい母さん」

静は受話器の向こうで俯いて、今更酷い罪悪感に身体を固くした。確かに母の言うことは正しい。

ジヨルノを襲撃した犯人を探すのであれば、それは【パツシヨーネ】の幹部である静自身がやる事。

その身に疑いがかかっている理由が【世界を変える】ことなら、これも静自信が解決するのが道理である。

確かにそうなのだ。

しかし甘やかされて育った静は、物ごころついてそうあってはいけないと自戒しても、どこかで「甘ったれ」が出る事がある。

「ちょっと変わってくれんかの」

ジヨセフはそう言ってスージーから受話器を貰った。

静はジヨセフの「ワシじゃけど」というやや穏やかな口調にも相槌打てず、黙ったままでいる。

「こんなことを言うのは静にとってショックかもしれないが、例えとして許してほしい。お前は養子であると言う事を非常に重荷とされていて、それ故ワシらに対してどうやって頼って良いのか幼い頃からまごつくときがあった。そうじゃるスージー？」

スージーにも心当たりがあった。

静が幼い頃、ジヨースター家の娘だと学校で信じてもらえず、話さなくなった時があった。

この時、静は親に頼る事も幼いながら遠慮し、ただ一人で抱え込むだけであった。

何度もジヨセフらは静に「何があったか」と聞いたが、彼女は口を結んだまま、泣きそうな顔で笑っていた。

ある日のこと、静はこの世から自分が消えてしまいたいと考えた。この時静は、自らのスタンドを発動し、ジョセフらに見つからぬよう姿を消そうと考えたのだった。

彼女の両親は焦った。

子が居なくなつたという地獄のような日々だったとスージーは語る。しかしこの地獄も、数日でなくなることになる。

静はスタンドを発動させたまま、一人悶々としていた。

自分なんか消えてしまえばいい。

延々と神にそう祈った。

すると彼女の周りは段々騒がしさも落ち着き、静が居た時と全く同じような日々が流れていった。

- - 今思い返せば・・・

その時の効果が、彼女のスタンド能力が進歩した証であり、【What I'm looking for】が初めて発動した瞬間であつたかもしれない。

元来スタンド能力とは、本人の精神力に寄与するところが大きい。

それは常にプラスの成長が寄与するわけではない。

かつての【吉良吉影】がそうであるように、マイナス方面の切望も、スタンドの成長に寄与し得る。

つまり誰にも見つからずに消えてしまいたいと切望していた静は、この時世界からも忘れられる力を手に入れたのだった。

さて静であるが、この時のことは良く覚えていないと言う。

ただひたすら消えたかったが、いつも通り暮らしている両親を見るうちに、急に甘えなくなつたという。

勿論両親は、静がスタンド能力を解除してから彼女の事を思い出した訳で、その後しばらくの間、静に対して「一時でも行方不明のわが子を忘れた」ことに自責の念をつのらせた。

また、この時世界が一巡したのであるから、静は特異点として現在の世界に存在しうるのだと言う可能性こそあるものの、確証は本人

に無い。

「それからワシらは本当の親子になるべく努力してきた。それでも静は優しい子じゃから、未だにワシらに甘えるのは良しとしない節があるじゃろ？」

「・・・そんなことないわ」

「親の目は騙されん。少しくらいの事は自分の中に貯め込んで、いつも自分で解決しようとしてきたことと記憶しておる。将来の事もそうじゃ。お前は何もワシらに相談せず、一人暮らしの準備をしておったじゃろ？」

まさかそれが両親に知られているとは思わなかった。

確かに静は、自分の根底にこびりついた「甘ったれ」を撤回すべく、一人暮らしを考えていた。

早めに生計を立てて、ジョースター家の世話になるなどと厚かましい事はしないと考えていたのだった。

「お前はいつも遠慮をすればかりで、上っ面でしか甘えようとしなかった。それが今でもワシらは悲しい。スージーが怒るのももつともじゃ。お前の言い方ではまだ上っ面に見える。しかしじゃな、それはワシらの愛情の裏返しじゃ。話してくれんか静。お前が何を考え、何を望んでいるのか、お前の言葉で、ワシらに協力を求めてくれんじゃろつか」

静はこの感動的な父の言葉を、心に深く沈めておいた。

確かに静は両親に甘えるときは【義務】として甘えていた事があった。

だからジョセフの言うことは、正しい。

「ごめんなさい父さん、母さん。心配ばかりかけて。今調べてほしいって言った事は、私の問題」

静は一息ため息ついて続けた。

「でも甘えていいというなら甘える。あのね、つまりそいつらは私たちと同じく【世界を変え】ようとしている可能性があるの。そしてそれは、アイリンお姉ちゃんが死んだ理由と深く繋がっているということ」

スージーとジョセフは息をのんだ。

そこに繋がるのは、二人の脳裏には無かった。

おおかたイタリアで出来た面倒事の解決を済ませる為の要請だと考えていたが・・・

「それはその団体がアイリンの死亡に関連するかもということ、静？」

スージーは震える声で聞いた。

- - あの娘は、本気でアイリンの死を探っている。それも、かなり特定して。

静にしても真剣だった。

敵が自分たちと同じ目的を有しているならば、彼らは何かを知っていることになる。

それは徐綸を生き返らせる手がかりになる。

加えてこのまま彼らを野放しにすると、自分たちの身が危ない。

そういう危機感もあった。

「静よ」と、ジョセフは切りだした。

「危ない目に合っているわけではないのじゃろっな？」

「合っていないわ。約束する」

「では財団に掛け合う事を約束しよう。多少危ない目に合ったとしても、それもまたお前の冒険じゃ。ワシらは精一杯バックアップするから、真実の探求を怠るんじゃないぞ」

こうしてトントンと話が進んだわけだが、静の心にはいささか淡々とした後悔が残った。

- - また上っ面だけで父さんたちに甘えちゃった。

受話器を置いた静は、オフィスの窓際に向かって足を向ける。

- - 結局私が原因なんだわ。本当の親子でもないって、心の何処かで拗ねてるから。

そして静は決意を新たにした。

ジョースター家の血縁を甦らせるということ。

その裏に、自分は所詮親子の代わりにはならなかったという悲しみを馳せた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

20話【鎮魂歌2】 修正版（後書き）

なんか納得いかない展開ですみません。

表現力がないというか。

物語の進行を焦って、心理描写が書けないと言っか。

そしてもう一つの小説読んだ人はすみません。

定期的に自分が病んだらああしてジヨジヨのキャラ達で意味のわからないラブコメやります。

本当になんていうか・・・病んでたんです・・・

21話【鎮魂歌3】（前書き）

閑話休題

21話【鎮魂歌3】

PM12:37 【パツシヨーン】本部ビル 8Fオフィス

オフィス内の机や椅子等の備品は、数こそ多くないものの、そこそこの気品を感じる。

現在静やエンポリオ達は、【パツシヨーン】のオフィスビルで、幹部としての書類整理に追われていた。

任された時は「なんで私たちが!？」と疑問に思うこともあったが、ジヨルノが欠けた今、決済のサインを出来る人間が足りない。

静らは書類に目を通しつつ、サインをするのだった。

とは言っても、具体的に検討すべき事項は一つも無い。

というより、そういった「検討」を必要とする事項は、如何に幹部とは言えど、この子供達に任せるわけにはいかないと言うのが常識というものだった。

ただジヨルノは、15歳でボスに就任した頃から、周りのサポートを受けながらも幹部として仕事を為していたわけで、それを思うと「お客様扱い」であることに不満を持たなくもない。

だが、彼ら3人が幹部となったのは、互いのメンツがあるからという事情に基づいたものであったため、互いに責任は負い合わない関係にあると静は考えていた。

しかし書類にサインをするのも、67枚目を超えたところで静が「疲れたー!」と言い出し、エンポリオとアレックスも、一息入れることにした。

静とエンポリオはサインを、アレックスはイタリア語で書かれた決済待ち書類を読む係である。

アレックスが目を通し、おかしいところは無いかとザッと目を通し、静らに渡す。

書類の内容は幹部の手元に来るまで2回チェックを受けており、アレックスが突っ込むようなところもない。

内容自体も、トイレの備品買い替え、机の修繕費等々、庶務が全てだった。

ハッキリ言ってもいいような内容にアレックスは飽き飽きしていたが、これを果たすだけで自分たちが【パッショーネ】の一員で居れるのだろうと納得していた。

時折英語の書類が入る事がある。

それは取引相手が英国企業であったり、米国企業であったりするが、所詮静らに回ってくる書類であるから、挨拶状や人事異動の書類がその殆どで、既に下部組織が閲覧してデータ化しているので、「処理終了……静・ジョースター（エンポリオ・アルマーニ）」とサインするだけでいい。

「っていつかなんでこんな会社みたいなことしてんのよ。ここギヤングじゃないの？」

「そりゃみんながみんなゴッドファーザーとはいかないさ」

書類を何枚か処理するたびに、静は悲鳴を上げた。

サインと言えど、結構神経を使う。

おまけにオフィスの中には3人だけではなく、他にも事務員のような人が20人強存在しているため、彼らは幹部という手前、サボるわけにもいかなかった。

とりあえず、サインをする。

結局ギヤングとは言えど、組織が拡大すれば会社組織と酷似することを避けられず、このような「企業」形態は他のギヤング組織にも良く見られる。

例えばゴッドファーザーの公開から40年近くの時が経っている。ギヤングも変わる。

一応だらけすぎない程度に一息入れていた静達に、40代の男が流暢な英語で話しかけた。

「そろそろお昼にしますか、メモ？」

声をかけてきたのはギャングの古株である【デイブ・ロジャース】だった。

彼はアイルランドからイタリアに来た二世であり、英語が流暢で重宝されている。

かつてジョルノがボスになったとき、歯向かった幹部や下部組織は多かったが、彼は違った。

彼もまたジョルノに同調し、かつてはフーゴがボスとの決戦に備えたジョルノらを裏からサポートしていた時も、彼が動いていた。

今は執務担当のトップであるが、幹部ではない。本人が幹部になるのを嫌がり、あくまで幹部らの執事であろうと努めている。

ところで彼の様な戦闘的でない人物も【パッショーネ】には沢山居る。

その大半は、前ボス時代に一味だった者ではない。

ジョルノは【パッショーネ】を攻撃的な組織よりも、自警団的な存在として成立させたかったことから、デイブのようなまるつきり善意者を必要としていた。

現在【パッショーネ】は、ある程度開かれた組織になっており、ネアポリスでその存在を知らない人間も居ない。

一方でジョルノのような幹部は、顔を見せることも良しとしない人間も多く、闇の仕事を執行する人間達も居たが、それは静らがる由の無いところである。

「あ、ありがとうミスター・ロジャース。皆さんはお昼どうされる

の？」

「ボスが食べれば、みな食べたすと思いますか・・・」

悪戯っぽくデイブが言うと、オフィスには笑い声が広がった。

ちなみにここでいうボスとはジョルノのことではなく、静らのことである。

「あらごめんなさい！お昼にしましょう！」

静は勢いよく机から立って、オフィスの顔ぶれを見た。

年代層はあまり高くは無いが、静らよりは当然高い。

それでも幹部という役柄上、彼らは静らを差し置いてランチという訳にはいかない。

欧米の上下関係とはもっと緩やかなものが普通かもしれないが、ギヤングとあってはさながら軍隊並みに上下関係が必要である。

と言っても、形式上だけの話であり、個人的な会話にはデイブのように親しみを込めたものが見られる。

静が声をかけると、各々昼ごはんの準備を始めた。

中には外で食べようと、部屋から出ていく者もある。

「今日昼何食べる？」と、エンポリオが能天気聞いた。

静が財団に依頼して以来、調査に時間がかかっているのかここ4日ばかり音沙汰が無い。

そんな彼らに仕事を与えたのはフーゴで、一応特別扱いはしないようにと（それでも他の幹部よりは特別だが）書類整理を頼んだ。

あれから本当に4日間、書類整理しかしていない。

あとは会議にちよろっと出たり、交渉に立ち会ったりという簡単な業務のみ。

それもオフィスで行われることが多いから、昼飯に利用する近場のレストランは行きつくしたので、そろそろ新しい選択肢が彼らは欲しかった。

「えー、なんでもいいわよ。アレックスは？」

「肉」

「ごめん何言ってるかわかんない。エンポリオどうする？」

「おい今英語で言っただろうが」

「ヴォンジョルノ、トレトレポーネ、アリーデヴェルチ！」

「おい、調子に乗んな」

「ハツハツハ、ゴッドファーザー？イタリエーノ？ローマ？ベネベネ。ハツハツハ」

「テメエいい加減にしろクソアマがアー！ーッ！ー！！」

「エンポリオ、こいつなんて言ってるの？」

「『今日のパンツ何色？』だって」

「相変わらず脳みそピンクね、このサルは」

「お前ら一回表出る！！ブツ殺してやるッ！！」

「『パンツください』だってさ静」

「相変わらず語彙力の無いクスね、このサルは」

アレックスは怒り心頭とばかりに、静をブン殴ってやるうとも思ったが、いかんせん女の子ではある。

静はひとしきりバカにして満足したのか、そっぽを向いてエンポリオと昼食について話している。

腹いせに彼女がいつも食べているビスケットをスタンドで盗んでやることで、腹の虫を押さえた。

「じゃあやつぱ表のピザ屋にでも行きましようか。アレック・・・あらアレックス、良い物食べてるじゃない？」

静がエンポリオと話し終えて振り向けば、ここ数日楽しみに取っておいた柑橘系のビスケットを、アレックスが頬張っていた。しかも8枚入り中8枚全部だ。

「よお。これ何ユーロだった？」

「・・・2ユーロよ」

こう静が震えながら応えると、アレックスは満足げに頷いて、せいぜいバカにしたように歯を剥いて彼女に言った。

「まアーた買つといてくれよォー？お・れ・の・た・め・に」

ブチンとキレた静は思い切りアレックスに殴りかかろうとしたが、エンポリオに止められた。

この後食事に出かけるまで、ゆうに10分ほど取っ組み合いが続く。

しばらくしてエンポリオは、この青々と広がるネアポリスの空を見上げながら「平和だなあ」と囁みしめていた。
その後ろで静とアレックスは、いよいよ殴り合いを始めている。
今、静の右ストレートが、アレックスの顎を捉えたところだ。

T O B E C O N T I N U E D . . .

21話【鎮魂歌3】（後書き）

あ、そろそろ物語進めなきゃ。

22話【鎮魂歌4】（前書き）

ホントは前回みたいなホノボノじゃないですけど、ああいうのでや
つていきたいんです・・・

22話【鎮魂歌4】

AM7:56 ドイツ・バイエルン州・州都ミュンヘン ミュンヘン駅

「逃げたか」

男は新聞紙をクシャッとまとめてベンチの横に捨てた。

彼の横に立っているスーツの男は、上司の顔色窺うように見上げた。駅の構内は、そこそこ綺麗にされている。

横に広いこの構内で、スーツ姿は珍しくない。

天井にはガラス窓があり、ただっぴろい構内に太陽の光を降らせている。

その下を、毎日何百人何千人という人間が、ヨーロッパを往来する。ミュンヘン駅は大きい。

それに比例して、ミュンヘンから出る列車は、ヨーロッパ各地へ繋がっている。

つまり選択肢は多いわけで、そこから一人一人が何処へ行ったかなど、誰が特定できるか。

上司は蓄えた髭をいじりながら部下に聞いた。

「どの列車に乗ったということもわからんか」

「おそらく乗ったのは、昨日の16時から21時の間かと」

「・・・OBBだ」

「すぐ当たります」と部下は手帳をたたんで胸ポケットへ入れた。

「あ、いや、いい。OBBの可能性もあるし、無い可能性もある。ただ、あの方の事だ。ウィーンへ戻ったやもしれん」

「しかし側近には『北へ』と」

上司は顎を右手の指で触る。

彼の歩んだ時間が染みわたっているような、武骨な指だった。その手で悩ましく顎をさする。

彼らのいうOBBとは、ドイツを走る新幹線である。

その本数は少ない。

だからこそ、この特急電車で逃げのびるとしたら、追手は追い掛けるににくい。

「ベルリンへか？」と上司はフッと笑う。

それはなかなか素敵な事だ。

縁がある、ということなのだと考える。

「ベルリンとは限りません。あるいは国外の可能性も・・・」

「そうだな。あの方はポーランドが好きだ。血を流すならあそこだ」

部下はどうにも現実的でない上司に疑問を持っていた。

全て【縁】や【意味】に関連付けて想像する。

言いかえればえらくロマンチストなのである。

実務では、役に、立たない。

上司は「いや、それがいい。あの方はベルリンへ向かわれたのだ。」

歴史がそうさせるに違いない」と、いよいよ嬉しそうだ。

「もっとも」と上司は続ける。

「実際のところ搜索活動は無理に近い。困難なことこの上ない。このミュンヘンがスタートという点で選択肢が広すぎる。私の想像通りであれば、どれだけ素晴らしいことかと妄想を楽しんでしまう」

「では・・・欧州の全同士に連絡させますか」

そう言つて部下は携帯電話を取り出した。

それを上司は手で制し、やめておけといわんばかりに指を振つた。

「一度側近に連絡だ。指示を仰ぐ」

部下は携帯で電話をかけた。

ちょうど時間がかかりそうだったので、上司は売店で水でも買おうと歩いていく。

売店の前に立つと、老女が「Hallo」と声をかけてくる。

ニコリと笑つてこれに応え、ミネラルウォーターを探す。

すると「Wasser?」と老女が声をかけてきたので、「Ja」と短く応える。

ドイツ人同士の会話とは、非常に簡素なものである。

それでもミュンヘンは西ドイツであるから、雰囲気は明るい。

それを上司は良しと採るか悪しと採るかは、その目元からは判断できない。

「シヨミットさん」

「おう。どうだった？」

「第二順位迄は知らせて、搜索はするようにと。しかし確保はせず
に、ご自由に振舞わせろ、とのことでした」

・ ・ ・あまり本気で探そうと言う気は無いらしい。

部下には組織の第二順位迄は知らせるように指示し、先ほど買った
水を口に含んだ。

その生ぬるい口当たりに吐き気がし、ラベルを見ると「炭酸抜き」
と書いてある。

今更取り替えてもらう訳にもいかず、しかたがないのでそれでも喉
を潤す。

どうも炭酸水に慣れると、ガス抜き水は飲む気がしない。

ぬめぬめした触感が耐えられないのだ。

彼は口元を袖で拭くと、「兄上」に電話をかけた。

その番号は組織内でも限られた人間しか知らない。

上司は元々側近のメンバーの一人であり、3年前からは側近直属の
実働部隊として活動している。

その彼が側近たちをすっぱ抜き、事実上の「トップ」へ電話をかけ
ると言う行為は、彼らから好かれない。

だが、今回の事態を判断するには、組織の結束を不祥事で緩ませな
いようにひた隠そうとする側近ではなく、もっと上の判断が必要だ
と考えた。

部下の目の前で上司は二言三言言葉を交わすと、電話を切ったため
息をついた。

「お前、休暇取れ」

「え？どっちのですか？」

「ポリツアイの仕事も、組織も両方だ」

部下は、また始まったよ、と辟易した。

上司の悪い癖は、目的を言わない。

現在取るべき方法しか述べないのだ。

「俺も休暇を取る」

「僕だけでなく？側近の意思ですか？」

「いや違う。【兄上】からの勅命だ」

部下の背中に緊張が走る。

「つまり組織には内緒だ。わかるな？」

「・・・ヤー（はい）」

言葉が続かない。

背筋が凍ると表現するには語弊がある。

例えるなら、ポップ（教皇）が一般人のクリスチャンに、直接命令されるような気分とでも表現すれば良いだろうか。

「チツ・・・なんだその気の抜けた返事は。これでも飲んでやがれ」

そう言って上司は部下へミネラルウォーターを投げてよこした。

部下はそれを手にとって、飲もうか飲むまいか考えている。

上司は既に出口へと向かっている。

その背中を見ながらミネラルウォーターを口に含む。

なんだか釈然としない気持ちになったが、とりあえずは上司を追い掛けることにした。

AM10:28 【パツシヨ―ネ】8Fオフィス

静は受話器を左手に持ちながら、右手でコードをクルクルと巻きつけている。

もうこの前までの緊張感はない。

既にジヨルノを襲った犯人に対する危機感は全くといっていいほど消え、最近3人はだらけていた。

「えー、父さんまだなのオー？」

「うーん、なんかな、あれから調べては居るんじゃが、どうにも手がかりが少な過ぎてのお。思い切って別の方法からアプローチした方が早いか、ジヨルノ君が目覚めるのを待つか・・・」

ジヨセフにジヨルノを襲った相手を探させてから、2日経っていた。こういうことは時間がかかるものだど頭では分かっているけど、静は無駄にジヨセフを急かした。

というのも、最初はサイン処理もしていて新鮮だったのだが、同じオフィスで仕事をしている年上の部下たちの手前、そろそろ居心地が悪かった。

確かに3人は幹部である。

しかし、正規の方法で入った幹部ではないし、尚かつ歳が若すぎる。おそらくここにいる部下たちは、歓迎こそしているものの、やり難さを静達以上に感じているだろうし、彼女達にはそれが分かっている。

た。
だから早いとこ犯人を見つけ、【世界を変える方法】を手っ取り早く聞きたいのだが・・・

「ジオルノさんは多分当分目が覚めないかも。血中に混じっている薬物反応が結構残ってるみたい」

「妙じゃ」

「なんで？」

「どんな薬物でも、排泄を繰り返す限り、血中濃度は下がるはずじゃ。科学的に言ってるな。はたまた神経系の麻薬か」

「案外敵のスタンドだったりしてエー」

電話口で二人はキャツキヤと笑い、非常に楽しそうではある。そこにエンポリオが静に向かってひじをつく。

「（静かにしろよ）」と小声でささやきながら、オフィスの部下たちを指差す。

静は慌てて咳ばらいをし、顔を引き締めて電話に向かった。

「ごめんね父さん、ちょっとキャツキヤが入ったからまた電話するわ。バイイ。愛してるわ。母さんにもそう伝えて」

「おお。それじゃあの」

静は受話器を置くと、立ちあがって部下たちに頭を下げた。

年下な分、謝罪とお礼だけはしっかりしておこうと決めていた。

ディブを始め、部下たちは恐縮していたが、中には当然だという顔

をしている人間も居る。

それを端目で捉えた静は、少しため息をついた。

「それで？わかんないって？」

「うん、なんか手がかりが少ないらしいわ」

エンポリオは静と一緒に落胆し、アレックスにも意見を貰おうと声をかけようとした。

しかし彼は机に向かって仕事に没頭し、今静が謝ったことにしても聞いていないようだった。

ここにきて不思議な事に、アレックスは仕事の出来る男だったのである。

単純事務作業だけでなく、電話掛け、備品交換、部下へのコーヒー入れ、お弁当の注文、それらのほとんどを彼は立派にこなしていた。部下たちの評価も、「部下で良かった」と心底感嘆の息を漏らすものばかりだ。

今彼は、受話器を肩で支えながら、サインをしまくっている。

・・・日本人より働くじゃない・・・

昨日は残業に残っていたくらいだ。

何に目覚めたのだろうか、このままでは【パッショーネ】に永久就職しかねない勢いである。

「ねえアレックス、ちょっと聞いてくれる？」

アレックスはこちらを向くと、受話器の相手に短く用件だけ伝えて電話を切った。

その所作は一朝一夕にできるものではない。ビジネスマンとしてのオーラが漂っていた。

「電話の相手は？」

「ああ、銀行の融資に関してちょっと疑問を持ったものだから。ほらここ見て？出資が二重にされてるだろ？額が少ないからただのミスだとは思っけど、一応確認してもらっていたんだ。銀行の方の口座を確認したらプラスマイナスゼロだったから、おそらく使い込みとかそういうのじゃないんだろうけど、このまま看過していたらきつと出資のズレが積み重なって、莫大な損害が・・・といっても紙面上の話だろうけ・・・」

「わかったわアレックス。アンタは出来る人間よ。でも今は本来の目的について少し話したいの」

「ああ、庶務のサインの話？それはこの前俺が日本のビジネスマンを参考に、ハンコを作らせたじゃん。あれ使えよ」

「違うわよ!!」

「でも助かったろ？」

「助かったけど違うわよ!!いい加減仕事を忘れなさいよ!!」

「お前俺の嫁か？仕事にカマけてないで構ってくださいって？」

「誰がアンタなんかの嫁よ!この世の誰が好き好んでアンタなんかと結婚するのよ!!」

「なんでそんなカリカリしてんだよ。なに？生理？」

「死ねクソザル!!」

静は居ても立っても居られず、立ちあがって思い切りアレックスの顔をブチ抜く。

流石に親指を目にかけて殴り抜く所業まではしなかったが、それを迷うくらいに静は腹が立っていた。

アレックスは椅子の背もたれ、背を海老反りにしてもたれかかり、そのままゴトン、と床へ落ちた。

エンポリオは声も出せずにその様子を、硬直した様子で見守っていた。

部下達も同じだった。

静は部下に向かって「なんでもないので」とばかりに微笑みかけ、デスクの下に横たわっているアレックスの胸倉をつかんだ。

「一回しか言わないわよ。犯人がまだ見つからないの。私たちはミスタさんのところに行ってくるから、アンタは引き続き仕事をよろしく。じゃあね」

そう言つて静はアレックスから手を放し、硬直しているエンポリオを掴んで部屋を出て行った。

勿論部屋を出るときは、デイクにその旨よろしく伝える事は忘れなかった。

AM10:49 9F 執行執務室前廊下

「ねえ連絡も無しにいきなり訪ねて良いものだと思う?」

「え、一旦戻って電話してからにする？」

「ダメよ。アレックスがきつと仕事に使っているわ」

顔面殴られてそれはないだろうとエンポリオは思ったが、実際既にアレックスはフゴフゴ言いながらも受話器を片手に仕事を進めていた。

彼を仕事へと掻き立てる謎の使命感は、自分の体とは関係なく燃え上がるのだった。

「えーどうするどうするー？」と静とエンポリオが喋っていたら、ドアの内側から足音がした。

別にやましい事はないのだが、二人は隠れるところを探した。

しかしそんなものもある訳も無く、このまま立ちんぼするしかない。それからすぐギイとドアが開き、フーゴが顔を出した。

「なんだ君たちが。何してたんだい？」

「えー、いや、このまま入ってもいいものかどうか迷ってたっけい
うかなんていうか・・・」

いつもと違っていきなりオロオロしだす静を見て、フーゴは「可愛い」と感じたのか、頬笑みかけながら中へと促した。

中には静の知っている顔だとミスタ、トリツシュが居り、後は二人の男が居た。

確かこのまえの幹部会議で見た顔だった。

「ああ、なんだお前らか」

「なんか遠慮していたみたいですよこの子たち」

「遠慮オー？らしくねーなア」

そう言つて部屋の中に居た人たちは笑いだした。直接は知らない幹部達までもが、だ。

なんだか恥ずかしくなつて、エンポリオと静は自分が小さくなる思いがした。

「もう一度だけ念を押すために言つておくと、お前らは立派な幹部だ。それも俺達のボスが迎え入れた」

「でもあれは私の要望だったわ」

「そうだとしても、ボスを負かして幹部になつたわけだ。誰も文句言えないだろ。もっと堂々として、幹部の一人として振舞つていいんだぜ？」

「・・・はい」

・・・そうは言つても、お客さん扱いじゃない私達・・・

ミスタは二人を中の円卓に呼び寄せ、そこに居る人間たちで固まつた。

なんとなく居心地悪かつた二人だが、トリツシユのウィンクで少し緊張が取れた。

「納得行かない顔をしているけれど、僕らは君たちを幹部だと考えて歓迎している。それに敵は君たちもターゲットに入れておく可能性がある。【レクイエム】の話によるとね」

「それはそうですね」

「なら君たちは自覚するべきだ。幸い目的が同じならば、【パツシヨ―ネ】の幹部としてボスを襲った相手を探し出し、君たちは君たちの目的を果たせばいい」

「個人として追うのも、幹部として追うのもやることは変わらないわ。そんな幹部幹部って」

「いや、一度幹部にしると言ったのは君だ。その言葉に責任を持ちなさい。それに僕たちは君たちを守りたいんだ。もし個人に戻ったとしたら、君たちは即敵の的になる」

静の肩にエンポリオが手を掛け、「お礼を言おうよ」と彼女に言った。

これには素直に頭を下げた。

あんな大舞台をさらした後に、それでも静達を守りたいという気持ちには、恐らく嘘ではないだろうと感ずるところだった。

- ゲスト扱いで拗ねてたのかしら。

トリツシュは細い顎に、結婚指輪のはまった白い指を置いて、そう考えた。

このあたりの姿が可愛いと感じるのは、恐らく現在の幹部の大半がこうだった、年相応の可愛げというものを捨てて、ギャングとして生きてきたからである。

だからなお一層年相応に可愛げのある子には甘く接してしまう。まるで自分に妹や弟が出来た気分だったのであろう。

もっとも、アレックスに関しては幸運にも「有能な社員」をゲットできたとして、別の喜びがあった。

アレックスは立派に社員をこなしている。

この短い間に粉飾決算を見つけたことは、彼の能力の高さを示していた。

「もう少し胸を張ってくれていい。お前らは幹部だ。アレサンドロ君なんて、もう立派に仕事をこなして・・・あ、いや、勿論それだけが幹部としての仕事じゃないけどさ」

アレックスの名前を聞いた瞬間、静の目に確かな怒りの炎が宿ったことに気付いたミスタは、慌てて付き足した。

「ほ、ほら静！それよりジョースターさんとの話の結果を！」

エンポリオに急かされ、そういえばそうだったと我に帰る。

「あの、実は今後の予定を相談したかったんです。財団に確認したところ、まだ敵は見つかっていないので、別のアプローチを試してみようかということでした」

「つまり・・・別のアプローチってというのは？」

「私が考えるに、現在もつとも近い証拠は、ジョルノさんの身体だと考えます」

えっ、という顔で幹部達は丸い眼を剥く。

ジョルノは意識不明の重体で、今は医療的なケアが必要だと思っていた。

しかし確かに考えてみればジョルノの身体は、唯一の敵との接点であり、【レクイエム】の態度からそれは頭をよぎりもしなかったのは落ち度だ。

「でもジョルノの服は脱がせて調べたし、彼の身体の傷も調べたわ。今は薬物の可能性を医療チームが示唆しているからその結果待ちだ

し、それに【レクイエム】が彼の体に触れることを良しとしないかも・・・」

「トリツシュさんの言い分ももつともです」と、エンポリオがしゃしゃり出る。

だがエンポリオはこの場の誰もが為していない方法で、ジオルノの身体から接点を見つけ出そうとしていた。

「例えば彼がこん睡している理由が、スタンドの所為だとしたら、試してみる価値はありそうじゃないですか？」

これにはフリーゴは思い当たる節があった。

というのも、彼のスタンド【パープル・ヘイズ】は、凶悪なウィルスを持つからだ。

スタンドが人間の身体に干渉する物質を分泌してもおかしくはないだろう。

そう考えたのはフリーゴだけではなく、トリツシュもミスタも、同席していた幹部の二人もそうだったので、話は早く済んだ。

「だが【レクイエム】が居るのに、ジオルノがこん睡している理由がスタンドだとわからないもんか？」

「スタンドにも多くの種類があります。ジオルノのはパワータイプですし、そういったことは不得手なのではないでしょうか。勿論体内にあるものがウィルスだとわかるのであれば、【レクイエム】はワクチンを作ること出来るでしょうけど」

この説明には誰もが納得した。

次はだれのスタンドなら、その判別が出来るかだった。

スタンドの用途方法は、考え方次第ということもあり、各々は必死に頭をひねる。

すると静が閃いたように何かを言おうとするが、すぐに苦虫をかみつぶしたような顔をした。

それを見たトリツシユが、口元を押さえて上品に笑いながら、その訳を静に聞いた。

「心当たりがあるんです、一名。ホントはあんなゴミクス野郎に頼もうなんて考えないけど・・・」

この言葉を聞いて、エンポリオも閃いた。

「なるほど、それならジヨルノの身体から、今まで見つからなかった接点を見つけることが出来る。」

エンポリオは期待を込めて、静の次の言葉を待った。

その頃当該ゴミクス野郎は、部下のミスの埋め合わせのために、受話器の前で頭をペコペコ下げていた。

それからミスを犯した部下に向かって「僕が頭を下げて済むのだから、気にしないでください」とフォローを入れ、まるで何事も無かったかのようにまた仕事へ戻る。

今やこのフロアの誰もが、ジヨルノに対するそれと同じくらい、この若い上司を尊敬していた。

理想の職場だった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

22話【鎮魂歌4】（後書き）

【デイブ・ロジャース】

前回登場した彼は、イタリア人のユーロビート作曲家です。

多分頭文字Dの曲にいくつかあったと思います。イチオシは【s p
a c e b o y】

23話【鎮魂歌5】（前書き）

遅筆で申しわけないです。

次回はようやくバトルに行けそうです・・・

23話【鎮魂歌5】

PM15:14 救護室 ジョルノのベッド

仕事にかかりきりだったアレックスを引っ張って、エンポリオが病室へ入ってきた。

【レクイエム】がいぶかしんだようにフーゴ、静、エンポリオ、アレックスを見ている。

「それで、ジョルノの身体に敵のスタンドが入りこんでいると、そういうわけですか」

【レクイエム】は冷たく聞いた。
確かにスタンドの言い分もある。

ジョルノの身体の中にスタンドが潜んでいるとしたら、何かしら【レクイエム】にも感じられる筈であろう。

「いいから任せて。すぐ終わるわ。そうでしょアレックス？」

アレックスは【レクイエム】から信用を得ようと、重々しく頷いた。
すでに彼の後ろには【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】がそびえている。

「少しでもおかしな動きをしたら」

「アレックスを殺してくれていいわよ」

静は、それが当然のように言った。

【レクイエム】はこの一言に納得し、ジョルノから一步身を引いた。静の一言に一瞬身をたじろいだアレックスだったが、重々しくジョルノの身体に近寄ると、彼をうつむけにし、その背中に【W・W・ワールド】の手を置いた。

それから目を閉じて、集中する。

そもそも【3W】の能力は、引き寄せる対象物を意識しなければ、それを引き寄せられない。

もし「それが何かはわからないけど、存在するであろう何か」という抽象的な対象物を引き寄せるためには、相当の集中力が必要とされる。

アレックスは今、己の集中力を高めようと心を落ちつけていた。

「あれでアレックス、集中力は抜群だからね」

・・・さん。

と念じながら、外界の音を段階的に消していく。まず、ソプラノに近いエンポリオの声を消す。

「そうね、そろそろ私たちの声も消えるはずよ」

・・・にーい。

と念じ、静の柔らかな声を消す。

「じゃあ何言っても平気なのかい？」

・・・いち。

と念じ、フーゴの声を消す。

そして最後のゼロというカウントと共に、目を開けた。

【3W】の右手に集中し、自分が何を引っ張りだすのかを探る。必ず在ると無理矢理認識する。

【3W】の右手のひらから出る軌跡の糸は、どんどん深くジョルノの身体を潜って行く。
アレックスの意識は、ジョルノの身体が受けた接触の歴史を手繰って、更にその深遠へと降りていく。

「で、なんで彼はジョルノの背中に手を伸ばしているんだい？」

「厳密に言うと、アイツの能力は【軌跡】を手繰り寄せる事なんです。ジョルノさんは背中から攻撃されたって言ってましたよね。だから背中から糸を垂らして、過去にあった衝撃の記憶をサルベージしているんですよ」

フーゴはエンポリオの説明を一回聞いただけでは理解に乏しい顔をした。

どうも厳密なルールの下でしか発動できないらしいということにはわかった。

突然破裂音とギヤリギヤリという音が聞こえた。

それがアレックスの唸り声だと解るまで、3人は少し時間が必要だった。

見れば、アレックスは脂汗をかいている。

それだけ集中したのか、あるいは別の何か。

「エンポリオ！フーゴさん！援護して！コイツ・・・スタンドだ！」

アレックスは早口に言うと、【3W】の右手を逆手にし、力瘤を作るように力一杯腕を曲げて引っ張った。

ジヨルノの背中からは凄い勢いで【軌跡の糸】が流れて来る。

「来るぞッ!」

フーゴとエンポリオはそれぞれ【ディープ・パープル】【ウェザー・リポート】を出して構えている。

そこへジヨルノの背中から、淡く光る、半透明の小さな物体が出てきた。

よく見ると機械のようでもあるが、弾力がある。

よく分かりはしなかったが、エンポリオが【ウェザー・リポート】の左手で受けとった。

「なんだこれ!？」

「わからねえ。けどそれがジヨルノさんの身体の中に入っていたんだ。ちょうど、取られた肋骨のあたりに」

アレックスが応えると、ビーツビーツと、その物体は【ウェザー・リポート】の手の中で鳴りはじめた。

慌てたエンポリオは、それを投げ捨てようとするが、窓がこの部屋には無い。

徐々に物体は膨らんで、熱くなってくる。

- - 爆発するのか!？」

エンポリオはとっさに【ウェザー・リポート】の両手で物体を密閉した。

徐々にブザー音が小さくなっていく。

アレックスは「どうしたんだ!？」とエンポリオに聞いた。

彼は両手だけを前にして、顔をややそむけながら答えた。

「今【ウェザー・リポート】の手の中だけを真空にしたんだ。これなら酸素が無いから爆発もしないだろうし、音も聞こえない。ただ、いつまでもこうやってるわけにはいかないっていうか・・・あれ？」

エンポリオが話している間に、彼はスタンドの手の中に違和感を覚え、手を開けた。

するとそこには先ほどまでであった筈の物体が無く、消えていた。すっかり無い、と言ってもいい。

おそらく無酸素状態で爆散できず、そのままスタンドの能力が消滅したのではないかという話に後でなった。

「それで、ジヨルノの方はどうだ？」

みんながジヨルノの方を見ると、彼の脳波は甦りつつあった。

どうやらあの物体が、ジヨルノの覚醒を妨げていたようで、【レクイエム】の姿も消えてしまった。

おそらくその内目覚めるであろう、ということになって一同喜んだ。急ぎで医療班を呼び寄せ治療に当たらせると、10分後には各々の持ち場に付こうと解散することになった。

「じゃあアタシたちも戻りましょうか」

「そうだね。アレックスは？」

「さっき電話が入って出てったわよ。仕事でしょどうせ」

「働き者だねえ」

二人は仕事のできる友達と比較されるのが息苦しくなって部屋を出てきた手前、また戻るのは億劫だった。

しかし仕事をサボるわけにもいかないの、仕方なくドアを開けてエレベーターの方へと歩く。
静は既に仕事が終わった後のショッピングについてあれこれとエンポリオに語って聞かせていたが、聞かされるエンポリオはなんとなく胸に違和感を感じながらも相槌打つのだった。

P M 1 5 : 4 0 ドイツ国内 O B B 車両内

「はい、了解しました。ええ、ちょっとスイスの叔母の見舞いに一人です。はい。じゃあその旨よろしく」

部下はそう言って電話を切ると、上司が耳に付けているイヤホンを乱暴に引きはがして報告した。

「【パツシヨーネ】のボスの居所が分かりました」

上司はけだるそうに「どうでもいい」と言った。

「そんな・・・財団の場所だってわかるのにですか？」

「・・・あのなあ。その財団が同じ目的持ってようが持ってまいが俺達にとってはどうだっていいんだよ。それは【パツシヨーネ】のボスを襲った奴が考えればいいんだ」

やる気が無いのか、自分の仕事に熱心になろうとしているのか部下には判別できなかったが、それもそうかと思う。

組織にもいくつかチームがあり、そのチームごとに作戦が遂行されていく。

だがそれに納得して胸中穏やかとは言えない。組織には世界を変えろという目的がある。

もし他の第三者がそれを狙っていたとしたら。なんとしてでも排除しなければならないのだ。

「おいヨハン・・・お前も財団の奴らをブチのめしに行きたいのか？」

「いえ、そういうわけでは」と言葉を濁して部下は上司から目をそらす。

上司は手元の音楽プレーヤーを停止し、部下に向き直って座りなおした。

「いいか、ヨハン。胸に手を当てる・・・違おう、そうじゃない。右手で左胸に置くんだけ」

部下は力を入れていない右手を胸に置き、上司の言葉を待った。

窓の外には民家がちらほら見えだしてきており、そろそろ駅に着きそうだった。

「よしいいぞ。代表時代のオリバー・カーンみたいだ。勇ましくな・・・それじゃあ俺の後に復唱しろ。いいな？」

部下は頷く。

自分の職務に専念できていない事が後ろめたく思え、目は逸らしたままだ。

「我らは、アーリア人の為に」

「・・・我らはアーリア人のために」

「アーリア人の支配の為に」

「アーリア人の支配のために」

「心臓をささげ、魂を燃やす」

「心臓をささげ・・・魂を燃やす」

「ハーケンクロイツの為に」

「ハーケンクロイツのために」

ヨハンと呼ばれる部下が復唱終わると、上司は生気の無い顔の口元だけ歪めて笑いかけた。

ヨハンはあいまいに答え、また自分の体勢が楽なように椅子へ座りなおした。

上司はまだ胸に手をかけながら、ヨハンを見ている。

- - 恐らくへマした時の自分をどうやって始末しようか考えている顔だ。

第三世界統一の前に、ヨハンは自分が死なない事を祈った。

勿論、ハーケンクロイツに。

T o b e c o n t i n u e d . . .

23話【鎮魂歌5】（後書き）

物知りな方は登場人物の名前でソイツらのバックボーンがしれそう
ですが、まあハーケンクロイツつつちやった時点でもうバレバレ
ですよね！

さて次回。

静達に襲いかかる魔の手は……

24話【鎮魂歌6】（前書き）

遅くなりました。

よづやくペース上げられそうです。

後書きはちょっと長くなりそう・・・

24話【鎮魂歌6】

PM14:56 ネアポリス界限

自分がスリに合った事に、アレックスは気付かなかった。なに、動じない。

【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】で財布を引き寄せればいいだけのこと。

そう思つてアレックスはスタンドを出現させた。

群青色の男性を象つた筋骨隆々の精神体が出現する。

その身体にはローマの戦士が着けるような青銅の鎧が。

そしてそれ以外の生身にはオリーブの木が巻きついており、頭にはオリーブの輪が掲げられている。

詳細の一つとして、鎧の心臓部分がハートマークにくりぬかれており、群青の地肌が丸見えになっている。

特異ではあるが、その面持ちから、人に安心感を与える。

もっとも、スタンド使い以外には見る事はできないのだが。

「財布の【軌道】は後ろに流れ続けている・・・やっかいだな・・・」

つまり財布は後ろへ移動し続けている。

スリは逃げていると言うことだ。

この状態で引き寄せると、スリ迄着いてこられる。

あまり能力の事を表に出したくは無いので、アレックスは【軌道】を追つて走つた。

人目の付かないところに入ったら、その時スリごと手繰り寄せる。アレックスは不自然にならない程度に走っている。

- - 走り難いな。

と思うのは、彼がスーツに革靴という出で立ちだからだ。
ちなみに部下の営業に付き合った後である。

アレックスは【軌道】を追いながら、それが小路に入って行くのが分かった。

寂しい小路だったが、特に意識せず入った。

足を踏み入れると、そこはゴミが落ちており異臭がするようなところだった。

幅2メートル位のところ、入口すぐの右側に一人ホームレスの様な痩せた男が座って酒を飲んでいるだけだ。

【軌跡】は目の前にあつた。

80メートル程先を、パーカーの若者が走って逃げていく。

アレックスは走りながら自分のスタンドで、財布を思い切り引き寄せた。

【3W】の手元から伸びる糸が、凄い勢いで引き戻される。

するとパーカーの男が、引きずられながら、凄い勢いで飛んでくる。

どうやら胸ポケットにでも財布を入れて居たようで、釣り針がパーカーの一部を引っ張るかのように、そこだけが盛り上がっている。

小路にパーカーの悲鳴が響いた。

- - お仕置きしてやるか。

アレックスは小路の中ほどで立ち止まると、おもむろに構える。

尚も【3W】は糸を手繰っており、距離は既に10メートルほど。

アレックスは思い切り拳を小さく握り込み、右手をL字に曲げたまま横に水平に引く。

「これでも食らいな！クソ野郎！」

アレックスは楽しそうに、こちらへ飛んでくる若者のボディに、強烈な右フックを思い切りブチかます。

ドゴムツと、およそ生身がぶつかったとは思えないような音がして、

若者は崩れ落ちた。

パーカーの若者は、腹を押さえて苦しそうにうめいている。顔は白を通り越して真っ青に染まり、彼の身体の下に吐瀉物がブチまけられた。

「強いなにーちゃん」

後ろに居た酔っ払いが声をかけてきた。

アレックスは後ろをチラッと見ると会釈し、若者の懐から財布を取り出した。

中身が出されていないか確認する。

「いやあ見事だった」

「ああ、ありがとね」

酔っ払いは酒瓶を持ちながらアレックスの後ろに立ち、肩越しに倒れている若者を見ていた。

背はアレックスより少し高い位だ。

「あ、コイツ有名なんだよ。すまねえな。俺が足でもひっかけてりやあよ」

「そんなそんな！俺の責任だよ！わざわざありがとオジサン！」

酔っ払いは目の前で犯罪を止められなかった事を悔やんでいるのか、苦笑いでこれに答え、アレックスの肩に手を置いた。

「こういう裏町にやあよ。こういう犯罪ばっかでき。やんなっちまうかもしれないけど、それでも俺達のネアポリスだもんな・・・あ、

それ珍しいな。なんだいそれ？」

なんとなくこの酔っ払いに親近感を抱いたアレックスは、財布から覗いている保険証を取り出して、彼に見せた。

この遠慮の無い下町っぽさが、アレックスがイタリアの好きなどころであり、こういうオジサンを見ると、なんだか嬉しくなってしまうのだった。

「へえー。これアメリカの？ 弟がワイオミングに稼ぎに行ってたな」

「そうなの？ 弟さん元気？」

「ああ、子供が7歳になる。俺の甥だけどさ、可愛いんだこれが。にしてもイタリア語上手いねにーちゃん」

「母さんがイタリア人なんだ」

「アンタの親父さんは幸せ者だよ。イタリア人の女は世界一だ。そうだろ？ こうして立派に学校送行かせてくれる。スーツまで用意してくれる」

「確かに・・・親には感謝してるよ」

「感謝はいいことだ。常に感謝しておけ。特に神様にはな」

「親の次には神様かい？」

酔っ払いの語り口がおかしくて、アレックスは吹きだしてしまった。泥臭いイタリア人っぽさがある。

それが懐かしくて笑いが止まらない。

「ああそうさ。ちょっと祈ってみるよにーちゃん。物事は感謝だ」

「感謝かい？」

「そうだ。ほれ、右手で左胸に手をあてなにーちゃん」

「オジサン神父様かい？いや、そんな顔しないでくれよ。するからさ。こうだろ？」

そうにこやかに笑って、アレックスは胸に手を置いた。酔っ払いは満足そうに頷いて、いかめしい顔を作って、目をつぶった。

「それではアレクサンドロ君、感謝の言葉を復唱しなさい！」

ネアポリス訛りのたどたどしい喋り方で、酔っ払いは続けた。アレックスは仕方なくこれに従ってやった。いやもう、彼の所作がおかしくてたまらなかったのもある。

「天におわします、我らが父よ！」

「我らが父よ」

「我らの蛮行はアナタのために！」

「我らの蛮行はアナタのために」

「また日常の糧を得ることを許したまえ！」

足がもつれて倒れてしまう。

地面に着いた左手には、さっきのパーカーの吐瀉物が付着していた。

「ひざまずくのは良いことだアレクサンドロ君。我らが総統閣下に私もひざまずこう」

そう言うと男は、肅々とそれをやってのけ、またアレックスに向き直った。

アレックスはまだ平衡感覚が戻らない。

それほど大きな声だった。

三半規管がおかしい。

「しばらくその格好で居たまえ。遠慮する事は無い」

そう言つて男は歩み寄ってくる。

その肩には間違い無い。

巨大なメガホンのような形をした、淡く実体化するあやふやな存在、

【スタンド】が浮かんでいた。

アレックスは更に注視して男に視線を走らせる。

その眼は鮮やかな碧で、髪は燃えるような金髪をしている。

正にアーリア人たる風貌であることに、今更アレックスは気付いた。

PM 15:07 ネアポリス界隈 アレックスの場所から北へ約2
km

一方エンポリオは、敵の鋭い追撃をかわすのに必死だった。

静は先に姿を消して逃げてしまった。

出来れば助け船を出す準備をしていると信じたい。

「ひゅんっ」

頭の上を敵のスタンドのマントがかする。

先ほど【ウエザー・リポート】が木箱を投げて攻撃をガードしたところ、木箱が敵のスタンドのマントの中に入って行き、消えてしまった。

何が起きたのかは分からなかったが、おそらくあのマントに攫われるとヤバイ、と認識していた。

背格好は追って来る本体の男と同じ程度の背丈で、金属を思わせる顔に目にあたる部分が黒く真一文字に穴が空いており、頭には多くのリベットが打ちつけられている。

おぞましいのは、その金属的な顔の口元だけが妙に生々しく唇を象っており、その口からは長い舌がだらしなく垂れている。

首は棒のような、一見案山子にマントを着せたと表現した方がいいだろうか。

とにかく本体は細そうだった。

マントの下には腕がチラリと見えるが、基本的には隠れている。攻撃するときにはこの腕でマントをヒラリとたなびかせる。

不気味な事この上無い形をしていた。

「おやおやおやおや静嬢は何処へ行ったのですか？」

本体の男はスーツ姿の青年で、見かけは普通だが、眼だけがイヤらしく蕩けていた。

口からはよだれが垂れている。

先ほど静と街を歩いていると、相手は急に襲ってきた。

走って逃げる途中に、何人か女性が、あのマントの下に消えていったが、何処へ消えたかはわからない。

ただ各々、断末魔と言うよりは、もっとおぞましい物を見せつけられたような悲鳴を上げて、取り込まれていった。

そして静は隙を見て姿を消し、エンポリオだけが追われている。

「おやあああ？でも匂いがしますねええ。美味しそうな匂いだあ」

「でも我慢我慢」と一人呟いて、青年は自らのスタンドのマントの下から人形を取り出した。

ぬいぐるみの様なものではなく、バービー人形のような女性の形をしたビニール人形だ。

それを青年はしげしげ見つめると、おもむろに人形を舐めはじめた。顔、胸、そして足の関節を回して足を開かせて股。

それを上から舐めるように人形を見ながらやってのける。人形を愛でているのだ。

そのおぞましい姿にエンポリオは恐怖した。

「きみきみきみ、僕のプライバシーですから、あまりジロジロ見ないでくださいよ」

「……き、きもちわりい」

男は大事そうに人形を、スタンドのマントの中へと戻し、エンポリオの言葉に応える。

「いいか少年。女性とはすばらしい存在だ。女性が居なければ男など何もできない。だから女性は愛されなければならない」

そう言うと、今度は別の人形を、スタンドのマントの下からとりだした。

人形は金髪で整った顔をしている。

服装は制服だった。

「しかし女性は時に残酷だ。男に格差を設け、差別をする。アップタウン・ボーイと寝て、大金を手に入れる。そして自分を着飾る。いつからか女性は、そうやって汚れていく。この世で一番無垢なのは幼女だ。幼女こそ私が命をかけて愛すべき存在だ。少年は知っているか？あの無垢な笑顔、残酷な事を何も知らない純粋な眼、性を感じさせない体型！全てが愛されるに値する！」

エンポリオは理解のできない相手に対して、困惑を超えて恐怖を抱き始めつつある。

相手の趣向どころではない。

そのような趣向について滔々と語り、人形を愛でているその姿。

そしてなにより彼の握っている人形は……

「そ……その人形は、さっきの？」

男は意外にも親切に答えた。

「エンポリオ君はなかなか聡明な少年だ。良く言われないかい？では僕が言つて上げよう。君は聡明な少年だ。その通り、この人下要は先ほど静嬢をさらおうとしたときに間違つて攫ってしまった、女性だよ。大正解だ。おそらく高校生だろう。そして彼女は人形に

なって、僕の愛の対象となった。幸せ者だよ彼女は……一生僕の
一途な愛を受ける事が出来る……」

そう語る唇は、卑猥なもののように艶めかしく動いた。
恐ろしさよりもおぞましさの方が勝る。

どうして良いかわからず、ただ戸惑うだけのエンポリオに対して、
男は更に続けた。

「まあそういうわけで静嬢をいただきたいのだけれど彼女は何処へ
逃げたのか教えてくれないかね？ いやいやいや教えるしかあるまい
よエンポリオくん。私たちは君たちに危害を加えるつもりは今のと
ころないのだよ。そう、君たちが【世界を変える】などと言うのは、
全くもって青臭い若さゆえの犯行であると認めてくれればそれでい
いんだ。勿論君は黙っておくことも出来るし、君はそれをやっての
けるだろうけど、だからこそ私が派遣されたのだよ」

男は人形をスタンドのマントの下へと隠し、スタンドを直立させた。
どうやら足は無いようで、上半身だけの案山子のように見える。
金属のような顔の中、口元だけが、やはりいやらしさを感じさせる
ほど生々しい。

だらしなく垂れさがっていた舌は、口の中へとしまわれている。

「そうだそうだ申しわけないエンポリオ君。私は君の名前を知って
いるが、君は私の名前を知らないね。ここは礼儀を欠いていた非礼
を込めて自己紹介しておこう。私の名前はエツケハルト・ハイゼン
ベルグ。スタンド名は【ジニー】、能力は【マントに触れた物体を、
人形に出来ること】であり、その人形の過去は私に全て伝わる。そ
して勿論私は悪人ではない。気に行った人形は、丁寧に機嫌を取り、
一身に愛情を注いでいる。それほど一途でまっすぐな人間だと思っ
ていただきたい。だからこそ私はここに派遣されたのだと自負して

いる。信用してくれていい。よろしく頼むよエンポリオ君」

そうまくしたてて、エツケハルトと名乗った青年はお辞儀をした。スタンドもお辞儀をしているようだったが、俯いた瞬間、その長い舌がベロンと飛び出し、まるで馬鹿にされている気分になった。

「な・・・なんで僕の名前をご存じで？」

これはこれは、と頭を押さえて、青年は非礼をエンポリオへ詫びた。

「同士がジョルノ・ジヨバーナに仕掛けたスタンドを、君達は取り出したね？今はそのスタンド、君の身体の中だけだ」

・・・だから居場所も名前も把握しているってことね、このド変態クソ野郎は。

静は姿を消しながら、一人考える。

・・・ブチのめしたものが、痛めつけて情報を引き出したものか・・・
静は迷いながら、先ほどエンポリオが逃げ回っている間に拾った獲物を担ぐ。

エンポリオとエツケハルトはまだ話をしている。

と言ってもエツケハルトがまくしたてているのがほとんどだったが、今しきりに、自分の所属している組織が如何に素晴らしいかを語っているエツケハルトだったが、静はその側頭部へ向かって、思い切り獲物を振り上げる。

その顔は、これから両手に伝わるであろう暴力の快感が、待ち遠しくて仕方が無い、という顔だった。

そんな静を知らずに、エンポリオは背筋にウジ虫這わせたような感覚でいた。

「さてエンポリオ君。選んでくれたまえ。【世界を変える】とはどういうことだい？政治的な？経済的な？実は妄言？それとも理想？もしくは・・・【ディオ】の【骨】が関係していたりするかい？」

バレてる。

それも目の前の人間だけではなく、おそらくエツケハルトの仲間全員に。

そう考えたのは静も同じで、一瞬振り下ろす獲物が止まる。エンポリオもとっさのことに動けない。

その様子がおかしかったのか、エツケハルトは笑いだした。癪に障る引き笑いをしながら後ろを向く。

静は彼と目が合ったように感じた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

24話【鎮魂歌6】（後書き）

【ジニー】

オーストリア、ウィーン出身の歌手Fallicoの歌。

白人で初めてラップを歌った人。私が最も尊敬する歌手の一人です。

ジニーという曲は、当時ウィーンで起こった幼女凌辱誘拐殺人事件の犯人の心情を歌った歌、だったような記憶があります。エッケハルトの趣味にも合致するんでちょうどいいかなと思って起用しました。

興味があれば一度聞いてみてください。

FALICOの曲は、心をえぐられるような歌詞が多いです。

25話【鎮魂歌7】

PM3:08 ネアポリス 路地裏

地震が起きているのかと錯覚するほど、足が震えていた。

俺は前を向いているのか、右を向いているのか、左か、上はどっちだ、ああ、まただ。

膝立ちから立ちあがろうとしていたアレックスは、再び地面へと倒れた。

だんだんクラクラが酷くなっていく。

目の前の男は直立して、何度も崩れるアレックスを見下ろしている。起きあがるのを待っているのか、あるいは足元の蟻でも見ているような気持なのか。

どうにか試行錯誤して脱出を試みているアレックスを見ながら、男は無表情で怒鳴った。

「その不屈の魂は称賛に値する！君は今、立とうとしている！身体がそれを拒否しようとも！君はそれにも負けず！たとえ汚物にまみれたとしても！君の魂は立ちあがことを止めない！素晴らしい事だ！私の胸は！今！熱く！震えている！」

再び爆音が響いた。

今度も耳をふさぐ暇はなく、鼓膜がびりびりに引き裂かれたかと思っ

た。やはり身体は立ちあがらず、未だ足元の吐瀉物と汚泥の中で身体を寝かせている。

男は胸に手をあてながら上を向いている。

いつ見ても、所作の整った軍人にしか見えない。

そう、軍人だろうか。

明らかに言葉づかいから言って、そのような振舞いだ。

「・・・チツ。アバラがイカレちまった」

のそのそと後ろで動く音を、アレックスは耳にする。

そちらを振り向く事が出来ないが、音だけは聞こえる。

起きあがる音だ。

そしてこの路地に居るのは、自分と、男と、パーカーの泥棒。

- - 最初から挟み撃ちするプランかよ。

アレックスは一人毒吐いた。

まさかパーカーも仲間だったとは、と恨むが、よく考えればすぐわかる簡単な罠である。

そのパーカーの男は先ほどまで、赤ん坊のように腹を押さえて丸まっていたが、次第に痛みも取れたのか、のそのそと置き始めているところだった。

その目は恨めしそうにアレックスを見ており、もう一人の男とは違って、感情と言うものが目線に触れるだけで流れ込んできそうである。

そのパーカーの男をアレックスは視認することができないが、見えたとしたならば、今から自身に降りかかる痛みを感じられる筈だった。

突如ドゴンっという音がして、アレックスは呻いた。

体中の筋肉が弛緩していく。

だめだ、硬直させなければと努力するが、激しい痛みがそうさせない。

それからパーカーは何度か右足のつま先で、獲物を食い散らかす肉食獣のようにアレックスの背中、腿、側頭部を蹴り飛ばす。

弱弱しく【3W】がパーカーを払いのけようとするが、力が入らず、生身に負けてしまう。

それでも男がパーカーを制したら、彼は大人しく従った。ただ口だけは鋭く「フェアじゃないからやり返したただけですよ」と言った。

「勿論フェアであること、あろうとすることは大切だ。しかしお前のは恨みだ。そこにフェアであろうとする魂は無い。フェア、つまり公平という言葉は使いどころを選びなさい」

パーカーは不貞腐れたように顔をうつむけ、所在なさげに目を動かす。

しかしその顔が瞬時にゆがみ、最後の一発をアレックスにお見舞いしてやった。

「レイ、私は君に辞めると言ったんだ。いつからドイツ語が分からなくなった？」

「ユダヤ語なら通じるかも」

アレックスの身体の中では、何度も蹴られた痛みが、電撃のように彼の身体をほとばしる。

その痛みが消えたようにアレックスが思ったのは、男の目に初めて感情の色が漏れたからだだった。

色に例えるなら黒、それも真っ黒ではなく、ドス黒い黒。

他人を畏怖させるようなそれではなく、異形と言ってもいい、グロテスクな昆虫の黒い眼をしていた。

勿論本当は深い碧色をしているのだが、男の身体から止めどなく溢れるオーラとも言うべきそれが、彼の眼だけをこの薄暗い小路の中で浮き出させていた。

「レイ。私は君の父上と親友だったことを強く誇りに思っている。

君が生まれた夜の事もまた、良く覚えている。君の父上が殉職した夏、道しるべを失った君を迷わせないように、君に何一つ不幸な事は感じさせないようにと私なりに善処することを墓標の前で君に誓った。そして君には世界の何が正しくて、何が間違っているかを教えてきたつもりだ」

言葉から見ると、父親が子を諭すかの様だが、その実、アレックスはレイと呼ばれた男が殺されるのだらうと直感した。

殺されるかもしれない、ではなく、捕食する事を決めたというゆるぎない決定を見た気がしたのだ。

レイと呼ばれた若者は、眼を見開いて口をパクパクしている。

人が恐怖に包まれて尚軽口叩こうとするならば、こうして鯉のような顔をするのかもしれない。

「その一つの中に、ユダヤ人への敬意の不可欠があったと思う。我々は支配者ではない。政治結社なのだ。その崇高な目的への尊い犠牲だったのだよ。つまり、彼らには敬意を払わねばならない。統一世界の礎となつていった彼らに。そんな彼らの尊さに泥を塗った。そうだな？私はそんなことを正しいと君に教えたつもりはないが？」

レイはコクリと頷いた。

まるで水飲み鳥のようだ。

「そんな私の言葉を軽んじたのか、ユダヤ人に泥を塗りたかったのか、どちらか言ってくれないかレイ？」

「は……反省します」

「今回だけだ。次にアレクサンドロ君に謝れ」

レイはアレックスに謝った。
わざとらしい仕草は一切なく、心の底から申しわけなく思っている様子だった。

だとしたら異常だ。

あれほど激昂していた人間が、一人の教育によって180度態度をこの短時間で変えてしまうのだ。

異常なまでの父性愛、そして洗脳。

男はアレックスに向き直る。

眼は元の碧に戻っていた。

それでも冷たさは残っていたが。

「身内の恥を晒すようで申しわけなかったねアレクサンドロ君」

アレックスは遂に自分の番が来たと思つて胃が痛んだ。

「こうして芝居の一つでも打つたのには訳がある。君と話がしたかった。非公式にね。どこから話そうかの判断が私は不得手であるからここは単刀直入に聞こうと思つ」

それから少し息を整える。

「君たち、財団の子供が言つ【世界を変える】とはどういう意味であるのか。それを教えてくれたまえ」

- - そういうことか。

まあ大体【レクイエム】の言う通りだった、というのが率直な感想である。

同じく【世界を変える】術を探っている奴らが居る。

- - まあ名前を呼ばれた時からそんなこつたるうと思つてたけどな！

と、歯ぎしりしながら心の中で悪態付いた。

男はツカツカと歩みより、アレックスの前で再び聞いた。

「君が妄想家であったのなら、話はそこで終わるのだよ。財団と【パツシヨーネ】、それと私たちは、各々素晴らしい人生を歩むことが出来る」

アレックスは痛みを耐えながら、よろよろと膝で立つ。

レイがそれを止めようとするが、男はアレックスの好きなようにさせた。

アレックスを尊重しているのだ。

彼が立ちあがることが、まるで厳かな儀式であるかのように、男は振舞った。

男にはアレックスに手を貸すことも、詰問することも出来たが、あえてそれを見送って、アレックスを見守った。

まるで生まれたての小鹿のようにプルプルとしながら立つとうとしているのは、先ほどのキックは勿論、一番初めに何度か食らった、男の大声が効いていたからだ。

アレックスは痛みを耐えながら、自分のおかしな三半規管を無理やり克服し、力を入れて立つとうとする。

たっぷり2分は掛けた。

笑う膝を押さえながら、なんとか立つ。

それなりにしなやかに、弱弱しく見えぬよう。

アレックスの眼には相手が横向きに立っているように見える。

へへっと口元で笑うと、アレックスは声だけは堂々とあろうとした。

「言わなければどうする？」

「我々もプロだ。仕事をするだけさ。多少非人道的であるが、私はまだ人を死に追いやるほどに迄はしたことがない」

「俺もそういうことされる?」

「……応えなければね」

アレックスが立つ一挙手一投足を見守っていた男は、やや悲しい顔をして彼を見た。

失望というよりは、自分の氣にいていた人間が、何処かへ去っていくような顔だった。

「真相は語ってくれないのかね……ああ、だがもう一度だけ聞こう。ディオの細胞で【世界を変える】つもりかい?」

「……ああー口ん中ジャリジャリする。

ペツ、と口の中に残る砂利と血を吐く。

思ったより飛ばず、自分の靴の上にかかってしまった。

惨めだとは思ったが、その惨めさも誇らしく、自分らしくあること決める。

「……一度しか言わないぜ」

瞼の裏には、今までエンポリオと歩んだ刻が流れた。

「大丈夫、俺が居なくてもお前は世界を変えられるさ。

それに、と続ける。

「……ジョースター家の為に死ぬよりマシな死に方があるなら!」

「……俺を……俺を倒して聞きやがれ……このクソナチが!」

今度こそ失望の色が隠せない男は、仕方なく自らのスタンドを構え

る。

レイもそれに応じて構える。

「この悲しみが君にも伝わると嬉しいよアレクサンドロ君。これでは安い子供向けのアメコミだ」

「・・・デウスエクスマキナよりはマシだぜ」

「教養のある面白い冒険の仕方だ」

「今時はやんねえんだよファッションなんてよオ。モーターでも崇めてやがれクソツタレ」

「もう話すらマトモに取り合ってももらえないようだね。一体何に君はそんなに激昂しているんだ。わざわざ死に急ぐ歳でもあるまい」

「だからッ!!」

体中に残ったありったけの反抗心を込めて、アレックスは叫ぶ。

「お前たちには絶対言わないと言ってるじゃねえか!!」

全身全霊を込めた鋼鉄の様なパンチを、【3W】が放った。

この腕を、いつの間にか男は避けて自分の目の前に居る。

「・・・私はヴィルヘルム・ヴァイトリング。光栄なことに革命的な名前を授かった。そしてスタンドは【99ルフトバルーン】という。覚えておいてくれ」

ナチスは暴虐非道の団体ではなく、列記とした政治結社である。

そこでは礼儀も当然重んじられる。

ヴィルヘルムはアレックスに礼を尽くすつもりで名乗った。

アレックスは、もはや上も下も分からないこの身体を立たせて応える。

「アレクサンドロ・ルイ・アームストロング。スタンドは【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】」

「素晴らしい名前だ（What a wonderful name）」

そうだと、と応えると、断りも無くアレックスはヴィルヘルムに掴みかかった。

なるほど始まっているのだとヴィルヘルムは一人呟いた。

アレックスは必至で自分のパンチを相手に当てようとする。

が、ヴィルヘルムがことごとくこれをかわす。

いや、そもそも壊れた三半規管では目測しきれっていないのだ。

辛いものがある。

格好を付けた割に、アレックスは自分のスタンドと自分のパンチの遠心力で、無様に崩れ落ちる。

床は汚い。

ヴィルヘルムの腕がアレックスの首元を掴み、ミシミシと骨を鳴らして、アレックスの身体を釣り上げた。

これくらいすれば吐くかと思ったが、苦しさを余所に、アレックスは笑っている。

勝負は呆気なかった。

「言うんだ。最初から君は戦える状況になど無い。どうしてそんな

に突っかかるんだね」

アレックスは締まりの無い笑いでヴィルヘルムを見ている。
もうこのまま死んだっていいと思った。

- - というか、今が死に時だ。

すくなくともツエペリという名前でジョースターの為に死ぬよりはいい。

自分が話せば、エンポリオとの約束を反故にしてしまう。

相手はこうまでしてアレックスが強情張って死に急ぐ背景には、絶対に秘密にしておきたい【世界を変える】内容があった。

死んでも言わない、言うなら死んだ方がマシ。

万全の受け入れ態勢でアレックスは挑む。

その奇妙な心地悪さにヴィルヘルムは動揺した。

それを隠すかのように、メガホンの形をしたスタンドをアレックスの顔の前に持つてくる。

- - 死ぬことはないだろうが・・・

しかしヴィルヘルムは構わないと思った。

あるいは、情報はエツケハルト一人で十分だ。

それほどにヴィルヘルムは、アレックスに対して敬意を払っていた。
だから彼が闘うと言うのなら、答えないわけにはいかない。

彼が闘って死を急ぐなら - - - -

「アレクサンドロ君。君を尊敬してもう一度聞く。どうしても教えてくれないね？」

「・・・倒せよ」

良かった。

相手に恨まれながら闘うことには、いつも躊躇いを覚える。

ヴィルヘルムはアレックスの首元にますます力を入れ、メガホンを

手に取る。

- - まるでカミカゼだな。

ヴィルヘルムは身体一杯に空気を吸い、肺が焼けつきそうな程空気を貯めた。

そして彼は思い切り吐こうと喉を開ける。

まるで風船のように、空気がヴィルヘルムの喉を通る。

そして声帯を震わせ、アレックスに届かんとするその瞬間。

グワツツシヤアアアアアン

ヴィルヘルムのメガホンによる爆音よりも、むしろ今彼がアレックスの眼の前から路地の壁側のゴミ箱に突っ込んだ音が聞こえた。

ヴィルヘルムは、側頭部をパッキリ割って倒れている。

その切れた頭部の傷は、薄暗い路地のなかで、一つだけ鮮やかな赤を演出している。

その赤を、更に映えさせるように、そこからは止めどなく血が流れている。

- - 誰だ!?

アレックスは喉元押さえてゲホゲホしながら、今起こった出来事を把握しようとする。

何が起きたかはわからない。

ただとりあえず目に映る物だけで判断するならば。

- - 目の前のレディが、オッサンを「上から」ブツ飛ばしたってことだ。それも、かなり勢いよく。

「大丈夫か？」

闖入者は軽く小首を傾げてウィンクをする。

目つきが怖い。

まず目についたのはウェーブのかかった茶色い髪。
色の白い首。

男性よりは丸みを帯びた肩の筋肉。

上下の黒いジャージ。

足元のブーツ。

顔の彫は深い方ではないが、まつすぐな眉毛と口元が印象的だ。

眉間には深く皺が寄り、お世辞にも可愛げがあるとは思えない。

その上その皺の所為で、大きい眼がまるで可愛げあるようには見えない。

その所為か、ウィンクの意図も、もしかすると「後は任せろ」という意味だったのかもしれない。

闖入者は今、残るレイに向かって右足を踏み出す。

一步、また一步と近づくと、拳が割れそうなほど握られていく。ギリギリという音まで聞こえそうだった。

そして彼女の背面には、真っ黒なドレスを着た女性型スタンドが浮いている。

彼女もまたスタンド使用であることに、アレックスは今更驚きもしない。

ただ、この目の前の女性が、ナチスに良いイメージを持っていない事は誰の目から見てもわかる。

そしてその怒りは、普段の静とは比べ物にならない怒気が、彼女の背中から上がっているのが視認できるほどであった。

25話【鎮魂歌7】（後書き）

デウスエクスマキナ

簡単に言つと、どっちらけになった劇を無理やりまとめる才チ。

26話【鎮魂歌8】（前書き）

遅くなって済みません。

26話【鎮魂歌8】

PM3:35 ネアポリス 路地

自分の父親の背中が大きく見えたということは、何度かアレックスには経験がある。

特に挙げるとすれば、3年前、危険を顧みず、赤ん坊を助けるために火事の中へ飛び込んで言った姿は忘れられない。

大きな脅威へ立ち向かう姿。

赤ん坊を抱いて出てきた父の背は大きく、息子としても誇らしかった。

そんな父の背中を思い出した。

安心感と包容力、というものではなく、何かに立ち向かう気丈な背中、誇りある背中、あるいは必ずこの人ならやってくれるだろうと言う不思議な安心感。

それが、不思議なことに、心の底から目の前の女性に感じられたのだった。

闖入者は、レイから3メートル程距離をとって立ち止まる。

彼女は低めの声で「ピリオンは何処だ？」とレイに聞いた。非常に堂々とした姿で問うている。

一方のレイは、口が震えて話せない。

どころか唇だけでなく、ブルブルと身体が震えている。

その様子に人間味はなく、まるで操られた人形か、壊れた機械のようだ。

その表情は硬い。

しかし口元のゆがみはとてつもなく醜く、何かを言いたげに、どもっている。

感情が言葉に先行し、何を言っているのかわからないのだ。

怒りと言う色が、レイの身体を爆発的な速度で浸食していく。その怒りで、今にも身体が膨れ上がりそうだ。

「おい、聞こえてねえのか？」

そう言つて、女性はスタンドでヴィルヘルムの身体を持ちあげ、それを軽々とレイの方へ投げてよこした。

ドムッと鈍い音がして、ヴィルヘルムの身体がうめき声を上げた。その所業でようやく気持ちの整理がついたレイは、キッと闖入者を睨む。

「何してんだテメエーアア！！！」

怒りにまかせてレイは闖入者へとタツクルで突っ込んでくる。

いけない、とアレックスは助けに入ろうとしたが、女性はこれに対し、左足を後ろに引いただけで、易々とこのタツクルを受け止める。レイは、自分のタツクルが止められたことに驚いた。

女性はレイの首元を思い切り掴み、襟元掴んで対峙した。

レイは一瞬虚を突かれたような形になったが、負けじと女性の襟元を両手で掴む。

互いに腕はブルブルと震え、如何に凄まじい怒りがぶつかりあっているかが見て取れた。

「テメエ何者だ・・・俺達の事知ってんのか・・・？」

レイは襟元掴みながら詰問する。

これに対して女性は「ビリオンは何処だ」と同じ質問を繰り返すだけである。

会話が成り立っていない。

両者は一旦互いを突き放し、自分のスタンドとともに、互いに突っ

込んだ。

女性の右手がレイの鎖骨を狙い、レイがこれを避ける。ブオンという空振り音からして、女性の方もタダ者ではなさそうだった。

レイは空ぶった女性のボディを的確に狙い、思い切りブローを叩きこむ。

低い音がして、肉が弾けるような音がするが、女性の方は全くダメージを受けていないようだ。

それからは互いに右、左、アッパーと多彩に攻めるが、互いに空振るか、当たってもダメージを与えられているようには見えない。

彼らの横ではスタンド同士がぶつかり合い、今は互いの手を握ってこう着状態に陥っている。

そのやや下で本体同士は殴り合いをしている。

レイが左パンチ、右ローキックとフェイントを混ぜながら攻撃してくる。

鮮やかな体術だった。

これに対して女性の方は、攻撃を受けるものの、もろともせず、レイに打ちかかる。

どちらかと言うと、女性の方が荒っぽい殴り合いをしている。

ただ客観的にみると、徐々に女性が押されてきているように見える。女性のスタンドは、相変わらずレイのスタンドと両手を掴みあっているが、段々に押されて体勢が低くなってくる。

今は握り合っている手が逆向きになり、女性のスタンドの手首がミシミシと音を立てて逆手が割かれそうだった。

殴り合っている女性も痛みを感じたのか、顔に苦痛が走る。

その瞬間を見逃さず、レイは思い切り女性を正面から蹴り飛ばした。尻もちついた女性に対して、レイは相手の腹を右足で押さえながら、勝ち誇った顔で女性を見下ろす。

「少しはやるようだ、お前は一体誰なんだ……？いきなりヴィ

ルヘルムさんを殴り飛ばすなんてマネしやがって……」

そう言っただけで乗せていた右足に体重を更に乗せる。

女性は苦しそうに呻いた。

それに快感を覚えたように、レイはどんどん力を入れていく。

「なあ、なんでビリオンを知ってたんだ？名乗れよクソアマあ」

グリグリとかかかとに力を入れて、女性の腹を踏みにじる。

ちょうど鳩尾の辺りで、筋肉のない場所に力を入れられた所為で、女性の顔は痛みで歪む。

「やめるオオオオオ！！」

アレックスは倒れながらスタンドだけで殴りかかるが、「嫌だね」と言われ、簡単にレイのスタンドに弾き飛ばされる。

女性はその間もずっと苦しそうにうめいていたが、アレックスに気を盗られたタイミングに、自分のスタンドでレイに殴りかかる。

しかし、これもレイは自分のスタンドで相手の右拳を片手で止め、女性に向き直った。

「良いパンチだ。一生その手のままでいろよ」

ギリギリと拳を強く握られ女性は痛みを感じていたが、それが無くなった。

レイは満足そうに女性の違和感芽生える顔を見下ろし、笑った。

アレックスからは、何が起きているか見えない。

女性もひとしきり自分のスタンドに何があったのか探っているが、理解が出来ていないようだった。

握られたその瞬間から、グググと自分の拳が固まり、まるでタール

に手を突っ込んだかのような感触にある。
つまり拳が開かないのだ。

「【トウ・ザ・メタル】の能力だ・・・触ったもの全て・・・鋼鉄にしてやるよ・・・ッ」

レイは睨みを利かせて女性を見る。

どうだ、と言わんばかりに見下ろし、足には更に力を入れた。

ギシギシときしむ音が、床に倒れるアレックスの耳にも届くようだった。

レイは次に何処を鋼鉄にしてやろうかと考える。

しかし、足元に力を入れれば入れるほど、何故か女性の顔から感情が消えていく。

まるで能面のような顔をして、乞食でも見るかのように蔑んだ眼を向けている。

そのある種の凄味を打ち消すために、更に足元へ力を入れようとする。

女性の眼はどんどん色を失い、漆黒に染まって行く。

ゴゴゴゴゴ、という音が聞こえそうなほど、レイにとって嫌なオラが立ち上って行くように見える。

「そ・・・そんな眼で見るなアアーーーーッ!!!!!!」

今度はつま先ではなく、踵に思い切り力を入れて上から振り下ろす。

人間の腹を思い切り踏み抜けば、必ず内臓は破裂するだろう。

振り下ろす位置がマトモならすい臓。

悪ければ脾臓が破裂するだろう。

内出血が始まり、赤黒く腹が染まる。

外傷ではない、防ぎよ様の無い内臓の痛みが女性を襲うに違いない。

「お前、調子に乗るなよ・・・」

女性はレイが踵を振り下ろす瞬間、固まっっていない左手でガードする。

- - がかったな。

レイはニヤリと笑い、ガードした左手を蹴りあげた。

女性は再び自分の身体に起きた異変に気付いた。

左手まで鋼鉄になっているのである。

彼女のスタンドもまた同じく、両腕が鋼鉄になっている。

「左手も鋼鉄にして貰ったぜ女ア。悪いねエ調子に乗っちゃって」

ギシシと歯をこすり合わせて笑うのが癖らしい。

女性はレイの笑いを余所に、自らの手を見比べる。

するとドス黒かった顔が、決意の表情を飾る。

「なんだあその眼は・・・・・・アッ!？」

レイの身体が、ゆでた海老よろしく、くの字にカクンと折れる。

女性はその隙に体勢を立て直し、両手を顔の前に構え、身体を小さくかがめる。

身体こそ小さくまとまったものの、その塊から発せられる殺気は爆発的な勢いで漏れ出る。

触れたら即爆発するような爆弾だ。

その右隣には、同じ体勢をした黒いドレスをまとった女性型スタンドも同じ構えで浮いている。

アレックスの眼には、どうやらレイは殴られたらしい、ということしかわからなかった。

レイは苦しそうに下っ腹押さえながら、女性を見やる。

そんなレイに、初めて女性は笑ったような顔をして話しかけた。

「悪いね氣イ使わせちゃって。これ、ありがとうよ」

そう言つて、女性は両手をぶつけ合わせる。

ガキンガキンという派手な金属音がして、アレックスは彼女の手が鋼鉄で有ることに気づいた。

固まる、というデメリットは、今、彼女にとって最高の武器を与えたことになる。

「いつまでダウンしてんだコラ。やるうぜ？どっちかが情報を吐きなくなるまで、鉄拳デスマッチだ」

そう女性は言つと、そのかがんだ状態から流れ出る爆発力を、ある一点に絞る。

踏み出した右足が、まるで地面に沈むかの様に蹴り、針より鋭い右手拳を、爆発的な速度でレイに繰り出した。

P M 1 5 : 4 0 ネアポリス アレックス達から2 k m程離れた路地

刺さるようなパンチが、静の身体を貫く。

その身体は、投げ捨てられたゴミ袋のように、極めて普通に、または軽そうに弧を描いた。

勿論彼女は透明になっている手前、その軌道が見えた者は誰も居ない。

しかし、その軌道が見えているように、エッケハルトは彼女の身体が落ちる軌道を追った。

信じられない、という顔で見ているのは、むしろエンポリオの方だった。

今まで透明人間の存在を嗅ぎつけた人間は、エンポリオの知っている限り居ない。

静も同じ疑問を抱きながら、路地の壁へしなやかに叩きつけられ、路上に転がった。

身体は透明なままだ。

「今の感触では、静嬢本人ですか。いやいやいや透明になれるとは面白いですねえ。でもわかつちゃうんですよアナタ・・・匂いがね、するんですよ」

エツケハルトは嬉しそうにニヤニヤ笑いながら話す。

妙に尖った上唇をむずむずさせ、ヒヒヒヒヒヒと口の端から声がこぼれる。

「あー、なんといいですか、かぐわしい匂いがしますね静さん。これは【2日目】ですか？それとも【初日】ですか？随分と芳醇でむせた匂いがしますね。これはその歳相応のもですよ。誇らしく思った方がいいです。ともかくこの匂いが、アナタの存在をこの空間の中で浮き立たせるのですよ」

「辞めるッ！！！」

見えない静の悲痛な叫び声が響く。

そして低い嗚咽と、苦しげなゲホゲホという咳が遅れてエンポリオに届く。

流星の彼にも、エツケハルトが言っている言葉の意味くらいは分かっていた。

「これは失礼しました。重い方でしたか？腹部に当たった？すみません。実に申し訳ない。もう二度としませんから、そこで見ていてくださいね」

・・クソ野郎・・・

静は血が滲みそうなほど唇を噛む。

何故自分の位置が分かったのか。

それが最も大きな脅威であったが、屈辱的なのは、自分の匂いでその場所が分かったと言う事実だった。

なんにしても、これくらい屈辱なら耐えられる。

アレックスの軽口と変わらないレベルだ。

どう打って出たものか、それだけが静にとつての至上命題だった。

とりあえずこの場から離れることだけを考える。

腹の痛みも治まりかけたところで、静は外へ向かうため、膝のバネで立ちあがると同時に走りだした。

「匂いが移動するんですよ。匂いが。だからこつそりなんてムリムリ」

エツケハルトは後ろに振り返る瞬間、スタンドを静へ向かって飛ばす。

狙いは正確に静の足元を狙って掬いあげる。

やはり見えないはずの静は、顔からすつ転んだ。

そのまま足首を持たれて吊るし上げられる。

「匂いは流れますよねえ・・・それは静さんの身体を纏って、身体のラインに沿って下へ降りていきますから、匂いが貴方の身体を象っている限り、私はアナタのまつ毛の本数まで数えられるのですよ」

静は背筋に虫が這いずるかのような気分になる。

そしてうすら寒い。

透明になるということが、ここまで簡単に破られる程度の能力だとは思ってもしなかった。

遠くから飛び道具で狙えば、また違うのだろうと踏んだのだが。

-. それよりも...

人形にされれば、あるいは自分も辱めを受けるのだろうか。

そんな恐怖が遅れて身体を支配する。

しかし足首に入る力は実に強固で、全くはがせる気がしない。

今【What I'm looking for】を発動させるか

・

いや、掴まれている限り、功を奏す可能性は低い。

おまけにここで相手に能力がバレるのも問題だ。

なにせよ手段はない。

「放せッ！」

エンポリオが【幽霊の拳銃】で狙いを付ける。

エッケハルトは微動だにせずエンポリオを見る。

まるで哀れな懺悔人を見るような目をしている。

「エンポリオ君・・・その選択肢はベターだがベストじゃない。静嬢の命は私が一瞬でどうにかできるものだし、口を叩く暇を作らせるということは、彼女を人形にするタイミングがあったということだよ？」

歯がきしむ。

力を入れて顎を閉めていたことに気がつく。

それは無意識のうちに、自分が詰んでいる事を認める何よりの証拠だ。

例えるなら、静が人形、つまり情報に成りえる時点でチエック。

あとは悪あがきをしながらキングを逃がすことで、チエックメイトを延ばすか。

決定的なのは、現状を打破しえる駒が、エンポリオ側に残っていないことだった。

「君達は何を考えているのか、それだけを教えてくれればいいんだ。しかしそれは、私に納得できる形だね。一方でもしそれが組織の理念に関わるようであれば・・・ある程度我慢をしていただかなければならないんだ。勿論こんな脅迫じみたことは言いたくないんだが、いかんせん信じる理念と臨むべき【世界】があるのでね・・・」

いちいち紳士的な口のきき方が癪に障る男だ。

エンポリオは、銃口に向けた【幽霊の拳銃】に力を込めながら、必死に今後のアイディアを模索する。

汗が頬を伝って唇に入る。

塩見を感じる迄、数秒時間がかかった。

「・・・うん。やはり時間の無駄かな」

エツケハルトはためらうことなく言った。

確かにこれ以上時間稼ぎを相手にさせれば、チエックメイトから逃げるか、あるいは盤をひっくり返す事態になりかねない。

それを警戒してのことだった。

清々しいほどの決断力で、エツケハルトはエンポリオに対し、もう交渉の余地が無い事を告げた。

そして【スタンド】の手に力を入れて、マントの下へと、静を引きずりこんだ。

「はい、これで僕だけのバァービィー人形が出来た訳だ。そして次は君の処置だ」

そう言うと、エツケハルトはエンポリオを【ジニー】のマントで覆うとする。

【ウエザー・リポート】でかろうじてガードしたエンポリオは、途端にエツケハルトと距離を取ろうとする。

その代わり、ではあるが。

エンポリオの【ウエザー・リポート】は、エツケハルトの手に渡ってしまった。

「ふん・・・まあこれで君も抵抗できないだろうし、良しとするか。それとも一緒にお人形さんで遊ぶかい？ほら、これがさっきの静嬢だよ？パンツの中を見たい？でもざんねええんそれは僕だけのお楽しみ。」と言っても歳をとり過ぎていて、あまりタイプじゃないけれど・・・」

エツケハルトは嬉しそうに静の人形で遊んでいる。

まるで人形劇を始めるかのように、セリフを自分で呟いたりしている。

すると突如何かを思い出したかのように、【ジニー】のマントの中から、小さな人形サイズの家を取り出した。

それを真ん中から開くと、内装がむき出しになる。

「いいだろうこれ？実はキッチンセットも僕は持っているんだ。こうして彼女に包丁を持たせて・・・料理を作ってくれるんだ。僕の為に。最高の能力だろうこれ？」

エツケハルトは人形になった静に包丁を持たせると、その玩具のドールハウスのキッチンに立たせた。

そこだけ見れば、良くあるお人形さんごっこに見える。

しかし、大の大人がまなじり下げて人形で遊んでいる姿は、狂気が、

もつとおぞましい何かしか感じられなかった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！【世界を変える】ことについて白状したなら、静は返してくれるか！？」

エンポリオは慌てて聞いた。

このままエツケハルトの性癖に任せて遊ばせていたなら、静に何をされるかわかったものではない。

一方で、静が手中にある状態で有れば、別段エンポリオに聞かずとも、静の記憶を探ればいい話ではある。

勿論エツケハルトはそれを分かっているからこそ、「Nein^{いやだ}」と言った。

必要がないと考えている相手を交渉のテーブルへ着かせる事は難しい。

しかしそれでもエンポリオは食ってかかった。

「静も知らない事がある！僕ともう一人の友人しか知らないような事実が！」

「エンポリオ君・・・おそらくそれは本当のことだろうが、だったら君を人形にして記憶を漁ればいいこと。残念だけど、交渉の余地は無いよ」

「いや・・・二人がバラバラになったことを想定して、互いに知っていること知らないことをあえて分けた・・・だから、僕の友達しか知らないことがある。そしてその彼は、僕の携帯電話で、僕の声で言わなければ、その情報を引き出すことは出来ない」

エツケハルトは軽く顎に指を当てて悩む。

すると、静の人形が地面へと落ちた。

気付いたエツケハルトは、ゆっくりとその人形を拾いあげながら、まだ悩み続けている。

「なるほど・・・僕には信じられないが、万一ということもある。それでもいいが・・・君が何かを企んでいる気がして仕方が無いんだよ」

「ならスタンドを預けたままでいい!」

「なるほど・・・あ、泥がついているじゃないか」

エツケハルトは人形を弄びながら、静に泥が付いていることに気付いた。

エツケハルトはポケットからハンカチを取り出し、それで丹念に人形についた泥を磨き始めた。

「ちょっと待ってくれるかい? いやね、僕の射程範囲外の女性とは言っても、一度人形にしたからには、愛情は注いでやりたいというのが僕のルールでね。その中の一つに【常に良い服を着せること】というルールがあるんだ。本当なら静嬢にも、もっと良い服を着せてやりたいところなんだが、いかんせん替えがなくてね。取り替えてやりたいのはやまやまなのだが・・・ああ、どうも泥が染みになつてしまったようだ。何か水とか持っていないかね?」

「・・・あ、いいえ」

「そうかい・・・じゃあ残念だけど」

エツケハルトは酷く残念そうに言うと、恥ずかしそうに戸惑ってから、静のスカートについた泥の部分を、丁寧に舐めはじめた。

「ちょっと顔を逸らしておいてくれるかい？どうにもマナーが良いとは自分でも思えなくてね。でも洋服に染みが付くよりはいい。女性にみっともない格好をさせるのは、僕の主義に反する」

そう言つて、丁寧に一舐め一舐めしていく。

これを止めていいものかどうなのか、エンポリオには判断付かなかったが、ここでエツケハルトの起源を損ねるわけにもいかず、そのまま顔を逸らした。

ところが、エツケハルトの方から段々荒く鳴る息遣いが聞こえる。思わずエンポリオが目を向けると、途端に【ジニー】が飛んできて、壁際にエンポリオを押しつけた。

ギリギリという音がして、顔を無理やりそむけさせられる。

目の前は【ジニー】のマントがあつて分からないが、エツケハルトが静に何かしら行つていには違いないと思つた。それも、おぞましいであろう行為を。

「マナー違反だよエンポリオ君・・・いや、でも君には感謝しなければいけないかもしれない。まさかこんな女性とめぐり合えるとは思わなかつたな・・・いや、本当だよ。なんと表現すればいいのだろう。この熟れる前の果実のように水水しい匂いは。この子は男を狂わせる匂いを持っているよ・・・そうは思わないかい？」

エツケハルトの息遣いは段々荒くなつてくる。

エツケハルトは自分に課したルールに対しては、非常に従順な人間だが、更に彼が従順なのは、彼の性癖に対してだった。

「ああ・・・いいよこのかぐわしい香り。豊満な女性以上に青いやらしさを感じる。ずっと吸っていたくなるような匂いだ。そして味も良い。徐々に僕の唾液で濡れていく彼女の・・・」

「辞めるオオオオオオオオ!!!」

エンポリオは叫んで止めに入ろうとするが、やはり身体は【ジニー】に磔にされたままだ。

エツケハルトは【ジニー】に向かって指をさすと、そのリベットだらけの顔から垂れた舌が、嬉しそうに下がった。

顔に表情は見えないが、その舌の動き方だけで感情が読み取れた。

その【ジニー】は、よだれをまきちらしながらエンポリオから手を放した。

エンポリオがこれ幸いとばかりに、身を低くしてエツケハルトの元へと駆け寄ろうとする。

「駄目だよ」

【ジニー】は右フックを思い切りエンポリオの腹にブチ込んだ。無防備だったエンポリオの身体が踊る。

呼吸が出来ないエンポリオは、地面へ倒れ込んで腹を押さえる。

それでも顔だけはエツケハルトへ向けている。

【ジニー】のマントの向こうを初めて見たエンポリオは、一瞬見なければ良かったと思った。

そこでは彼の友人が丸裸にされており、エツケハルトは彼女の身体の隅々まで舐めているところだった。

人形になった友人は、焦点の合わない目をエンポリオへ向けている。にんぎょうであるのだから仕方の無いことではあるが、人形の虚ろな瞳が助けを求めているとも、あるいはこの状況を疑問なく受け入れているようにも見え、エンポリオの身体には鳥肌が立った。

血が冷たくなってというのがわかる。

どうしようもない凌辱に対し、エンポリオはどうしようもなく涙が出てきた。

「君も混ざりたいのか・・・駄目だ駄目だ。これは僕と彼女の愛の営みだ。僕が彼女の身体を愛で、彼女がそれを受け入れる。美しい愛の形だ。自分の性欲だけを満足させるような性交等想像してないだろうな」

エツケハルトはそう言うと、静のからだを眺め始める。

「綺麗だ・・・実に綺麗だ。この陶器の様な肌。これは東洋人にしかないものだ。そしてこの形の整った乳房。一つ一つがまるで芸術品のようじゃないか・・・だがやはり匂いだ。君の身体が分泌する体液の匂いは、他の何にも代えがたいほど素晴らしい」

エツケハルトはそう言うと、尊敬と底知れぬ愛を持って、人形の股を開ける。

その状況を止めることのできないエンポリオは、未だ襲い来る痛みを堪えてうずくまっている。

彼は顔を伏せて嘔び泣いていた。

友人一人しか助けられない非力さに、そして友人の屈辱を甘んじて受け入れるしか出来ない自分を呪ったことだった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

27話【鎮魂歌9】（前書き）

仕事の関係で遅くなりました。
申しわけありません。

後書きで解説します。

27話【鎮魂歌9】

PM3:50 ネアポリス裏路地 アレックス達からは2km エ
ツケハルト達の上空15メートル

ビルの屋上に、二人の男が居る。

二人は屋上の柵を乗り越え、排水パイプの上に座りながら、下を見ている。

「相変わらずグロイツスね」

「ですね、だ」

小柄な金髪の男が、長身の黒人の言葉づかいをたしなめた。冷徹さとはまた違う、厳しさが見てとれる口調だ。

服装は、上下黒のスーツ。

薄いジエラルミンケースを持っている。

年の頃は若く見える。

10代後半と言っても通じるだろう。

その実30代半ばである。

初対面の人間は、彼の容姿を見て誰も実年齢を信じない。

もう一人の男は、冷静に下の様子をつかがう男を、中腰の姿勢で見下ろしている。

背はかなり高い。

言葉づかいとは裏腹に、身なりは良い。

黒の肌とコントラストを取るかのように真っ白いシャツ。

その上から上品なベスト。
そしてベージュのパンツ。
小綺麗にしている。

しかし唯一の反抗心からか、袖をまくっている。

「相変わらず、品が無いですね。彼は」

「そうだな」

「そんな彼の情事を覗き見している俺達の方こそ品が無いですけどね」

「・・・そうかもな」

背の低い男が笑うと、黒人の方は「ワンモアタイム・ジョージ・・・」とご機嫌に口ずさんでいる。

「それより、周囲に人は？」

「あ、反応アリ。でも2km程先のブラボー2からの通信なんで、多分ビッチです」

その報告を聞いて、背の低い男は黒人を睨みあげた。

まるでナイフだ、と黒人は思う。

自分より背の低い男にすこまれて言う事聞くなど、彼の人生の中で今まではなかった。

例外は目の前の男だ。

しかしここでフォローを入れるなら、決して黒人は小男の言いなりになっていくわけではない。

黒人の方は、小男を深く尊敬していたし、恩義と感謝もあった。

あるいはトラブルが向こうさんの方で起きている可能性もある。
急ぐ事じゃない。

慎重に餌を垂らし、大物を待つ。

「あ、後先生からさっき連絡がありました」

「え、なんて？」

小男は驚いた様子でマキャベリを見る。

意外と目がくりくりしていて可愛い。

額に皺さえ寄っていないければ、あれだ、ジャスティン・ビーバーに
ちよつと似ている。

マキャベリはそんなしょーもない事を考えながら小男に報告した。

「じゃあ急がないとな。お前やれるか？」

「ダークさん一回エツケハルトの身体ごと沈められます？そしたら
後やります」

マキャベリがそう言うと、彼の肩に緑色の小さな玩具の兵隊が上っ
てきた。

足にはご丁寧に、自立する為のスタンドが着いている。

マキャベリはその5cm程の兵隊に作戦を説明する。

ラジャー、と低い声で兵隊は言うと、ロープを取り出して地上へと
降下し始める。

すると何処に潜んでいたのかと思うほど、ビルのあちこちの隙間か
ら同じように玩具の兵隊が、各々のロープで降下し始める。

雨どいには何人かが残り、背負った通信器具に向かって何かを叫ん
でいた。

恐らく作戦を伝えたのであろうが、そうだとすると、目の前に展開

されている以上の兵隊が、他にも居ると考えて良いことになる。

「なあ、これなんて名前なんだっけ？」

「え、【ライク・ア・トイ・ソルジャーズ】だって何回も説明したじゃないですか」

どうにも疑わしい。

確かにディテイルは違うのだが、どうも昔の知人のスタンドにそっくりだとダークは思った。

「っていつかダークさんお願いしますよ」

「あ、ああ。すまん」

そう言ってダークは自らのスタンドを下へ飛ばす。

これまた小さい男のようなスタンドが、エッケハルトめがけて急降下する。

「HEEEEEEEEEEEEEHAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

- - あーあ、エッケハルト気付いちやったじゃん。

本人に比べて、嫌にハイテンションなスタンドである。

マキャベリはどちらかというと、隠密に事を進めたいタイプだったので、こうした行動は慎んでほしいのだが、ダークに応援求めた責任もあるので我慢する。

ただちよっとうるさい。

下ではエツケハルトが目を剥いて驚いている。

【ジニー】は間に合わなかったようだ。

今、ダークのスタンドが、エツケハルトを直撃する。

マキャベリは小声で、ファイアーと呟く。

玩具の兵隊たちは、各々の武器でエツケハルトに照準を付けた。

P M 3 : 5 0 エンポリオ達から離れたとこの裏路地

小路にガキнгаキンと金属同士がぶつかる音がする。
圧倒的質量同士がぶつかり合う重く響く音。

「オラ立てよッ！」

うずくまったレイに向かって、女はそう挑発した。

しかし声なぞ出るものではない。

鋼鉄の塊で腹を殴られたのだ。

下手をすれば内臓破裂の可能性もある。

自分が殴られたわけでもないのに、アレックスは冷や汗が止まらな
い。

とりあえず怖い。

「ダンマリが許されるのはジュニアまでだぜ」

そう言うと、女はうずくまるレイの横腹を思い切り殴った。とっさにスタンドでガードをしたようだが、ダメージは深刻のようだ。

レイは先ほどアレックスの攻撃を食らって、今日三度目のボディブローを食らったことになる。

命を狙われかけたにも関わらず、アレックスは敵の心配をしている自分に気がついた。

女は舌打ちをすると、レイを仰向けにひっくり返す。

「今度はその面思い切り殴ってやるからな。味わえよ」

そう言うと、両手を組み合わせ、女は例の顔へとそれを振り下ろした。

死んだな、とアレックスは思う。

何処の世界に鉄塊で顔を殴られて生きている人間がいる？

しかしレイは生きていた。

かろうじて息をしている程度であったが。

何故鋼鉄で顔を殴られたにも関わらず生きているのだろうか。

ここでアレックスが女の手を見ると、鋼鉄ではなく生身の手に戻っている事に気付いた。

どうやらレイは、自らの顔が殴られる前に、鋼鉄化を解いたらしい。お陰で鉄塊に殴られると言う悲劇は避けられたものの、生身の体で殴られてもダメージは深刻な筈だ。

その証拠にレイは失神している。

「……寝ちまったよ」

女がそう呟く。

そういえば、とアレックスは思い出したように女へお礼を言った。

「いや、本当はもっと早くに助けられたんだけどさ。止めづらくて」

「俺とその、ヴィルヘルムってやつのか？」

女は近くにあった木箱に歩み寄って座る。

スタンドは既に解除しているようだった。

もうひとつ木箱を寄せて、自分が座る木箱に並べる。

座りなよ、ということらしい。

アレックスは彼女の好意に甘えて座った。

彼女はニヤニヤしてアレックスを見る。

それから背中を叩いて親指を立てる。

「ああいつの止められたら、なんか雰囲気困らない？」

――ジョースター家の下りか。

アレックスは苦笑する。

彼女は自分の家にまわりつくジョースター家のしがらみを知っているわけではない。

だが、アレックスの必死さ、あるいはそれから逃れようとする姿勢は感じたようだった。

確かに、名乗っただけにしてはえらく大仰というか、熱がこもっていたなと思う。

「なかなか様になってたよ」

「そりゃどうも」

恥ずかしさ誤魔化すため笑ってしまった。

まあとりあえずは生きている。

三半規管も戻った。

隣に座る女性の素性は知らないが、なんとなく悪い奴ではなさそうなのは感じた。

とりあえず自己紹介して、彼女の素性を聞いてみることにした。

「え、じゃあアームストロングじゃないの本名!？」

「色々あってね」

「あ、アタシはアリシア・キーズね。本名よ」

「よろしくキーズさん。それで、ビリオンってのは、仲間？」

アリシアの鼻先に皺がクシュッと寄る。

「あ、可愛い。」

「アタシらの仇かな。恩師が居ただけだね。殺されちゃって」

「……かける言葉が見つからないよ」

気にしないで、とアリシアはアレックスの手を握り、ポンポンと軽く叩く。

アリシアは眉をハの字にして笑いかける。

その笑顔をどう受け取っていいのかアレックスは分からず、質問を重ねる。

「でもコイツらって、ヤバイ組織じゃないの？」

「……うん。政治結社らしいけど、アタシはあんまり把握してな

い。アタシはとにかくビリオンって奴をぶっ潰したいだけ」

「危ないよ」

「それは貴方も同じでしょ？」

良く考えれば、恩人が殺された、世界を変える、戦う理由はそれぞれあれど、不自然な点が多い。

世界を変えたい高校生が居たとして、わざわざ危険を冒してまで戦うだろうか。

恩人を殺されて、仇討の為に高校生が命の奪い合いをする必要性が何処にある？

人間はそういう「大きな力に流され」その感情を抱きながら歳を取るものである。

一般の高校生が命の奪い合いをしてまで行動することじゃない。

普通は警察に捜査を任せて、あとは命日に花束でも持参すれば立派に普通の生活だ。

そういう普通から離れて、ある種物語じみた行動を取る彼らは、その自分達の「非日常さ」や「不自然さ」に疑いを抱くことが少ない。

ただ一つ言えるとするれば、彼らはその理由として「スタンド使いであること」を挙げる。

普通の人間が「大きな力」を勉強代と諦めて学習するのは、それらに匹敵する、あるいは盤上をひっくりかえせるほどの力を持っていないからだと理解している。

例えばスタンド使いが一個師団と敵対したとする。

彼らは多くの火器を用いて、スタンド使いを抹殺しようと考えてるだろう。

しかし例えば静の場合、【What I'm looking for】さえ発動してしまえば、師団は攻撃対象が何であったかすら思い出せない。

あるいは彼女がそれを発動させてホワイトハウスへ侵入したとしてしよう。

誰も彼女に気付けない。

そのまま大統領だけが有すると噂される核ミサイルボタンを静が推したとすれば？

勿論それだけでミサイルが発射するとは思えないが、すくなくとも脅威ではある。

考えようによつては、スタンド使いは一人で世界を混沌へと落とすことが出来る危うい存在だと言える。

それは使い方次第で普通の生活を送ることも、世界と敵対する事も出来るのだ。

それほどの恐ろしさを秘めた力を持つのであるから、自分たちは不自然にも、日常から離れて戦うことになっているのだろうといつてもアレックス達は考える。

一方で、もしエンポリオと出会ってなかったら。

- 多分テストの解答盗み見したり、バイトの荷物運びさぼったり、スタンド使ってもそんな程度だったろうな。

「それで、財団の人なんでしょ、アームストロングさん？」

何故それを、とアレックスは身構える。

しかしアリシアの目は純粹さに満ちていて、悪意のかけらも見えない。

「あ、あのね。なんかアタシ達と一緒に行動してる人が関係者らしくって。ちよっと聞いた。たまにアタシらも財団と接触してるから」
そんな話聞いたことが無い。
だが嘘をついているようにも見えない。
財団関係者で、自分たちを狙う組織を、狙う者が、自分達と同じサイドに立つ人間なのだろうか。

自分達の計画が広範囲に知れ渡っている。
アメリカのジョセフは、静がアイリンに会いにきてるとしか知らないはず。

自分たちの知らないところで何が起きているか、それが不思議なくらい気がかりなアレックスだった。

「あ、詳しい事は後で話すよ。アタシの仲間が来てから。なんか、もうすぐ来るっぼいし」

そう言ってアリシアは指をさす。

その先に、小さくうごめくものが見えた。

虫か、と考えてぞっとする。

アレックスは苦手だった。

しかし良く目を凝らすと、それが無視ではなく、ただの玩具であることに気づく。

よく小さい子が持っている玩具の兵隊だ。

それが動いている。

そういうスタンドなのだろう、と理解したアレックスは、とりあえず眼前で寝ている敵を見る。

「うーん、まあ後で互いの話をゆっくりしようよ。今はアイツら警

戒しつつ、アタシの仲間を待とう。そのうちアームストロングさんの仲間も一緒に来るでしょ」

とりあえず連絡でもしておくかと、アレックスは携帯電話を取り出し、電話をし始めた。

相手はデイブだった。

襲撃食らったと言ったら「直ぐに手配します」と護衛をくれそうになったが、なんとなくそれを断った。

それでも一応遠くから見えておいてくれるように言って、電話を切る。その足元で、レイの指がピクリと動いたことに、まだ二人は気付いていない

T o b e c o n t i n u e d . . .

27話【鎮魂歌9】（後書き）

レイ

ガンマ・レイというバンドから。スタンドの【トウ・ザ・メタル】は彼らの曲。

マキャベリ

2pacというラッパーの、もう一つの名前。と言っても、死んだ後にしかその名前を使ったCDは発売されていません。

【ライク・トイ・ソルジャーズ】

Eminemの曲から。この解説を簡単にさせていただきます。かつてアメリカで人気を博したギャング出身の超有名ラッパーが二人いました。2pacとノトーリアスBIGです。Biggieの方は5部で出てきましたね。

さて彼らですが、ギャング出身ということもあつたのでしょうか判りませんが、襲撃されて殺されています。当時はこうしたことが珍しくありませんでした。この曲のプロモーションビデオは、彼らのことを示唆するような場面に溢れています。特に冒頭で緊急手術室で手当てを受けるシーンですが、これは2pacが襲撃された直後の状態を指したものではないかと思えます。

ダーク

ダークネスではありません。そのうち本名出します。

ピリオン

気付いた人は内緒にしておいてください。

さてこんなところですよ。構想は遙か先まで出来ているので、若干急ぎ足に派成りますが、ご容赦ください。また明日掲載するよう努力します。

28話【鎮魂歌10】（前書き）

仕事ですよ仕事。

アップロードしたときにデータが消えたと同時に残業。

すみません言い訳しました。

本当にごめんなさい。

28話【鎮魂歌10】

PM4:00 ネアポリス裏路地 アレックス達からは2km

「Ahh... Scheisse! (クソがアアアア)」

エッケハルトは声に反応して上を見る。

それからこう呟けたのは奇跡に近い。

自然落下速度を超えたスピードで、エッケハルトの頭上に何かが落下してきた。

エッケハルトはエンポリオを【ジニー】でいたぶっていた所為で、ガードが間に合わない。

いや、はたから見れば間に合うはずもない。

ベランダから物が落ちて来る速度で考えてはいけない。

その落下物は、狂喜叫びながら落ちて来る。

それも壁を蹴って自らを加速させながらだ。

その速度で地面に直撃すれば、常人であれば怪我どころではない。

つまり常人ならやる訳がない。

今落ちてきたのは【スタンド】に他なかった。

ここまで思考が整理出来たエッケハルトは、自らのダメージがそこまで深刻でないことに気づく。

なるほど、速度こそあり避けられなかったものの、痛みはそれほどではない。

...多少頭は痛むが。多少。多少ね。うん。うん？

次の瞬間エッケハルトは倒れる。

言葉が出ないのはエンポリオの方だった。
絶望しきっていた彼に、救いとは言えないがチャンスが巡ってきた。
この好機を逃すな！と自分に言い聞かせるエンポリオだが、全く身体が動かない。

今なら【ジニー】も自分を攻撃の対象としていない。

「お、お前何してんだ・・・？」

思わず相手を気遣ってしまふ。

敵の頭上に物が落下してきた。

その後だ、少しふらついたように見えたエツケハルトが、静の人形を拾おうとして、そのまま地面へ勢いよくダイブした。

今はその頭も地面へメリ込んでいる。

そして目だけは見開かれたままである。

手では起きあがるうとしていているのだろうかわからないが、これを日本人が見たらなんとであろう。

まるで静の人形に向かって土下座をしているように見えるのではないだろうか。

それも額を地面にこすりつけるほどの綺麗な土下座。

勿論エンポリオには土下座と言う習慣はわからないが。

息をする間も付かせず、今度は小さい何かが降ってくる。

一瞬枯れ葉か何かかと思ったが、良く見ると驚くべきことに、それはグリーン・アーミー（玩具の兵隊）だった。

それらが一様に落下傘で、イタリアの裏路地へと降りて来る。

全ての落下傘には星条旗のマークが書いてあるのだが、それがまた非現実さを増していた。

壁際からも大勢のアーミー達がロープをつたって降りてきている。

その落下傘で降りてきた20個くらいのアーミーは、自らがしょっ

ていたパラシュート装備を脱ぎ捨てると、足を器用に動かしながらエンポリオに向かって走ってくる。すかさず構えるエンポリオだったが、一番前を走るアーミーが話しかけてきた。

「危険ですから下がって。デルタ各員、フォーメーションホワイトルーク」

そう言うと、エンポリオに背を向けながらアーミー達は統率のとれた動きで彼を囲みだした。

と言っても、全長5cm程度のものがエンポリオの前方を直角として左辺に10人、右辺に10人である。

突破は可能であったが、あえてエンポリオは彼らに従うことにした。敵意は無さそうだった。

もう一方のアーミー達は、土下座し続けるエツケハルトの身体に取りつきゴソゴソ動いている。

何をしているかエンポリオの目からは見えなかったが、彼の身体の表面が波打っているようにも見え、ビクンと鳥肌が立った。

するとアーミーの一人が後ろを向いて「大丈夫ですか？」と声をかけてきた。

おそらくスタンドなのであるが、こんな玩具に気を使われても気味が悪い。

一応頷いてみると、小さな緑の兵隊は前を向き直り、銃を掲げた。

気付けばいつの間にか「ジニー」がエツケハルトの身体にまとわりついた玩具の兵隊らを手で剥がしては握りつぶしていたが、彼らの数は尚も落下傘やロープで頭上から降りてきており、減るところが増えている。

例えるなら地面に落ちた蝶にたかる蟻のようでもある。

わらわらと群がり、相手をゆつくり追い込む。

究極の人海戦術かもしれない。

「しかしそれより何が気味悪いって、こんなに礼儀正しいアーミー見たこと無いな。」

士官クラスならいざしらず、アメリカの一般常識ではアーミー＝無作法な荒くれであつた。

いや、今話しかけてきたのが士官なのかもしれないが。

エンポリオの中ではグリーン・アーミーの様態よりも、そちらのほうが居心地悪かつた。

さて尚もエツケハルトの身体の周りにはグリーン・アーミーがまとわりつき、体一つ分大きくなつたようにも見える。

【ジニー】が引きはがすスピードも相当なものだが、全くアーミー達はひるまない。

どころかエツケハルトがちよくちよく悲鳴を上げているところをみると、どうやら彼らは攻撃を加えているようだ。

しかしたまに「嫌だ!」「放したら考える!」等のくぐもつた叫び声も聞こえる。

「何か会話でもしているのだろうか。」

エツケハルトは身もだえしながら動くが、全く意味をなしているようには見えない。

時折頭が浮くので、身体の自由は聞いているようだが、少しするとまた勢いよく地面へ頭がダイブする。

それを数回繰り返すうちに、エツケハルトの顔がどんどん血だらけになつていくのが見える。

「まあ、あれだけ地面へ頭を打ち続ければ・・・」

「これで・・・これでどうだ・・・ッ」

エツケハルトは喉の奥から絞り出したような声で、懇願するように

言った。

すると静の人形がムクムクと膨れ上がり、静に戻った。ただし裸だったが。

エンポリオは静の無事を喜び「静！」と叫ぶ。

しかし本人はまだキョトンとした顔でエツケハルトを見ている。

状況が飲み込めていないのだろうか。

まるで「どうして私は裏路地なんか？」という顔で周りを見渡している。

壁に挟まれた路地、傍には金属のパイプ、そして目の前には土下座する男。

そこまで確認すると、彼女の顔もみるみるうちに鬼の形相へと変わり、裸の鬼が立ちあがった。

彼女は一言「どけ！」と叫ぶと、土下座するエツケハルトの頭めがけて、強烈なキックを繰り出す。

喉元締め付けられたような声でエツケハルトは悲鳴を上げるが、静の攻撃はそれでも終わらない。

「死ねエアアアーツ!!!」

静は傍にある金属のパイプを両手で持ち、エツケハルトの頭に打ちつける。

手の平が鉄パイプとこすれて焼けつくような熱さが、確信を静に与えた。

強烈な一撃を食らってエツケハルトは悲鳴を上げるが、頭はその場にめり込んだまま動かない。

さて二撃目を食らわせてやるつかという裸の静を見て、エンポリオは慌てた。

自分たちの命を狙われたとしても、なんとなく相手の命を奪うこと

には抵抗がある。

勿論正当防衛という言葉を知ってはいたが、後味が悪くなりそうな事はしたくなかった。

それに、殺しをすると、もう後には戻れない気がしていた。

今なら普通の高校生に戻れる余地はある。

そういう逃げ道が欲しい。

それを静に強要する必要はないのだが、この時はとっさのことで頭が働かず、なんとなく止めに入ろうとしてしまった。

だが、振り下ろされる鉄パイプは、エンポリオが止める前に、別の誰かが止めたようだ。

静はパイプを振り下ろすことが出来ない。

どうやらアーミー達が静の身体にへばりついて、静の攻撃を辞めさせたようだ。

- - やっぱ敵か!?

尚も壁づたいに降りてきて増えるアーミー達の一部が静の攻撃を止めると、後から後からその身体にまとわりつく。

エンポリオがそれを引きはがそうと静に駆け寄ろうとした時だった。軽い様子で黒人の男が現れた。

どうやら玩具の兵隊を連ねて、それをロープづたいに降りて来たらしい。

ということとは、この兵隊スタンドの本体あるいは関係者である。

その黒人の身なりは良く、長身でガツシリしている。

- - 構っていられるはずもない。

エンポリオはその黒人目がけて【ウェザー・リポート】を飛ばす。

「ちょっと待ってるバディ」

黒人はそう言って手で制す。

エンポリオの動きが止まってしまったのは、黒人の言葉が英語だったからだ。

ここはイタリアである。

エンポリオが呆気に取られていると、黒人は優雅な歩み方で静に寄り、そつと手に持っていたジャケットをかけた。

グリーンマン達は相変わらぬ静に群がったままだが、よくよく見ると、恥部を隠すように群がっている。

「これでちょっと辛抱してな。服は・・・あそこか」

黒人はそう言うと、エツケハルトの傍に落ちている静の服を拾いあげた。

人形化を解いた時、同時に普通の服に戻ったようだ。

「これ、今壁作るから着替えな？」

静は今になって自分が裸であることに気付き、大人しく従った。凄く恥ずかしい思いをした気分だった。

壁際にすぐグリーンアーミー達がたかって壁を作る。

すぐごと静は入って行った。

それを見届けて、黒人はエツケハルトに話しかける。

「オイそこのクソ野郎。地球にキスする気分はどうだい？」

「・・・悪くない・・・敬愛する地球だからな」

「そうかいそりゃ良かった。出来たらそのまま一回転して自分のケツにキスしてやんな」

エツケハルトは恨めしそうに黒人へ視線を送る。

今も頭は地面に着いたままで、【ジニー】はアーミー達を引きはがし続けている。

黒人は満足そうに頷くと、エンポリオへと向き直る。

さてバディ、と言いかけたところだった。

突如後ろに【ジニー】が浮かびあがり、思い切り黒人を殴りつけた。痛そうなき音が響き、黒人は驚いた顔をしながらエンポリオの方に倒れかかる。

エンポリオはダッシュでそれをスルーし、自らのスタンドを相手のスタンドへとぶつけた。

それから【ジニー】は【W・リポート】の左ほほを殴りつけ、【W・リポート】もこれに応酬する。

右左右左とパンチを繰り返すが、【ジニー】も同じだけ殴り返してくる。

ラッシュをするには分が悪い。

相手は上半身以下無いのであるから打点はどうしてもこちらが多くなる。

ここいらで、とエンポリオは左拳のフェイントを入れつつ、太刀筋の様な右フックを【ジニー】の面に入れた。

それでも相手はリベット打ちつけているので、硬度がある。

耐えきつた【ジニー】は両手でラッシュを繰り返してくる。

防ぎきれずに何発か食らい、【W・リポート】の身体にはヒビが、エンポリオの身体には裂傷が浮かんでいた。

更なる追い打ちが予想され、既に防戦一方なエンポリオは構えて前を向く。

【ジニー】が油断なく振りかぶる。

「右だッ！」

隙を見つけたエンポリオが、カウンター覚悟で右アッパーを入れた。確かな手ごたえを感じたエンポリオは無意識のうちにガッツポーズをしていた。

しかし【ジニー】が消える様子は無く、逆にエンポリオの右腕が酷く痛む。

【ウエザー】の右拳を、握力だけで【ジニー】は文字通り潰していた。

心が折れそうになるエンポリオは、ついに構えを解いて右腕を庇ってしまった。

すると当然のように【ジニー】はエンポリオ本体を殴り飛ばし、意識の底へと彼を叩きこんだ。

「ああ・・・実に良い兵隊だが・・・指揮官無き兵隊など烏合の衆にすぎない」

それからせつせと【ジニー】は兵隊たちを刈り取り、ようやく最期の一兵まで潰してエツケハルトは起きあがった。

足元を見れば、エンポリオが血を流して倒れており、乱入してきた黒人も倒した。

どついう訳か、さっきから重かった頭は、今重力を振り切ったかのように軽い。

「こんな弱さで世界を変えるなど・・・おこがましい。かの粛清のごとく、弱者は世界の断片から切り捨てられるべきです。優秀な遺伝子を残すことこそ・・・人類の魂を至上の域に連れていく唯一の方法だと言つのに」

と、長い説法を聞いているわけも無い被害者二人に語るエツケハルトだった。

つまり彼らの組織の前身にあたる、かのナチスはそうして世界の浄化を望んでいたかのように彼は話す。

一方でウイグル族、チベット人その他少数民族を殺し続ける漢民族とは一線を画すと言つ意識は彼らにある。

それはあくまで国を共産国家という現代の悪魔的国家形態を維持する為の、あるいは中央政權が利權を取る為の手で有り、究極的にはその目的は自己に帰属する。

一方でエツケハルトらは、人類と言う種を前進させるため、人類の中でも突出して気高いアーリア人に人類を絞って、出来そこないの種を断絶させる事こそ、真に人類の為であると考えていた。

そんな決して揺るがない彼らが嫌うのは、ユダヤ人だけでなく黒人もまたそうだった。

尚もブツブツと演説するエツケハルトはエンポリオをまたいで黒人の前に立った。

どうやら先ほどから小賢しい兵隊どもを出していたのは黒人のようだったが、それにしても不審な点がある。

- 何故スタンドを全て潰されてもコイツは平気だったんだ？

そして気がかりなのはもう一点。

- 磁石に吸い寄せられるかの如く頭が地面に引かれたのは黒人の能力なのか？

おそらく2人ないしそれ以上の人数が居たと考えて良かった。

しかしエツケハルトを襲う能力がさつきから消えた。

あれから時間が経っても全く頭が重いわけでもなく、兵隊が増えることも無い。

であれば、何らかの要因で、仲間はスタンド能力が発動できなくなっている。

それはなにか条件を満たしていないが故なのか、それか本体が何処か別の場所へ向かったかどちらかだろうと踏んだ。

そこでエツケハルトは【ジニー】に警戒させながら、黒人の身体を起こした。

「汚らしい肌の色だ。まるでチョコレートを身体に塗りたくったような色をしてるじゃないですか。こういう劣性遺伝子が世の中には

存在するからいつまでたつても人類は暴力を捨てることが出来ないんですよ。こんなニグロ一匹人形にするにあたはず。次に生れて来る時はアーリア人に生まれて来る事を祈るよ」

そう言うのとエツケハルトは懐からナイフを取り出して、黒人の首筋にナイフを当てた。

切っ先がチヨコレート色した肌に吸いこまれる。

「アンタ、私を忘れちゃったの？」

突如轟音が右耳の鼓膜を震わせたかと思うと、ブツキヤアアアアアと音がするほどの衝撃を受け、エツケハルトの鼻が爆ぜた。

「これで、匂いは分かんないでしょ？」

「まさか・・・」

・・・失念していた。

完全にエツケハルトの頭の中にはエンポリオと黒人しか居なかった。思い返せ静も居たのだ。

どうしてそれを忘れたんだろうか。

・・・忘れるほどに迄黒人に執着していた？

そう思うが矢先、エツケハルトの身体を激痛が襲う。

見ればガードした右腕の肉がえぐれていた。

・・・いや、怪我などビリオンが居る限りどうでもいい。

自分の身体を最大限捨てる覚悟で来ているからには、極限まで戦うことが出来る。

それをエツケハルトは自分のアドバンテージだと考えていた。

「逃げないの？ 凄いわ！」

そう右から声が聞こえたので【ジニー】でそちらを薙ぎ払う。
だが空振りに終わる。

- - 一度つかめばいい。肉体の極限まで耐えても、その一瞬さえあれば...

カサリ、という音が聞こえて左を薙ぐ。

同時に両足の腱が弾けてエツケハルトは地面に倒れ込んだ。

何が起こったかわからない、しかし確かに今左に音がしたように感じたのだ。

「じゃあここから我慢比べね。私が拷問に飽きるか、あるいは貴方が私たちを襲った理由を話す迄、我慢比べってとこね！」

さも嬉しそうな声がエツケハルトの耳に聞こえる。

- - 望むところだ。

と考えたのは「最期の手」がエツケハルトにあったからに他ならない。

というのも、半径2m程であれば、【ジニー】のマントの射程範囲にあるのだ。

静は接近攻撃しかしてこない。

それにもし遠距離からの攻撃でも構わない。

通路の前か後ろしかないのだから、最悪どちらかに【ジニー】の特殊労力を発動させながら飛ばせばいい。

追い込まれたようで追い込んでいる。

こういうズルさがエツケハルトの本性だった。

- - とか考えているんでしょうね。

と静はビルの上からエツケハルトを見下ろす。

横にはダークと名乗るスーツの男が一人。

「それで、ピンクさん？」

「ファーストネームで呼ぶのはやめてくれ。ダークで頼むよ静嬢」

絶対お前本名じゃねえだろと静は心のうちで思いながらビルから再び見下ろす。

「ごめんなさいダークさん。で、あの男だけど・・・」

「Do it yourself... If you want」

まさかの丸投げをいただいた静は嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。ロクな人間にならないぞとダークはため息ついて静の顔を見る。

イタリアの太陽の如き眩しい笑顔でエツケハルトを見つめていた。

P M 4 : 0 3 エンポリオ達から離れたとこの裏路地

いきなりアリシアが吹っ飛んだようにアレックスの目には見えた。

- - 油断した・・・ッ

まだまだ子供故の浅はかさがあった。

ちよつとアリシアと話せてのぼせたところもあったのかもしれない。兎に角話していた時だ、急に【トウ・ザ・メタル】がアリシアを殴り飛ばした。

敵に武器を与えないためなのか、もう鋼鉄化はさせないようだ。

それからレイは腹を押さえながら立ちあがると、アレックスにも右パンチを食らわせた。

なんとか【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】で防いだアレックスだったが、レイの方が攻撃態勢に入ったのは早い。すぐに劣勢に立たされた。

また先ほどまでおしゃべりだったレイは今や無言になっている。

- - よほど怒っているなコイツ。

アレックスは殴られながらそう思った。

「この野郎ッ！」

アリシアが自らのスタンドで攻撃を仕掛けたところでようやくアレックスへの攻撃の手が止んだ。

少々雑なレイの攻撃は、それほど彼が頭に来ていた事もあって、純粹な暴力に満ちていた。

「二対一のお前に何が出来るんだよッ！」

アリシアのラッシュに乗せて、アレックスは自らも突っ込む。

- - 味わえよ！二人分のラッシュ！

右、左、右、左。

これを息もつかさず秒10発相手の身体に叩きこむ。

アレックスがいつも不思議に思うのは、精神力の具現化とも言える【スタンド】を殴れば、生々しいほどの肉感がある。

つまりはそれを感じながら、【トウ・ザ・メタル】にパンチをブチ込んでいく。

しかしこれでもか、これでもかと繰り返す二人だが、肉が弾けるような感触も得られる一方で、振り子を殴っているような感触も感じる。

アリシアはこれを、拳と拳がぶつかり合う独特の感触だと感じていた。

事実、相手のラッシュの所為で、自分自身の拳からは血が噴き出し

ている。

「どうしたアツ！二対一なんたるツ！？」

徐々に増す自らの拳の痛みにも、アレックスはようやく気付いた事がある。

レイは自らの身体にも、その能力の効果を生じさせることが出来るのだ。

- - 鉄パンチは痛えよ・・・

横目でちらりとアリシアを見るが、彼女の方は身体の傷をも顧みず、そのラッシュは血飛沫と相まって激しさを増している。

その軍神の如き闘いぶりに、静とはまた違った怖さを感じるアレックスだった。

- - ここで降りたら殺されるのは俺だ。

別の意味でもそれは真実だった。

レイが自分のスタンドの腕を鋼鉄化してラッシュを繰り返せば、数こそ劣るものの威力は二人合わせても届かない。

この凶悪なパンチを食らわずにすんでいるのは、その数で相手のパンチをパンチで弾いているからだだった。

だったのだがしかし、【スタンド】は本人の精神状態に哭一刻と影響される。

負けを無意識にでも感じた瞬間から【スタンド】は弱体化していく。

「テメーはすつ込んでろ、負け犬」

ラッシュの中、巧妙に隠されたフェイントに騙されたアレックスは、腕を【トウ・ザ・メタル】に掴まれた。

掴まれた？と感じた時には身体が浮いて右に吹っ飛んでいた。

【トウ・ザ・メタル】はアレックス本体の左手を掴み、そのままアリシアの居る左方向にアレックスの身体を使って薙ぎ払った。

当然殴つてはいけないとアリシアは一瞬ラツシュを躊躇し、アレックスの身体と共に右の壁へ叩きつけられた。

「ごめん」というとっさのアレックスの一言に答えず、アリシアは再びレイに踊りかかった。

アレックスは自分が無視された事に敏感に気付いた。

どうやら自分は役立たずらしいと一瞬呆然とする。

加えて自分の身体を見回すと、左半身が動かない理由が分かった。左目から左の足先まで鉄になっている。

自分はよほど役立たずらしいと改めて自覚したアレックスであった。目の前ではアリシアが再び血飛沫上げながら戦っている。

もはや拳は作れず、掌で相手の攻撃を受けている。

それでいて相手の隙あらば本体を狙ってくるのだから、アリシアの闘争心はよほどである。

・・・カッコ悪すぎだろ俺。

完全に諦めていたところだった。

「いつまで寝てんのよ！」

というアリシアの声に起こされた。

プライドが高い分失意も深かったが、プライドが高い分頼りにされると俄然やる気に満ち溢れて来る。

そういう少年だった。

・・・逆に・・・逆に頭冷えたわ！逆に良かったわ！むしろありがとうだわ！

気持ち悪いほどのお調子者も手伝って、やる気万全であった。

しかし頭が冷えたのは事実である。

身体は動かないが。

これは結構致命的だった。

くなくなった。

アリシアは片膝ついて涙を目に貯めている。

必死に負け惜しみを言おうとするが、肺は上手く酸素を入れてくれない。

一度折れた心は立て直してくれはしない。

そのアリシアを気遣うように、黒いレースを基調としたドレスに身を包む彼女のスタンドが、その肩にそっと手を置いた。

アリシアはその【スタンド】を見る。

顔には鼻の下からレースがかかっており、口元は容易として見えな

い。

それでもアリシアを励ますかのように微笑をたたえている。

- - どんな時も私らしく。

それはかつて恩師に教わった言葉だった。
英語はヘタクソだったが、情熱だけは人一倍で、いつも生徒の事を気にかけていた。

そんな恩師を想うと・・・

- - なおさらぶっ殺してやる・・・ッ！

そんなアリシアの目つきが気に食わないのか、レイは胸倉を掴みあげた。

「大人しくしてりゃ死ななかつたものを」

そう言ったと同時にアリシアのつま先が鋼鉄化する。

それは足首、太ももと上ってきて、ジワジワとアリシアが動かせる範囲を狭めてきた。

「徐々に自分が鋼鉄化する気分はどうだい？」

そう楽しそうにレイは聞く。

アリシアは自分で鋼鉄化する恐怖を押さえることが出来なかった。

居た。

その締まりのない口を開けて、極めて人を小馬鹿にしたように、アレックスはこう言っただけだ。

「ヘッヘッヘ・・・またまたやらせていただきましたアン！」

その言葉を聞いてレイはどう思っているのか。

彼はイタリアの砂をジャリジャリと噛んでいた。
ざまあない、という具合である。

T o b e c o n t i n u e d . . .

28話【鎮魂歌10】（後書き）

ああまだ終わらない。

もうそろそろ終えたいのにプロットだとこの後何人敵が出て来るの
やら・・・

鎮魂歌の後にもあるのに・・・

第29話【鎮魂歌11】（前書き）

本当に遅れてすみません。

また書き始めますが、可能な限り書き続けます。
よろしく願います。

第29話【鎮魂歌11】

PM4:05 ネアポリス裏路地 アレックス達からは2km

「私の味、どうだった？」

「高くつくわよ？私、安くないの」

静の音がするたびに、エツケハルトの身体は血しぶきを上げながらくるくるとダンスでも踊るかのように舞う。

「それってワルツ？ Rond？ 私違いがわからないの！でも素敵よ！」

今度はアゴの下から衝撃が来る。

口の中をベロで舐めまわすと、5本ほど歯が折れているようだ。どつりで痛む。

「ほらこつちよ！」と同時に「ズツギヤアアアン！！」という音がする。

焦点の合わない目で患部を見ると、足に派手にガラス瓶が刺さっている。

ガラス瓶で殴られた、というより突かれたようだ。その衝撃で瓶は割れて突き刺さる。

「イタリアンマフィアですらここまでしないでらうつ。ビルの上からダークは思った。」

「いや新聞を見た限り、彼女はイタリアンマフィアなのだが。いやいやここまで清々しく相手をいたぶれるなんて、どう考えても

異常だ。

しかしその異常も相手から比べれば安い物か？、とダークは思う。今ダークの目の前には「目的の為なら手段を選ばない異常な人間」と「暴力によって快楽を求める異常な人間」が居るが、どちらが異常なのだろうかどつでもいいことを考えている。

とりあえず今は静の言う通りにあれやこれやと自分のスタンドで彼女の声をエツケハルトの側へ飛ばしている。

肝心の静はというと、ダークのスタンドに捕まりながら、宙を浮く形で居る。

ダークのスタンドごと透明になっているのでその位置まで正確には分からないが、だいたいエツケハルトの頭上5メートル付近だ。

【ジニー】のマントの射程外ということである。

そこから声だけあさつての方向に飛ばし、鉄パイプやら空き瓶やら手に取った静がその都度降りて攻撃すると言う形だ。

先ほど「私がやるのか？」と気遣いは見せた。

年頃の娘が凌辱された？相手にもはや戦う意思を見せることができるとも思えず、そう言った。

答えは勿論「私がやる」の一言だった。

笑みは無かったが、その目にはドス黒い意思が宿っているのをダークは見逃さなかった。

「ねえ！参った!？」

「・・・ハア・・・ハア・・・ネヴァー・・・」

「ギブアップね!」

静の嬉しそうな声がエツケハルトの後ろで聞こえる。

・・・なら前だ。

エツケハルトはやらねながらも法則を見つけていた。
声が出た方とは反対側、大体誤差90度程度のところから攻撃が来る。

そう思つてエツケハルトは、無防備に見せかけて前へ【ジニー】を走らせた。

「これでどうだッ！！【ジニーイイイイッ】！！！！」

渾身の一撃で、賭けに出た。

直後に、頭の上から硬い物が落ちて来る。

ガランゴロンとエツケハルトの頭上からゴミ箱が転がった。

- - チクシヨー。

そう思つたか思わなかつたかエツケハルトの意識は薄れる。
右手を下にしてうつ伏せに倒れた。

「クソ・・・」

すると耳元で「残念！」という声がする。

静の挑発だ。

相手にする元気も無い。

ここは相手の手に落ちてから再起を図ればいい。

そんな事を考えながら、エツケハルトは意識を失った。

「これくらいやれば二度と齒向かうことも無いだろう」

ダークは呟いた。

先ほどから一方的すぎてつまらないと静は感じていたのだろう。攻撃パターンが単調になってきている。

「そろそろ引き上げるよう伝えてくれ」

静にそつとスタンドから耳打ちする。

意外にも静は大人しくそれに従い、今は八虫類のような形をした彼の足に捕まりながら屋上へ戻ってくる。

さんざん遣りたい放題やったお陰で、静はすっかりした顔で帰ってきた。

極めて明るい顔とコントラストを取るように、手は血で染まっている。

「もう引き上げる時間かしら？」

「ああ、とりあえずもう一方と落ち合おうでしょう」

「もう一方？」

「君のツレが居ただろう？」

ダークはそう言うと、スタンドを再び下へ降ろしてエンポリオを引き上げた。

その最中「話せば長いんだが」と前置きし、ダークは自分たちの目を静に話し始めた。

った。

とにかく万力で体中を粉々にされたような痛みを我慢し、体勢を立て直そうと目をもう一度開けると、グヴォツという鳴咽のような声と、身体を横にくの字に曲げるレイが映った。

「早くこの鋼鉄化を。なんとかしないと、もう一度鋼鉄キックがア
ンタの脇腹に刺さるよ」

見知らぬ少女がそう言うと、レイは悔しげに自分の能力を解いた。

・ ・ 何故あの少女に能力を？敵はアレクサンドロ一人の筈では・ ・ ・
そう思ってから、ヴィルヘルムは彼女注視すると、その金髪具合か
ら静ではないと分かった。

その彼女が自分の鋼鉄化が解かれるのを確認すると、その後ろから
男の声で「俺も全快した」と英語が聞こえた。

それを確かめると、彼女のスタンドと思いき黒衣の女性が急に女の
横に立ち、素早くレイの腹を手のひらで突いた。

大した苦しみもなさそうで、レイはすぐに気を失ったように見えた。

一連の流れを見ていたヴィルヘルムだったが、未だ襲う体中の痛み
の前では、止めようとすることすら難しく、あれよあれよという間
にコトは進んでしまった。

それでもなんとか振り絞り、割れそうに痛む頭を抱えて考えるのは、
とにかく命乞いをしようの一点である。

「オイッ！ソイツ動いてるぞ！！違っ今倒した方じゃあないッ！今
俺が投げて寄越した方だッ！！！」

投げて寄越したとは不自然な言い方だとは思ったが、自分の事を言
っているのだと言う事はヴィルヘルムにはわかった。

しかし今マトモに戦える状態でないことはわかったし、そもそも足

止め程度が今回の目的であるのに、命まで落としては意味が無い。

「ザ・・・ザザッ・・・って・・・れ・・・」

その時ノイズがかった声がアレックスらに聞こえた。

敏感に反応するが、横倒るヴィルヘルムの口元に、半透明であちこちがポロポロに欠けている拡声スピーカーが浮かび上がるのを見てとった二人は、その声が彼の物だと分かる。

しかし絞り出したような声であることに、戸惑いを見せる。

「頼・・・ザザッ・・・見逃してくれ・・・」

空気を震わせず、直接鼓膜に響くような声だった。

・・・いや違う、頭に響いているのか？

アレックスは先ほど自分が立てない理由が分かった。

この頭か鼓膜に響く声が、直接自分を攻撃していたのだと。

「何、この声・・・」

「キースさん気を付けて・・・多分そのスピーカーっぽいスタンドで話しかけてるんだその人は」

それがどのような効用となってアレックスの身体の三半規管を狂わせていたのかは分からなかったが、どうやら自分の声帯とは別の方法から意思疎通を図っているらしいことはわかった。

つまり、自分の考えている事を相手に伝える事の出来るスタンドなのだろうか。

ただ、そうであるなら先ほど必要以上に叫ぶ必要がヴィルヘルムに

はあったのだろうか。
いや、通りの誰も気づいて居ない辺り、叫んでいるように聞こえたのは、彼の考えている事をスピーカーが拡声させただけだったのか、真相はわからない。

「気をつけた方がいい・・・さっきはその人の声を聞いたと思ったら、三半規管がおかしくなったんだ」

「でも・・・」

それが出来るならとうにやっている筈である。
わざわざこうして対話する必要は無いと言えよう。

「ああ・・・頼みがあるんだ・・・ザ・・・ザザ・・・」

「レディーに拳を振るっていたような奴の仲間の頼みなんか聞くと思うか？なあキースさん危険だ。退散してこいつらをウチの連中にも引き渡した方が良いつて」

「頼む・・・見逃してほしい・・・」

・・・どうする？

危害を加えるつもりならヴィルヘルムはもう自分たちに加えている筈だ。

ヴィルヘルムの申し出をどう取るか、アレックスには判断つきかねていた。

「ビリオンは何処？」

アレックスの思案中にアリシアはヴィルヘルムを見据えてそう聞い

た。

それに答えれば、見逃してやるとも言った。アレックスは少し驚いてアリシアを見る。

「コイツらはね。ナチスの流れを汲む組織なの。そんなにアタシも知らないけど、多分ネオナチより古いわ。それが最近「スタンド使い」だけを集めて動き出したの。それが理由かしら、以前まで起こしていた犯罪の数も格段に増えたわ。あたし達の恩師も巻き込まれて、その仇討するためにアタシ達は【ビリオン】って奴を探してるの」

それなら合点が行くとアレックスは思った。

【ビリオン】 【ビリオン】と、つまりそれは人の名前だった訳だ。

「ビリオ・・・は・・・ザザ・・・イタリアに居ない・・・本当だ・・・」

「じゃあ連絡先を言いなさいよ」

「知らない・・・」

「じゃあいつまでもアンタ達を見逃すわけにはいかないわ」

「見逃す必要はないよ、キースさん」

え？と後ろを振り返ってアリシアはアレックスを見る。手には携帯電話を握っていた。

「もう連絡しちまったからさ。俺達の組織に。詳しい話はコイツらを収容して、それから聞くとしようよ」

「財団が来るの？」

「いや、俺【ギャング】なんだよね。一応こっちもボス狙われたりで都合もあるしさ。みんなで合流して、一度話合わない？多分俺達、共通の敵が出来たと思うんだよね」

こんなにヘラヘラした若い人間が【ギャング】とは少し驚いたが、アリシアは「それでいいわ」と答えた。

この後アリシアらはダーク達と合流し、アレックスもようやく静に会えることになる。

とんだトラブルをこうむった午後だったが、問題はこれにおさまらない。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第29話【鎮魂歌11】（後書き）

いかがでしたでしょうか。

この先舞台も変わります。

わかりづらい描写が出て来るかもしれませんが、努力します。

30話【鎮魂歌12】(前書き)

そろそろまとめも書こうかなとも思っています。

30話【鎮魂歌12】

PM21:30 ネアポリス界隈の飲み屋 襲撃の翌日

静に呼び出されたミスタであったが、まさか未成年を飲み屋に連れて来るとは思わなかった。

昨日の襲撃から回復した静達は、今日の午前中にはミスタ達に詳細を報告し、ダーク達の紹介も終わった。

ミスタが本人たちと会話した限り、彼らの印象はこんな具合であった。

先ずダークであるが、どうやら相手の組織に友人を殺されたという。それがアリシアやマキャベリ（酷く古風な名前だがミスタは気にいなかった）の恩師であるということになる。

本人自身はアメリカで働いていたが、この友人の死の真相を探る為に休暇を使って仇の組織を追っているらしい。

また、昔ジョースター家と縁があり、それが今でも続いているという事だった。

ただか一介の会社員が友人の仇討の為に2人の子供を連れて、というのはいささか不審な点もあったが、静に確認を取ってもらったところ、確かにジョースター家やスピードワゴン財団との関係は有ると証明された。

詳しい事は静も知らされ無かったが、一応強烈なスタンド使いという事に加え、また襲ってくるかもしれないので、今はイタリアのホテルに宿泊させている。

勿論【パッショーネ】の息のかかったところに。

次にマキャベリという長身の黒人青年であるが、今はダークの家に

居候をしながら高校に通っているらしい。

ダークの妻はアジア人であるらしく、肌の色で判断するなら純粹に血縁者ではないようだ。

これは勝手にマキャベリが話したことだが、どうやら元々スラム街で拾われたらしい。

そういう人間はイタリアでも珍しくない。

最後にアリシアの印象だ。

気の強そうな女子高生であるが、彼女にわざわざ恩師を殺された事で仇討に走る必要があるとは思えない。

まだ彼女は何かを隠しているようだが、彼女の腕に巻かれたリストバンドを見てミスタは察するものがあつた。

そういう人間をミスタは見たことがあるし、そういう人間が立ち直つた灯台を失つたならば、命をかけてそれを壊そうと言つ氣になるのもうなずける。

各々深くは触れなかつたが、【パツシヨーネ】との関係は共同戦線ということ落ちていた。

【パツシヨーネ】としては、ジオルノを襲つた相手を野放しにはできない。

それを静とは別経路で財団を使って捜し出しているダークとは、共同戦線という形が最も望ましいように見えた。

しかしダークの本心としては、こうまでネアポリスのギャングと関わつたならば、今更何も無かつたように3人で行動するわけにもいかない。

良いように使われている感が否めないダークであつたが、情報交換という名目でつるんでやるかと思つている。

本当はギャングに睨まれて敵を増やしたくないというのもあつた。特に2人の子供を連れていては尚更。

・・・って事考えてんだらうなあ。
とミスタはダークの本心を想像する。
こちらとしては何でもいから相手の情報が欲しいのだが、ダーク達を利用していても思わせなくなかった。
・・・とりあえず衣食住位は世話をしてやるう。

「おい聞いてんのかワキガ！」

ミスタはいきなり背中をドツかれた。

カウンターに座る横には静がジョッキを持ちながらミスタに絡んでいる。

「聞いてるよったく・・・ワキガって言うなよ」

「だって臭いじゃん」

・・・敬語ですらねえよ・・・

そもそも静に今後の事で話したい事があると誘われたミスタだったが、まさか飲み屋に来るとは思わなかった。

おまけに静は未成年である。

それが着くなり酒を頼みくならない事でクダを巻き、事あることに「おいワキガ！」じゃあ面目丸つぶれだ。

「だからさ」

「何だよ」

「人を殺した事はあるかって聞いてんだよワキガ！」

思わず口に運んでいたジョッキの中で酒を吹きだした。

それを見て静はケラケラ笑っている。

「お前！声がでけえよ！」

「オメーが聞いてねえからだろワキガ！」

目が据わっている。

答えなければならぬだろうが、こんな喧騒の大きな飲み屋で話す内容じゃあない。

「なんでそんな事聞くんだよ静」

「アタシはねえ。人を殺すつもりだったのよ」

「ああ、エツケハルトの野郎の事か？」

「そうよ。それが良いか悪いか聞いてんの！」

「・・・おいおいどうしてコイツは俺に道德なんか聞くんだよ・・・
心底頭の痛くなる話であった。」

一応ダークの方からも静にあった一件は聞いた。
思春期の女の子ならば、かなりのシヨックであったことだろう。
またキレたら見境の無い彼女の事だ。
殺してやりたいと願う気持ちもわからなくもない。

「あんな・・・辞めとけ」

「なんでよー！」

ため息をついて、ミスタは喋り出す。
かつて自分が行ってきた所業を振り返りながら、彼にしては真面目に話すつもりだった。

「俺はな、ジヨルノと一緒に冒険していた頃は殺されるかもしれないって状況にあつたわけ。確かに相手は何人も殺しをしているような危険な連中だったけど、今でもたまに【命まで奪う事は無かつたんじゃないだろうか】と考える事はある。流石に悪夢や責任に駆り立てられる事は無かつたが、今でもとどめをさした時を思い出すと、正当防衛でも後味悪いよ。とにかく悪い。自分にどれだけ正義があつてもな。だからしないで済むなら殺しなんてしない方がいい。金で済むなら、そっちの方が何倍もいい」

そう一息に語り終えると、静はポーっとした表情ながら、何かを感じたようだった。

軽々しく殺すなんて言うもんじゃない、とミスタは考える。

それはダーク達にも当てはまるのだが、彼らの事情には介入できない。

ただ、殺すかどうかという判断の間で揺れている自分の部下には、自分の経験を踏まえて誠実に対応してやろうと思った。

ミスタは優しい男なのだ。

「そっか」

「おう。そんだけか？」

「うん。自分でもダメって思ってたけどさ、いつか勢いでやつちやいそつで」

「まあ襲われたらそんなの考えなくていい。死んだらなんにもなら

ねえ。ただ後味悪いから、必要が無いなら殺すな」

「わかった。相談して良かった」

「相談って程のこつちゃねえよ。何せお前は」

「部下だから？」

静はカウンターに座ってジョッキを持ちながら、何の気なしに壁を向いて聞いてくる。

ミスタはその横顔を見て何と言っていていいか迷ったが、「そうだ」と答えた。

本当は「仲間だ」とでも答えたいところだったが、彼女を【パツシヨ―ネ】に深く巻き込む事にはまだ抵抗があった。

「大切な部下だよ。出来るならまっとうな道を歩いてほしい」

「ありがとうミスタ・・・」

少しミスタはてれ臭くなったので、場を茶化すつもりで本当の事でも言ってみようかと思う。

良い話にするのは苦手だし、何より本当の事を彼女に伝えて、対等の関係でありたいとミスタは思った。

「本当はな、俺はお前のファンなんだよ。またたく間に俺達ギャングをぶっ潰して、ボスの前でイカサマしてからのギャング入りだ。こんなイカした奴が居るか？俺はエンポリオとアレクサンドロが羨ましいよ」

「何それ！好きになっちゃった!？」

「20年前ならそうかもな」

笑い合う年の離れた二人の間には、いつしか仲間以上の親近感が沸いていた。

恋人や友人ではなく、家族のような暖かさが満ちていたのだ。

どうにも彼女の前だと甘くなってしまうというか、どうにも本調子でないのは、彼女の魅力がそうさせるからだろうとミスタは思った。

その夜、未成年に酒を飲ませたことと、未成年の女の子と二人つきりで居た事に対してトリツシュは激昂し、あわや大惨事というところであったが、静はこれを知らない。

トリツシュはなかなか嫉妬深い女性である。

AM 6:47 静の部屋 備考：飲んだ翌日

ガオオオオオオオオオオオオオオオとけたたましい音が部屋に響く。
なんの音であろうか、静のいびきである。
地鳴りのようでもある。

しかしそれと同じ位の大きさを扉を叩く音がする。
が、静は気付かない。

「もういいから踏み込もう！」

「死ぬぞお前!？」

若い男の声がドアの向こうでする。

恐らく女子の部屋に踏み込もうかどうしようか迷っているのだろう。確かに思春期の女子の部屋に入るなら、相応の覚悟が必要である。なかなかドキドキである。

胸がこうなんていうか。

それが静の様な女性ともあれば。

「じゃあ僕が死ぬから!早く開けて!」

「・・・俺、逃げるからな!」

決意を固めた事を、声の温度から感じ取れた。それからガチャリという音と共に、扉が開く。

しかし確固たる決意とは裏腹に、その様子は恐る恐るであった。

「なんだこれ・・・時計でも壊れてやがんのか?」

「酷い圧力がかかるような音だな・・・早く静を起こして!」

「お前がやれよ!俺ア死にたくねえよ!」

「・・・チツ」

「エンポリオおま・・・」

アレックスがエンポリオに掴みかかるうとした時、既にエンポリオは静のベッドの前迄歩み始めていた。

・僕は悪くない。僕は悪くない。

そう神頼みに近い気持ちで念じながらベッドに近づく。

部屋の中は意外と汚い。

至るところにお菓子の空いたゴミ、脱ぎっぱなしの服やランジェリーが散乱している。

その中をピョンピョンとび跳ねながらエンポリオはようやく静の元へ辿りつく。

・これ、歯ぎしりか・・・

驚くべきことに先ほどまで鳴っていた轟音の正体が、居間ベッドの布団の中に居るらしい。

ゴゴゴという音は既に、痛覚に直接訴えて来るようなギリギリという音に代わっている。

聞いているだけで痛くなってくる。

「これどうすんの？」

「そのまま揺らしてみたらどうだ？」

「・・・おい静あ」

・・・・うっつ・・・柔らかい・・・

目線を左に外しながら、右手で布団越しに静の身体を掴む。

指先が思ったよりも布団越しの身体に沈んだ。

温かい感触が、エンポリオの脳に駆け上る。

「変な事考えんなよエンポリオ」

「じゃあお前がやれよアレックス！」

・ ・ 危ないところだった・・・
何が危ないのかも分かっていないエンポリオだったが、とりあえず
引き続き起こすことに専念する。

「静！起きろよ！」

身体を激しくゆすぶるが、起きる気配は見えない。
というか激しく掴んだことよって、一層手の感触が生々しくなる。
エンポリオは混乱した。

「時間がない！もう布団はいじまえ！」

後ろで無責任なアレックスの音がする。

その声に、エンポリオは冷水をかけられた思いだった。

つまり自分の役目を思い出したのだ。

最早手段は選ばんと、エンポリオは意を決して布団の裾を掴む。

「起きろ静！」

大きな動作で布団をはぎとりながら、半ば罵声に近い声で静に向か
って叫ぶ。

「あ、紫」

一瞬我を忘れてしまうエンポリオだった。
はいだ布団の下には、紫色の下着を付けて寝ている静の姿がある。
思ったよりも筋肉の付いた健康的な身体であったが、かえってそれ
が色気を出している。

「・・・うーん」

布団がはがれたことによつて光が眼球を刺激し、まさに静は起きようとしていた。

エンポリオは恥ずかしさを隠すためもう一度顔から下だけに布団をかぶせ、静を呼ぶ。

ようやく空いた眼をこすりながら、上半身を起こす静に、慌ててエンポリオが布団をかけて叫ぶ。

「起きろ静！」

「起きてるわよ変態！！！」

エンポリオが耳元で叫ぶと同時に、鋭い平手が彼の頬を薙いだ。視界がブレて脳がシエイクされる。

「死ねゴミ！」

下着姿で静はエンポリオを殴り倒す。

引きずり倒して蹴り倒したりと一方的に暴れる静に、エンポリオは困惑しながらそれを受け入れた。

下着姿の女性に踏まれるのもなかなか無い機会であるとか、起こすためには仕方が無いとか自分に言い訳するが、実は下着姿の女性に踏まれたいだけだった。

ちよつとした異性へのMツ気は思春期独特のものである。それを扉の隙間から痛そうに見ているアレックスだったが、用心深く静に悟られないよう見えないフリしてこう言った。

「静！時間がねえ！いいから服着ろ！」

静はベッドの脇で振り下ろし続けている拳を止めて、アレックスに

「何があつたの？」と聞いた。
アレックスは見ていませんよという意味表示なのか、半開きの扉から手だけヒラヒラさせて服を着ると促す。
「わかつた着るわよ」と着替えを捜しながら、いったい何が起こつたのかをもう一度聞き返した。

「一回しか言わねえぞ！ついさっきの事だ！デイブさんからの連絡で、奴らが脱走したんだとよ！

「さあ服を着てエンポリオを連れてきてくれ！幹部は本部に集合だ！」

体細胞がカツカと発熱したように熱くなり、静は自分が大変な状況下に置かれているのだと気付いた。

時計を見れば早朝、空はまだうす暗い。
でも電車は動いているという微妙な時間帯である。

人々が動き出す前の時間を狙った犯行を、彼らを収容した2日後にはもうやってのけるのだから、相当統率のとれた組織というか、とにかくアクションが早すぎる。

スタンド使いが関わっているのではないかという憶測を立てながら（監視もまたスタンド使いであるため脱走はスタンド使いじゃないと難しい）、静は茶色のライダーズジャケットに袖を通す。

それからエンポリオに「起きなさい」と一撃くれてやりながらアレックスの隠れる扉へと近づいた。

「それで・・・行きましようか？」

ボサボサのウェーブがかつた髪をかき上げながら静は言った。
アレックスは「ああ」とだけ言って静の服装に目を走らせる。

「紫の下着にブルーのキャミソール、茶色のジャケットってどうよ

？」

静はその質問に対し、アレックスの頬へ右フックで答えた。
ガードすら間に合わず、至近距離からの攻撃をモロに食らったアレックスは扉を背に崩れ落ちる。

- 覗きは死んじゃえはいんだ。
等と思いながら、ホテルの廊下を走った。
エレベーターを待ちながら、やっぱり服装を変えてこようか悩んだが、やはりこのままでいいと思った。

「だって皆、私の下着の色なんか知らないし」
その通りである。

T o b e c o n t i n u e d . . .

30話【鎮魂歌12】（後書き）

また近いうちに上げられたらと思います。

31話【鎮魂歌13】（前書き）

この度の地震、みなさんご無事でしょうか。

私自身無事でしたが、知り合いの何人かは被災したようです。

また、関東の人々は余震が続き、殆どの人がナイーブになっていることと思います。ニュースからは悲惨な映像が止めどなく流れています。

こんな中ではありますが、私は引き続き書いて行こうと思います。ナイーブになった人たちに、少しでも楽しみが出来れば。そう思っています。

余談ですが日赤に届いた募金はまだ使われていないようです。やはり物資を各地方自治体から送った方が、今被災者の方々の為になるのでしょうか。日本人として東北の皆さまへのバックアップの一旦を担ぎたいと思っています。

それではまえがき長くなりました。どうぞ。

31話【鎮魂歌13】

PM21:30 ネアポリス界隈の飲み屋 襲撃の日

「もう一回聞けけど・・・こっから逃げただって？」

アレックスは大きな声でデイクに聞いた。

彼の部下、といっても年齢は50半ばであろうか、デイク・ロジャースは年下の上司にむかって 丁寧に答えた。

「彼らが牢屋から消えた以上、そう考えるのが普通でしょう。彼らの能力では透明になることは恐らく不可能です。なにより侵入者が居たのを看守が見ています」

「看守つつたつて・・・見た瞬間吹っ飛ばされたんじゃないやあ・・・」

アレックスが居るのは【パッション】の本部ではなく、静がジョルノをやり込めた【サンデー・モーニング】というバーの地下牢である。

流石に安全上、本部の下には独房を設けられないので、こうした地下牢はそれぞれのビルごとに点々としてある。

多くは先代ボスであるディアボロ時代に築かれたものであり、今もジョルノらは【裏切り者】や【敵】を一時的に監禁したいときはここを使う。

ごく稀に懲罰として監禁させることもあるが、そうたいした件数は無い。

内装はそれぞれ違い、石造りの牢もあれば、コンクリートの牢、も

しくはオフィスの一室を改造した簡易的な牢もある。
さて今回エツケハルトら3人を閉じ込めていたのはコンクリートの牢であり、彼らの痕跡はあとかたも無く牢内から消え去っている。

「フーゴさん！看守ってスタンド使いですよね！？」

牢の階上に居るフーゴに、アレックスは大声出して聞いた。

ああそうだ、という返答の音がコンクリートの壁に当たって反射し、アレックスの耳に届いた。

「スタンド使いが看守でも、スタンド見る前にブツ倒されちゃあ世話ねえなあ」

「スタンド使い同士は能力の相性というのがありますから、必ず強いスタンドというのが有るわけではないですね。相性が悪かった、ということになるのかもしれませんが」

アレックスは静のスタンドを思い出し、確かにそうであろうと納得した。

自分の【3W】は誰にも負けない自信があるが、それにしたって静にはいつもやられてばかりだ。

ただ透明になれるだけ、ただ記憶から消えるだけという能力を思い出す、どうあっても勝てそうにない。

しかし例えば相手の能力を察知できるようなスタンド能力であれば状況も違ってくるだろう。

静は本当に居なくなっただけではない。

人の記憶から消えても、そこに実際に存在する以上、機密性の高い部屋内で毒ガスでも入れられようものならひとたまりも無いだろう。また、任意の射程内に誰かが入ってきたら判る、スタンド能力に対して反応する、というような能力があれば、静の存在を忘れていた

としても、追尾は可能だ。
つまり攻略法が無いわけではない。

「そうだな・・・ブツ飛ばされた看守の能力を教えて貰えますか？」

「ああ、二人居ますが、一人は誰かがスタンドを使えば、それに反応するような索敵能力に長けたスタンド、もう一人の能力は、ただ単に相手を閉じ込めておくことが出来るスタンドです」

「後者の方を詳しくお願いします」

「相手を閉じ込めておく、ということ以外に説明のしようがありません。相手をこう、任意の範囲内に閉じ込めておくんです。詳しい事は本人から聞いていたきたいのですが、その間は外部から内部から手出しが出来ない状態にあるそうです。本人がスタンド能力を解かない限り、ということですが、一応時間制限はあると聞いています」

「じゃあやつぱり第三者の犯行と見て良さそうだが・・・侵入した形跡が全くない」

「看守の話によると、背後で爆発音のようなものがした、と思った」
ら

「ブツ飛ばされたと。まあそれは聞きました。デイブさん、ここの警備が鉄壁とあれば、相手の能力はレポートとか、壁をすり抜けるだとかそういう能力になってくるのでしょうかね」

デイブは大仰に頷くと、アレックスの肩に手を置いた。
アレックスも大分参った顔をしている。

こうしてトラブル続きでは、神経が休まる時が無い。

- どうやって侵入したか。

実はそれがどんな能力であるか、ということは重要ではないと二人は気付いていた。

どの道、未知のスタンド能力に対しては想像をいくら働かせたところで、大方の予測がつけばいいと言うところ。

それより先ずは犯人を捜すこと、そして何処へ逃げたかを探すことが先決だった。

フーゴ曰く、「黙っていても、奴らの目的が済んでいない以上、絶対に静達を狙ってくるだろう」と言う。

これに3人は納得した。

彼らは世界を変える、という奇妙な一点。

いや、これは非常に奇妙な点である。

ある組織が、罪を犯すことを厭わず、世界を変えようとするのだ。

これは得体の知れぬ心地悪さがある。

おぞましさでも言おうか。

狂気の沙汰である。

「デイブさん、相手の目的って何だと思えますか？率直な意見を聞かせてください」

「世界を変える、ということでしょうか」

「つまり？」

「おそらく【世界を変える】という言葉に振り回され過ぎではないでしょうか。こう考えてください。奴らはナチズムを汲む組織です。彼らが世界を変えれば、民主主義の撤廃だとか、選民主義の徹底であるとか、色々考えられます。」

少し回りくどかったのでこう言いなおさせていただきます。つまり、今の世界の政治体系と、ナチズムの目指す政治体系の間にあるミスマッチの打開こそ、彼らが【世界を変える】と表現している事ではないでしょうか」

アレックスは今更冷や水をかけられたようだった。

全員が自分たちのように私怨で動いているわけではない。むしろこう言える。

彼らの方が、自然なのだ。

自分たちの建設的な目的を、スタンドという武力をもって革命する。彼らは政治的戦争をしているのだ。

- - 俺なんとなく世界を変えようとしてる。

という覚悟の無さを改めてかみしめる。

大した目的もなくここまで来てしまった事に、後悔も少しある。手に持つコーヒーを飲んで、アレックスは身体を温める。

「俺みたいに中途半端な人間が、相手に勝てるか不安ですよ」という自嘲的な呟きに、デイトは「そんなことはない」と自然に否定してくれた。

「貴方の目的こそ私にはわかりかねますが、ひとまずの目標としては、こう考えてはどうでしょう。貴方は今、狙われている。それを打開する為に命を賭ける。」

あるいはこうです。世界を混沌へと落とそうとする奴らを、叩きのめすことが出来るヒーローになるのだと」

それでもアレックスはどうにも説明つかない不安さと、居心地の悪さを処理できなかった。

ただ言えるのは、あまりにも身勝手に計画性のない自分の行動ゆえ

に、命を狙われているということだ。
それを招いてしまったことを再認識すると、足が震えそうになる。
勿論ディブの助言はアレックスの心の重りを軽くしてはくれたが、
全てとはいかなかった。

「アレックス君、居るかい？」

上からダークが階段をつたって降りてきた。

成人男性としてはかなり低い身長だが、険しい顔と、逆立った髪の毛の所為か、気押される存在だった。

「やあダークさん」

「今看守から話を聞いた。牢屋を見せてくれ」

「僕は良いですけど・・・機密とかじゃないですかねディブさん」

アレックスがディブに聞く頃には、既にダークは床に這いつくばりながらあれこれ探索していた。

ディブはアレックスの方を向いて肩をすくめ、二人は仕方なさそうにダークを見守った。

まるで床の事が愛おしくて仕方が無いかのように、ダークは慎重に、舐めるように触れていく。

そのくせ目だけはカットと見開いて、もうお前を逃がさないという復讐に燃えたような光をたぎらせている。

その姿が不気味で、アレックスは目をそらせてしまった。

そこへダークは「アレックス君、もう少しいいかな？」と床から目を離さずに聞き、了承も取らずにこのまま探索し続ける気であろうことは容易に判る。

「勿論どうぞ」と言ったアレックスは、階上へと上がって行った。
デイクも後を追う。

残されたダークは、床を調べ終わると、軽いため息をついて牢屋の中を調べる。

コンクリートの床の上には一応痕跡らしいものは無かった。

あと手がかりが有るとすれば、あるとすればの話ではあるが、牢屋の中だろうと考える。

これも3つ部屋が有る中で、ひとつずつ調べて行こうかと思いついたが結局得るものは無かった。

コンクリートの破片がいくつもあるだけだが、ディアボロの時代からあるための老朽化だろうと分かる。

そういえばところどころ爪痕が付いている。

だがこれも前に収監された囚人のものだろうとわかった。

「誰なら出来る？どんな能力なら？」

声を出して自問自答するが、一切答えは見えてこない。

こういう時は、最初に立ち帰って考えようと、先ほど看守から聞いた話を思い出す。

看守は次のように語っていた。

それによればすなはち「私は入り口の方に立っていたのですが、相手の能力を過信していたと言いつつ訳ではありません。ちゃんと3人を見ていましたが、彼らの能力がまだ未検証の状態だったので、一応距離をとっていたのであります。ところが、急に一番奥の牢あたり（エツケハルトが入っている）から爆発音がしたので急いで駆け付けたんです。相方ですか？彼の能力が解除されることが一番の問題ですから遠いところに大気させてありました。ええ。そうですね。

ご指摘の通り、私の使命は、命に代えても相方を守ることにあります。

爆発音が聞こえた時にさかのぼります。急いで牢屋がある手前の角を曲がると、目の前に長身の影が見えました。見えたと思った後は、ご存じでしょう。彼と私の距離ですか？さて、牢の一部屋が横に3メートルほどですから、6メートル前後でしょうか。とにかく気付けば私の目の前に居たのです。私が考えるに、あれはスタンドだったように思えます。それであればあの俊敏な動きも説明が付き
ます。

相手の姿恰好ですか？これは困りました。何故なら曲がった瞬間、吹っ飛ばされたに近い訳ですから、なかなか容易には思い出せません。距離を覚えておいたことですから精一杯の所業でした」とのことである。

また、謎はもう一つあるのだ。

例えば犯人がエツケハルトの牢から出てきたとして、それがエツケハルトかもしれないが兎に角そいつは何らかの手段で残りの二人を、鍵のかかった牢屋という密室から逃がしたのだ。

そして彼らはこの牢から、忽然と姿を消した。彼らを拘束していたスタンド能力を解いたこととも謎といえは謎だ。

しかしこれは第三者が囚人3人を、そのスタンドの射程外へ出したとすれば不自然な問題ではない。

その時ダークは思いだした。

この牢屋は、下水道の上にあるはずだ。

しかしその為には壁をすり抜ける事が必要不可欠となるだろう。

やはりエツケハルトの牢付近を探そうと思い、そちらへ立つ。

再び鍵を開け、中をのぞくが、他の牢同様目立った形跡はない。だが論理的に考えれば、ここ以外に侵入経路は無いのだ。

床をじっと見つめる。

手がかりを探した。

大方15分は経つただろうか。

階上のアレックスの耳に、けたたましい笑い声が聞こえた。

何事かとアレックス達は階下へ駆け降りると、恐ろしい形相をしたダークとブチ当たった。

ダークの目は血走って見開き、口からはよだれを垂らしながら「マキャベリとアリシアは何処ですか？」と尋ねる。

「どうしたんですか！？スタンド攻撃にでも遭いましたか！？」

「ああ、デイブさん、アレックス君。マキャベリとアリシアは何処に居ますか？」

「この更に上の階に、静様らと一緒に居ると思いますが・・・」と、この人が変わったようなダークの姿に狼狽しながらデイブは答える。

「では私が行きましょう。ついでにフリーゴさん、あとミスタさんにも連絡取っていただいても？」

「判りました。要件はどうお伝えすれば？」

「こう伝えてください。侵入者の正体は通称ビリオン。恐らく一人でしょう。今すぐ追跡体制を取っていただきたく、会議室へ集まってくださいと。こうお願いします」

そうデイブに伝えると、ダークはアレックスを置いて階段を走って

登って行く。

・・恐らく奴にとって壁は壁たりえない。そして追跡もままならない。馬鹿にされている。

マキヤベリ達が居ると言われた部屋のドアを開けると、皆が一斉にこちらを向いた。

髪を振り乱しながらドアを開け放った修羅の如きダークの容貌に、全員の顔付きが変わった。

ドアからは微風が漂う。

「なにかしら」と静は緊張した面持ちで聞いた。

同日PM19:06 ベルリン駅 改札前

手がかりも無いと思われる搜索だった。

この地にも同士は沢山いる。

彼らのネットワークを使えば判らない事は少ない。

しかし逃走者も上手くそのネットワークから漏れるように移動している。

何処何処で見た、という話しの翌日には全く別の地方都市で見たと言う話も上がってきた。

いかにせん【あのお方】が逃走した事自体、まだ組織内でも一握りの人間しか知らされて居ない。

取りはじめた休暇は既に4日目。

ヨハン青年はそろそろ限界だとばかりに上司へ文句を言った。

「あの、シュトロハイムさん。やっぱり別の場所って可能性はあり

「ませんか？」

シュトロハイムと呼ばれたヨハンの上司は、出来の悪い教え子に諭すかのように語りかけた。

「なるほど、では逆に考えるんだ。【あのお方】は、何故逃げているのだと思う？」

うっとたじろいで、ヨハンは答える。

「・・・我々から抜け出すためです」

「いいや違うな。【あのお方】は責任感の強いお方だ。常々言っておられた。この組織が道を踏み外すようなことが有れば、私が何が何でも正すと。今回の逃走のきっかけは2週間前の会議だろう。それとは知られず用意周到に荷物をまとめ、ある朝居なくなった。これは驚嘆すべきことだ。我々の監視は絶対に続いていたのだから。そして書き置きだ」

「【ハーケンクロイツは死んだ】と書いてありましたっけ」

「そうだ。ご丁寧に血文字でな。おそらく反旗を翻す気だろう。たった一人で。気高いお方だ」

そう言うと、シュトロハイムは懐から携帯電話を取り出し、番号を見た。

見覚えのない番号だったが、長い間バイブレーションが鳴っている。そこで口元に人差し指を当て、ヨハンに合図すると、彼は不貞腐れた顔のまま黙った。

それを確認してからシュトロハイムは電話に出る。

「ハロ？」

「シュトロハイムだね」

「あー、何処でこの番号を？」

電話口からは、若い緊迫した声が聞こえる。
あくまでシュトロハイムは冷静だった。

「何処だっという。それより君はどうしても僕を追ってくるんだね？」

ヨハンはシュトロハイムの顔を見て驚いた。

普段輝きを見せない眼が、がっと上へあがる。

いつもの何処となくやる気が無さそうで、それでいて精悍な顔が、
今や緊張を通り越して、焦りすら感じさせた。

しかし、次の言葉で、ヨハンもまた同じ顔をすることになる。

「閣下ですか？閣下、貴方なんですか！？」

「大声を出さないでくれ。ヨハン君も驚いているじゃないか。ほら、
キヨロキヨロしないで僕の質問に答えてくれ。君はどうしても追っ
んだね？僕のあの意見を聞いても、それでも追って来るんだね？」

まるで近くで見られているような思いがし、シュトロハイムの背に
は冷や汗が流れた。

「それは・・・それが組織ですから」

電話口の相手は残念そうにため息をついた。

「組織が間違いを犯そうとじていても、つまり君はそれにあらがうことはせず、一緒に沈もうと言う訳だ。それこそが一世紀近く前の敗北の原因だ」というのに、君たちはまた間違いを犯そうとじている」

「どうかそう言わないでください。私はただ不安なのです。貴方の身が」

「僕が？なら君がこれ以上追うなら自害するよ」

「閣下、どうか。どうか」

「僕は組織の決定にあらがうよ。どうせ君たちは僕というシンボルが消えると困るんだろう？だったらその弱みに付け込んで、君たちを倒さざるを得ない。と、こう言っても僕を追い続けるんだろうね君は」

「仕方が有りません・・・私は貴方を連れて帰れと言われているだけですから・・・」

「そうか、じゃあこのまま電話を切らせて貰うよ。組織の中では一番君が物分かりが良いと思っていたのに残念だ。ヨハン君にもよろしく。頑張つて僕を捕まえてみたまえ。ヒントはあげないよ。もう僕は行かなきゃ。【兄上】にはこの事を伝えておいてくれ」

「閣下、まだ話しが！」

「それじゃあね、シュトロハイム。悪いけど僕、世界を救わせて貰

うよ
「よ」

途端にツー、ツーと電話が切れた。
自分たちの王による、突然の宣戦布告に、
どうしていいのかわから
ず、ただ茫然とヨハンと顔を見合わせた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

31話【鎮魂歌13】（後書き）

後書き位明るい話題でも。

そろそろシュトロハイムを出しました！

懐かしいですね！ナチスの科学力は世界一とか言っていたオツサンですね！！銀河鉄道に乗らなくても機会の身体はナチスに行けば手に入る様ですよ！！残念哲郎！！

こうなったら戦わせてみたいですね。メートルバーサスシュトロハイムバーサスターミネーター。わあ、B級映画出来そう。これは見たい！！誰か書いて！！

はい、ちよつと暴走気味です。書きあげる喜びってこれに勝るものはありませんね。それではみなさんお元気で！！すぐに次を書きあげますよ！！なんて言いながらいつも上げていませんが、今回はストックがあるので、すぐに上げれます！！それでは！！

キャラクターまとめ【パッション編】（前書き）

更新が遅れております。申し訳ありません。

インターネット環境が整わず、ストックだけが貯まる歯痒い状況にあります。

そこで、せめて携帯でも何かしらのアクションを起こそうと、これまでのキャラクターまとめを作りました。

そういえばコイツこんなだっけ？

と思いながら読んでいただけたら幸いです。

キャラクターまとめ【パッションネ編】

【ジョースター家最後の特攻野郎：静・ジョースター】

今作のジョジョである。

カッツとなったらギャングにだってカチコミかけちゃうジョースター家のリーサルウエポン。その正体は第4部でジョセフに拾われた日本人の赤ん坊。今は養子としてフロリダの【イングリッシュ・カントリー・ガーデン高校】に在籍。ただし現在夏休み中。

実は誇り高き血統が流れていない事にコンプレックスを持っている。昔は両親に迷惑かけていた。

全く連絡を取っていない彼氏が居る。

【スタンド名：アクトンベイビー（能力：ワット・アイム・ルツキング・フォー）】

透明になれるだけ。【ワット】はそれを加速させ、世界の記憶から消える事が出来る能力。注意したいのは、記憶から消えても存在は消えない事である。自分を知る人の目の前で使っても、その人は新たに静という女性を認識するだけである。つまり世界との関係をリセットするだけなのだ。新たにリセットしたくば能力を解いて、もう一度能力を発動させねばならない。

尚、性質上透明になる過程を踏まねば【ワット】は発動出来ない。

一番効果的なのは記憶から消えて背後から鉄パイプで襲う事である。

【ドリーミン・ヴァージンボーイ（夢見る童貞）：エンポリオ・アルマーニ】

しよっちゅう静にどきまぎするムツツリ担当。その正体は第6部でただ一人生き残った特異点にして、宇宙一邪悪なゴミクス神父を地獄へ叩き込んだ勇者、エンポリオ少年である。結局アイリンら（一巡後の第6部主人公である徐輪）が一巡しても結局死んでしまった事から、世界を巻き戻して最初からやり直す、つまり世界を変えることにした。そのヒントであるDIOの体細胞を手に入れるべくジョースター家に潜入。特異点ではないが、何故か一巡する前を覚えていた静と意気投合。

【スタンド名：バーニング・ダウン・ザ・ハウス】

物の幽霊を引き出せるが、攻撃には向かない。

【スタンド名：ウエザー・リポート】

ホワイトスネイクにDISKにされたウエザーの人型スタンドを身体に入れて使えるようになった。つまり生来のものではない。

多分その気になれば全人類をカタツムリに出来るがやったことはない。いつもはオラオラと大気操作位しかない。

【気高き血統を受け継ぐエクストリーム・ヴァージンボーイ：アレクサンドロ・ルイ・ツェペリ】

不遇のツェペリ家から遂に出た。最強のツェペリ。その正体はシーザーの曾甥にしてウイルの玄孫、そしてジャイロの子孫。常にジョースター家の陰で消えていった英雄達が魂を引き継ぐ。

エンポリオとは第5マルーン孤児院で出会う。スケベ担当。ジョースター家には相当なコンプレックスを抱いており、その影響からか「ルイ・アームストロング」という通り名を多用する。

【スタンド名：ワット・ア・ワンダフル・ワールド】

ギリシャ神話の神々を思わすような人型マッチョ。全身青い。頭にはオリーブの冠、顔は仮面を被っている。その能力は、有体物が動いた軌跡を巻き戻す事が出来る。例えば目の前を通りすぎた車を、同じ軌道で引き戻せる。裏を返せば最初から置かれている箱を任意の方向から引き寄せる様な真似は出来ない。

効果的な使用法は、走り去った相手を引き寄せてカウンターパンチを繰り出す事だろう。巻き戻す速度に上乘せした豪速カウンターパンチ。アームストロングたる所以を垣間見る事が出来る。

以上が主人公達です。

次は物語に箔をつける、黄金の精神を持った人達の紹介です。

【パツシヨ―ネ編】

【情熱のイケメンワキガ：グイード・ミスタ】

パツシヨ―ネの幹部陣をまとめる若き議長。その正体は第5部でデ
イアポ口戦を生き延びた伝説のギャング。相変わらず変な帽子を被
っている。あと未だに「4」を乗り越えていない。

プライベートではトリッシュと結婚し、今は市内のアパートで笑っ
て暮らしている。

【スタンド名：セックス・ピストルズ】

№.1、2、3、5、6、7からなる指先ほどのスタンド。彼等
はミスタが撃ち出すリボルバーの弾丸が行く進行方向を、自在に変
えることが出来る。

【銀髪天才ハスラー：フーゴ・パンナコッタ】

組織の経営を担い、裏でボスの右腕を任される若き宰相。その正体
は第5部のボス戦前に芋引いた最強のプツン野郎。実はあれから
組織に戻ったフーゴは、組織に忠誠を誓うフリをし、陰ながら誰に
も知られる事なくジオルノらを支援していた。それはジオルノへの
信頼もそうだが、もしかするとブチャラティという光への信頼がそ
うさせたのかもしれない。

現在は自身もカジノのルーレットハスラーとして店番をする一方で、
ジオルノが表へ出さない仕事を行なっている。

【スタンド名：パープル・ヘイズ】

知能は高くないが、極めて凶暴な人型スタンドである。その拳には

超凶暴殺人ウイルスが入ったカプセルが埋め込まれており、発動すると相手は死ぬ。マジで死ぬ。光に当たるとウイルスは死滅するが、全力で相手を殴ればウイルスが死滅する前に相手を殺せる。対抗出来るのはワクチンが作れるジョルノ位だろう。それ以外は大体死ぬ。

【戦う嫁：トリツシユ・ミスタ】

ミスタの嫁。その正体は第5部の先代ボスの娘、トリツシユ・ウーナ。親父から命を狙われ死にかけ挙げ句魂をワキガと入れ替えられた苦勞人。だがワキガの臭いに当てられたのか、そのままミスタと付き合い結婚。結婚式ではミスタと引き合わせてくれた事に「天国のお父さんありがとう…」と第5部を完全否定させる様なセリフを涙ながらに語り、あのジョルノを慌てふためかせた豪胆。現在は組織のチームを率いるリーダーだが、斬った張ったはなく、かなりワガママに暮らしている。

【スタンド名：スパイス・ガールズ】

物体を極限迄柔らかくさせる能力を持つ人型のスタンド。自我があり、常にトリツシユを思いやる芯の強い女性(?)。柔らかいということは、絶対に碎ける事は無いと言う第4部のサブタイトルに真っ向から喧嘩を売りに行った事で知られる。究極、ダイヤモンドより碎けないと噂される。

【アレックスの部下にして組織の古株：ディブ・ロジャース】

アレックス達の部下だが、いつしかアレックスのビジネスパートナーと化した。性格は温厚そのもの。頼れる部長である。

【黄金の旋風：ジオルノ・ジョバーナ】

パツシヨ―ネのボス。その正体は第5部の主人公で、ディアボロに「終わりの無い死」を叩き込んだ張本人。物静かだが、情熱が絶える事は無い。

現在はボスとしてパツシヨ―ネをマトモなギャングにすべく奮闘中。それでもネアポリスは安全とは言えず、彼の夢は叶っていない。この物語が終わる頃には、彼の夢が叶っているだろうか。

【スタンド名：ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム】

ゴールド・エクスペリエンスが矢を取り込んだ、他のスタンドから一歩進んだスタンド。物質から生命を作り出す事は勿論、相手の感覚を加速させてなのか、永久に殺し続ける事が出来る。

この度ジオルノが襲撃された時は、独立してジオルノを守った。常に金色に光っている。

以上【パツシヨ―ネ編】迄の登場人物のマトメでした。

キャラクターまとめ【パッションネ編】（後書き）

パソコンのインターネット環境が明日になれば整う気がします。

あ、仕事のパソコンでアップすれば良いのか…

ホントに良いのか…？

ご期待ください。

32話【鎮魂歌14】

PM22:30 牢屋があるビル

脱獄を幫助した犯人がビリオンだと分かった【パツシヨーネ】だったが、だからと言って彼が何者であるのか、またどうやって追えば良いのかまでは分からない。

また唯一ビリオンについて知っている肝心のダークも、今もこうして会議室で腕を組んでいる。

知らない訳ではなさそうだが、彼の正体に関してはかたくなに口を閉ざしていた。

解決策が見えない。

「フーゴ、ジヨルノの様子はどうだ？」

「ああ、居たのかミスタ。相変わらず何を考えているか解らない顔だよ。だがもうすぐ自分も動けると言っていたから、そろそろ復帰できるだろう」

ミスタは会議室の中左奥に座っている。

室内には静、アレックス、エンポリオ、マキヤベリ、アリシア、ダーク、それから古い幹部が4人居た。

他の幹部は各々の仕事に当たっており、とりあえずこの場には集まれる上、スタンド能力の使い方に長けたような人物が集められた。そんな中だから、フーゴという旧友の顔を見て、ミスタはほっとした。

じゃあジヨルノ抜きでやるか、とミスタは全員へ声をかけた。

誰がどういう経路で追つか、という点で、2時間程の会議をおこな

った。

その前から既に部下たちはネアポリスの街を走っていた。後はどう効率良く動かすかである。

結局何名かのチームに分かれて移動する事にした。

というのも、ダークの発想だと、ビリオン達は下水道を逃げて逃げることが出来ても、本国へ帰るやり方は車、列車、飛行機のいずれかであるうし、その為には国境を超えるなりなんなりしなくてはならない。

であるならば、まだ遠くへは行かないはずなのだ。

そういう方向性で会議は打ち切られ、全員各々のチームごとに分かれてビリオンらを追った。

静らの班はアレックスとエンポリオの3人に加え、アリシアの4人である。

互いの自己紹介は済んでいるので、談笑しながらとまではいかないが、打ち解けた様子でビリオンを追った。

同日PM23:26 ネアポリス B51区画

静らは走った。

広いネアポリスの町を何ブロックかにわけ、そこを手分けして探す。静にはある確信があった。

それは、向こうもまだ自分たちを狙っている事には間違いないと言
う事。

もしかすれば、あの3人のうち、誰かと二回戦をするハメになるかもしれないし、新しい資格が来るかもしれない。

確実なのは、エツケハルト達をブチのめしたことで、彼らとは戦わざるを得ないということだ。

未だに奴らの尻尾を捕まえたと言う情報は無い。

携帯電話片手に静らも相手の逃走範囲を狭めるが、なにせ脱走後1時間経つてから形を整えた搜索布陣であるから、もう既に抜けられている可能性はあるし、今こうして作戦を立てながら搜索を始めたのはたかだか3時間前である。
見つかる可能性は低い。

あるブロックまで来ると、静達は小さなパティオ（広場）の前で落ち合った。

息を切らせたエンポリオは「ここらへんに間違いないよね？」と静に念を押した。

「多分間違いないわ。下水道は土地勘のある人たちがネアポリスの端から追っているから、アイツらが下水道にとどまっていたとしても地上に出てこざるをえないわ。とにかく探しましょ。一件効率が悪いように見えるけど、正直人海戦術以外に奴らを追い詰める方法なんて無いと思う」

この意見には同感と皆は頷いて示し合い、また搜索に戻った。

翌日 AM 01:37 ネアポリス B32区画

静は一人走っていた。

3つ目のコーナーを曲がると、暗い夜道が追いかけて来る気がして怖くなる。

誰かに見られてやしないかという強迫観念が沸いて来たので、姿を能力で消した。

はたから見ると、誰も居ないのにカツンカツンという靴の音だけが響く小路は怖い。

何度か「アイツら何処いったのよ」と呟く。

答えは出ないが、ある程度広い道路に当たった。

見通しが良いので右左向くと、両方100メートル程先まで見える。右に走ってしばらくすると、一本大通りから奥の裏路地に、同じく走る人影を見つけた。

同じ程度の速さだったので自分の影かなとも思ったが、それでもないらしい。

- - まさか・・・

やや緊張した面持ちで静はツバをのむ。

自分の姿が透明な以上、影なんか出来る筈が無いのだ。

よし次だ、と目の前のカーブで曲がると裏路地に出るが、先ほどの影は見えない。

- - しまった！

そう思つて今来た道を戻り大通りへ向かうが、あと一步で目の前の影に阻まれてしまった。

男の影だ。

しかも静にとつては嫌な思い出のある相手である。

大通りの街灯の逆光になり、顔や姿はハッキリと見えなかったが、誰だかは嫌というくらいわかった。

喉元から沸く押し殺した笑い声。

奇妙に長い手足。

そして黒いスーツ。

「私をお探しですか静嬢？」

「・・・運命の相手って居るものね」

フフフっと人影は笑い、後ろに組んでいた手を解いた。静は姿を消している。

相手に察知できるわけではないのだ。

しかし相手はここに静が居ることが分かる。

そんな相手、一人しか静は心当たりなかった。

「残念ですが、貴方にはもう興味はありません。例え運命の相手だとしても。私は今烈火のごとく怒っています。私をコケにするのも大概にしていたくださいですねえ・・・仏の顔も三度まで、とは言いますが・・・流石に私は一回で十分ですよ！」

相手が叫ぶと、その後ろにぼんやりとマントを着たような人の形が浮かび上がる。

今は逆光で良く見えないが、近くで見ると、リベットで打ちつけたような頭にだらしなく垂れ差がった舌が見えるだろう。

その人影が今静にじりじりと詰め寄る。

逃げ場を逆に失った静は、数日前と同じく分断されて相手に狙われることになった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

33話【鎮魂歌15】（前書き）

おまたせしました。

2話あげさせていただきます。

近々【鎮魂歌編】のまとめでも書こうかなと思ってます。

33話【鎮魂歌15】

AM01:40 ネアポリス B32区画

男は見えないはずの静に向かい、更に歩みを進めた。
対する静は後ずさる一手である。

「怖いですか静嬢？それとも怖くない？うそうそやっぱ怖い？どつちでしょうなあ。私としてはせいぜい怖がってくれると本当にうれしいんですよ。女性を支配する充足感。あなたにわかりますか？私は満足しています。おやちよつと脅えた匂いがしますね。尿意でも感じていますか？」

「こ、今度こそ・・・殺してやる・・・」

「そういえばアレは終わったようですねえ。残念ざんねん・・・ああ、動いたって私解りますよ貴方の場所。私・・・鼻が効くんですよお鼻が。治ったんです。凄いでしよう。あんなにグシャグシャだったのにねえ・・・ビリオン達がほらつて・・・直してくれたんですよお・・・」

見れば静が先日平らになるまで殴り続けたエツケハルトの鼻は、驚くほど綺麗に治っていた。

その鼻をポリポリと掻きながら、エツケハルトはじりじりと静との距離を詰めて行く。

左肩に浮かぶ【ジニー】も、よだれを垂らして喜びに満ちた表情をしていた。

勿論そこには不気味な鋼鉄の顔しかないのだが、何故だか彼女にはそう見えた。

恐ろしくなり、静は右へ走った。

しかしすぐに目の前へ【ジニー】が先回りし、静は挟み撃ちにされた。

「はいこれで逃げられませえん」

だが静には秘策がある筈だ。

【What I'm looking for】の能力をもってすれば、エッケハルトは瞬殺できる。

未だ彼女がその手を使わないと言つのは、使えない理由があるに他ならない。

静の【What I'm looking for】は、世界の記憶から静に関する情報だけを忘れさせることであるが、だから言つて彼女の存在が無くなるわけではない。

その状態で人に会えば、相手は静だとは思わないが、誰か女性と話しているというのは認識できるのだ。

そもそも彼女の【What I'm looking for】は、完全に世界から記憶を消してしまう。

だがこの能力は一度消したら、それつきりという弱点がある。

この能力を発動したまま誰かと話せば、相手は静ということを忘れて、知らない女性と話していると認識することになる。

つまり静の記憶が消えても、新たに記憶を作ることではできるのだ。

これをエッケハルトに適用すると、確かに静の存在は忘れてしまつが、【目の前に姿は見えずとも女性が居る】ということは認識出来てしまうのだ。

姿を消すこととセットにして初めて有益な能力であるから、姿が認識できる状態では全く意味を為さない。

同じ要領で、サーモグラフィーでは静を認識できると言えよう。

しかしそれでも静は諦めなかった。

【ジニー】の射程は2 m程度であるから、瞬間的にエツケハルトの懐に潜り込んで瞬殺する事ができれば、【ジニー】の能力から勝ち逃げ出来る。

だが静は素手によって一撃でエツケハルトを倒せるとは思っていなかった。

なんせ大人である。

何処をどう攻撃していいのかも解らないし、その間にも距離を詰めてきている。

完璧に挟み撃ちの体制に入ると、両者の間にわずかな沈黙が流れた。エツケハルトの顔に影がふとさした。

「・・・出来るなら僕も少女に手をかけたくは無いですかね。信念の為には仕方が無いですよ」

「信念の為には暴力沙汰や、果ては殺人まで許されるのかしら？」

「信念を尊守し、更に磨きをかけることこそ、人類の魂を更に昇華させることに他ならない。わかつてくれとは言わない。ただ、僕は僕の信じる世界を作りますよ。その為に、いたいけな少女を蹴つてしまうことになったとしても」

【信念】の話をすると、あの落ち着きなく色情に身を任せていたエツケハルトは信じられないほど真面目な顔つきをしていた。

それはある種の清々しささえ感じられるほどの、【清廉された魂】だった。

こんなもの魅せられては、静も破れかぶれになるしかなかった。

【信念】も【家族】もどうでもいい。

今は自分の信じるチャチな【正義感】の為に闘おうと、静も覚悟した。

エツケハルトへ向かって足を踏み出す。

上体を沈ませ、思い切り右足で踏み切った。
せめてもう一度鼻を潰せればと思うが、右手は思うようにエツケハルトの顔面に吸いこまれなかった。

「ざんねん。その腕、いただきます」

心底残念そうに、エツケハルトは静の透明な腕を掴んだ。

静は勢いよく左手で相手の鼻先を薙いでみたが、エツケハルトは軽々と避けて見せる。

「これで終わりです!!」

静の後方から【ジニー】が飛んできてマントを広げた。

静が後ろを振り返ると、リベットを打ちつけた鋼鉄の様な頭が見えた。

顔に眼は無いが、金属製を思わせる顔からは不釣り合いに、真っ赤な口内と、そこから垂れ差がるだらしない舌がより生々しく感じられる。

静の顔が恐怖に歪んだ。

ゴウっという風と共に、マントが横薙ぎにされる。

・・・チツ・・・

エツケハルトを巻き込むまいとしたのか、【ジニー】は静の頭上一步手前でマントを薙いでしまった。

静はチャンスだとばかりに腕を振り払って距離を取る。

今、【ジニー】とエツケハルトと対峙した静は、知らず知らずのうち拳に力が入っていた。

後ろに逃げるか？

いやこれはチャンスなのだ。

「マジに来なさいよ」と静がニヤリと笑って、とは言えども透明な

ので彼女以外には知覚できないのだが、声の調子でわかった。

「やってやるっツ!!」

バウツ

音がしたかと思うと、気付けば【ジニー】が目の前にいた。静は慌てて身を逸らす。

ガオン！ガオン！と【ジニー】がマントを振る度に、風を切る音がする。

- - 何故だツ!! 何故当たらないツ!!

「動きが見違えたわ。そろそろアタシも本気で行くわよ」

静が踏み切って【ジニー】に突っ込んだ。

【ジニー】のマントはまだ開いていない。

静はこのタイミングを待っていた。

エッケハルトが迫ってくる静の一撃を避けるためには、【ジニー】のマントを閉じたままガードしなくてはならない。マントを再び開くには時間がかかる。

走りながら静は懐からスタンガンを取り出し、スイッチを入れた。透明が故に、エッケハルトは彼女が何を持っているかまでは感知できない。

「パンチ一撃くらい、耐えられないとも思ってたか!!」

「残念・・・パンチじゃねえんだよツ!!」

チツチツチと音がして、スタンガンから火花が散る。

エッケハルトまで50センチというところだった。

迫りくるだろう苦痛に顔を歪ませていたエツケハルトは、この瞬間突然笑った。

「残念、はどつちかな？」

エツケハルトは口が裂けるほど口角を上げ、【ジニー】のマントを広げた。

静の読み間違いであった。

マントを開いて自分を包み込むまでには時間がかかると思っていた静だが、このままエツケハルトは静の一撃を耐えつつ、【ジニー】の開いたマントで抱きしめてやればいい。

距離にして30センチ。

・・強敵だった・・・

「サヨナラ静嬢！！」

そうやってエツケハルトは【ジニー】のマントを閉じた。
ガヴァツとマントを閉じる。

「アンタがサヨナラよ。エツケハルト」

と誰も居ないはずの空間から聞こえた。

まだ目の前に匂いを感じる。

それも30センチ、20センチと猛烈に距離を詰めながら。

「マントを広げなければ!!」

しかし閉じてしまったマントをもう一度開くには、相手が近すぎる。

「またまたやらせて貰ったわアン」と耳元で聞こえると、バチバチイッという音がして、エツケハルトの視界は暗転した。

彼の身体からは力が抜け、「ジー」も消えた。

ドサアツという音と共にその身体は地面に倒れた。

肩で息をしながら、静は「アレックス!!」と叫んだ。

するとエツケハルトの遙か後方から、アレックスが走って寄ってきた。

「アンタ遅いわよッ! もうちょっとでアタシ、また人形にされてたじゃない!!」

「え、あの位ギリギリじゃないと、バレちまうじゃんか」

言い争ってはいても、敵を倒した嬉しさにはかなわない。

しばらくしてウツシッシと笑い合い、エツケハルトの身体の側に寄った。

「しかしこんなに上手くいくとは思わなかったぜ。お前こついう汚い手考えるの天才だな」

実は静は、事前にアレックスと距離を開けてエツケハルトを探していたのだった。

彼が現れると、静 エツケハルト アレックスの順でエツケハルトにバレないよう縦に配置させたのだ。

その上で静が逃げると、静 エツケハルト アレックスとなる。

これで静の考える作戦の9割は完成した。

あとはエツケハルトが攻撃を繰り出すタイミングで、ちよつとずつバレないよう【ワット・ア・ワンダフル・ワールド】の能力で後ろに引いてやればいい。

そしてここぞというところで、静がスタンガンで奴をしとめる。

元々エツケハルトは静に固執していたから、絶対自分に来るだろうと踏んでの作戦だった。

もしアレックスを先に潰されていた場合、何の手だても用意していなかったので、幸運であったと言える。

勿論静はその穴に気付いていたが、その時はジョルノなり誰かと一緒に戦えば倒せないことも無いだろうと楽観的に考えていた。

「さあてみんなが来る前に、とつとと黒幕のピリオンとやらの正体と居場所を吐いて貰いますか」

そう静が言つと、エツケハルトに馬乗りになり、おもむろに拳を振り回し始めた。

ゴツンゴツンと頭を殴り、うつ伏せにして腹を殴りまくる。

ゲホゲホとエツケハルトは息を吹き返したが、すぐさま静が喉元にスタンガンを押し付けて「動くな」と叫ぶ。

このとき彼女は長袖で腕を包み、彼の生身に触れないよう気を付けた。

「大人しく私の質問に答えたら感電死は免れるわよ」

エツケハルトは自分の置かれた状況を理解したようで、悔しげに唇をかんだ。

背中に静の胸が当たるのは正直嬉しかったが、だがそれでも小娘に

負けたと言つ屈辱の方が勝った。

「ビリオンの正体を教えて」

「・・・言つと思ひましたか？信念と命、どちらが重いかなんて、ドイツ人なら誰でもわかると思ひますが」

「取引をしましょうエツケハルト。貴方はビリオンの正体を教えてくれればいいわ。ビリオンって偉いんでしょ？ソイツの正体が分かんないと、パツシヨーネとしても顔が立たないの。そのかわり、貴方には携帯電話を返してあげる。組織のパーソナルデータが入っているであろう大切な携帯電話・・・ちよつと動かないで！もう懐から抜き出してあるわよ！」

苦渋を飲まされたような顔をして、彼は悔しがった。

ここで言わなければ携帯電話のデータは全てパツシヨーネ側に渡ってしまう。

諦めたのか、ため息交じりに「ビリオンですか・・・彼には恩があるんですよ。多大なね」と懐かしそうに呟いた。

「彼が来てから組織はよりスムーズに動くようになった。我々のリーダーがアーリア人の他に認める人種とえば、日本人だけだ。貴方みたいなね」

「ちよつと待つて！」と慌てた様子で静はさえぎる。

「ビリオンは日本人だつてこと！？」

「それも知らなかつたんですか？帝政ドイツが滅んで以来、我が国と日本の間には大きな信頼関係があつた・・・彼は日本を代表し、

もう一度日本人として協力すると申し出てくれた。最初は幹部の一人による紹介であったが、常に我々のために働いてくれましたよ」

「本名は？」

「それは知りません。ただ幹部の古い知り合いだとか。ああビリオンという名前ですか？それは本名が呼びにくいので、本名をもじって付けた通り名と聞いていますよ。ビリオンは日本語で10億でしたっけ。なんとかオクと言うらしいですが・・・オクヤス、そう、オクヤスだったと思います。それ以外はなんとも」

変な名前、と静は処断した。

だが何処かで聞いたことが有るのだろうか、記憶の奥底が疼くのも確かだった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

34話【鎮魂歌16】（前書き）

7部最終回でシヨックです。

だが8部が杜王町を舞台にしているだど！？

これはまさか・・・静が来るのか・・・？

ともはれ、私のジヨジヨはこのまま連載します。
皆さまよろしく願います。

34話【鎮魂歌16】

AM01:51 ネアポリス G10区画

全ての人類は、アフリカで生まれたという説がある。

人間の体内にあるミトコンドリアのDNA構造を見ると、驚くべきことに大半の人類が同じDNAのミトコンドリアを保有していることに気づく。

そもそもミトコンドリアのDNAとは、母親からしか次世代には受け継がれない。

これは先ほどのデータにある、あらゆる黄色人種、有色人種、白人種に共通するミトコンドリアのDNAから、ある仮説を見いだすことが出来るだろう。

それは、人類は一人の母親を祖として、あらゆる肌の人類が生まれた、というものである。

彼女はミトコンドリア・イブと名付けられた。

勿論彼女が聖書に言うアダムとイブの片方であると考えるのは難しい。

他のミトコンドリアを保有する人間も居るからだ。

ここから引き出せるのは、つまり彼女が人類のイブたる存在であった、ということではなく、有色人種であろうが黒人種であろうが白人種であろうが、共通の祖先がいると言っていることである。

ミトコンドリア・イブ……彼女はアフリカの大地で生まれ、その子孫を増やした。

彼女の子孫は世界へと散り、また子孫を残した。

その中でも一握りの子孫は、人類が生まれた地に残り、アフリカの大地で進化した。

アフリカには人の命を脅かす獣がいる。

彼らと共存し、時に殺し合い、アフリカに残った子孫は強くなった。

今日、スポーツ面で黒人は、異色の身体能力や卓越した獣的と言っては大きな批判が出るだろうが、そのフィジカルは現代人より遙かに優れている。
また人々を豊かにしてくれる音楽は、アフリカ人から広まったとされる。

これはつまり黒人であるということは、人間界最強の人種であるということに他ならない。

その血を濃く受け継いだ戦士がネアポリスの街に居る。

ジャツカルのようなコーヒー色をした瞳。

カバの様にやや厚い唇。

アフリカ系にしては尖った鼻。

その下には常人とは一線を画す付き方をした肉食獣の如き筋肉。

オジロヌーのような太い骨。

キリンのように長い足。

それらすべてが彼が現代人とは違うと言う事を主張していた。

まさしく獣だった。

しかしシャツ、ネクタイ、ベストという紳士的な服装。

整えられた髪の毛。

仕立ての良い革靴。

そのアンバランスさがマキャベリは気にいっていた。

アンバランス、ということは多様性に富むということの裏返しだと

マキャベリは考えている。

自分の見てくれに対しての紳士服。

自分を育てた貧困に対する現在の裕福。

そして21世紀に対して時代を逆行していると言える自分の本名。

マキャベリ・ウェーバーはこれらを本当に誇りに思っていた。

自分の全てが完璧な生命として確立していると思っっている。

その高すぎる自己評価がダークも、また彼の死んだ恩師も気がかり

であった。

ひとたび攻撃をされれば、烈火のごとく怒るだろう。だから例えば彼が地面に跪かされるような事があるとしたら、その誇りを守るため、彼は獣になるだろう。

「良いザマだなニグロ」

そう言われれば、ジャガーの如き牙を剥くだろう。

遡ること30分程度前。

あれから静らは他の班とも合流し、ツーマンセルでさらに搜索する事にした。

というのも、相手から狙われやすくする為でもあった。

敵の使命は終わっていない。

狙われるなら静、エンポリオ、アレックスの3人だと誰もが思っていた。

静とアレクサンドロ。

アリシアとダーク。

マキャベリとエンポリオ。

この3組で搜索し、相手が襲ってくれば、即アリシア、静班あるいは他のパツシヨーネに連絡を取ろうというものだった。

そして30分後。

まんまと策に引っかけたのはエンポリオとマキャベリの方だった。決定的に欠落していたのは、【襲われた時、相手の力が自分たちを上回る】ということだ。

既にエンポリオはヴィルヘルムと、その右肩に浮かぶ拡声器による謎の攻撃によって嘔吐を繰り返し、道路にうずくまっている。

マキャベリは耳をふさぎながらろうじて膝立ちをしている。

脇には直径50cmの蓋が付いた、缶のようなものを持っていた。

「さて、だ」とヴィルヘルムは口を開く。

「これで目前の敵には敵わないと、その言葉通り【身をもって】体験した筈だ。これ以上の争いは無益だと思うが？」

「膝に力が入らねえ・・・」

マキヤベリは酷い頭痛に耐えていた。

この頭痛が、自らの三半規管を奪い、膝に力が入らない。

今や自分が上を向いているのか下を向いているのかすらわからなかった。

隣で吐き続けているエンポリオを見る。

今はグツタリとしているが、それでもとてつもなく気持ちが悪そうである。

無意識にマキヤベリは、脇にある缶にもたれかかり、体重を支えていることに気付いた。

「友人が心配か？安心しろ。聞きたい事がある。それさえ聞ければ私たちは何もしない。今スタンドの力を弱めてやろう。さあ喋れるはずだエンポリオ君」

エンポリオは苦しそうに息を吐き、それでもようやく喉の奥から「クソ野郎」とだけひり出した。

思わず「グレート」と呟いたマキヤベリだったが、こちらはもはや立っていられず、その場へたり込んでいる。

「クソ野郎で結構。答えてもらえればな」

そう言ってヴィルヘルムはエンポリオの近くまで寄って行った。

「さあ答える。君の【覚悟】についてだ。一体【誰のスタンドを使

「つて】君たちは世界を変えようとしているんだね？」

随分核心を突いた質問だと感心する半面、そんなこと自分たちにも分らなかった。

ただ一つ確信を得たことが有る。

「つていうことはさ・・・誰かのスタンド使えば変えられる、そういうことなのか？」

「驚いたな・・・どうやら君たちは少々無鉄砲過ぎるようだ。確固たる信念も根拠も無い。つまり君たちに危険を冒してここまで接触する必要も無かったと言うことだ」

これをきいてマキヤベリは「だったら逃がしてくれ」と口を効いた。吐き気と頭痛に憔悴しきつたのか、顔は先ほどより人間に近くなっている。

「口を開くなニグロ。貴様に発言権はない。いや、だが質問の意図は理解している。それを答えてやるっ」

「そりゃどうも、逃がしてくれたら3日はアンタをブチのめすのを我慢してやるぜ」

「ナメた口を効くなッ！いいか？コイツが既に【用済みだ】と分かったら、ソイツをこれ以上生かしておく理由も無いのだッ！」

今まで殺されていなかった事が如何に幸運であったかをエンポリオは知った。

コイツらは人を人と思わないのだろう。

じゃまになつたらすぐに捨てる、そういうことだった。

「最期に聞こうエンポリオ君、君の御両親あるいは親戚にアーリア人は？」

まるでその血が流れていれば救ってやるとでもないというのか。

エンポリオは自分の命を天秤にかける以前に、いつの間にか口をつけて出たのは、少しも意図をしない反射的な言葉だった。

「そんな汚らわしい民族・・・見たこともないね・・・」

マキャベリはエンポリオを見て、口笛吹いて「グレート」と呟いた。

「もう少し君は賢いと思っていたがな・・・こんな愚かな人間など例えアーリア人であったとしても生きる価値ナシッ！死ぬ貴様らッ！！」

ヴィルヘルムの右に浮いていた拡声器が、まがまがしく形を変えて行く。

それは機械的に拡張変形し、ライフルのように長い拡声器へと変わった。

形だけ見れば、トロンボーンのようにも見える。

その照準をエンポリオ達に合わせ、満足そうにヴィルヘルムは笑った。

エンポリオは自らの行く末を思うが、死ぬ覚悟なんて出来そうになかった。

ヴィルヘルムのスタンドについたメーターが上がってきている。

あれが満タンになったら自分は死ぬのだろうか、そう頭痛を抱えながら思っていた。

ブシッ！！

何か物が切れる音がして、ヴィルヘルムの耳から大きく血が噴き出した。

ヴィルヘルムはスタンドに添えていた右手を自らの右耳に持つていくと、その手にベットリと血が付いていた。

何が起こったかわからないのはエンポリオも同じだったが、肩に緑色の物体が動いているのがわかった。

- - なんだあれは？

その緑の物体は、ゴソゴソと光る何かを持っている。

何処かで見えた覚えのある緑色の物体は、何体か居るのが、互いに協力し合い、ヴィルヘルムの耳にもう一度突っ込んだ。

ブシッ！！

今度こそ悲鳴を上げてヴィルヘルムは首筋を押さえた。

首を切られたらしい。

気付けば頭痛はだいぶ楽になっており、エンポリオはマキャベリと顔を見合わせて逃げだした。

「待て貴様らッ！！・・・アッ！！クソッ！！」

その拡声器でヴィルヘルムが叫ぶと、再び二人はバランスが取れなくなり床へ二人揃って倒れ込んだ。

マキャベリの持っていた円柱状の缶が転がって鈍い音を出す。

あの材質はプラスチックだろうかと考えながらゲエゲエと吐いた。もう吐くものも無いはずなのに、車酔いを百倍酷くしたようなこの感覚は、それでも胃の底から何かを引き出そうとしていた。

これ以上の苦しみはないと下を向いているエンポリオだったが、横を見るとマキャベリが目を見張ってヴィルヘルムを見ていた。

なにやらブツブツと「ブラボー！」だの「ファイア」だの本当に小

さく眩いている。

それからエンポリオと目が合うと、ゲロまみれの顔でパチンとウインクを投げてよこした。

ヴィルヘルムはその間ダンスを踊るように足を上げては下ろし、身体全体を震わせていた。

悲痛な悲鳴も聞こえる。

一つ一つは大した傷ではなさそうだが、だんだんと切り傷のようなものだけが増えて行く。

「行けるか、エンポリオ？」

と、小声でマキャベリが聞いてきた。

エンポリオが頷くと、作戦がある、とマキャベリは持ちかしてきた。

ヴィルヘルムの悲鳴はより一層甲高いものへと変わっている。

ゲロまみれの二人は、ようやく逆転劇の幕を開いた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

34話【鎮魂歌16】（後書き）

第8部、例え主人公が静で、この物語と違う物語が語られたとしてもツ！！この物語がツ！！終わるまでツ！！連載するのをツ！！辞めません。

35話【鎮魂歌17】

AM02:01 ネアポリス G10区画

「・・・許さんぞッ！！貴様らアアア！！」

ヴィルヘルムは叫びながら悶えてはいるが、それでいてエンポリオ達の動きは確実に止めていた。

吐き気と闘いながら、マキャベリはエンポリオに計画を打ち明けた。

「いいか？俺が奴の意識を一瞬だけ逸らす。その瞬間お前は奴に一撃くれてやってくれ。失敗すれば警戒されて殺されかねない。初めての共同戦線だがやれるか？」

やれないはずは無かった。

脳みそを思い切り蹴飛ばされたような痛みと、それを渾身の力でシイクされたような衝撃がエンポリオを依然襲い続ける。

マキャベリも同じだけの衝撃を受けている筈なのに、彼の方が症状は重そうに見える。

眼の焦点も合って居ない仲間は、それでも言葉を続けた。

二言三言でエンポリオに作戦を伝えると、マキャベリは持っていた円形のボックスに手を伸ばした。

そのゴム製の蓋を開けると、そこから小さな緑色の人形が出て来る。彼は機敏な動きでマキャベリの顔の前までやってきて、年季の入った敬礼を掲げた。

「ジェームス・カーター少佐です」

「よろしく少佐。既にオペレーションは実行中だ。今取りかかって

いるブラボー1から5迄はそろそろ弾切れだろう。君にアルファ1から5、デルタ1から5迄を預ける。アルファはブラボーと合流後地上から引き続きやってくれ。デルタは空中から。後は追って指示を出す。よろしく頼んだ」

小さな緑色のアーミーは「アイサー！」と元気よく叫ぶと、ボックスの中から更にわらわらと兵隊たちが出てきた。

かなりの数が出て行ったあと、大きな通信機を背負った通信兵と護衛がマキャベリの前で止まった。

あの通信兵で他の部隊と連絡を取り合うのだろうか。

エンポリオが振り返ると、マキャベリのボックスから出てきた玩具の兵隊たちは、各々の武器を道で調達し、あるいは持ってヴィルヘルムに掴みかかった。

「ウグオオオ」と仰け反りながらヴィルヘルムは叫ぶ。

何体か引きはがしては地面にたたきつけているが、一向に玩具の兵隊たちがひるむことはない。

今は彼の腕を取って、なんとか拡声器から手を放させようとしている。

「ジエームスに伝える。引き続きオペレーション続行。アルファ1から5迄は各々ターゲット後方40。から5。つつ展開。デルタは傘下開始」

マキャベリは早口で通信兵に告げると、ヴィルヘルムの頭上に落下傘で何体もの玩具の兵隊が降りてきた。

エンポリオはこの作戦を見て心底感心していた。

「旦那、そろそろアンタの出番だぜ」

言われて気付いた。

徐々にヴィルヘルムの意識が後ろに向かっている。
追い込まれた状況で、たった一瞬かいま見える幸運の女神が浮かべるほほ笑み。

それに応えられる瞬間を確実に掴む。

それが徐綸やアナスイの背中を見て学んだことだった。

緊張するな、緊張するな。

そう言い聞かせながらチャンスを待ったが、それは思いのほか直ぐに来た。

ヴィルヘルムは自分たちよりも、先ずは自己の身体の安全を優先させたようで、より一層無茶苦茶に暴れまわっている。

今か？とマキャベリに確認している暇はない。

ただ突っ込め、とばかりに【ウエザー・リポート】をヴィルヘルムに対して飛ばした。

やれるはずだった。

「食らえッ！！」と叫ぶ中で、一瞬ヴィルヘルムと目が合う。

その瞬間奴はニヤリと笑った気がした。

「殺れる、と思っただか？」

その刹那、ヴィルヘルムの身体が反転して、手にしたトロンボーン状の拡声器が【ウエザー・リポート】のラッシュを逸らした。

・ ・ ・ 掴めなかった ・ ・ ・ 運命の ・ ・ ・ その先を ・ ・ ・

その瞬間エンポリオに詰め寄り、ヴィルヘルムは拡声器を持って彼の耳に当てた。

緑色の兵隊たちの攻撃に耐え、その上での反攻だ。

ドス黒い敵意がエンポリオの前を霧のように漂った。

何故だか明確に【死ぬ】ということが理解でき、いよいよ第六部【完】である。

床に横たわっていたエンポリオは、ヴィルヘルムに胸倉を掴まれ、半ば宙づり状態になっている。

その顔は殺人鬼のような狂気ではなく、むしろ【制圧者】のような圧倒的に虐げようとする者の顔をしていた。そして今、奴にはそれが可能だった。

「ここまで粘るとは思わなかったぞ・・・それだけ【称賛】してやるッ・・・」

「らしいぜ！良かったなエンポリオ！」

ふいにヴィルヘルムの動きが止まった。

その顔には今まで浮かんでいた【自信】や【誇り】とか全てが混ざり、【後悔】だけが表れた。

彼の後ろには大柄な黒人が立っており、この状況では不謹慎なほどお茶らけた声でエンポリオに話しかけている。

しかしその声とは裏腹に、気迫は凄まじい。

- - ライオン！？

エンポリオが思つのも無理は無い。

一瞬見紛う程に、マキャベリは【獣】に近づいていた。

「この・・・土人めがアアアアアアッ！！」

ヴィルヘルムはその負け惜しみを言ったか言わないかで、その振り返っている顔をマキャベリに左腕で殴られた。

歯が飛んで、口が真っ赤に染まる。

「相手と対峙する時は黙って殴れ。それがストリート・ファイトの【基本】だ」

それから右フックをヴィルヘルムの背後から右わき腹に一撃。

鳩尾に入ったのは必然で、これで声が出なくなることは明らかであった。

だがエンポリオは既にヴィルヘルムのスタンド能力について理解している。

彼は、直接喋らなくても、考えただけで拡声器がその言葉を拾い、相手を攻撃するのだった。

それをマキャベリに伝えなければと思うが、床に身体が落ちてしまった。

吐瀉物が付いた口が思うように開かない。

・ニグロが・・・

ヴィルヘルムの身体がクルリと回って、拡声器がマキャベリの方を向く。

・こんなところで・・・第三世界を諦める訳にはいかないのだッ！！

「誰がニグロだって！？貴様の様な野郎がいるからッ！！俺たちはいつまでもハーレムなんだよッ！！」

ヴィルヘルムの心情をくみ取ったかのようにマキャベリは相手を讃えた。

だが間髪いれず敵のスタンドを封じるため、拡声器を持つ左手を殴って弾き飛ばした。

宙に飛んでいくだろうと予測していた拡声器は、やはりスタンドらしく敵の横で止まったままだ。

その方向は今度こそマキャベリを捉えた。

「悪あがきだろうともッ！！」

一方マキャベリは、周辺に探索させておいた自らのスタンドの気配が、物凄い勢いで消えて行っていることにまだ気付いていない。

T o b e c o n t i n u e d . . .

35話【鎮魂歌17】（後書き）

さらばナチス。さらばヴィルヘルム。

こんにちはジョジョリオン。

新世紀ジョジョリオン。

逃げちゃだめなんだろうなあ。

36話【鎮魂歌18】（前書き）

遅くなつてすみません！！

更新時期が不安定ですみません。

アクセス履歴を見ると、だいたい火曜日と木曜日がケタ違いに多いので、その周期を期待して見に来ておられるのかなあと思うと申し訳なくなります。

いつそツイッターを利用した方が、読者の方にはわかりやすかったりするんでしょうか。

まあ私のツイッターは病的に気持ち悪いのでアレですが・・・

まあでも個人的には暇な時に読んでいただければ恩の字なので、たまに覗いてやってください。

36話【鎮魂歌18】

AM02:29 ネアポリス B32区画

マキャベリ・ウェーバーはスラム街で育った。

3歳で両親が離婚し、11才の時母は彼を捨てた。

しかしマキャベリは暮らしに困ることは無かった。

彼は、クラッカー（麻薬の売人）として生計をこのころ既に立てていたからだ。

学校などそもそも行っていないから教育費もかからず、毎日毎日アホな大人にマリファナを売りつけては金をせしめていた。

それは彼が母親から捨てられたという現実から【逃げたかった】のかもしれない。

そのうちハーレムのギャング達に可愛がられるようになり、ここで彼は拳銃の扱い方や女の買い方を学んだが、やはり彼が一番得意だったのはクラッカーとしての職業だった。

天性の才が有ったと言ってもいい。

最初は彼をギャング達が利用してマリファナの売り方を教えていたが、いつしか立場は逆転して彼が16才になる頃には、その地区のマーケットの責任者は彼になっていた。

そんなギャングとして絶好調に居た時、彼の元へ「高校の先生」なる人が訪ねてきた。

元々アメリカ人ではないらしく英語はただたどしかつたが、真っ直ぐな眼とハンバーグみたいな頭が印象的だった。

その先生は一言マキャベリに「学校へ入学しろ」と言ってニコリと笑った。

彼の勤める【ボン・スコット高校】の校長は慈悲溢れる人で、「スラム街に教育を」がモットーであった。

【先生】はそれを校長から命ぜられ、体現した訳である。

勿論ギャング達が黙ってはいなかった。

だがこの時マキャベリの周りにいたギャングを含め、大半のギャング達はものの1分で丸裸にされ、財布から何から何までゴツソリ恐喝されていた。

この時マキャベリには、彼の後ろに【スタンド】が立っているのが見えていた。

意外にもマキャベリはこの【先生】に勝負を挑む事はなかった。

「弱い者は逃げる」と脳の全てが指示しており、その根拠は幼い頃よりハーレムで培った弱肉強食のルールだった。

しかし【先生】は軽々とマキャベリをブチのめしてみせ、高校に連れて行った。

他のギャング達も【先生】の手によって各々の高校に入学させられた。

追って復讐してくるギャング達は【先生】に血祭りに上げられ、その度に【先生】の懐は潤った。

そしてマキャベリは【先生】の友人である【ピンク・ダーク】の邸宅に預けられ、彼ら夫妻から無償の愛を受けることとなり、ハーレムから脱却し始め時に【先生】は死んだ。

犯人捜しが始まった時、マキャベリの脳裏にあったのは「逃げる」の一言だった。

【先生】が敵う相手ではなかったということは、自分は瞬殺されるだろう事は明白である。

「兎に角逃げる」

それが彼の人生のルールであり、生物として最も原始的な危機管理能力の発現である。

彼は【逃げる】事を恥じはしない。

ただ生き残るための一手だと考えている。

- 10分前

- 「逃げる」

その懐かしい感覚に襲われると、マキャベリは脱兎のごとく逃げ出した。

呆気に取られるエンポリオの手を引いて、静達と合流すべく連絡を取り合う。

なおもマキャベリのスタンドは消滅し始めており、今南に派兵した偵察部隊のガンマ隊の反応全てが消えた。

彼らからの入電途中に通信が途切れたのだ。

おそらく通信兵から戦闘兵が根こそぎやられたのだと見て良い。

だから、相手の素性がわからない。

ただ判るのは、一瞬にしてマキャベリの兵隊らを潰せるということである。

しかしこの場を離れてはエツケハルトを見逃すことになり、エンポリオは勘だけで逃げることには疑問を持った。

「スタンドの眼を通して君には物が見えたりしないのか？」

「あれは俺のスタンドじゃない。スタンドが生み出した副産物だから、感覚の繋がりが無いんだ。だから見えない。お前の【スタンド】は出来るのか？」

マキャベリは走りながら言った。

確かに感覚は有れど、視覚を共有出来るスタンドは少ない。

居る事は居るのだ。

ただ法則はない。

エンポリオはたまたま出来る方だ。

「だったら走りながらでいい、後ろを警戒してくれ！おい足を止めるな！走りながらやれ！」

「そんなに近いのか!？」

「わかんねえ！兵隊と連絡を取ってるが誰とも繋がらない！」

マキャベリの顔に焦りが見て取れる。

後ろに広がるのは安穩としたイタリアの夜だ。

ある人々は就寝し、またある人々にとってはこれからが夜、である。流石に昼間よりは少ないが、まだ道に有る程度の交通量はある。

どこからか車の音に紛れてJ a z zが聞こえてきた。

人々は夜を楽しむ。

そして彼らを暖かくネアポリスを豊穡の黄金色した月の光りが包む。優しい、大きな月にエンポリオは少し見とれた。

そして走りながら、静からのメールでも確認するかと携帯を開いた時だった。

「ブラボー3より入電！！ビリオンと思わしきバイクが接近！！どうしますか！？」

マキャベリの顔色はどんどん青ざめて行く。

-. 逃げられないか...

マキャベリは肩に乗っていた通信兵に「ブラボー3との距離は？」と聞いた。

「後方約500メートル、6時の方向です」

マキャベリが舌打ちする間もなくそこへエンジンが高速回転する音が響き渡る。

-. 速過ぎだ。

この狭い小路を誰かがバイクで走ってきている。

ブオオオというエンジン音が段々と近づいてくる。

遠くの方でチカチカと電気が見える。

ここまでくればエンポリオも焦った。

・・・本当に来た・・・

心臓はこれ以上に無い位脈打っている。

自分の認識が甘かったことを後悔しながら走った。

噛みしめた唇は青ざめている。

ここに来てやはりマキャベリは足が速かった。

黒人特有の足のバネは、彼を狩りする黒豹の如く演出させる。

もつとも、今はエンポリオに合わせて走っているだけなのであるが。

その後ろをバイクが猛スピードで突っ込んでくる。

この狭い路地の中、バイクで走り抜くのは自殺行為に等しい。

だが彼はそれをやってのけているのだ。

バイクはより一層近づき、今やエンポリオ達との差は100メートルと迫った。

「追いつかれるぞ!!」

エンポリオがマキャベリに怒鳴ると、彼は後ろを振り返りながら兵隊たちに何かを命令した。

それからエンポリオを振り返って「やるか」と眼で訴えかけて来る。軽くうなずき、「このまま走り続けてくれ」と、マキャベリに言った。

マキャベリは応え、二人はバイクに背を向けたまま一層足を速める。ブイブイインとエンジンが更に高速回転する音がした。

きつとスロットルを絞ったに違いなかった。

目の前に自分たちの影が出来る。

ヘッドライトが彼らの影を映し出しているのだ。

距離はあと50メートルを切っただろうか。

ギアアアアアアというギア音が、マキャベリの内臓をゆすった。

ハーレムで培った第六感が【逃げる】と強く語りかけるが、エンポ

リオは今だにちらちらと後ろを気にしている。

こんな時に何悠長に・・・と仲間の危機感を呪った。

だがその意図を同じく第六感が教えてくれた気がした。

- - あ、そういうことか。

一度納得してしまえば、おそらく簡単な作戦になるだろうと思ひ、マキャベリはその策を演出するため走りながらベストを脱いだ。

それを啜えながら、いつの間にかあの兵たちが出て来る箱を抱え込み、その箱から出てきた彼らにそのベストを渡した。

「やっちまえッ！【ライク・ア・トイ・ソルジャアアアアアズ】
ッ！！！」

マキャベリはガバアツと箱を開けると、そこから何人も兵隊が飛び出す。

途端、ガギャンとバイクに急制動がかかり、後輪が跳ねあがった。高速でバイクが「前周り」をしたのだ。

兵隊たちはマキャベリから飛び降りた時、その速度を落としていた。当然各々はバイクとすれ違ふ事になるわけだが、彼らはその瞬間、バイクの前輪にベストを巻き込ませた。

これにより前転したのだった。

「今だエンポリオッ！！！」

「【ウエザー・リポオオオオトッ】！！！」

エンポリオは急に後ろを振り返り、宙に浮いたバイクと搭乗者に向かって思い切り拳を振り抜く。

親友であるアレックスの技の応用である。

そのバイクの速度。

足すことの振り抜く威力。

その破壊力は速度に比例する。

「グワツシヤアアアアン」

確かな手ごたえがエンポリオの拳に感じられ、バイクの部品のひとつは爆散して宙に広まった。

計器類、エンジン、フレームはひしゃげ、タイヤはパンクしている。それらがショットガンの弾のようにエンポリオ達の進行方向へと流れ、鉄の塊が雨のように注いだ。

ガガガガと鋭い金属音と共に、何か大きなものが落下する重量音がする。

ぱつと二人が振り返ると、バイクの部品達が無残に広がっていた。

「ザマアねえ。」

マキャベリが毒づくが、エンポリオは何かにうるたえているようだった。

すると通信兵が「総帥!!!」と耳元で叫んだ。

「後方に人影発見!!!ビリオンかと思われます!!!」

「... 乗り捨てやがったなツ!!!」

後ろを振り返ると、長身の男性が立っていた。

年の頃は30前後だろうか。

かなり大柄であるが、優しさを携えた眼が印象的である。

恩師の仇を目の前にしてそう感じるのは自分でも不思議だった。

しかしマキャベリが気に食わないのは、彼の髪型である。

まるで恩師を挑発するかのようには、ソックリな髪型である。

気付けば歯ぎしりをしていた。

「テメーかッ！！ビリオンってなアッ!？」

男は対して頭が良さげには見えないが、ハッキリとした口調で応えた。

「・・・俺がビリオンだったらバイクを壊しても良いって言うのか？」

口調こそ軽々しいが、彼の横にはスタンドが現れていた。

ローマ人のように剛健さを持ちながら、やはり何処か慈愛を感じさせる不思議なスタンドだ。

「さて問題だクソガキ共・・・俺様のバイクを粉々にしてくれたことアどうでもいい。もつと言えばヴィルヘルム達を再起不能にしてくれたことも俺的にはどうでもいい。それでも俺がお前たちを追う理由が何だかわかるか？」

エンポリオがマキャベリの横顔を窺うと、先ほどまでの獣さとは違う、もつと人間臭い怒りを感じ取った。怒り、いや恨みとでも言うべきか。しかしそれ故に恐ろしい形相をしていた。

「・・・【さて問題だ】だと？俺は今ッ！！完ッ全にプツン来たぜッ！！二度とそんなセリフ抜かすんじゃないやねエッ！！そりゃあ【先生】の口癖なんだからよオ！！」

「問題を出したんだ。答えろよ」

「ならこう答えさせてもらっぜ・・・テメーは俺達を殺しに来たッ！！だから俺達もお前を殺すッ！！グレートに！！ゴージャスにな

しかしその時は既に遅く、マキャベリはエンポリオの助言を聞いても口の端でニヤリと笑うだけで、尚も彼のスタンドはビリオンへと突っ込んだ。

- - スタンドが傷付けば、本人もまた傷付く。

その大原則が頭をよぎり、エンポリオはマキャベリに駆け寄った。

T o b e c o n t i n u e d . . .

36話【鎮魂歌18】（後書き）

ボン・スコット高校のボン・スコット

昔のAC/DCのヴォーカル。かなり前に亡くなりました。今は
ブライアンがヴォーカルやってますが、私は彼の声も好きです。

っていうかオクヤスをこんな形で出すとは連載開始当時の自分もサ
ッパリ。

37話【鎮魂歌19】（前書き）

遅くなりました。

37話【鎮魂歌19】

AM02:29 ネアポリス B34区画

「辞めるマキャベリ！！辞めると言っているんだアーーーーーッ！！」

【ライク・ア・トイ・ソルジャーズ】を突っ込ませたマキャベリは、エンポリオの悲痛な叫びにも応えず、ただひたすら手元の箱から兵士を「撒き」続けていた。

尚も円柱状のおもちや箱からは、緑色をした兵隊の玩具が相手に向かって進んでいる。

兵士は走り、よじ登り、空からビリオンを攻めた。

エンポリオは急いでマキャベリの肩口掴み、静からのメールを説明するが、マキャベリは辞めようとしなない。

兵隊はいよいよビリオンの足元迄届いた。

しかしビリオンは眉ひとつ動かさず、これを構えたスタンドの右腕で殴り潰していった。

兵隊たちの小さな悲鳴が聞こえる中、ビリオンは淡々と兵隊たちを撃破していく。

「なんとなく見た目が懐かしいスタンドだぜ・・・潰すのが惜しいな」

「そりゃ良かった。もうちょっと堪能していけよ」

「遠慮するぜ全く・・・」

ビリオンとマキャベリは互いに睨みあっている。

ピリオンはその間熱心に兵隊たちを潰し続け、何か対策を考えているようだった。

エンポリオはその二人を見て、自分が入り込む余地が無い事を悟った。

少なくとも、これ程度距離が離れていれば対策の取りようが無いし、何よりマキャベリが考えているであろう戦略を邪魔出来なかった。依然マキャベリはずっとピリオンを睨みつけている。

その肩で小さなグリーン・アーミーがコソコソと通信機へ向かって通信をしている。

やがてマキャベリの左ほほがピクリと動いたことにエンポリオは気付いた。

そこへ焦れたようにピリオンが軽口叩く。

「この貧弱なスタンド、お前のなんだろ？じゃあ全部潰しちまったら・・・お前死ぬよな？今のうちに引き上げ解いた方がいいんじゃないか？あねえのか？」

マキャベリは眉間に皺をよせながら「この数全員潰せやしないさ」と応えた。

「いいから黙って俺にやられるよ、このハンバーグ頭」

「・・・一回警告したんだ。死んでも恨むなよ」

ピリオンは右手を下げ、「食らえエエー！」「叫びながらその腕を右に振った。

空を裂くような轟音が、ガオンと空間に響き渡る。

兵隊たちは散り散りに霧散し、このパンチ一発で相当数の兵隊たちが死んだ（壊された）。

霧散した兵隊達は、ただ殴られただけとは違い、各々恐ろしい勢い

く端から更に網をかけて行く。

「発想は良い……だがイタチごっこだ。直ぐに解いてやる……ッ！」

ビリオンは素早く自らの肉体を使って網を解いて行くが、それを聞いたマキャベリは、慌てることなくニヤリと笑った。

「ハッ……イタチごっこ、だから良いんだぜビリオン。お前は勘違いしている。お前が網にかかりつきりになっている、ってところがポイントなんだが気付いたか？もう遅いんだが……だろ、エンポリオ？」

黒い煙、いや黒い獣に、ビリオンは網目の細かい間から見えたかもしれない。

ゆっくりと黒い、靄の様なものが自分に覆いかぶさってくるような錯覚。

しかし実際の速度はこれよりも数倍速い。

ごうん

と腕だけでなく、身体で風を斬る音がビリオンの耳に届いた。

だが体中の毛穴から汗が噴き出すのを感じ、彼の第五感がアラートを鳴らす。

マキャベリの眼には、絶妙のタイミングで突っ込むエンポリオの姿が目に入る。

それは目配せした瞬間だった。

エンポリオの身体が、踏み込みと共に深く沈み、上体を右にひねって跳ねる。

一步、そして二歩目で更に足に力を入れて前へ跳躍する。
ここまでで0.17秒。

そして三歩目で踏み込んだと同時に、まるで伸ばしたゴムが一瞬で戻るかの如く、エンポリオは上体を左にひねり、右腕をビリオンへ向かって殴り貫いた。

彼のやや前方にはローマ人の彫像のように筋骨隆々とした半透明の男性型スタンドが、その筋肉を余すことなく前方へ向かって右拳を押しだしている。

その綺麗な「突き」は、マキャベリの目から見ると、まるで彼らの筋肉全てが、この右パンチ一発のために存在しているかのような、衝撃音を轟かすパンチだった。

「痺れるぜエンポリオ・・・」

マキャベリは自らの作戦が成功したこと、また戦友と共に一撃を打ちだせたことにひたすら満足していた。

やり遂げた充実感が彼の血管を巡り、ほてった体を更に熱くした。血流が肉薄して感じられる。

勝利がそこにあった。

「・・・アアツ!!」

が、エンポリオの低い悲鳴が鈍く漂う。

完全に勝利しきった、と感じていたマキャベリは、自らが置かれている状況を把握するのに遅れた。

その呆けた顔のマキャベリは、凄まじい勢いで自分の持っている箱に異変が起きたのに気付く。

そこには、確かにビリオンにかけていた筈の網が、まるでビデオの逆再生を見ているかのように箱に吸収されていく。

居た。

言うなりビリオンは着地する前にマキャベリの箱を蹴り飛ばす。箱はベコンとへしゃげて、マキャベリの手から吹っ飛んだ。

同時に、見えない力に吹き飛ばされたように、マキャベリも同じ方向へ吹っ飛ぶ。

「その箱がスタンドだったとはなあ・・・道理で無尽蔵に兵隊たちを殺しても、お前がダメ　じ受けない訳だぜ」

マキャベリのスタンドは、実はその箱であった。

群衆型のスタンドであれば、各々が受けたダメージは小さな傷となつて本体へと現れる。

だがマキャベリにとつての兵隊たちは、【箱】の生み出したスタンドの副産物であり、彼の箱こそが【ライク・ア・トイ・ソルジャーズ】だったのだ。

「Damit.....」

マキャベリは立ちあがろうとするが、元々彼のスタンドは耐久力が低いため、ダメージを受けると何倍にもなつて本体へ帰ってくるのである。

立ちあがれるはずは無かつた。

「エンポリオ君が居れば、お前みたいな出来そこないいらねえわ」

ビリオンがそう言って、壁際に叩きつけたマキャベリの顎を右手で掴んだ。

その手に力が入り、やがて首をへし折るかその時、ビリオンの上空から看板が落ちて来る。

かろうじてこれを避けたビリオンは、念のために更に距離をあけた。

ザッザッザと駆け寄る音がし、小柄な男性が走ってマキャベリに近寄る。

「おい大丈夫かッ!？」

「ああ・・・いつも迷惑かけますね・・・ダークさん・・・」

走り寄って来たのは、先ほどエンポリオからメールを受け取ったダークだった。

その姿を見てマキャベリは安堵の表情を見せるが、驚いた顔をしているのはビリオンの方だった。

ここに来て初めて彼の顔に、深い困惑と何かを思い返すような色が浮かんだ。

ダークはマキャベリの上半身を両手で支えていたが、これをゆつくりと床に横たわらせ、いつもよりさらに厳しい視線をビリオンに送った。

今にも人を殺しかねないような面をして立っている。

「テメエ・・・次はウチの息子に手を出す気かよ・・・」

「・・・お前の息子だとは知らなかったぜ」

「次から次へだ・・・テメーは次から次へと俺の大切なものを壊しやがる。だが最初にテメーが壊したものを覚えているかッ!？これは復讐劇だ。俺がお前に対する。それを始める前に、あえて一番最初にお前が壊したものを質問させて貰う。いいなッ!？では聞こうッ!！」

ダークは声を張り上げ、怒気を隠すことなく、その自らが持つ殺意を全て声に乗せて叫んだ。

「何故だッ!? 何故億泰を殺したッ!!! 丈助ッ!!!」

路地裏に怒号が響き渡る。

今にも沸騰しそうなダークの顔を見て、やがて落ち着いたように丈助と呼ばれたビリオンは応えた。

「久しぶりなのに良く分かったなあ・・・な? 康一?」

康一と呼ばれたダークは、ギラギラとその目を輝かせ、確固たる殺意を持って、丈助を睨んだ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

37話【鎮魂歌19】（後書き）

丈助

第四部主人公。ビリオン。裏切り者。

億泰

第四部に出てきた仲間。

康一

ピンク・ダークの名は露伴の漫画より拝借。

38話【鎮魂歌20】（前書き）

遅れてすみません。

38話【鎮魂歌20】

7カ月前 12月22日 イースト・アンドウエスト・トリビューン新聞社 ニューヨーク本社

机の上の電話が鳴ると、男は顔をしかめた。

- - またか・・・

ため息ついて受話器を取る。

受付の交換手が、相変わらずの低い声で用件を告げる。

「Mr. ヒロセですか？」

「またワイフからですか？ワイフだったら今外出中だと言って切ってください」

今日で何回目の電話だろうか。

焼いてくれるのは嬉しいが、何度も職場に電話されてはいささか仕事に支障が出る。

イースト・アンド・ウエスト・トリビューン誌のNY担当記者、広瀬康一は思わず受話器を置きそうになる。

5年前、日本の仙台支社から大抜擢されてニューヨーク入りした康一だったが、ニューヨーク入りしたのは彼だけではない。

妻の【由花子】もまた、彼と共に渡米を選んだ。

住み慣れた杜王町（現在は杜王区であるが）を離れるのは寂しいものが有ったが、何より古い友人達が「行って来い」と背中を押してくれたのがきっかけになった。

それに、アメリカに縁が無いわけでもない。

- - 世話になったと言えばジョセフ・ジョースターさんだ。

高校時代の友人である東方丈助の父に当たり、康一の住むマンションの手配をしてくれた人である。

彼とは共に杜王町を殺人鬼から守った仲であり、またイタリアへのスタンド使いの調査など、細々とした用事を康一に与えてくれた。た。

それだけジョースター家が彼を信頼していたとも言える。

縁はそれだけではない。

高校時代の友人である虹村億泰は、ニューヨークで高校教員として働いている。

彼とは仲が良く、大学では教員資格が取れるように康一が勉強を見てやったものだった。

そして何より東方丈助である。

探検家である承太郎の勧めで、丈助もまた同じような仕事を歩んでいるらしいが、色々あつて康一はここ2年ほど丈助とは連絡をとっていないかった。

「・・・聞いておられましたか？」

いつの間にか康一は昔の記憶を頭の隅から引き出して、それを夢想していたようだ。

それほど彼にとって、高校時代は思い出深い。

それを慌てて取り繕い、もう一度相手に同じ用件を尋ねた。

「ですから私はこう申し上げました。【ボン・スコット高校】のアングス・ヤング校長からお電話です。用件は、【ご友人が亡くなられた】件について、と」

身体に雷が走ったような衝撃を受けた。

康一には突然過ぎて、「直ぐに繋いでくれ」と言うのが精いっぱいだった。

7カ月前 12月22日 PM4:00 【ボン・スコット高校】

応接室

「イタリアンブレンドです。彼は、これがめっぼう好きでしてね」

アングス・ヤング校長は、ソファに力なく座る康一にコーヒーを手渡した。

校長は自分もソファに座ると、深いため息をついた。

しばらくの間、二人は言葉なくコーヒーをすすり続けた。

「・・・その、なんですか。私も生徒の死に立ちあうことが年に何度かあるんです。多くはギャングの抗争に巻き込まれたんですが、その度ギャングから足を洗わせられなかった子どもたちへの罪悪感が襲うんです。私はそういうとき、自分の無力さが本当に悔しい。ですが今回は彼らの死とはまた違う、ただただ悲しいんですな。朝から何も考えられないのですよ。彼は貴方にとっては勿論だが、また私にとっても良き友人でした。あの屈託のない笑顔、憶えていますか？ヘタクソな英語でソーリーなんて悪びれも無く謝るわけですよ」

「・・・高校時代から変わっていませんよ。そのへんは」

「そうでしょうとも。子どもらしさを残した、素晴らしい先生でした。特に身よりの無い子どもたちには優しくですね。ウエーバー君は確か・・・」

「私の家で預かっています」

「ウェーバー君を連れてきたのも彼でしたなあ。ときにタイリョータイリョーと嬉しそうに眩きながら10人以上の生徒を高校へ引きずりながら連れてきましてな。常に人をワクワクさせる天才でした」
今まで話した事は無かった校長が、自分に思い出話をしながら涙を流して友人の死を悼んだ。
校長の言葉を聞いて、康一もまた、涙を流してしまう。
二人の大人の啜り泣きが、応接室の中に響いた。

「ウツ・・・ウツ・・・」

一人の死がこれほどまでに大きい出来事だとは、今まで思ってもみなかった。

泣いていても始まらない、とは判っていても、この涙を止めることが康一には出来なかった。

もう会えない、という事実が胸を締め上げる。
今は後悔しかない。

ハア・・・と校長はため息ついて、首を振る。
気持ちに整理が付かないのは、彼も同じだったようだ。

「・・・警察はなんと行っておられますか？」

「警察ですか？ああ、あの犬どもめ・・・さんざん彼のアラを探そうと努力しましたが、先ほど遺体と一緒に引き上げて行きましたよ。どうも、ギャングに帰り打ちにされた、あるいはドラッグの利権に彼がからんでいたというシナリオで事件を処理したいようです」

「目撃者が居たとか・・・」

「ええ、遠くからホームレスが一人見ていたそうです。大柄な男二

人が外国語でもみ合っていて、その内一人が・・・」

「億泰君だったと・・・」

二人の間を再び沈黙が満たした。

やがて授業のチャイムが鳴ると、康一は部屋を出ようと席を立った。自分に電話をくれたことにお礼を言い、また近いうちに会おうということになった。

握手を求めてきた校長の眼がしらは、未だ濡れていた。

「ああ・・・そういえば遺体は、見られましたか？」

「まだですが・・・拝見できるものなのでしょうか？」

「彼には親族が居ませんから、特別縁故者とも言えば対面できるかと思えますよ。是非会って行ってやってください」

そう言うと校長は再び噎び泣き始めた。

「校長は拝見されましたか？」

「しましたが・・・奇妙な死に方でしたよ。腹部に大きな穴が空いていて、背中の方が現場のコンクリートと癒着しているらしいんですな。信じがたい事です。神父様は奇跡の御業だとおっしゃっていましたが・・・」

康一の背筋に冷たいものが走った。

神の御業？

絶対にある得ない。

何かに似ているなと思う。

それはかつて友人の一人が、人知を超えた【スタンド】という超能力で作った岩だ。

人と岩を混ぜた岩、なのである。

「アンジエロ岩・・・？」

窓には雨筋がつたつてくる。

やがて雪になるだろう。

7ヶ月後　ネアポリス

やはり丈助の拳は、康一にとって脅威であった。

闘い慣れているというのか、兎に角自分に触れさせないように中距離を保って康一と対面している。

こうして互いに戦う中、徐々に顔を突き合わせて、康一は思ったことがある。

それは、丈助の髪型が変わっていることだった。

前までポリシーとしていたリーゼントではなく、今は側頭部を刈り上げて、頭頂部を短いモヒカンにしている。

「答える！！何故億泰君を殺したア！！」

康一は近くに有った小石を丈助の頭の上に投げ付ける。

それを「エコーズ！！」と叫ぶと、急に小石は軌道を下へ変え、確かな質量をもって丈助に襲いかかった。

あぶねえ、と丈助が避けたところに小石が落ちると、道のタイルにひびが入った。

まるで、超重量の鉄でも落ちてきたかのように。

「悪いが康一・・・それは言えねえ。聞きたきゃ俺を殺せ」

「じゃあそうしてやるよハンバーグ頭」

男が二人、真剣に殺し合いをする。

その空気がこれほどまで張りつめるものだと、マキャベリは予想していなかった。

これまで自分たちがやってきた、【命まではとらない闘い】など、お遊戯に等しい。

今日の前で繰り広げられるのは、純然たる【命の奪い合い】であった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

38話【鎮魂歌20】（後書き）

イースト・アンド・ウエスト・トリビュン
ステイールボールランのスポンサー。

39話【鎮魂歌21】（前書き）

仗助が丈助になっていたとのご指摘ありがとうございます。完璧に
ただのミスです。本当にごめんなさい・・・

39話【鎮魂歌21】

AM3:00 ネアポリス B34区画

- 何発食らった…？

康一が身体を見渡すと、打撲傷が至るところにあった。

原因は単なるパワー負けだ。

せめて一度でも仗助に触れる事が出来れば。

そう思っているが、なかなか出来ない。

いや、康一はわかっている。

賭けなのだ。

それを認めたくない自分がいる。

つまりこうだ。

今はクレイジーDのパンチをエコーズで防いでいるが、これを解いて、エコーズで必殺技を叩き込めばいいのだ。

この必殺技こそ『3 FREEZE』である。

エコーズACT3がある構えをした後に、全力で相手に拳を叩き込む。

拳によるダメージは無いが、しかしエコーズの能力は、殴ったものを（スタンド体含め）重くできるのである。

ただ防ぐので手一杯なものと、仮に防御を捨てたとして、あのクレイジーDのラッシュに耐えつつ相討ち覚悟で仗助にパンチを叩き込めるだろうか。

だから賭けなのだ。

今また仗助と距離を取った。

康一は手近な物を投げつけながら後ろへ2mほど下がる。やはり仗助は、させるかとはかりに距離を詰めてくる。

「こつちだッ！」

エコーズに防御させながら、仗助に向かって康一は転がっている鉄パイプを横風ぎに払う。

攻撃中のクレイジードで防ぎきれない為仗助は一旦身を引いてかわした。

その隙に康一はもう一度距離をとる。

勿論距離を稼ぐ為、鉄パイプは仗助に投げた。

「エコーズ！」と叫ぶ。

「了解シマシタッ！」

康一と同じ位の身長をしたスタンドが、拳法の構えに良く似たポーズを繰り出そうとする。

が、しかしそこへ「ギューユューン」と風を切る音がして、50cm程度のコンクリ片が飛んできた。

「避けるエコーズッ！」と叫んだが間に合ったかどうか。

「…S・H・I・T」
トレン

エコーズは構えの途中、随分間の抜けた恰好でふっ飛んだ。

しかし感嘆の声もなく、仗助は追撃せずにクレイジードと共に構える。

「…構えは完成したのか？…いやな賭けだぜ。」

一瞬だけ迷った仗助だったが、康一は血を吐き吹っ飛ぶのを見て、賭けに出た。

相手はコンクリ片の慣性の法則に従い、まだ空中を横滑りする。康一が少し離れた所で咳き込みながら地面に叩きつけられた瞬間だろうか。

仗助は渾身の力で地面を前へ踏みきり、康一の身体へ襲いかかった。未だせき込み倒れている康一は、いよいよ四肢に力が入らないようである。

- - 康一 . . .

仗助は拳を振り上げながら、その脳裏に映る、在りし日の自分たちを想った。

それは杜王町での出会い、ぶどうヶ丘高校での生活、町を守るために戦い、また傷つくことも多かった。

それらすべてを一身に想いながら、億泰の顔がまた浮かぶ。

億泰は最期、自分になんと言ったのだったか。

そして今康一は、最期に自分へ何を言って . . . 散るのだろうか。

後悔と、寂しさと、すまなさと、それでも拳を止められぬ覚悟を置いておき、仗助は康一目指して駆ける。

耳にはゴウゴウと風が鳴る音しか聞こえない。

同時刻 ネアポリス B 2 1 区画

エンポリオのシャツは、マキャベリの吐く血で真っ赤になっていた。それでもエンポリオは彼を担いで逃げているところだった。

マキャベリの顔は、苦しそうであるが、それでも先ほどよりは幾分ましになっている。

こうしてエンポリオは友人を気遣う半面、自分たちを逃がしたダーク、いや康一のことを慮った。

康一は自分たちを助けに来てから、ビリオン、というか仗助と応戦しつつ逃がしてくれた。

仗助と呼ばれた男は、多少なりとダークと交流があったようだし、またそれがゆえに二人の関係が奇妙に複雑化しているのだと理解している。

だが現に、こうしてエンポリオが逃げられていることを思うと、やはりビリオンにとってもダークの登場は、本来の目的を見失うほど衝撃的だったのかもしれないと推測できる。

「ハア・・・ハアアアアア・・・アツ・・・！」

マキヤベリがエンポリオから体をはがそうとして、肩を降りた。そのまま壁にもたれかかる。

息遣いは死にそうとまではいかないものの、かなり荒い。

「おい大丈夫か!？」

「ああ・・・それより・・・ダークさんが危ない・・・」

それはエンポリオにも分かっていたのだが、しかし血反吐を吐く友人を担いでいてはどうにもできない。

助けに行く事すらも。

「いや・・・俺を置いていくのは勘弁してほしいんだが、さっきから妙に想っていたんだ・・・。お前さ・・・携帯電話、あんだろ？」

「・・・ああそうか！」

「じゃあ悪いんだけど・・・助けを呼んでやっっちゃあくれねえか

？・・・俺の、初めてできた親父、なんだ」

マキャベリは、血で汚れた口元でニヤリと余裕ぶって笑ってみせると、少しせき込んだ。

ネアポリスのレンガでできた道路を、その血が汚す。

エンポリオは急いで携帯を取り出してコールする。あせって指がうまくボタンを押せないが、それでも何とか上司の番号を押すことができた。

トウルル、と鳴る呼び出し音が、ひどくもどかしい。

「ウルルルルッ・・・ルルルルッ・・・」

「・・・頼むッ！」

きっかり6回鳴り終えたところで、ブツツという音声が開通した時独特の音がすると、一気にエンポリオはまくしたてた。

「ミスタさんですかッ！？今すぐ応援をください！！ピリオンが、今ダークさんと・・・」

「エンポリオか！？無事なんだな！？」

「僕たちはいいから・・・マキャベリはちよつと負傷しましたがけど、でもそれよりダークさんを！！じゃなきゃ、殺されちゃう！！」

するとマキャベリが、喉に痰を絡ませたようなダミ声で「滅多なことと言ふなよエンポリオ」と叫んだ。

続けてゲホゲホとマキャベリは咳き込む。

「・・・お前たちがいるのは21区画辺りだな？」

「そうですねけどダークさんはもっと向こうに・・・」

「いいかエンポリオ、お前たちは今すぐ大通りを上がってこい。しばらくすると肉やが見えるから、そこに入って待ってる。そしたら迎えに行く」

「アンタは一体なんの話をしてるんだよミスタさんツ！！僕はダークさんがヤバイって言ってんだろツ！！」

あまりの話しの伝わらなさに、思わず涙声で怒鳴ってしまうエンポリオだった。

今一人の命がかかっているときに、どうして保身など考えられようか。

それも友人の父親が、である。

そこにエンポリオは、孤児である自分にはないもの、だがとても価値のある大切な絆を守らなければと想っていた。

だから何度も涙を流しながら叫んだ。

ダークを、ダークを助けてやってくれと。

それをもはや倒れかかった状態で聞いているマキャベリの目には、うつすら涙が浮かんでいた。

感涙など、今までしたこともなかった。

「・・・落ち着いてくれエンポリオ。俺の話を聞け。今すぐ安全な場所へと行くんだ。お前の身は【パッションネ】が守る。今すぐ行動に移せ。今すぐだ」

「だからダークさんが・・・」

「ダークなら大丈夫だ。パニクるな。絶対大丈夫なんだ」

「どうしてそんなことが・・・」

「ダークがいるのはB34区画だな。わかっている。さつき『彼から連絡を受けて、もう応援が着く頃』なんだ。嘘じゃない。ちゃんとお前たちを助ける前に、彼は俺たちに連絡をよこしている。そして今向かっているのは【パツシヨーネ】の中でも最強の幹部。最強なんだ」

「え・・・誰が行ったんですか！？ジヨルノさんが!？」

「いいやジヨルノじゃあない。だがな、最強なんだ。それは俺が一番よく知っている。だからお前たち子供はもう休め。今から俺たち大人がお前らを守ってやる。大人しくしている。いいな？」

そう言っつて電話を切ると、エンポリオは黙ってマキャベリの肩を担いで、また歩き出した。

その間二人はダークの無事を祈りながら、そして互いにそれを希望的観測に基づき裏付けながら、【パツシヨーネ】のアジトを目指した。

後のことはすべて、大人にまかせることにしたのだ。

AM3:15 ネアポリス B34区画

「アンタが仗助、だっけ？」

そう言うと、女は康一の前で盾になるかのように立ちはだかった。しかしその顔には余裕があふれ、どこか気だるそうにも見えた。まるで柳のように、吹いたらなびくような体つきである。

しかし仗助は、先ほどから受けている攻撃で、自分がどう攻撃していいのかまったく理解不能だった。

目の前の柳が、仗助にとっては攻略不能の城砦である。

その仗助を前に、女性が続けた。

「まだやる？」

「・・・お前こそ勝算あるつもりか？」

女はため息をつくと、まるで心底馬鹿にしたように、仗助にある『鉾物』の常識を話し始めた。

今赤みがかった髪の毛を書き上げると、それは炎のように逆立つ。

「ダイヤモンド、ってあるわよね。世界で一番硬い物質よ。きらびやかで、品があつて、それでいて傷つかない。でもこんな常識をこ存じかしら。ダイヤモンドってね？その原子配列ゆえに、外部からの『衝撃』には脆いの。その強さは簡単に崩れてしまうただの見せかけ」

「何が言いたい？」

「アタシはホンモノよ。絶対に砕けることのないホンモノ。言うときかないなら、それをアンタにレクチャーしてやるうって訳」

「俺と殴りあつて？」

「そうね」

「アンタ名前は？」

「トリツシュ・ミスタ。【パツシヨーネ】の幹部様よ。役不足かしら？」

「・・・グレート」

T o b e c o n t i n u e d . . .

39話【鎮魂歌21】（後書き）

昔の読み返してたらやっつけくさいのとかあって恥ずかしいです。
なんで、なんでこんなに文章がへたくそなんだろっ・・・

40話【鎮魂歌22】（前書き）

遅くなつて済みません。

今書き溜めておりますので、次もすぐあげられると思います。

40話【鎮魂歌22】

AM3：15 ネアポリス B34区画

俺は思わず左足を一步引いた。

相手は構えすらせず、腕を組んで嘲笑している。

相手の余裕ぶりには、絶対の自信をのぞかせるものがある。

それに恥ずかしい事に、いつの間にか左まぶたがピクピクしていることに気が付いた。

まさかビビった訳じゃねえ。

いや、ビビっている、のか？

とにかく得体のしれない能力だった。

およそ出会ったことがない能力だ。

クレイジードのパンチが効かない、いや、効果が有った無かったすらわからない。

ただ事実として、康一への攻撃が防がれたのは間違いなかった。

後ろからやってきた女。

空中に投げだされたパレオ。

沈んだ康一。

何が起こったかを理解するんだ。

数分前、仗助が康一に襲いかかった時、仗助は必殺のつもりで一撃を繰り出していた。

そのクレイジードの拳が康一の胸を貫く瞬間、その拳と康一の間には、まるでファウルフラッグが投げ込まれるかの如く、豹柄のパレオが投げ込まれた。

それが女性を着飾らせるパレオなのだとしたら、拳は布を突きぬけて、康一の胸は大きな穴を空けて血を吹きだしていただろうから。

だが実際は、【およそ物理的に、起こりえない】事が起きた。

その振り抜いこうとした拳にパレオがまわりつき、何故かそのまま振り抜けず、威力を減殺した上で康一に当たった。
- - じゃあなんで康一にはダメージが無かったんだ？

それはパレオが【無限に伸び】て仗助のクレイジードの腕をからめ捕った後、康一の身体は拳が当たると同時に、地面へ沈み始めたのだ。

まるで泥沼に入って行くかのように。
むしろ水だろうか。

仗助の感覚では、【水面を殴ったかのよう】だった。
とにかく、ネアポリスの堅甲なレンガ道と、決して砕けないクレイジードの拳。

これに挟まれれば、いかに硬い物でもその分子結合を諦める事しかできない。

その筈だった。

そして数分後。

仗助はその答えをまだ出せていない。
まさか砕けないという能力なのか？

その疑問に気を取られていた一瞬の隙だった。

シユツという音と共に、人影が動いた。

冷や汗を誤魔化す暇も無く、仗助は襲いかかられる。

「シツ！！」という短く息を吐く音がして、トリツシュの後ろに居たスタンドが殴りかかってきた。

これをクレイジードで防いだ仗助は、右のアップパーを繰り出すがいやに人じみたトリツシュのスタンドは、これを易々と避けた。

すかさずそのスタンドは右のハイキックを叩きこむが、これはクレイジードの片手ガードでは防ぎきれなかったようで、仗助は吹っ飛ばされる。

「・・・ヤレヤレ」

初めてトリツシユの側に居るスタンドが喋り始めた。

良く見ればのっぺりした顔の中で瞳が生きて見え、それから胸のふくらみ、四肢の肉付き方から、生々しい女性っぽさを感じ取ることが出来た。

人の形をした虚像、というよりは、最早人に見えた。

「先二聞イテオク。アンタノ【スタンド】八時ヲスツ飛バシタリ、ワタシ達ヲ、パラルルワールドニ引キ込ム事、ソレヨリモツト凄コトハ出来ル？」

「何を言い出したんだこのスタンドは・・・？」

「出来ナイナラ、忠告シテアゲル。力任せニ殴ルコトシカ出来ナイノナラ、絶対ニ私達ニハ勝テナイ」

そう言うと女のスタンドは、先ほど康一を襲ったコンクリート片を拾いあげ、思い切り吹っ飛ばされた仗助に向かって投げつけた。ヴオン、と風を唸らせてコンクリ片が飛ぶ。

「・・・何かがヤバイ・・・弾き飛ばせッ！【クレイジー・ダイヤモンド】ッ！！」

直感で、普通ではない何かを感じた仗助は、自分のスタンドにコンクリ片を弾かせようと指示した。

身体が投げだされた状態では満足に迎撃も出来やしない。

【クレイジー・ダイヤモンド】が右手のチョップで払いのけた瞬間だった。

ゲニヨン

コンクリ片は真ん中から溶けるように折れ、まるで引き延ばしたゴムのようになつた。

どころか右手を支点にして、コンクリの両端はそのまま引き延ばしたゴム、あるいは粘着性の高いスライムのように【無限に伸びて】
仗助の身体まで襲つた。

ポドンツッ！

仗助の身体に接触したコンクリ片は、叩きつけられたスライムのよ
うにペチャンコになつて仗助の身体に当たる。

・・・やわらかい！？

とっさのガードの上に、外傷は無くとも重い質量の物が飛んできた
【衝撃】はあつた。

それは確かに仗助の胸を圧迫し、確実にダメージを受けた。

「ゲホツ・・・ゲホツ・・・」

少し咳込むが、なるほど大体相手の能力は分かつた。

しかしそれが故に、仗助は「これほど相性の悪い相手は居ない」と
悟つた。

相手が余裕そうに傍観する中、それに甘えて仗助は身体を起こした。

・・・口ん中切れてら・・・

「これで分かつたかしら？」

「勝てないって事をか？ただ物を【柔らかくするだけ】しか取り柄
の無い能力なのか？」

これを聞いて笑ったのは、意外にもトリツシユのスタンドだった。さもおかしいかのように、口に手を当てて嘲笑する。

「才前八何モ理解シテイナイ」

「いや、そうでもない・・・」

「一瞬逃げも考えた仗助だったが、何か重要なヒントが隠されている気がしてならない。」

「というか、意外にも呆気なくカタがつきそうだった。」

「理解していないのは、お前の方じゃなくてか？」

「あら、つよがり？」

「そうでもない。お前は俺にヒントをくれたよ。攻略の重要なヒントって奴をな」

「そう言いながら、仗助はスタンドと共に突っ込んだ。」

「形勢逆転とはいかなくとも、この判断は間違っていないと踏んだのだ。」

「物を柔らかくするということは・・・」

「答えに行きついた快感は、体中に熱い血液を送り込む。」

「アドレナリンが分泌されるとき、あの独特の高揚感を仗助は味わっていた。」

「つまり、自分自身は柔らかくすることは出来ねえ。ってことは俺のパンチはほぼ確実に決まるって訳だ。」

「仗助が出した結論は、本当にシンプルなものだった。」

「物を柔らかくすることで戦略を広げるのが相手の戦術なら、思い切

つて本体と対決すれば、その能力を受けることは無い。
轟音と共にクレイジードのパンチが、トリツシュのスタンド目がけて高速で抜ける。

しかしこれに対してトリツシュは、いやに余裕ぶったように、いや、当人は本当に余裕なのかもしれないが、前髪をいじりながらため息をついた。

まるで出来そこないの生徒を諭すように、あるいは諦めの悪い男を振る時のように。

「【柔らかい】という事は、絶対に碎けないということ。私たちは絶対に【碎けない】わ。それはすなわち、碎くしか脳の無いアンタは絶対に勝てないというコ・ト」

相手に届く一瞬前、嫌な汗が流れる。

仗助は迷った。

その迷いが0.1秒ほどの隙を生んだからだろうか。

「おいおい、こんななあ聞いてねえぞ……」

圧倒的破壊力を自負するクレイジードの拳だ。

少なくとも粉々にするつもりで殴った。

しかし仗助からクレイジードの背中越しに見るトリツシュのスタンドは、涼しい顔をしてクレイジードのパンチを【受け止めて】いた。何事も無かったかのように、だ。

まるでその事を知っていたように。

その拳を事もなげも無く【力で】止めた。

そしてトリツシュは、突っ込んできた仗助を見ながらこう言った。

「男っていつもそう……敵わないと思ったら、結局いつも暴力で

解決しようとする。そして大概の女は、自分より力が【圧倒的に弱い】と思っている。それが間違いな事に、男は後でしか気付けない。そう言うと、トリツシュのスタンドは、ギリギリとクレイジードの右腕をひねりあげ、その腕を砕きにかかった。その柔軟そうな身体をからめ、肘関節にその力を啜えて逆に折ろうというのだ。

仗助は途端に苦しみながら、右腕を押さえて苦しむ。

「アアツ・・・やれツ！！C・ダイヤモンドツ！！」

クレイジードは左腕でトリツシュのスタンドを狙った。

これに対し、彼女はC・ダイヤモンドの右腕を放して自由にしたり、そのまま片手で防御した。

すこし押されて見えるが、それでも涼しげな顔ではあった。

・・・だがそれだけ確認できればいいツ・・・

「しめたツ！！両手で防御しなければならぬところを見るに、やはりパワーは俺の方が依然上ツ！！」

仗助はそのまま力で押し切るつもりだったらしい。

そのままクレイジードは、痛む右腕でアツパー、ボディブロー、左カット、ストレートと次々に重ねて行く。

ビシツとたまに身体が裂ける。

トリツシュのスタンドは、これを防ぐか捌くが、段々押されて行く。

「どうしたアツ！？【圧倒的に弱い】じゃねえかツ！！」

トリツシュの額に汗が浮かんだ。

やはりパワーでは少し押されている。

何十発ならまだしも、何百発とは防ぎきれない。

「引いてツ！【スパイス・ガール】！！」

遅い、と叫んだ時には、仗助はその破壊力をもって、スパイス・ガールに襲いかかっている。

「やだツ・・・」

と言ってトリツシユは、先ほど投げた自分のパレオを投げる。
再びクレイジードの身体にまわりつき、殴っても殴ってもパレオは伸びるばかりで更にまわりつく。

「だがこのパレオごと殴ってしまえばツ！！やれエエエツ！！」

パレオが撒きついた状態で、更に距離をつめてトリツシユらへと襲いかかるクレイジード。

シユツという音がトリツシユの耳元で聞こえ、その拳は確実に頭蓋骨を捉える。

・・・やだ、死にたくない・・・

敗因はなんだっだろう。

油断したことか？

パワーが相手の方が上だったということだろうか？

喉元まで上がってきた悲鳴は、出す前に声帯ごと破壊されるだろうか。

・・・ミスタ、やだ、アタシ・・・

「3イイFREEZE!!」

トリツシュの頭蓋骨を確実に捉えていた拳は、その速度を失って、一気に地面へめり込んだ。
ベゴン、という音と共に、パレオが絡まったクレイジードの右腕が、

レンガの床へと叩きつけられる。

そのまま身体も一緒に地面へ激突する。

今まで、絶対勝利を確信した仗助の顔が引きつったまま地面へ倒れ込む。

悪態付く暇もなければ、状況を理解出来もしなかった。

呆気にとられた仗助に、恐ろしい程の重力が彼の身体を襲う。

砕けそうなほどに重圧が仗助の骨を締め上げる。

「もつと過重だッ！【エコーズ】ッ！！」

小さな人型のスタンドは、「Yes, sir...」と呟いて、忠実に本体の命令に従った。

子どもの様な顔をしたその虚像は、やはり小さなその手の指をパチンと鳴らす。

「マダ理解シテナイデシヨウカラ、解説サセテイタダキマス。今、アナタノ身体ニ巻キ付イタ【パレオ】ヲ重クシマシタ。ソウ、【無限ニ柔ラカク】ナツタ【パレオ】デス。ソシテ又、【パレオ】八重クナル」

そうエコーズが言うと、クレイジードの身体にかかったパレオは、どんどん彼の身体を取りこんだ。

その柔らかかさ故、パレオはその面積を広げ、クレイジードの身体を包みながら地に落ちる。

スライムを例えば人形の上から落としたりしよう。

スライムは人形の形に沿って、それをふわりと包み込みながら、地面に流れる筈だ。

あるいは「溶けるチーズ」をパンの上に置き、オーブンで熱するとしよう。

そのままではパンの上に乗る固形かつ四角いチーズは、オーブンの

はたから見ていても聞こえる骨がきしむ音を聞いて、トリツシュは青くなった。

おそらく内臓も潰れそうか、あるいは既にグシャグシャに潰れていることだろう。

「殺す気……か……？」

もし康一が自分を殺すつもりなら、とっくにそうしているだろうと仗助は考える。

やはり命までは狙わず、痛めつけた上で何かしらの情報を聞き出したいのだろう。

であれば、このまま戦えば何処かに活路は見いだせるだろう。しかし、それに代償を払う価値はあるだろうか。

仗助は、身体を襲う痛みに耐えながら思考を巡らせる。

自分の目的は、あくまでエンポリオ少年とアレックス少年達の勾留、及びエッケハルトやヴィルヘルム達の露払いだ。

しかしここにきて康一の登場、【パッショーネ】の介入は予想外だった。

だいたい思い返せば、DIOの体細胞を摂取したという話も仗助は聞いていない。

あくまで彼の目的は、別のところにある。

「エコーズ！！もう一度過重しろッ！！」

「な……これ以上やったら死んじゃうわよッ！！」

「だからッ!？」

トリツシュが止めに入るのも当然だった。

殺すなどというのが【パッショーネ】の目的だ。

あくまで自分たちのボスを狙った組織の情報収集をするだけ。

確かにダーク（康一）は【パツシヨ―ネ】ではないので、その命令に従わずとも良いが、トリツシュにはその殺人行為を止める義務は組織上ある。

だから彼女は焦ったのだ。

「ダークさん・・・殺すつもりなら、【パツシヨ―ネ】が相手になるわよッ！今すぐその殺人行為を辞めなさい！！」

康一はあくまで殺人行為を辞めないつもりらしく、狂気を孕んだ目で仗助を見据えながら、心なしか笑っていた。

トリツシュはいよいよ康一の襟元を掴んで文句を言うが、その目を見てトリツシュは驚いた。

先ほどまでの、自分の息子を思う顔ではない。

今そこに有るのはドス黒い殺意。

もはや目的を忘れ、殺人欲をしゃぶりつづける康一は、トリツシュの眼には、あるいは精神に異常を来たしてしまったのではないかと疑うほどだった。

その時、パレオの下から「うおおおお」という雄たけびが聞こえた。

すぐさま振り向くと、パレオの下でクレイジードが蠢く。

ほんの少し離れたところで、地面に突っ伏している仗助がかるうじて右腕を上げた。

「何処にそんな力が・・・」

「いけッ！クレイジー・ダイヤモンドッ！！」

そう仗助が叫ぶと、パレオの下で、バズンツと何かを裂く音が聞こえた。

それと同時に、信じられないことだが、パレオの下からクレイジー・

ダイヤモンドが飛び出す。

それと同時に仗助も、自らの脇腹を抱えながら立ちあがった。その光景を呆気にとられて見ていたトリツシュと康一だったが、仗助は直ぐに振り返って走りだした。

康一の「待て」というドスの聞いた低い声を振り切って、仗助は走りだす。

残された二人は追い掛けようと駆けだすが、呆気にとられていた瞬間もあり、簡単に逃がしてしまった。

速度をゆるめながら二人はゆるゆると立ち止まった。肩で息をする。

トリツシュは意外と自分の肉体が若いのかもしれないと、くだらないことを考えた。

意外と人間、非常事態になるほど考えることは幼稚になる。

「・・・戻りましょうか」

そう言ったのは康一だ。

それでも目は仗助が逃げた方を追っている。

トリツシュは「そうね」と応えて携帯電話を取り出す。

夫の電話へのコール音が鳴る中、トリツシュはこれからのことに頭を巡らす。

まず恐らく彼らの素性を調べる調査が必要になるだろう。

それ相応の報復を試みなければ、ネアポリスでの【パツシヨーネ】の求心力が落ちる事は必須だ。

何にせよ、逃すことのできない相手だ。

- - 全面戦争・・・なんてオチは無いわよね・・・

彼女は昔のことを思い出した。

それはかつて自分の父親と繰り広げた、長い闘いの旅だ。自らの父に命を狙われ、次々に暗殺者たちが自分を襲う。

あのような日々がまた始まるのだろうかと考えると、これから来る

暗黒の毎日に、覚悟をせまられる思いだった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

41話【鎮魂歌23】（前書き）

遅くなって済みません。

次の次くらいで新章、かな？

41話【鎮魂歌23】

AM9:14 ネアポリス 【パツシヨーン】本部ビル

悪夢のような一夜が明けて、皆が昼過ぎまで睡魔を貪った。

しかし一人、気が立って寝るに寝れないと、朝早くから本部まで来た者がいる。

アレクサンドロであった。

なんとなく寝れなかったのだ。

何故なら彼はこの3日間程に及ぶ闘いの中、ことさら相手の組織に対して恐怖を覚えており、それが彼の意識を睡魔から現実へと引き戻したのだった。

その意識を消したくて、彼は仕事をしているのである。

だがやはり、なにもしていなくても、ふとその面々を思い出してしまう。

匂いで相手が追跡できるエツケハルト。

彼は静の【アクトン・ベイビー】あるいは【What I'm looking for】すら通じないかもしれない。

その絶対的な追跡能力と、【ジニー】の対象を人形に変えてしまう能力。

そして何より、異常なまでのフェミニズムに没頭する性癖。

あれをフェミニズムと呼んでいいのかアレックスには判断付かなかったが、彼は兎に角女性にこだわった。

今は再び【パツシヨーン】の牢の中にブチこんである。極めて大人しいらしい。

ヴィルヘルムは逃げ出していた。

聴覚に直接メッセージを送り込める（音量も調節できる）スタンド【99ルフトバルーン】。

エンポリオとマキャベリは三半規管を大音量でゆらされ、血へド、あるいは吐瀉物にまみれて戦った。

二人は今回の一番の功労者だろう。

信じられないほどに彼らは粘り強かった。

極めて相性の悪い相手だったと思う。

吐きすぎで、喉が焼けただれと言っていたから、二人はしばらく養生した方がいいだろう。

そのようにアレックスは書類を作った。

また、ヴィルヘルムの詳細をまとめ、逃げた経路、犯行手口等をデータ化している。

レイを見た者はいない。

ビリオン。

ようやく会えた人物だ。

マキャベリ・アリシア・ダークの宿敵である。

本名は東方仗助。

ジョセフ・ジョースターの息子である。

それはつまり、静・ジョースターの兄でもある。

彼は、かつての旧友・虹村億泰を殺して、現在相手の組織の幹部として活動中である。

ダーク、いや広瀬康一の話によると、わざわざ虹村億泰と同じ髪型をしていたようである。

償いのつもりなのか、服装もほとんど彼と同じだったらしい。

これになにより怒ったのは静だ。

自らの兄が、蛮行を働き、自らの命迄も狙っただけでなく、【自らが殺した人間の名を語る】という死者を愚弄するようなマネをしていたという事実も、また彼女を失望させ、烈火のごとく怒らせる理

由でもあろう。

彼は圧倒的な破壊力を持ったスタンドと、モノや傷を治す能力を持つているらしい。

ただし、自らの傷は治せないようなので、しばらく表へ出て来る事は無いだろうというのが静の見解だった。

さて、とパソコンの前で大きく背伸びをし、アレックスは側に有ったコーヒーカップへと手を伸ばした。

砂糖をたっぷり、コーヒーと同じ量入れる。

これが驚くほどに力をみなぎらせるのだと、祖父が言っていた。事実、力がみなぎるのが分かる。

「速いわねアレックス。ツェペリ家の男はタフね」

デスクの後ろにある入口から、若い女の声がした。

部下たちは今日が休日故、誰も居る筈はない。

「……ツェペリ家ねえ」

後ろを向くのも面倒くさいので、コーヒーを啜りながら答える。

別に意識して言った訳ではないのだが、その声のトーンに気付いた静は少し眉を寄せ、すまなそうな声で謝る。

気を悪くしないでくれ、と静の方を振り向いてアレックスは言った。

座れよ、と彼女を促して、同じコーヒーを入れてやることにした。

豆はイタリアンブレンド。

砂糖は、たっぷり。

「さ、ツェペリ家に代々伝わるコーヒーだ。疲れが吹き飛ばせ」

「……ごめんってアレックス」

静が謝るのも無理は無い。

彼女はジョースター家の人間で、彼はツエペリ家の人間である。両者の間には、自分の家の話をするときに、何か遠慮がちになる壁のようなものがあつた。

それは旅の始まりからそうだつた事を、互いに意識していた。

「そついやお前と家の話、したこと無かつたな」

アレックスはそう言つて、自分の椅子の背もたれに身を預ける。ブラインドの半分かかつた窓からは、イタリアらしい陽光が差す。真っ白で、力強い光がアレックスは好きで、今日のオフィスは電気を付けていない。

この微妙な暗明が好きなのだ。

その光が、横のデスクに座る静の顔を照らす。綺麗な顔だとアレックスはしみじみ思う。

彼が言葉を繋げないので、静はコーヒーを啜りながら口を開いた。

「・・・そつね。こつという話、アレックスが不快だろつなつて感じ
てた」

「静は？」

「微妙。だつてあたし、ジョースターの血筋じゃないし」

「でもジョースター家だろ？」

「うん・・・だからジョースター家の文句は聞くつもり。その姿勢がアタシのアイデンティティだから」

静は意外にも力強い眼でアレックスを見据える。

そんな重い話をするつもりもなかったし、今は互いの労をねぎらいたいのだが、どうにもうまくいかなかった。

「アリシアから聞いたわ・・・アンタがアームストロングって相手に名乗っていたって」

そう言うと、バツが悪そうに静は顔を下に向けた。

窓の外からは小鳥の声が聞こえる。

その声が、アレックスの心を突くように感じる。

まあいいか、とアレックスはゆっくり話し始めた。

「あん時はさ、流石に死ぬのを覚悟したんだよ。多分死ぬだろうなつて。そしたらシーザー叔父さんや、何世代か前のウィル伯父さんあとは我が家の英雄ジャイロ伯父さんの話を思いだしたんだ。彼らはジョースターと共に歩み、ジョースター家の前で散った訳だ。別に恨んじやないし、それはそれで誇りに思うことだと思ってる。でも一方で、なんでいつもツェペリだけ、って思うときはある。まるで運命がそうさせているような、大きな渦の中に居るようなんだ。ジョースターと一緒に居ると、こう、なんていうか必ず・・・」

「死ぬ？」

「・・・そうだな。だから死ぬとしても、せめて【ジョースターと居るから死んだ】と思われたくないなって。そのジョースター家の脇役にしたくなかったんだよ。ツェペリ家を」

アレックスがそこまで言い終わると、静はコーヒークップを置いて言葉に詰まった。

自分とは違う、【家の呪縛】にとらわれている。

それは自分とは違った形でアイデンティティに迷っているということとなのだろうか。
家の者だと言いたいけど血が繋がっていないヨソ者である自分。家の者じゃないと否定したいけど否定しきれないアレックス。どちらが幸せなのだろうと、静は思いを巡らせた。

「あー……こういう空気好きじゃないんだよ」

そう言っておチャラけるアレックスだったが、静の面持ちは沈んでいる。

その心の端を、少しは感じ取っていた。

【家の呪縛】というものを。

「あのさアレックス」

「あ？コーヒーのおかわり？」

「そうじゃなくて。またピンチってくると思う？」

「ああ……どうだろうな。少なくともまた奴らは狙ってくるだろう。その前に世界を変えられりゃ一番いいんだけどな。あいにく方法がわからねえ」

「……じゃあさ」

静はアレックスに向き直り、真っ直ぐに彼の両目を見つめる。

その目は澄んで、何かを決意した光を湛えていた。

そう、静は覚悟をしたのだ。

それをアレックスに伝えようとする。

とても、大切な言葉を伝えよう。

「え、なに？『あなたを死なせない！』とか言ってくれんの？」

しかしアレックスが先に口を開いた。

静は何かを喋ろうと空いた口がふさがらない。

・・・八？

こいつは何を勘違いしているんだ。

アレックスは若干ニヤけながら、その言葉を待っているらしい。

本当に頭の中の軽いお調子者だと思う。

これがイタリア人の血って奴なのかしら。

これからは【パツシヨーネ】として生きてたら本人も楽しいだろうに。

「寝ぼけてんのサル？なんでアンタなんか守んなきゃいけないのよ」

「言えよ」

「言わないわよクズ。何勘違いしてんのよ童貞」

「おい・・・お前言い過ぎだぞ」

「本当の事でしょ精子脳。アタシがちょっとでもアンタの為に何かしてやるうって思う訳ゴミ？」

「別に思ってたねーよ！何なんだよお前急に！だからジョースターの家は嫌いなんだよ！」

「今ジョースター家は関係ないでしょ！」

「あるねー！」

「ねえよ豚！」

「うるせエ捨て子！」

「捨て子で何が悪いんだコラア！！！」

「品がねえんだよクソビッチ！」

「...あれ？」

ビッチと言った瞬間、静の姿が消えた。

机の下にでも潜ったのだろうか。

顔が真っ赤になっていた。

あるいは泣き崩れたとか？

「...いや違う、コイツは・・・」

「ダアアアアアレがビッチだド低能がアアアアアッ！！！！！」

怒鳴り声が耳元で聞こえ、次の瞬間、無防備な肉体に激痛が走った。

「ふぐえッ」

首に軽トラックがぶつかってきたような衝撃を受け、気付けば視界

が逆さを向いている。

痛いのは首？

顎？

背筋が反り返し、脳を揺さぶられた感じがある。

しかし床にたたきつけられたアレックスは、反射的に上半身を起す。

すると、目の前に【アクトン・ベイビー】を解いた静が立ってこちらを見下ろしていた。

この度の戦いで打たれ慣れたのか、アレックスは静の問いに対して、直ぐに口を開くことが出来る。

「で、誰がビッチって？」

「お前のご痛いッ！！」

アレックスが答える途中から、静はローキックを繰り出す。

今は体育座りのような格好をしているので、左のモモはガラ空きで、静の右スネは吸いこまれるように入った。

しかしアレックスは不思議と痛くない事に気付いた。

いや、痛いのは痛いのだが、闘いで得た痛みよりは、それは信頼や情に裏打ちされた痛みだった。

久しぶりに味わったこのじゃれ合いにも似た痛みは、アレックスを現実へと引き戻してくれるようで、何処か心の安寧を得られるものだった。

「ふ……ふざけんなこのクソビッチ！！」

ドゴン、という音がするほど思い切り静に蹴られる。

つま先が脇腹にめり込んで、アレックスはダンゴムシのように床へ横になって丸まり、その痛みに耐えた。

蹴られた左わき腹を抱え、それを下にして守る。

・・・ああ・・・懐かしいこの感じ・・・

「蹴るしかできねえのかゴリラ！」

次は尻を思い切り蹴られる。

上から見下ろす静の眼は、冷たい眼から怒りに燃えた眼に変わっていた。

・・・ケツ・・・悪くない・・・

「やめろゴリツツツアツ！！蹴るな売春ふぁツ！！」

今度も罵倒している間に尻を左足でけられる。

「死ねツ！このド低能ツ！！」

殆どリンチの様に、静はアレックスを蹴り続ける。

この一方的な暴行の果ては、この後10分ほど続いた。

同時刻 特急列車BBQコンパートメント内 オーストリア・ザルツブルグ郊外

一人の老婆が列車のコンパートメントで眼を覚ました。前の駅を出た時から寝ていたらしい。

窓際に座って、壁にもたれかかっていたようだ。

最近すぐに疲れて寝てしまう。

老化によるものだろうか。

頭にもやがかったように感じる。

こう言う時、老婆は自分にお迎えが近いのだろうと自嘲気味に笑う。

この歳になると、最早お迎えが来るのを心待ちにする自分が居る。

長い人生に疲れてしまったのだ。

純粹に老婆は休みたかった。

窓の外には、のどかな田園風景が流れる。

これを絵画に描き起こした画家が居たはずだ。

確かフランス・オルセー美術館にその絵があり、自分は娘夫婦とそ

れを観に行った。

だがそれも忘れてしまった。

老婆はため息をついて、窓とは反対側、廊下へと眼をやった。

彼女が眠りはじめた時には居なかつたが、今はそこに20歳前後の

青年が座つて寝ていることに気付いた。

険しい顔をして寝ているが、幼さを残した顔には、全く似合わない

という事も無かつた。

凜々しい顔をしている。

流れる川のようにであり、その中で動かぬ石のようでもあつた。

どれくらいそうしていたのかは、歳の所為でわからない。

しばらく老婆が見つめていると、その青年の片目だけがカツと見開いた。

その瞳はギョロギョロと動き、何かを探しているようであつた。

しかし老婆の姿を確認するや否や、ピタリとそこに止まり、観察する様にじつと見続けた。

老婆は気まづくなり「シユルデイゲン（失礼）」と呟くと、「気にする事ないよ」と、年の割に甲高い声で青年は返した。

それまでは寝るために折りたたんでいた手足を、まるでバネ仕掛けの玩具の様にビヨンと開き、老婆に向き直る。

「いやあ、今日は良い天気ですね！」

老婆は青年の態度を不審に思った。

若者の、声のトーンにだ。

普通の若者は、ここまではつらつと積極的に老人へ話しかけて来る事は無い。

たまに近くのボランティアで来る若者が、老人に興味を持って話しかけて来る事はあるが、それだつてここまで積極的にガツガツとは話しかけてこない。

いや、何と表現して良いのか、老婆自身も分からない。

ただこのギョロギョロと良く動く落ち着く焦点の合わない眼、人を不安にさせるような声と所作。

「良い天気だと思いませんか!？」

甲高い割に、腹から出すような破裂音に似た声でもう一度青年は聞いた。

顔は老婆を向くが、その目の焦点は合わない。

「ええ・・・少し曇っていますけどね」

「じゃあ!」

そう言うと青年は立ちあがる。

老婆は身構える。

「良い天気ではないと言えはいい!違いますかッ!？」

ことさら大きな声を、青年は老婆に投げかける。

脅えた表情を老婆は青年に向ける。

何かが切れている。

頭のボルトとか、そういうものではなく、もっと根本的なコミュニケーション能力の未発達とも言うべきか。

「答えてくださいおばあさんッ！今日は、どんな天気ですかッ！？」

青年の落ち着かない眼はギョロギョロと周りを詮索するのを辞め、今老婆を射抜かんばかりに見据えている。

・・・怖い・・・

声を出して助けを呼ぼうにも、老婆は恐怖故か出来なかった。

この世で一番恐ろしい者は、恫喝や脅迫のようなものではない。

ナイフをちらつかせられたり、銃口を向けられたりと言うのは、若い頃老婆が居た東ドイツでは当たり前の光景だった。

真に恐ろしいものは、【自らの常識が通じない状況】である。

つまり恐怖とは、その認識する世界からかけ離れた【奇妙さ】にある。

目の前の青年は、しつこく自分に天気の話を問いかける。

ガタンガタンという列車の中で、青年の声は良く通った。

そして徐々に自分の方へ迫り寄る青年を見ると、本当の冷たい死の予感すら登って来る。

渴いた喉にへばり付いた声は、喉の奥で二転三転し、恐怖の色に染まって出てきた。

「なんなの・・・あなた何か変よッ！！」

「ですからッ！！」

青年は声を張り上げる。

先ほどまでの奇行や奇声が嘘のようだった。

「殺しはしませんよ。いやね、ただ【電話】なんて言うから」

「な・・・なにが・・・？」

「いやあねえおばあさん。わかってるくせに。あれ・・・」

ここで言葉を貯めた。

青年は魅力的な笑顔に変わって、にやあと笑う。

「あれ、【スタンド使いにしか見えない】んですけど？」

老婆の顔が電流に走ったように変わった。
そして同時に、自分のうかつさを呪った。
・・・まさか、まさかこの様な形で・・・

「捜すな、って言わなかったっけ？」

そう青年が言うと、彼は思い切り拳で老婆の鳩尾を殴った。たまらず、うめき声すら上げずに老婆は崩れ落ちる。

青年はその顔から笑みを外し、老婆をコンパートメント内に寝かせると、ポケット等をまさぐった。

すると右ポケットからは小型の拳銃。

ロケットの中には、あまりにも狂信的にハーケンクロイツ。

そして連絡を取る為の携帯電話が入っていた。

「・・・いただいでおこう」

青年は銃を懐にしまい、携帯電話をたたき折った後、それは老婆のポケットに戻した。

さて、とコンパートメント内を見渡すと、目に痛みが走った。

先ほどの狂人のまねごとの代償だった。

老婆が居るコンパートメント内に入る前、青年は大胆にも車掌室へ隠れていた。

すると、駅に着くたび列車内を行ったり来たりする老婆が居たのだ。

一目でその顔立ち、アーリア人であること。

そして右のポケットの異様な膨らみ。

杖を持っているが、しっかりとした足取り。

なにより車掌と話している時の、いやに耳に残る【東独訛り】。

殆ど間違いは無かった。

あまりにもお粗末なスパイである。

だがその半面正直言つて青年は、自分の組織の人間が大概の事では驚いたり油断したりしないのを知っていた。

鉄の意志を持っているのである。

だから老婆が自分を捜しに来た人間だと気付いた時、あえて立ち向かったのだ。

相手の裏をかく為の、捨て身の行動。

もしこの演技がバレれば、即彼女の【スタンド能力】によって捕獲されていただろう。

そこで、青年は、彼らの弱みに付け込んだ。

もし【崇拜されている自分】が狂ったら隙も出来るだろうと踏んだのだった。

「ま、大成功ってどこか・・・頭おかしいフリはもう少し要研究だ」

青年は老婆を見降ろして、一人反省する。

あとは老婆に、このままチェコ位まで行って貰おうと思い、彼女の衣服を整え、椅子に座らせ、寝かせてやった。

車内のアナウンスは、次の停車駅はザルツブルグだと言っている。

そしてその次は？

「ウィーンか・・・どうにも・・・嫌いじゃないね」

AM9:31 ネアポリス 【パツシヨーネ】本部ビル

「ウィーンが？まさか！」

部下であるデイブ・ロジャースにアレックスは言った。

ここ数日は幹部達の戦闘のバックアップをする為、殆ど寝ずに働い

ていた。

しかしその所為で身体の調子も良くなかったのだが、今日一日の睡眠で随分身体の自由が戻ってきた様であった。

一方で、彼には、睡眠不足の身体を引きずってでも、アレックス達に伝えなければならぬことが有るのだった。

「でもどうしてそれを？」

「これは有る程度推測なのですが、【日曜日の赤ワイン】という組織を御存じですか？」

「わからないな・・・そのワイン同好会がどうしたって？」

この若い幹部の飛ばすジョークが、デイブは嫌いじゃなかった。

こういうのを好んで口にするあたり、イタリア人らしいセンスである。

「勿論彼らはワインを好んだでしょうが・・・真相はこうです。日曜日は労働者たちの休息日を表し、赤ワインは【血】あるいは【社会主義】を表します。つまり、社会主義労働者たちが自らの政治的意思を発信する事が出来る唯一の場所という意味です」

「今時社会主義だなんて、隠れてコソコソ讚えあう世の中でもないのに？」

「確かに社会党等の政党もありますからね。今になってはそういう判断もありうるでしょうが、ナチスが解体した直後は、大っぴらにそう言う事を言える世の中じゃありませんでした。ましてやヒトラーが死んでから、彼の側近たちは世界へと散らばりましたから尚更世界は警戒します。つまり彼らが結束した時代は、彼らが隠れて

動かねばならないという事だったのです」

「……【血】は？」

「それを流してでも、やり遂げなければならぬという決意でしよう」

アレックスは唇を噛んだ。

自分たちが敵対する相手が、街のチンピラ程度ではない。

その事実がアレックスの胸を掻き穿てる。

彼はデスクに腰掛け、先ほどデイブと入れ替えに出て行った静のコーヒーの残りを飲んだ。

既に冷えている。

「そういえば【第三の男】を見たことが有るんだけど……」

「私は鳩時計の下りが私は好きでしてね」

「遊園地の話ですね。それで……あの時代は第二次世界大戦直後の話だったんだっけ。確かに彼らが結束するならウィーンだったのかもね」

映画【第三の男】の舞台は、第二次世界大戦後のウィーンである。

当時のウィーンはイギリス、アメリカ、フランスの資本主義国家とソ連という社会主義国家がそれぞれ統治する「四分割統治」という制度が行われていた。

かつてハプスブルグ家のお膝元と言われていたヨーロッパの誇りを、スタスタに四分割した訳である。

この時の社会は非常に不安定であったが、同時に社会主義が蔓延ることも出来るほど混沌としていた。

アレックスが言っているのはまさしくこのことで、その後もウィーンは資本主義の道を進むも、水面下では社会主義色が強く、スパイが蔓延っているというのは一時社会の常識となっていた。

「そもそもヒトラーもオーストリア生まれでしたし。とにかく半ば公然と【日曜日の赤ワイン】は存在します。しかし今回我々が接触した相手が【日曜日の赤ワイン】だと裏付けが取れた理由はもう一つあるのです。実は、エツケハルトの持ち物を探ったところ、手帳が出てきました」

アレックスの眉が少し傾く。

「そこに？」

「結論はそうです。勿論暗号が使われていたので、コードブック無しでは解読できません。そこで、我々は彼と取引をしました。こう言い変えましょう。落とし所を決めたということです」

「それってジヨルノさんを襲った相手を教える代わりに、ってこと？」

「頭の回転が速くて助かります。その代わりに彼の開放、それと、彼らのボスの居場所を教えてもらうこと」

今度こそアレックスは驚いた。

あれほど自らの使命に忠実だったナチスの兵士たちが、そうやすやすと現場の判断で自らの組織の要を晒すことをするとは思わない。何かの罫か、出鱈目に違いないと感じた。

「簡単な話です。エツケハルトはスパイでした」

「なんだって!?!」

いよいよきな臭くなってきたように思う。
思ったより、現状は複雑に絡んでいるらしかった。

「トウルルルルルルルルルルルルルルルル」

二人の会話の中、デスクの電話が鳴った。
アレックスはデイクとの会話を続けたかったが、それを惜しむように受話器を上げた。

「アレクサンドロ君かい?仕事熱心で助かりますよ」

ジヨルノだった。

自分のボスと話すのは、もしかすると2回目3回目程度だったかもしれない。

彼が襲撃された後、彼のスタンドとは会話をしたが、本人と話すのは久々である。

彼が回復したらしたで、今度はアレックス達が襲われることになるので、もしかすると話すのはこれが初めて位かもしれないが。

「ありがとうございます。それで・・・?」

「あと15分もすれば各幹部達が会議室に集まる。これからの事を話しましょう」

まさしくエツケハルト、それと【日曜日の赤ワイン】の事だろう。

デイク達が情報をかき集め、それを幹部の耳に入れる必要性が高くなったに違いない。

今アレックスが誰よりも早くこの内容を推察できたのは、デイクのお陰だった。

これで会議の内容には有る程度着いて行けそうである。

「分かりました。5分で行けます」

「ええ。それと・・・」

ジヨルノは思いついたように続ける。

アレックスは注意深く聞こうと、再び意識を電話に戻した。

「なんででしょう?」

「君はその・・・コーヒーを入れるのがとても上手いと聞いてね。

出来れば彼らが到着する前に振舞って貰おうと思ったのですが・・・

「

「すぐ行きます!」

「ありがとう。それでは」

自分の顔がニヤけるのを隠せなかった。

まさか【パッションネ】の誰かにコーヒーを振舞う時が来るなんて思いもしなかった。

いや、それよりも嬉しかったのは、ジヨルノが自分に歩み寄ってくれたという事だろう。

この歳の少年にとって、イカした大人にかまってもらうのは嬉しい事なのだ。

アレックスはデイクに礼を言って、デスク回りを片付け始める。デイクも会議室へ向かうと言うので、一緒に行くことにした。途中、つついじョルノにコーヒーを頼まれた事を誇らしく話してしまう。

「コーヒーを、ですか」

「ええ、是非デイクさんも。あまりの美味しさに驚きますよ」

「お気遣いありがとうございます。それでその・・・驚くと言えば・・・」

デイクはこの機会に、歯切れ悪そうに聞いた。

アレックスは嬉しそうな顔をして「なんだい？」と聞き返す。

「気に障ったら申し訳ありません。その・・・昨日闘いが終わった後はそんな傷ありませんでしたが・・・その顔で会議に臨まれますか？」

デイクが言っているのはアレックスの顔の事だった。

唇の端が切れて、やや内出血している。

更に顔中ひっかき傷があり、薄く血がにじんでいた。

髪もグシャグシャで、ワイシャツのボタンは上から二つほど取れている。

「ああ、これですか？」

「ええ、3分もあれば着換え位下の部屋で用意できますが・・・」

せつかくの申し出だったが、アレックスは断った。自分のコーヒーを心待ちにしている人が居るのに、無駄な時間は潰せなかった。

「それにこれは・・・静の一種の甘えなんですよ」

「甘え、と仰いますと?」

「彼女とは度々感情をぶつけ合って、こういうことになるんです。僕らはそうしてでしか、分かち合えないんです。二人とも意地っ張りですから」

なるほど、とデイブは相槌を打った。

内心、幹部の人間関係について聞いてしまったことへの失態を悔やんだ。

こうした事に、口は挟まないのが組織の掟だ。それでも聞いてしまったのは、アレックスが話したがったというものもあるが、やはりデイブからしたら幹部の一人と言うよりは、自分の子どもを見る様な感覚があったのかもしれない。

「変な関係、と思われるかもしれませんが」

「いえ、深く聞いてしまって申し訳ありません」

「いいんですよそんなの。僕は聞いていただいて満足しています」

・・・それにしただって・・・

しかしちよつとやそつとのモメ方ではない。

イタリア人は気性が荒く、一度起こるところした傷が付くまでやり合う連中も居るが、少なくとも静がそうだとはデイブは思っていない

かった。

明らかにただの喧嘩とは違う。

やり過ぎだった。

生々しい傷を見ると、やはり何らかの手当てが必要ではないかとアレックスの身を案じる。

「それに・・・」

「それに？」

アレックスは照れたように顔を伏せ、少し頬を赤らめる。

「・・・若い。」

しかしそれが同時に素晴らしいとも思う。

自分は誰かの事を話す時に、胸がざわめいたりだとか、頬を染めるような事をここしばらくの間していない。

それは若さだけが得られる、ある種の衝動に違いなかった。

それが今、デイブにとっては羨ましくさえ思う。

そんな彼に向き直り、イタリアの太陽のような笑顔でアレックスは続けた。

「僕・・・こういうの嫌いじゃないんです」

「・・・」

なんと返して良いのかわからないデイブだったが、曖昧に笑うと、納得したようにアレックスは会議室へと足を向けた。

デイブも少し躊躇うと、彼に続いた。

恋とは色々な形があってしかるべきである。

それが一方的に虐げられる関係だったとしても。

そう自分に言い聞かせながら、頭の片隅に有る「それは性癖だろう」という言葉を深く意識の底に沈めようと努力した。

41話【鎮魂歌23】（後書き）

本来ジョジョの奇妙な冒険という作品は、登場人物たちの生き方に焦点を当てている人間賛歌の物語です。

私がそれと同じことをしても、あまり意味が無いと思うので、もう少し時代や社会、それに翻弄されつつも生きる人間を描きたいと言いますか、更に少し奇妙に、かつサスペンスっぽくなればいいなあと思ったりしています。つまり、登場人物だけでなく、彼らを彼らとせしめた脈々と受け継がれる先人たちの魂も肯定したい、そういう人類賛歌をやっていきなと。生意気にもそう考えています。

余談ですが、アレックスは暗くなりちなこの作品を明るく照らす、太陽だと認識しています。だから変態ですけど許してください。

42話【鎮魂歌最終章】（前書き）

遅くなりました。

42話【鎮魂歌最終章】

AM9:14 ネアポリス 【パツシヨーネ】本部ビル 会議室

会議室での席順はいつも決まっている。

今日も円卓の外側3時のところに静ら3人、その右隣にトリツシユ、真ん中12時の席にはジヨルノ、その脇をそれぞれフーゴ、ミスタが固めた。

そして侃々諤々の会議から1時間が丁度経った頃、初めてフーゴが議論を割った。

「この際相手がどこに居て何を目的としているかはハッキリ言っただうでもいいだろうツッ！！これは【パツシヨーネ】の沽券に関わる問題ッ！！いかにして相手に落とし前をつけるかだッ！！」

フーゴがキレるのも無理は無かった。

会議はこれまで相手の素性や、その性格、彼らの目的について各々が議論していた。

また、彼らから受けた挑発行為とも取れる行動。

それはつまり、ジヨルノが受けた攻撃だけではなく、静らが受けた攻撃でもあるが、これにあれやこれやと憶測で物を言う事は、それこそゴシップ記事と変わらない、とジヨルノも思っていた。

違う、これは復讐の話なのだ。

【パツシヨーネ】が舐められたという事実が大切なのであり、如何にして落とし前をつけさせるかが本来の会議の目的の筈だった。

「でも相手の目的を知らなければ・・・」

「そんなこと、どうでもよかるうツッ！！」

フリーゴは古参の幹部を叱った。

激昂したフリーゴの所為で、会議室の空気は一気に悪くなってしまったが、これを汲んでようやくジヨルノが口を開いた。

「フリーゴ、少し頭を冷やしてください。ですが、確かに彼の言う通りです。これは【パッションネ】始まって以来の出来事だ。皆それ故に踊らされ過ぎている」

不思議とジヨルノが喋りはじめると皆黙った。

彼の言葉だけは、ないがしろにできない。

勿論凄味で言えばフリーゴも相当のものだったが、ジヨルノの言葉にはそれとは違う「聞きたい」と思わせる何かがあった。

「ディアボロの【パッションネ】と今の【パッションネ】は違う。これは明確です。ですが、やはりギャングであることには変わりはありません」

ミスタの眉が動いた。

ジヨルノの言葉の端から、何かを感じ取ったのだ。

同じように、今まで下を向いていた幹部たちの中の何人かが、ジヨルノの眼を見た。

「大したもんだ」とミスタが感心したのは、静もまた、何かを感じてジヨルノの眼を見据えていた。

何人かの間に、緊張感が走る。

「僕たちの目的は、この街から【不幸】を無くす事。この街からドラッグ中毒者を無くし、無意味な暴力を排除し……」

- - 詭弁ね。所詮ギャングなのに。

静は一人冷静だった。

静の中には確固たるルールがある。

それは、どんなに【善】をしていたところで、その根本が【悪】ならば、評価はするべきではない。

例えばギャングが孤児院を作ったところで、それがギャングである限り、彼らに泣かされるものが居り、時に取り返しのつかない不幸が起きることが有る。

それでも【パツシヨ―ネ】にはそういった偽善ギャングとは違うように思えたから、静は【パツシヨ―ネ】に身を置いたのである。しかし、ギャングという存在に対する疑念は晴れなかった。

「ギャングの綺麗事は嫌いですか静さん？」

見透かしたようにジヨルノが静に尋ねた。

静は突然名指しをされて戸惑う。

しかし、会議室の視線を跳ねのけるように静は口を開いた。

「嫌いですね。ハッキリいったら良いんですよ。報復する、ってね」

「おい静……」

「黙って頂戴エンポリオ」

慌てて友人を止めようとしたが、ぞんざいに弾かれてしまった。

彼女に注ぐ周囲の視線は一層厳しい。

そんな中「続けて」と言うのはジヨルノだ。

「私がギャングというものに疑問を持っているのは確かです。ですが、だからと言って舐められっぱなしじゃあ、ネアポリスの治安は悪くなります。よって結論は一つ。報復しましょう。報復して、も

う二度と、誰も【パツシヨーン】には逆らいたくないと思わせるほどに！」

ジヨルノは肩をすくめ、会議室のテーブルに座る幹部たちに向かって「だってさ」とばかりにジェスチャーした。

周りも頷き合い、報復だ、報復だと言っている。

フーゴはようやく納得がいったように腕組みして座っている。

そして彼がジヨルノにむかって頷くと、「それでは！」とジヨルノは全員に声をかけた。

「相手も運が悪い！我々【パツシヨーン】がいかにも恐ろしい組織であるかを見せつけてやりましょう、ただし・・・！人殺しは自分の生命に危険がありそうな時のみ許可します。いいですね？」

異議なし、と誰もが答える。

静も控えめにそう言った。

大事に巻き込まれている気がして、気が小さくなっていたのだ。

しかしひとつだけ言えるのは、相手もまた【世界を変える】ことを目的としている組織。

それもおそらくは自分達と同じような手段をもってして。

であれば、その目的を達する為に【パツシヨーン】でいることも自分のモラルは納得してくれそうだった。

一瞬だけ和やかな雰囲気の流れた会議室で、ミスタが一人立ちあがった。

「ちょっと聞いてくれみんな。次の議案は俺からだ。おいジャステイン、まだ終わっちゃいないぞ。オーケー、それでいい。じゃあデイク、配ってくれ」

そう言うと、いつの間にかドア付近に居た部下のデイブ・ロジャーが、全員にいきわたるようにA4用紙を2枚回した。

「ざっと目を通してくれ。余計な説明はしたくないんでな」

突然書類に目を通していた古株の幹部がミスタに食い付いた。

「おいミスタツ……この二枚目は!？」

そう言われて、全員が一斉に二枚目の書類に目を通した。

各々が「馬鹿な」「対応が早すぎる」等漏らしている。静ら3人も、周りに合わせて二枚目をめくる。

いつものような書類であればアレックスに翻訳して貰うところだが、今回静とエンポリオに限っては、その必要が無かった。

「ああ、パヴァロツティさん。いい質問ですね。皆聞いてくれ。今朝早くに捕獲した相手方組織のエツケハルトだが、CIAから【うちの捜査官を返せ】と打診が来た。詳しいことと、あと引き渡しに関する細々とした情報はそこに書いてある。まあなんだ、結論から言えば、どうやらエツケハルトは仲間になってくれそうだ、なんちゃって」

AM9:16 オーストリア首都ウィーン シュベヒャート空港
備考 本編より一週間遡る

気付けばまたデッサンをしていた。

シャルル・ド・ゴール空港のデザインも良かったが、シュベヒャー

トにはシュベヒャートにしかない魅力がある。
異国の地、と言っても何処か懐かしい気がするの、小ぶりの空港だからだろうか。

あの大都市パリに比べたら、なんとつつましい人々だろう。
デッサン、だ。

パリからはウイーンまで4時間と言ったところか。

流石エールフランスの機内食は旨かった。

移動中は実に快適だったと言いたいところだが、横に座った女性がうるさいのが気に食わない。

えてしてオバサンとはああいうものなのだろうか。

【有名人を見ると、つい騒いでしまう】ような。

いや、自分で自分の事を有名人などと評価するのは よそう。

確かに僕は、その世界じゃ知られた存在かもしれない。

だがそれにしただってオバマやサルコジ程知られた著名人でもないし、
ジョニーデップやダニエルラドクリフの様にキヤーキヤー言われる
有名人でもない。

しかし数年ぶりのパリは良かった。

まあイベントでもなければあんな土地、行くはずもないがな。

特に、またルーヴルに足を運ぶだなんて・・・

「ウオウ！マイコーちよつと見るよ！あそこに居る人はもすいかす
いて・・・」

ああ、またオタク面をした外国人が僕を指差している。

しかも見るからにアホそうなヤンキーじゃないか。

お前ら頭使って生きてんのかよ。

無視だ無視。

「オーマイガーダニーツ！！間違いないぜツ！！俺たちの神様だツ
！！」

「イエスッ！！イエスッ！！ジーザスサンキューベリマツチ！！」

「サイン貰おうぜツダニーッ！！でも英語喋れるかな！？」

「ヘイマイコ・・・ヴオクに任せてくれよ。中国語なんてなんのそのだぜ！！」

「さっすがだぜダニー！！よろしく頼むぜ！！」

「フン・・・」

すきっ歯がダニーで、ソバカスマみれの方がマイケルか。個性の無い名前だ。

リアリティが無い。

どうせいつもと同じだ。

同じような事を言うに違いない。

ほらこっちへやってきたぞ。

さあ、言ってみるガキども。

「ニーハオ！ラオチー！？」

「・・・は？」

驚いたな。

こんな馬鹿面していて、その面を超えるほどの馬鹿ぶりを持っている。

いや、単に知らないだけなのか・・・？

だとしてもだ、せめて【サインをねだる】時、相手の母国位は調べしておくものだろう？

全く、だから馬鹿は嫌なんだ。

「いいぞお前、英語で。僕は喋れるから」

「ウオウ！リアリー！？マイコーこっちこいよ！この先生英語喋れるぞー！」

汚い英語だ。

どうせオクラホマかそこらへんから観光に来ているが気に違いない。このオーストリアで僕を知っている人なんて、数えるほどしかない筈だからだ。

いや、それよりもっと早く彼らの母国を見抜く方法がある。

【アイ・ラヴ・アメリカ】とかフザけたTシャツを来ているからだ。あんただったらどうだ？

僕だったら死んでも【アイ・ラヴ・ジャパン】なんてシャツ着ないね。

そーいうデリカシーとか自尊心とかとにかくアメリカ人は馬鹿なんだよ。

「ねえ先生・・・サインくれよ」

「プリーズ位言えないのかお前たち」

「そうだぜダニー、失礼だぜ先生に」

「いやいいんマイケル君。サインは【既にしておいた】。これからも応援よろしく頼むよ」

二人ともポカンとしてやがる。

ほら、それだよそのTシャツ。

その横に書いてやったんだよ。

「ああダニー。あの先生去り際迄かつこいいぜ・・・」

「でもマイコー。なんだってあの先生俺のＴシャツのアメリカって文字を消して、ＪＡＰＡＮって書いたのかな？」

「そりやお前・・・あの先生は日本が好きなんだよ！」

「なるほどなマイコー！！」

もういい！！

勝手に勘違いしてる・・・ッ！！

全く最近のこまっしゃくれたファンには手がやける。

だがそんなことどうだっていい。

そう、結果こんな始まり方をしたウィーン滞在も、これから起きる出来事を思えば大したことは無かった。

今から僕が皆さんにお話するのは、僕が出会った数々の事件の中でも、もっとも奇妙な事件。

それは、死なない音楽家の話・・・

そういえば申し遅れました。

僕の名前は【岸部露伴】。

これは、僕が体験した奇妙な冒険・・・

T o b e c o n t i n u e d . . .

42話【鎮魂歌最終章】（後書き）

【ジャスティン】

ティンバーレイク

【パヴァロツティ】

ルチアーノ・パヴァロツティ（歌手）

はい、新しく物語が始まります。
遅延遅延で本当にすみません。

43話【岸部露伴は動かない1】（前書き）

遅くなつてすみません。

今回からしばらく、岸部露伴シリーズが始まります。
勿論静達の冒険も、ちゃんと書いてますよ！

43話【岸部露伴は動かない1】

AM11:06 オーストリア首都ウィーン 王宮の庭

備考 本編より一週間遡る

7月も終わりの方になれば、ウィーンも暑い。

しかし日本のように湿気が有るわけではないので、こうして木陰に居さえすれば何時間だってここに座っている事が出来る。

それにしても驚くほどにペンの進む場所だった。

この王宮ほど堂々とした建物を、僕は見たことが無い。決して豪華絢爛と言う訳ではない。

しかし建物全体を覆う白は、圧迫感を持つ白色だ。

これが王宮と言われた時、思わずなるほどと頷いてしまった。隣に有るあの彫像はヨーゼフ公のそれだろうか。

大きく猛々しい。

そうやって僕が無我夢中でそれらをスケッチをしていたら、「シユルディグン」と身なりの良い老人が声をかけてきた。

不潔にならないよう黒い髪を短くし、古いジャケットを羽織っているが、それでもその眼力の強さからか、品の無さはうかがえなかった。

「・・・なんでしょうか？」

「おや、ドイツ語がお上手ですな。留学生の方ですか？」

お上手？

確かにそうだ。

僕のドイツ語は完璧な筈だ。

僕がファンに対して心がけているのは、自分の作品を読んでくれることに対する敬意を忘れないことだ。

彼らが真摯に僕の作品と向き合ってくれるのなら、僕もまた彼らと真摯に向き合うことが必要。

その為には意思疎通だけは誤謬のないよう完璧にしておかなくてはならない。

彼らに真摯に向き合うには、彼らの言語を使う事が必要という訳だ。と言ってもヘブンス・ドアで自分に【ドイツ語が出来る】と書き込んだだけなのだが。

「昔ちよつと・・・それより何か御用でしたか？」

「いやいや、私もデッサンをするものですから」

ほう。

まあ外国人がデッサンをしていれば珍しいか。

「王宮をデッサンされているんですか？」

「ええ、朝9時位から」

「なるほど、ではそろそろ引き上げる事をお勧め致しますよ」

「それはどうして？」

「ほら、あそこに馬車が居るでしょう。あれが昼ごろから観光客目当てに増えます。私も良くあったんですよ。気付いたら鼻から異臭が入る」

「・・・去った方が賢明、という訳ですね」

老人はリヒティヒ！と答えた。

だが半ば僕は呆れていた。

その馬車から絶え間なく出される【馬糞】があつたとしてもだ。

それがどうしたって？

そうやって【馬糞すら無い王宮】を描くことがそんなに正しい事なのだろうか。

デッサンとは・・・

デッサンとは物事に忠実に、誤魔化し無く描く事。

それをしないという事は、つまりそれは創作物だ。

それは、王宮をデザインした、または建築した人々に敬意を欠く事なる。

その信念を曲げてまでフィクションを描こうとは思わない。

だが不思議と老人の話を聞いていると、この場所がとてつもなく自分にとって損をする場所になるのではないかと思うようになってきた。

きっとこの老人は、自分に親切がしたいだけなのだ。

そして老人と話していると、何故だか知らないが、老人とはウィーン出身の画家エゴン・シーレの話や、グスタフ・クリムトの話で盛り上がった。

海を越え、自分の絵画の好みが一致したシンパシーに僕は感動したのだろうか。

結局僕はこの見知らぬ老人に心を許し、その場を立ち去ることにした。

「ところで若い絵描きさん。昼食はお食べに？」

「ニクNein」

僕がそう言つと、老人は満足そうに僕を「良ければ」、と昼食へ誘つた。

時刻は11時半ちよつと前というところ。

それにオーストリア人（彼に言わせればウィーン人なのだが）が、いったい昼ごはんは何を食べているのか気になるところではあつた。

【リアリティへの追求】の一環ということだ。

それから僕たちは王宮の城下町の様な場所を抜け、ミュージアムの横を通り、再びリンク（旧市街地。現在は文化遺産に指定されている）に戻つた。

リンクの中には独特の雰囲気漂う。

整備された石畳、ヨーロッパ特有のアパルトメント方式で作られた建物、そしておそらくイスラム文化から入ってきたのである中庭。それらが混在し、未だ20世紀初頭を思わせる町並みは、やはり美しい。

気付けば僕はデジカメで写真を撮つていた。

その僕を嫌がることなく、落ち着いた視線を湛えている老人は、ゆつくりと僕にこの街を見せながら昼食の場へと誘つている事が分かる。

その所作がとても感じ良かった。

「さあ着きましたよ」

そう言われて、ようやく僕はファインダーから眼を離した。

「ここは・・・？さつきまでケルトナーシュトラッセ（ケルトナー通り）に居たと思いましたが？」

見なれない場所だつた。

一応この付近の地図は頭に入れたと思っただが、どうも初めての街、ましてや外国の建築物に囲まれると方向感覚が働かない。

「ほらご覧なさい。あそこにシユテファン寺院が見えますよ。ここはその裏道なのです」

なるほど。

シユテファン寺院とはウィーンのシンボルとも言える教会であり、この旧市街地の中では背の高い部類の建物だ。

それが見えると言う事は、それほど遠く離れていない。

少し安心した。

「こちらですよ。私はここの珈琲が気に入ってましてね」

老人が手招きする方を振り返ると、そこにはいかにも老舗らしいカフェがあった。

両隣りはパン屋と雑貨屋だろうか。

それらにはさまれながら、比較的古風な雰囲気醸し出している。

中に入ると、そっけない外観との格差に驚いて、僕は声を上げてしまった。

全面木張りの店内、バーカウンター、そして木で出来た剛健な椅子。それらが煙草のヤニや手指で良い感じに落ちついた色を出している。今日は平日の昼ということもあり、店内の客は老人たちが4割ほど埋めている。

驚いたのは、彼らの大半が互いに顔なじみであるということだった。右でチェス盤になった机に座り、そこでチェスに興じている老人たちはこちらへ挨拶してきた。

店の奥からも手を上げてこの老人に挨拶してくる人が居る。

そしてあちこちから「ヤパーニツシュが来るなんて珍しい」「一人て来たのか」「ここに来るとは生意気だぞ」と、言葉こそ荒いもの

の、懐の深い歓迎を受けた。

僕は老人が進む店内を歩いて、一番奥に位置する窓際の机に座った。老人がメニユーを僕に渡す。

ドイツ語は読めるが、いかんせん意味が分からず、適当にこれと言ってみる。

「ここに来たならメランジエですよ！ウィーンに来たなら、ウィーンのもを堪能する事です」

なるほど、この老人にはそういった美学があるのかもしれない。じゃあそれにしますと言って、これを頼んだ。

それからコーヒが来るまで、老人は懐かしそうにしながらこの窓からの景色を楽しみ、僕は店内の雰囲気を目いっぱい楽しんだ。

かなり古いカフェなのだろう。

内装は痛んでいるように黒ずんでいたりする。

その実ただのヤニ汚れなのだろう。

ヤニでここまで汚れるというのだろうか、ひょっとすると20世紀初頭からあるのかも知れない。

いや、もしかしたら19世紀後半とか・・・

そう煙草の紫煙に思いを乗せていると、珈琲が運ばれてきた。

「それで・・・露伴君だったかな？」

僕は驚いて顔を老人へ戻した。

垂れさがった頬の皮膚が、右だけ上がっている。

この老人特有の笑い方らしい。

違う。

そういうことじゃなくて、なんで僕の名前を？

「さつきから言おうと思っていたんだ。そのネームプレートを外した方が良いぞ、ってね」

そういうことか。

僕は組んだ自分の腕を見て口の端でクスリと笑う。

「シユミットだ」

「よろしく、シユミットさん」

そう言っただけで握手を交わした。

「まあそのまま聞いてくれ」と老人は続ける。

「君は絵が上手い。いや、これはお世辞なんかじゃない。本気でそう思っているんだ」

そりゃどうも。

ま、それで食いつないでいるんでね。

「祖国では美術系を？」

「実は漫画家をやっています」

「ほう・・・そりゃ凄い。いや、嫌味とかじゃない。私は絵描きだろうが漫画家だろうが、美術に貴賤は無いというのが持論でね。またそういう美術で生計を立てている人を、私は尊敬しているんだ」

ここまで褒められたら悪い気はしない。

どうせなら」となりの雑貨屋でミッキーの横に並んでいますよ」とでも言いたかったが、それは品が無いので辞めておいた。

だから、老人が「何と言う作品なんだい？」と聞かれても、あえて答えないことにした。

「ウィーンへは取材で？」

「そういう一面はありますね（実はサイン会があるのだが）。今書いている作品に、不穏なサスペンス色を出したくて。例えば第三の男という映画がありますよね。ああいう不穏でひたひた来る不安がウィーンにはあると感じて、今回来ることになった訳です」

「なるほど！確かに私もウィーンに住んで長いですが、時折そういった空気をこの街は出すことがありますね。それならこういう話に貴方は興味を持たれるのではないですか？シュテファン寺院に出る幽霊の話なんですが・・・」

老人はウィンクして僕を見た。

よほど話したいらしい。

僕としても【幽霊】と聞くと人ごとの気がしない。謹んで拝聴させていただくことにした。

「この旧市街の中には王宮の横にある教会と、このシュテファンがあるのをご存知ですか？私はシュテファンの幽霊しか知らないのですが、兎に角地下墓地から人影が参列者をじっと見ているそうなんです。じーっとね。虚ろな眼でこちらを見て、こう言うそうですよ。『タスケテ・・・』ってね」

僕は一生懸命事細かにメモをした。

どうにも老人の話だけでは要領を掴めないところがあったので、そこを突っ込むと、老人は周りの人間にも声をかけ始めた。

奥で新聞を読んでいた男は葉巻を置いて、「幽霊は夜出る」と言っ

た。

ドア近くでチェスに興じていた男性二人は、「魂を持っていかれる」と騒いだ。

マスターは「色々なお客からその話を聞く。先ず間違いなく真実だろう」と言った。

この時点での僕は、この幽霊の噂話を信じてはいなかった。

明確に居てもらっては興ざめだから、居るかもしれない。

そういう空気はあったし、あの物音は、今何かが動いた、悲鳴が聞こえる、このような間接的な事実の方がよほど臨場感を掻き立てる。

僕はその程度の体験談を希望していた。

だってどうせ、幽霊なんてそうそう居やしない。

客たちは口々に幽霊の話の僕にしてくれる。

それだけで一つの作品が出来そうなほど情報は集まった。

「それで・・・どなたか見た人は？」

そう僕が聞くと、皆が一様に「友達の友達が見た」「嫁が見た」「

隣の客から聞いた」等、直接見た人間は皆無だった。

いや、それで良かった。

そういつた噂話が一歩歩きできるくらいこの街には【不穏な空気】がある。

4カ国統治時代を終えて尚この土地に潜むその【おどろおどろしたもの】を求めて僕は来たのだ。

上手くは言えないが、居るような雰囲気が必要なのだ。

僕はこの話をする客たちの、まるで恐ろしい者を見たような顔を何枚もカメラに収め、できるだけ僕が今感じている臨場感を残そうと、大量にメモを書いた。

老人たちの口ぶり、顔のしわ、ねじれた口元、うなされるような眼、それらを事細かに書いてみると、話を聞きだしてから2時間近く経っていることに気が付いた。

「大変参考になりました。ありがとうございます」

彼らは「いいんだよ」「頑張って売れるよ」と最後まで僕に優しく話した。

僕をこのカフェに連れてきたシュミット氏は、僕がこれほどこの話に興味を抱いたことに意外だったようで、大変喜んでくれた。

僕はこの老人とこの後1時間ほど近代ウィーン美術史について語らった後、遂におひらきとなった。

シュミット氏は僕に「今すぐ美術館へ行くべきだ」と勧めた。時刻は今2時半程。

今から行けば、3時間程度は見学できる予定だ。

「そうだ、サインをいただけないだろうか」

別れ際、カフェの前でシュミット氏から思いついたように言われた。その手には手帳が握られている。

勿論、と僕はペンを取り出し、シュミット氏の持つ手帳めがけて右手を振った。

不思議そうな顔をしているので、手帳を指差す。

シュミット氏はいつの間にか飛ばされたインクで書かれたサインを見ると、大層驚き、喜んでくれた。

同日PM 2:55 ウィーン南駅近く ベルヴェデーレ宮殿オー
ストリア絵画館

パッと見ただけでは、ただの屋敷に見えた。

坂を上った感覚は無かったが、ベルヴェデーレ宮殿上宮から旧市街地を見ると驚いた。

遠くに見えるシュテファン寺院が、遙か下に見えるのだ。どうやらウィーンは平坦な土地に見えて、その実広い丘に違いなかった。

この高低差、景色を見れば、このたかだか3階建て程度の屋敷も宮殿に見えた。

僕は宮殿の前にある長さ150メートルはあろう庭には眼もくれず、宮殿の中へと入った。

内装は美しいの一言だ。

二階が上がってすぐ、他の観光客が天井を見上げていることに気付いた。

その見上げる様が、かつてラファエロが言った「石弓の如く背をのけぞらせよ」という言葉を思い出す。

彼が天井画を描く時の姿勢と、同じように上を見る。

荘厳な宗教画がそこに描いてあった。

宗教とは質実剛健なものと考える人も居るに違いない。

しかし僕は、そういう人々からの批判を受けてでも、この宗教画に賛辞を贈らずには居られなかった。

それほど素晴らしい天井画だった。

少し感動を覚えた僕は、ゆくりと左回りに絵を見て行った。

どれも素晴らしいものだったが、凄く心に残るほどのものではなかった。

こんなものかと思いつつ、最後の大部屋に入る。

観光客こそまばらであったが、僕はこの部屋にこそこの美術館最大の価値があると思った。

そこには大方2メートル四方はあろうかという巨大な絵画が一枚だけ置かれていた。

その殆どが金色に塗られ、世界の全てを肯定する様なパワーに溢れた絵画だ。

僕はこれを見た衝撃を、一生忘れないであろう。

名前を、【Der Kuss（接吻）】と言う。

グスタフ・クリムト最大の作品と僕は決め込んだ。

あまりの衝撃に僕はうつとりして、警備員に「閉館時間です」と言われるまでそこに居続けた。

それでも見足りず、僕は悪態付きながらミュージアムショップへ行き、迷惑そうな転院をしり目に散々物色してやった。

買ったのはハガキとハンカチ、それにネクタイだ。

全てクリムトの絵が元となった、金色をしている。

これほどポジティブな作品を見たことが無い僕は、それら贋作を見ているため息が出てしまう。

そうこうして美術館の外へ出ると、すっかり夕方になっていた。

ホテルへ帰るか、あるいは街をぶらつくか。

迷った僕は、晩飯を調達して旧市街へと戻ることにした。

どうせ居る筈の無い、幽霊が気になったのだ。

同日PM10:30 旧市街 シュテファン寺院の中

眼を覚ますと、僕は木で出来た椅子の上で縮まっていた。

どうやらジェットラグの所為か、お祈りの途中で寝てしまったらしい。

霞みがかかった頭を振り、どうして自分がここに居るのか整理した。

・・・そうだ。

確か僕は晩御飯を食べた後、8時頃この寺院に足を運んだのだ。

確かに幽霊は居そうな雰囲気だったのだが、8時なら観光客もパラパラと居り、とてもじゃないが幽霊が出て来る雰囲気は無かった。

それがどうだ。

今シュテファン寺院の中は蠟燭の明かりも消えて、月灯りがステンドグラス越しに見えるのみ。

人が居ると居ないとで、これほどに表情を変えるものなのかと、僕は驚いた。

それにしてもだ。

閉館時間は10時の筈。

僕はそれに気付かず眠り込んでいたわけだが・・・この警備はどうなっているんだ？

僕けっこう目立つ格好で寝ていたはずだぞ？

いいのかシユテファン。

とりあえず僕は椅子から立って、廊下を歩いて出口を目指した。暗くて分かりづらかったが、全く分からないと言っこともない。

扉の前に立つと、それが古い鉄でできていることに気付いた。

これはもしか、と思って手をかけると、案の定鍵が閉まっていた。やられた、と誰にやられたわけでもないのに舌打ちする。

それから装飾品を壊さぬよう慎重に歩いて、僕は別の扉を探った。すると地下の扉からコツンコツンという足音が外からする。

僕は急いでそこに降りて助けてくれ、と叫ぶと、こちらに気付いたのだらう。

足音はすぐ近くまで寄って来た。

「ここに閉じ込められたようなんですが、どなたか鍵を持っては居られませんか？」

そう聞くと、足音は遠ざかって行った。

なにかボソボソと言っていたのは分かったが、ドア越しで聞こえなかった。

僕は振り返って階段を上り、また寺院の真中まで歩いた。まあいいさ。

そう思って寺院の仲を改めて見回す。

華麗な装飾品や、天使たちの今にも動き出しそうな像が所狭しと配置してある。

こんな中閉じ込められるのも、リアリティを生む経験になるに違いない。

それよりも先ず、ここに閉じ込められた言い訳をなんといいかだ。そう考えていると、ギィという扉の空く音と、コツコツと階段を上る音がした。

「ああ、助かりましたよ！ご迷惑おかけしてすみませんでした！」

僕はそう声をかけた。

足音は段々と上へと昇ってくる。

来たのは修道院の人か、あるいは管理会社の人か。

どちらが来てもいいように、適当な言い訳を考えていた。

いたのだが妙だ。

足音は徐々に登ってきているはずなのに、その姿が見えない。

僕の立っている位置は、階段から離れているので、その下までは見えない。

だがこれだけ登っているのだから、そろそろ頭位は見えても良い筈だ。

僕は近寄って階段を覗きこもつとする。

その瞬間、何かに撫でられたような、風を感じた。

断つておくが、この寺院は密閉されており、窓も少ない。

風が入る余地など無いと言っているだろう。

また寺院の中は薄暗いを通り越して、殆ど光が無い状態だが、横を誰かが通り過ぎたのなら分かるはずだ。

嫌な予感がして、僕は後ずさった。

するとゴン、という音と右ひじに激痛が走る。

そこには立て看板があった。

なんてことはない。

少し悲鳴を上げてしまったが、元からある看板にぶつかったただけだ。息を整えながら、その看板を確認した。

一体何の看板だったか、地下階段の方へ矢印が描いてある。

『 地下墓地 』

貴方は身体から汗が噴き出ると言う経験をお持ちだろうか。誓って言おう。

僕はこの瞬間まで、それは一種の誇張表現の一つだと考えていた。昏間の老人たちの言葉が脳裏をよぎる。

【兎に角地下墓地から人影が参列者をじっと見ているそうなんです。じーっとね。虚ろな眼でこちらを見て、こつ言うそつですよ。』タスケテ・・・』ってね】

ハッキリ言っておこう。

僕のスタンドは、幽霊に対しては全くの無力と言っている。

これは数年前ルーヴルで起きた事件で明らかとなった。

死者に、【ヘブンス・ドア】は効かない。

「く・・・来るなアアアアアアアッ！！！！！」

僕は精一杯、寺院の外まで聞こえる位の大声で叫んだ。

こんな事したつて意味はない・・・クソッ！そんな事分かってるッ！無我夢中で僕は出入り口の方へと駆ける。

しかし所狭しと並べられた長椅子が邪魔で、思うように前へ進めない。

クソッ！クソがアアアアッ！！

「どなたか居られるのですか？」

焦って逃げていた僕の背後に、低い声でこつ投げかけられた。

思った以上に澄んだバリトン。

それは一瞬で僕に安堵を与えた。

「もしかして参拝者の方ですか？・・・クソッ！明かりが無いから分からないな。どちらに居られますか！？」

それからパタパタと、迷いながら歩く足音がした。

暗い中、その地下墓地へと通ずる階段から聞こえてきたのは、確かな肉感を持つ人間の声だった。

僕は逃げ出した足を止め、すぐるような思いで叫んだ。

「ああ居てくれてよかった！神様！」

僕は身体を翻して、地下墓地入口へと足を向ける。

それからライターを取り出し、目を付けてから今来た人に向かって声をかけた。

「明かりを付けました！ここです！」

ライターがあることをすっかり忘れていた。

これだけ暗いと、ライター一つでだいぶ明るい。

そのぼやとした明かりに照らされる寺院の内部は、それはそれで綺麗であった。

と、感想を述べられるくらいには僕は回復している。

「・・・どちらですか！？ここですよ！」

ふと違和感が芽生える。

このライターで照らせるのは、直径40メートルほど。

寺院の壁は見えている。

つまりそれは、【内部に誰が居るか程度には分かる】範囲である。それなのに。

姿が見えない。

「明かりを取りに戻られたのですか？ここなんですけれど・・・」

僕は後ずさりをしながら柱へと背を付ける。

先ほど一生分は書いたであろう冷や汗が、今再び僕の背を流れ落ちた。

しかし先ほどの声は人間のそれと同じであった筈だ。何処だ。

彼は明かりを取りに戻っただけなのか。

誰でもいい。

誰か来てくれ。

「明かりをお持ちでしたか・・・」

ふと後方から声がした。

それと同時に一筋風が吹く。

ライターの焰が揺れ、そして消えた。

僕はパニックに陥ったことが自分でも分かった。

こんなことをしている場合ではないのに、そんな事わかっているのに、なんとか明かりが欲しくてジッポライターのギアをガチガチと回す。

オイルが入っている筈だ！

何故、何故付かない！

ガチツ、ガチツと試し、7度目にしてようやく焰が灯った。

その明かりが、再び寺院内を照らす。

僕は両手でライターを持ちながら、辺りを見回した。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

「
.
.
.
タ
ス
ケ
テ
」

44話【岸部露伴は動かない2】（前書き）

遅くなつてすみません。

露伴編のみ一回上げたいと思います。

44話【岸部露伴は動かない2】

同日PM10:43 旧市街 シュテファン寺院の中

「やあああめろおおおおおおおおああああああエエエエエエエエエエエツ・・・」

死にたくない！

だが喉元を絞められる、明確な感覚が僕にはあった。

背中は柱にべったりと付けているため、後ろに逃げる事は出来ない。助けを呼ぼうにも、喉元を絞められていては声も出せない。

おまけに柱へ磔にするかのごとく、体中の骨が鳴るほど後ろへ押しつけられている。

両手で見えない力を外そうと試みるが、両手は空を切るだけだ。死にたくない・・・

「・・・ダハエハアラアエ（誰だお前）ッ！」

振り絞り切るように声を出した。

もう肺に空気はない。

後は僕の脳が酸欠で機能停止するまで、醜く、もがくだけだ。

「苦しいかね？」

当然だ。

・・・!?

「これでどうだ」

ターゲットにブチ当たる前に？

いや・・・これは当たってないんじゃない。

僕は確かに当たって、すり抜けたんだ。

あの空気の音は・・・すり抜けた時の音？

男の声が、次は耳元で聞こえた。

「もう一度聞こう。この行動に意味は有るのかな？」

今度こそ死を覚悟した。

それと同時に、直前に迫る死を恐怖した。

何が自分に起こっているのか、まるでわからない。

声の方向を振り返り、せめて死ぬ前に顔を拝んでやろうと思うが、やはり真つ暗でわからない。

どこか実体が有るのかどうかすら分からない。

自分は死ぬのか？

こんな僻地で？

「別に殺そうと思ったわけじゃない。君の答え方次第であるが」

眼の前にうすらぼんやりとした影が立った。

ステンドグラスから差す月灯りが、その輪郭だけを少しだけ浮き上がらせていた。

その影が、ガチンガチンと金属を摩擦させる音を放っている。

この音は？

僕のライターだ！

「とにかく話を聞いてもらいたいのだ小国の旅人よ。待たれよ。今灯を」

ガチンガチンという音がかみ合ってきて、ようやくボツと焔が点いた。

一瞬眼の前が真っ白になったような気がする。きつと眼が暗闇に慣れ過ぎた所為だ。

2秒くらいして落ち着くと、徐々に相手の姿が見えて来る。

するとそこには、背の高い男が立っている。

ああ・・・だがどうだ。

やはり先ほどと同じ様な生氣のない顔！

そして頁が開きっぱなしの顔から見えるのは『死』の羅列。

ああ・・・僕は・・・

こんなこと、杜王町以来だ！

「そう驚いてくれるな」

「僕を殺そうとしたのにかッ！？驚くなって!？」

「逃げないよう押さえたつもりだったが、間違えて首を押さえてしまつてね。この身体は不便だ。君もいずれわかるだろうがね」

わかりたくもない。

コイツは何がしたいのだ。

僕は生きて帰れるのか。

それとも誰にも気付かれずこのまま死んで身体は腐り落ち、オーストリアのウジ虫にその身を食われるのか？

中途半端に頁の開かれた顔をして、幽霊はライターを持ちながら僕を見下ろしている。

その眼には生氣が無く、今にも死にそうなほど具合が悪そうな髭面が一人。

「僕をどうするつもりだッ！」

「どうする？違う。私が君に頼みたいんだ。どうにかしてくれないか。この私の願いを」

「・・・な、何を？」

「いや、ここで君の様な人と出会えたことについて、我が主に感謝せねばなるまい。長らく彷徨った甲斐もあったというものだ。その不思議なエネルギーを持つ人間は少ない。特に君のように、精神を具現化させるような人間はね。私が生きていた時には出会った事は無かった。だがこうして会えた。話も出来た。私は嬉しいよ」

眼の前の男が喋りはじめた。

まるで久々に会った友人と話すかのように気さくに、しかし品性を感じる話し方は崩さなかった。

暗い教会の中、男は僕を見据えた。

その眼は意外にも澄んで生気が有る。

顔とは大違いだ。

僕は初めてだろう。恐怖とパニックで言葉が出てこなかった。

「そう、そのまま聞いていてくれ。私の一族が背負う【業】の物語だ。私が死んで、そろそろ100年が経とうという。それはつまり、今から話す内容は100年ほど前の話ということだ」

そう言うと幽霊は、へたり込んでいる僕の眼の前にそっとライターを置き、自らは参列者の座る礼拝用の椅子に腰かけた。

それから彼は深いため息をつき、天を仰ぐようにして顔を上げた。

「これはある槍の話だ。ある予言者を殺した罪深き槍・・・しかしその槍が彼に与えたのは死ではなく、復活と言う奇跡だった。そも

その話は2000年前にさかのぼる。カルタゴ近くに生える榆の木から、3本かの槍が作られた。2本は兵隊へ装備させられ、もう一本だけは処刑用にカルタゴへ残された。この時はまだその槍は特別な意味を持たず、【One of them】と表現できた。しかしある予言者の処刑の日、磔にされた彼を、処刑人である男がその槍で予言者を刺し殺した。その日からだ。それまで何の変哲もない普通の槍だったそれが忌み嫌われ、世界中から憎まれたのは。本当に恐ろしいのは槍じゃない。槍に宿った人の思いなのだ。それがただの槍をやりならざるものへと変え、世界を混沌へと落とす迄になった」

「・・・ヒッ」

彼の後ろに、ドレス姿の夫人が経っているのが見えた。

いや、彼女だけじゃない。

およそ生気のない何人かが、うすら笑いを浮かべながら、いつの間にか僕を取り囲んでいた。

中には背が曲がったものや、顎が妙にしゃくれている者もいるが、全員身なりだけはしっかりしている。

その全員が爛々と眼を光らせ、しかしその他は形容しがたいような土気色をし、温かみを感じられない。

寒い。

今初めて自分が凍えていることに気付いた。

そして寂しい。

なんとなく死にたくなるような気分になった。

僕は・・・どうしてしまったんだ？

何故死にたいと僕は感じているんだろうか。

幽霊に違いないであろう彼らはそのまま僕を取り囲み、先ほどから話し続けている髭の男の話を聞いていた。

ある者は泣きながら、有る者は笑いながらだ。

クックククという笑い声や、声を押し殺して泣いている声は、耳鳴

りのように僕の耳を包む。

ああ、なんてこった。

今見渡せば僕は、大勢の幽霊に取り囲まれているじゃないか。

余計に寒い。

誰か・・・

「我が家族だ・・・今ここに居る全員を代表して君に話している。これはわが血統を賭けた闘い・・・その【業】とは、槍を手に入れた事！そしてそれを！失った事！」

周りの幽霊たちがざわめきだした。

ガサガサという音だけで、耳には何の意味もなさなような雑音だけが聞こえる。

だが頭の奥に、彼らの言葉の意味が流れて来るのだ。

幽霊の感情が高ぶると、その感情が僕にも雪崩れ込んでくる。

『頼れるのはお前だけだ』

『断れば殺す』

『死ぬのは恐ろしいぞ？』

『まさか褒美をねだるつもりじゃあないだろうな！』

『下賤な・・・』

『アヒヤヒヤヒヤヒヤ』

『死にたくはあるまい？』

『お前』

『こんにちは青二才』

『それとも死にたい？』

『お母さん！この人死ぬの？』

『死は暗く、冷たい。お前が思っているよりずっとな』

僕は耳を押さえた。

脳には低周音が響き渡り、その音が老若男女の幽霊の声を流し込んでくる。

割れそうに痛い！

「我らの頼み事はただ一つ。我らの【業】を取り戻すのに手を貸してほしいのだ。我らはハプスブルク＝ロードリンゲン」

この暗い教会の中、光が差したように見えた。歴史のパズルに今、一本の糸が通ったようだ。そうか。

彼らがハプスブルク家の・・・

じゃあ槍と言うのは？

だとしたらなんて事だ。

既に燻って久しいこの世界で、今度こそ【本物の大戦】が始まってしまおう！

相槌を打つように、子どもの声で『その通り！』と聞こえた。

「旅人よ、手を貸してくれないか。槍を、取り戻さなくてはならない」

大勢の幽霊を分け入って、髭の男が手を差し伸べてきた。眼の前の男は真摯に僕を頼っている。

しかしどうだ。

周りの幽霊たちの恐怖は言い表せない。

動機が速くなり、目眩がする。

冷や汗が止まらず、過呼吸気味なのが自分でもわかる。

ああ嫌だ・・・

死にたくない・・・

「・・・わかった。分かりましたよ！」

彼らがざわめきで揺れた

僕は再び頭を抱えてうずくまった。
まるで幽霊の大合唱だ。

人の温かみを全て攫って行くような声。
それが互いに反響し合い、僕の頭の中で悲鳴を上げ続ける。
意識が遠のいて行くのが分かる。

「それでは君は、明日の夜ここで目を覚ますことになるだろう。決して口外するな。常に我々は見張っている。また明日の夜会おう旅人よ。ここへ来るのだ。では」

そう言うと、教会内に断末魔が響いた。
それも何百と言う断末魔だ。

それらを口ぐちに上げて、彼らは再び地下のカタコンベへと戻って行く。

教会内を白い影たちが飛び回る。
それらは実に嬉しそうな断末魔だった。

2000年前の予言者を殺した槍
それを取り戻したいと語ったハプスブルク家の幽霊。
僕は薄れゆく意識の中で、髭面の男の名を思いだした。
僕の記憶が正しければ、彼はカール1世。
オーストリア・・・最後の皇帝。

To be continued...

44話【岸部露伴は動かない2】（後書き）

少し話が込み入ってきたかもしれないので一度整理します。

静編

世界を変えるためにDioの体細胞を求めてパツシヨーネ入り
ジヨルノがネオナチに襲われる 迎撃するも、そこに居たのは【虹
村億泰】を殺した張本人、自分の兄【東方仗助】だった 兄を取り
逃すも、ネオナチの一人を捕まえる 実はそいつはCIAのスパイ
だった。

露伴編

サイン会でオーストリアへ到着 幽霊に絡まれる ハプスブルク
家の業とは？ 槍とは？

露伴編はですね。Googleで調べたら多分一本の筋が見えて来
ると思うので、マァ興味がある人はどうぞ。

ここで簡単に補足すると、ハプスブルク家はだいたいの欧州を一時
期征服していた一族で、まあすごい偉い王様です。そういった背
景を知っていたらだと、もしかすると楽しめたり楽しめなかつ
たり・・・まあ頭使わない物語が一番ですよ。なんか硬くなつ
ちやっとなー・・・

45話【岸部露伴は動かない3】（前書き）

今まで更新を止めていて申し訳ありませんでした。

実はジョジョの新刊が出る、しかも第五部の続編と8月ごろ情報を入手しまして、その動向を探っていたに有ります・・・
というのも、整合性が取れなくなるのが一番嫌だったものですから・

一応2回ほど読んだのですが、どうもこうなんていうか・・・かつて小説で出た5部と内容違うくね？
そんな気がしてなりません。

だってフーゴは本部に帰った後も、ブチャラティ達を組織側からこっそり援護していたなんて描写があったようですよ（荒木先生の文庫版の後書きにて）

なのに恥知らずってなんか話の流れとしておかしいだろうと。
あんたプロが二次創作するんなら、徹底的にやってくれよと申し上げたかったにございます。
っていうかパープルヘイズが恥知らずだったら、なんで今ジョルノとミスタとフーゴは仲良しこよしなんだよ整合性とれねーじゃねーかよオー！とか思っていた訳です。

ということ色々大幅にシナリオを修正して、ようやく書き始めております。よろしければまた、読んで感想など聞かせていただければと思います。

45話【岸部露伴は動かない3】

現在時刻PM3:30 ネアポリス 【パッショーネ】本部

会議室の中は、ある種の緊張が満ちていた。

何故、だが誰がどうしてそうしようと思ったのだろうか。

出席者たちはわからない。

ただ席に着いた瞬間、いや部屋に入った瞬間から、今日の会議がどのようなものか、ある程度予測はついていた。

だが、どうして。

一人の若い青年が、流暢なイタリア語で上司へと質問する。

銀髪の上司は彼だけでなく、その場に居た全員を説得するように言った。

「諸君が危惧している事については安心してほしい。昨日のFAXをもって、私たちの対立関係は終わった」

だからと言って納得しないのは静だろう。

あれほどの恥辱を受けたのであるから、その感情はただならぬ大波に荒れている筈だ。

「とりあえず皆、横に座っている彼がどのような経緯でここに居るかはわかっていることだろう。」

「あたし、質問があるんですけどお、フーゴさん？」

「どうぞ、静さん」

ヤバイ。

横の二人の青年は肝を冷やした。
同時に彼女の発現を止めようとするが、既に間に合わない。

「ありがとうございます。えつとお、CIAの方に質問なんですけどお、先ず最初に言いたいのは、なんでそんな余裕ブツこいて座っちゃってるんですかってことなんですがぁ？」

「質問の意図がわからないけれど？」とフリーゴが制した。
しかし静は矢継ぎ早に攻め立てる。

「そいつは私たちに危害を加えてきた張本人です。私はぁ、コイツの身体を自由にするということについて疑問を覚えます」

「しかし敵対関係は終わったとボスが判断しても？」

「ボス、今彼が能力を使えば、あつという間に会議室は血の海になります。リスクは少ない方がいい」

静は口ぶりとは全く別の、ある種残忍さを湛えた視線を会議室の隅に向けた。

端的に言えば、眼の前の男を殺したくて殺したくて仕方がないというような眼だ。

一瞬少年かと思まがうような、黄金色の髪を持つ男がそこに座っている。

彼は何かを考えるように顎をさする。

そのひとつの動作にさえ、彼は余裕が有った。

そしてそれは、彼の圧倒的な存在感を演出する。

彼は、ジヨルノ・ジヨバーナ。

【パッショーネ】のボスであり、誇り高きジヨジヨを受け継ぐ、闇の帝王DIOの息子である。

「確かに静君の言うことにも一理あるんだが、ここは矛を収めてほしい。CIAと協力する事が、相手の素性を知る最短距離だ。気持ち分かるけどね」

と言われては、流石の静も黙ってしまう。

それを傍目で見ていたスーツ姿の男は、場をいさめるかのように話した。

そう、フーゴの横に座る男。

以前はエツケハルトと名乗っていた、CIAの捜査官である。

「いやいやいやいや静さんには非常に申し訳ないことをしたと思っっていますよ本当に。ですが考えても欲しいのが、私は潜入調査の真つ最中だったもんですから、彼らの組織にかなう動きをしなければなりません。しかしですねえ・・・いやあ、ワクワクしますね実際のところ！CIAがギャングと手を組むなんて！これはアメリカが非公式ではあるけれど地下組織と手を結んだに近いことですよ！あ、乾杯しますか！私【ジニー】でシャンパンを人形にしていますね！」

そう言うと、エツケハルトの後ろに、うっすら影が浮かぶ。

それは次第に色身を帯び、ついに宙へ浮かんだ人型となった。

方から下は全てマントに覆われているが、実は空洞であり、そこから生々しい手が伸びてきてマントの中へと対象物を引きずりこむ。

顔は金属なのか生物なのか解らない。

全体的に銀色をしており、眼や鼻は無い代わりにリベットが撃ちつけられている中、やけに口だけは生々しい。

口は、深層心理内の性を表すシンボルである。

彼がそういったスタンドが発現したことは彼の深層心理にかなっているものであるから、つまり彼のゆがんだ性癖は元からのものである

る。

「いいから座って居てくれないかエツケハルトさん。場がややこしくなるのでね」

今まさにマントの下からシャンパンの人形を取りだしたエツケハルトは、つまらなそうにこれを再びしまった。

フーゴが咳払いをし、さて、と話を戻し始めた。静は未だ不機嫌そうである。

「とにかく、話を進める。CIAとの取引はこうだ。エツケハルトが潜入していたと言う全ての事実を秘匿する変わりに、相手方の情報を彼から聞くことが出来る。皆、これに異論は無いと思うが一度決を取りたい。その後質問に移るつもりだ。では賛成の者、起立」

各々が椅子を引きながら立ちあがる。

静もそうだ。

全員が立っているのを見渡したフーゴは、後ろを向いてジョルノに目くばせする。

ジョルノは軽くうなずくと、再び顎をさすりはじめた。

それでは、とフーゴが促す。

エツケハルトは自分の知ることについて話し始めた。

一週間前 AM10:01 ウィーン西駅近く ホテル【サウンド・オブ・ムズイク】

僕は何度目かの洗顔を行っている。

顔の皮脂は落ち切り、爽やかというよりは肌寒い。

「・・・あれは夢だ」

そう鏡の前の自分に言い聞かせるが、全く効き目がない。夢じゃない。

その証拠に僕は今朝シュテファン寺院の中で起こされた。

修道士たちは僕が酔っぱらって寝込んでしまったのだと勘違いし、快く許してくれた。

それから僕は逃げるように旧市街を抜け、地下鉄に乗って西駅まで帰った。

眼の前のマリア・ヒルファー通りを抜ければ旧市街だったと思うが、流石にここまででは幽霊も来られないと信じている。

ああ・・・幽霊・・・

まさしく悪夢だ。

杜王町に居た頃は幽霊なんて怖くも無かったのに、ここに来て幽霊が恐ろしい。

日本とは全く性質の違う恐ろしさを持っている。

もし僕が今夜現れなければどうなるのだろうか・・・

起きてから何度も考えた選択肢だ。

しかしどうだろう。

見えるだろうか鎖骨に浮かぶこの黒い手の跡。

時間と共に、徐々に首へと近づいて行くのだろうか。

時折この手の跡がピクリと動く。

それは僕の筋肉に流れる電気信号によるものではなく、明らかなき意によって・・・

だがチャンスととらえることも出来る。

彼はこのヨーロッパのほとんどを従えていたハプスブルク家のカル1世だ。

こんな経験できるか？

歴史上の偉人とコミュニケーションが取れるんだ。

・・・くそッ。

その何が楽しいんだ。

死んだ奴に操られるなんて、この僕のプライドが許さない。

死んだ奴は大人しくしておけばいいんだ。

死んだ奴は・・・

僕は疼く鎖骨付近を押さえながら、ベッドに横たわった。

天井を見上げると、シミが人の顔に見えてきた。

くそッ。

「誰か居ないのか？」

しかし誰も居ないだろう空間に向かって声をかけてみた。

幽霊なのだから、僕を憑きつきりで監視してもよさそうなものだが。

あくまで自由意思ということか？

馬鹿な。

なら死をチラつかせたりはしない。

「待てよ・・・？」

そう。

監視していれば良い筈だ。

そうだろう。

あれだけ沢山の人員、いや、幽霊たちが居るのだから、それこそ人海戦術をもって僕を囲めばいい。

どこるか！

そもそも僕をあのまま幽閉でもすれば良かったんだ。

それを何故しない？

貴族のプライド？

いや、わかったぞ！

奴らには【行動範囲】があるんだ！

そして【活動できる時間】が存在する！

間違いない・・・

【行動範囲】はシユテファン寺院！

【活動時間】は深夜！

ハハハハハッ！

そうになると、奴らはこの僕が何処に居て、何をしているのかを邪魔出来ないに違いない！

ならとにかくこの手の形をした枷を外すことだ。

先ずはこのまま夜まですごすことだ。

体力を付けてやる。

それから彼に連絡しなくてはな。

今頃、あのド低能極まる仗助を捕まえたところだろうか。

未だに好かないが、信頼はしていた。

それを裏切るように友人を殺した仗助。

許されはしないぞ・・・

仗助の事を思うと、僕の体に熱がこもる。

怒りの熱だ。

裏切られた、と言う。

これを晴らさなければ、億泰の魂が浮かばれない。

シユテファンで出会った幽霊と同じように、もしかすると杜王町で彷徨っているのだろうか。

T o b e c o n t i n u e d . . .

45話【岸部露伴は動かない3】（後書き）

長らくお待たせしてしまい申し訳ありません。
前書きも長くて本当になんていうか・・・

今後ともよろしく願います。

鎮魂歌編キヤラ紹介（前書き）

ということでながらくお待たせしていたものですから、そろそろ登場人物なんて忘れていた頃かなと思います。

ということでもとめ、投稿させていただきます。

鎮魂歌編キャラ紹介

【鎮魂歌編】キャラ紹介

つまり億泰の魂を鎮めるために闘っていた彼らでしたが、そんなこんなでキャラ紹介。

【復讐に燃える男：広瀬康一】

第4部の副主人公。一説では4部は康一目線で書かれた物語とも言われているが真偽は定かではない。だとしたら4部の主人公と言う事になる。

一応現在はイーストアンドウエストトリビューン新聞社に勤めているが、アメリカの大手新聞社と思っていたきた。出典は勿論ステイルボールラン！レースのスポンサーでありました。

億泰とは一緒にアメリカに渡っていた。仇討に燃える。

ちなみに嫁は、あの由花子さん。超鬼嫁。

【スタンド名：エコーズact3】

触れたものをどんどん重くする。

あいかわらずハイテンション。

【狂ったダイヤモンド：東方仗助】

第4部の主人公で、ジョセフ・ジョースターの息子。吉良の死後、承太郎の勧めもあって冒険家のマネごとをしていたが、数年前から音信不通に。最後に現れたのはNY。億泰を、殺したときだった。

現在は【日曜日の赤ワイン】という社会主義テロ組織に在籍。コードネームは『ピリオン』。それは、彼がかつて手にかけて親友の名から取ったものだ。

【スタンド名：クレイジー・ダイヤモンド】

ダイヤモンドの拳を持つ闘士。能力は「物を直す」というもの。承太郎はこの能力に感銘し、こう例えた。

「世界で一番優しい能力だ」と。

【紳士の卵：マキャベリ・ウエーバー】

クールな18歳の黒人青年。かつて億泰にスラム街で捕獲され、そのまま学校へ通う事になった。

彼が追い目を感じるものはスラムの存在だ。多くの芸能人は、自分がスラムで育って、そこから這いあがってきたことを誇りに思う。

しかし、マキャベリはそうではない。

一旦スタムという社会の底辺を味わっている自分は、二度と高貴に振舞えないと考えている。かつて自分が犯した罪は、死ぬまで彼に付きまとうだろう。それを恥じているのだ。

一度幼少の頃、州の保護士が自分の元へ来たことがあったが、彼女は「生きて行くのだから仕方ないわ」と言っていた。それは理解できる。それを選んできたことは事実だ。しかし誇っていい訳がない。踏み台にした人々を忘れてはいけない。

そういう点で、マキャベリは世のヒップホップ・スターを好きになれないことが有った。例えばJay-zはかつて麻薬販売人だったらしいが、それを公言している。マキャベリは思う。何故犯罪を自慢するのだと。ワルをやれば格好がよい。そう考えている人間が許せない。彼はそういう正直に裏打ちされた正義感を持つ人間だった。

彼が着るシャツとネクタイ。それはスラムとの決別の証。

億泰が死んだ今、康一に引き取られている。

【スタンド名：ライク・ア・トイ・ソルジャー】
抱えられる位の大きさをしたバスケットの中から、無尽蔵に玩具の兵隊を出せる。

ただし、あくまで玩具の兵隊であり、動きはするが重火器の攻撃は出来ない。また、基本的に無尽蔵で有り、本体はバスケットであるが故、兵隊が何人死んでもマキャベリは傷付かない。その点で虹村形兆の【バッド・カンパニー】と違う。ちなみに本体のバスケットは激ヨワ。

【美人過ぎるガチンコパンチドランカー：アリシア・キーズ】
億泰の生徒。何故今回の仇討に参加したのかは現時点で不明。
明るい気性が激しく、やると決めたら徹底的に正面からガチンコ勝負を挑む最強女子高生。
今は康一の家で面倒を見てもらっているところ、恐らく両親は居ない。

【スタンド名：アズ・アイ・アム】
どんなスタンドの影響も受けない能力を持つ、漆黒のドレスを身に纏ったスタンド。その姿は、アリシアの内面の美しさを表すように、強く、その強さの中に美しさがある。

名前はかつて億泰からかけてもらった一言から。

億泰は言った。

「君らしくありなさい」と。

【謎の男にして親友に殺されたロンリーガイは全ての子供たちをスラムから抜けださせる事を夢見るハートウォーミングな高校教師：

虹村億泰】

死んだ。

以上味方だけでもまとめってみました！
憶えていた方、なんとなく思い出された方、今後もよろしくお願
い
します！

46話【岸部露伴は動かない4】（前書き）

遅くなりました。

46話【岸部露伴は動かない4】

現在時間 AM 8 : 20 ネアポリス空港

待合室の椅子に、銀色の髪の毛をした男が座っている。

身体は特別大きいと言うほどではない。

先ほど彼の横を通り過ぎた女性は、彼の眼が深い青色を湛えていたのを見て、何故か目が離せなくなったという。

あまりにも、寂しそうだったと。

また先ほど泣きわめいていた赤ん坊は、母親が男の横に腰を下ろした瞬間泣きやんだ。

そして男の方へと手を出し、赤ん坊は男の腕をギュッと抱きしめるのだった。

甘えているのではない。

甘えることが生きる目的とも言える赤ん坊が、男に語りかけるのだ。「君は一人じゃないよ」と。

かつて男は、信頼する仲間にかつて言った。

「僕は恥知らずだ」と。

昔は仲間だったが、かつて殺し合いをしたこともある男は、借り切ったスタジアムの中でこう思った。

「なんてさびしい瞳をして言うのだ」と。

男はギャングの人間である。

生まれは裕福な貴族の家系だったが、成金貴族である祖父と父親のコンプレックスをストレートにぶつけられ、抑圧されるように育った。

頭は良い。

大学に在籍したこともあったが、その時彼はまだ小学校を卒業する

かどうかという年だった。

常に良い子を演じてきたし、それを負担と思う事もなかった。

しかし、教師の放った一言が、抑圧されたもう一人の【彼】を呼び起こした。

良い子の自分ではなく、残虐な獣としての自分。

ついに彼はもう一人の男に人格を乗っ取られ、大学の教師を百科事典でメッタ打ちにして捕まった。

家族は誰も迎えに来ず、大変長い間勾留されている中、来た来客は一人。

それはギャングからの誘いだった。

こうして青年は、ギャングへと身を落とし、遂に仲間を裏切ることとなった。

だからかつて仲間と対峙した時に、一人こころ漏らしたのだ。

「僕は恥知らずだ」と。

しかし彼の人生も、絶対的に尊敬するボスに心臓をささげて以来、好転へと傾く。

再度ボスに仕え、与えられた任務をこなし、ようやく信頼を得るまでになった。

だが、何処かで自分は裏切り者だという気持ちを抱えている。

あの時、ブチャラティが組織に反旗を翻すと決めた時、乗り損ねたその後、組織の中でブチャラティを隠れて支援していたこともある。それは後悔からだったろうか。

いや、途中で船を降りた恥知らずな自分が持つ、精一杯の希望を託したのだ。

保身と、解き放たれた【白】の中の自由。

葛藤しながらも、【白】の中に居たいと強く願っていた。

心に生まれたその願いは、圧倒的な悪に対する、自分に出来たせめてもの抵抗だった。

静は、彼の深い藍色の眼を初めて見た時、この色は慈愛の色だと思
った。

落ち着きがあり、動かない山の様に頼れる存在感。

しかしその深い藍色は、実は寂しさを瞳の奥に沈ませた色で、それ
に気付ける人間は少ない。

銀髪の男、フーゴ・パンナコッタは孤独な人間である。

「どうしました、フーゴさん？」

フーゴは声をかけられるまで、静が傍に立って居ることに気付かな
かった。

耳に入った英語に反応できなかったのだ。

見上げると、ティーンエイジャーらしい服装をした静が、珈琲を2
つ手に持ちながらこっちを覗いている。

フードの上に革のジャケットを着て、デニムパンツの上にブーツを
履いている。

何処にでもいそうな女の子だ。

この年頃の女子とは話した事がなかったので、静と話す時はいつも
たじろいでしまう。

彼女が「よければ」と珈琲を手渡す。

「考え事ですか？」

「いや、昔を思い出していたところですよ。誰かに命じられて、任
務をチームでこなすって事をね」

静達も、先の鬪いの話は聞いている。

ディアボロという悪党を、ジヨルノが倒した時の話だ。

「船を降りた時の話ですか？」

恐ろしく正直な問いに、フーゴは答えに詰まった。
ある意味酷い侮蔑なのだが、恐らく静に意図は無い。
だが、フーゴの手が止まる。
鼓動が跳ねあがった。

「今回は、真つ先に降りるのはアイツですよ」

指を差した先に、新聞を広げて携帯電話で話している少年が居た。
金髪をクルクル指で巻きながら、何やら難しい話をしている。
株の話だろう。

あれを買え、これを売れと銘柄指定にうるさい。

「アイツ凄い無責任でビビリなんですよ。軽薄で如何にもイタリヤ人って感じ。あ、別に皆がそうだとは思わないですけどね！兎に角アイツ、絶対どっかで逃げますよ。フーゴさんが闘ってる後ろでね。そういうやつなんですよアレックスは」

頭を抱えるフリをして、静はおどけて見せた。

静からすると、それは本音だったのだが、フーゴはそれを見抜けない。
い。

下手なフォローに聞こえたのだ。

であるから、フーゴは正直なところ気分を害した。

「っていうかマジ頭おかしいんですよ。この前街でチンピラに絡まれたんですけどね。アレックス酷いんですよ。眼を合わせないようにして、ずっとサンドイッチを食べてて助けてくれないんですよ！意味わからなくないですか！？」

後から理由を聞いたら、静なら一人で大丈夫だと思っただの、あれは相手にも一理あるだの言っつて、結局お前怖いだけだろって話」

「ああ……でもなんで僕にそんな話を？」

「真つ先に浮かんだんですよ。フーゴさんのことが。こんな時、フーゴさんなら店から逃げてもアタシを助けに来てくれる。フーゴさんが敵わないと感じたら、もつと強い人を呼んできてくれるとか。兎に角、逃げないと思うんですよ。フーゴさんなら。そこんことをちよつとアレックスに叩きこんで貰えませんか？あれからアタシ、口聞いてないんですよ。あのド低能と」

「その話によると、僕は評価されているんですか？いないんですか？」

静はキョトンとした目でフーゴを見る。

何言ってるんだコイツ、というような眼だ。

「してるんですよ。そりゃ自分が敵わないと思ったら、船を降りるのが正解。でも自分が行けないなら、せめてその船にジェットエンジンでも付けてやる。その姿勢は船を下りる時となんら変わってませんよね。降りるかどうかが問題じゃなく、闘う体勢を変えたただけ立ち向かうって姿勢が大切なんですよ。それをアレックスは分かかってない」

静の解釈は、かつてフーゴの仲間であったアバッキオが、死に際に目指した境地と同じだった。

一歩でも良い。

歩み続けると言う姿勢はいつか真実に辿りつける。

それは同じように、船を降りる事は逃げじゃないということを示していた。

あの時自分は、ボスとの圧倒的な力量の差が怖かった。

自分の中の芯が折れたと感じたのだ。
ただどブチャラテイ達への支援は、償いではなく、それも闘いだっ
たのか？

「あ、アレックスがこっち来た。アタシはエンポリオとアリシアと
土産物でも見てますから、一回説教しといて貰えますか？あとアタ
シがめっちゃめっちゃ怒ってたって。じゃ！」

「ああ・・・珈琲ありがとう。また後で」

静が去った後、アレックスが会釈をしながらこっちへ近づいてくる。
ようやく相手に何かを告げ終わると、フーゴの横に座った。

「フーゴさん。これを機に株式の運営について本気で乗りだしたい
と考えているんですが、どうでしょうか？

確かにイタリア含め、EUの財政は傾きかけてます。ですからユ
ーロではなく、今もまだ悩み中ですが、選択肢として円を買うと言
う方法を考えているのですが、しかし流動性があつた方がいい。つ
まり国債という訳ではなく、株式を・・・」

「アレックス君。あー、君の高説を聞きたいのは山々なんだが、先
に僕の話に付き合ってくれないかな」

「勿論。組織のためなら」

フーゴは思わず笑ってしまった。

とことん歯車のズレている奴だなと思いつつ、先ほど静から聞いた
話をしてみることにした。

「例えばなんだが、巨大な悪が地の果てまで追っかけて来る。従え

ば自分は生き残れる。それに例えば仲間が立ち向かったとして、君はどうする？」

「えー・・・勝てそうですか？」

フーゴは堪え切れずに笑ってしまった。

アレックスの顔は極めて真面目である。

そうだ。

確かにこれは正しい。

先ずは、命あつてのものだねという訳だ。

「ハハハッ！君は生粋のイタリア人だね！」

そういえば自分を含め、イタリア人とはこういう気質のものなのだ。第二次世界大戦のイタリアを思えば簡単に答えは出る。

【勝てそうな方に乗っかる】とは、如何にもイタリアらしいやり方だ。

何故だかフーゴは、自分がイタリア人だったことに初めて感謝した。心は何故か、晴れやかだった。

「よし、君の好きに予算を使うといい。プールさせてる金を全て任せよう」

礼を言ってアレックスは立ち上がり、慣れた様子で携帯電話を取り出す。

着信履歴から先ほどの電話相手であるデイブを呼び出しているのだろう。

フーゴがその背中を追うと、スーベニアショップとは反対方向の階段の下で、アレックスは「全ッ額ツツ込め！！」と突然叫んだ。

一週間前 PM18:12 ウィーン 世界遺産地区リンクス 国
立オペラ劇場近く スターバックス店内

正直ウィーンにまで来てスターバックスというのも気がひけたが、
何故だかアメリカナイズされた店内は落ち着けた。
他の一般的なカフェに入るとどうも、ね。

奴らが出てきそうで怖いんだ。

約束の時間まではあと4時間ほど。
時間指定。

約束しなければ殺す、という事なら、あの場で決めさせれば良かったじゃないか。

時間でわざわざ相手を縛る必要があったのか・・・？
まあ今夜分かる。

ただ分かった時は、僕の反撃が始まった時だ。

「あー、ROHAN先生？」

「・・・今考え事してるんだ」

「すみません、でもサイン会の打ち合わせをしないと・・・」

僕がハプスブルク家と闘うって時にコイツは一体何を言っているんだ。

さつきからあれはどうですかこれはどうですかって、お前は僕の母親か。

まあ母親の顔は知らないんだが・・・

とにかく眼の前に座っている女性が、僕にはどうも合わなかった。

顔は整っているが、鼻が高い西洋人顔というわけではない。
ラテンっぽい、顔に凹凸の無い造り。

日本人よりは鼻筋が通って居るかなという程度。
だが美人だ。

愛らしい顔ではある。

ただ、僕はとことんこの人が苦手なんだ。

何故って？

見ればわかる。

杉本鈴美にそっくりなんだよ。

だからあれこれ世話を焼かれると、落ち着かないと言つかむずかゆいと言つか・・・

そんな問答をしてしばらくすると店が混んできた。

僕は手元のカフェ・モカを飲みほしてシユテファン寺院へ向かう。
相手と戦うには、相手のことを知らなければならぬ。

「もしかして、ROHAN先生ですか？」

声をかけてきたのは一人の少年だった。

身長は高くない。

中学生くらいだろうか。

顔つきは幼い。

手にサイン紙を持って、おずおずと聞いてくる。

「サインかい？」

思ったより僕が気さくに見えたのだろう。

少年は喜んでサイン紙を差し出す。

「好きなキャラクターは？」

「あ、あの、ピンクダークです！」

リクエスト通り書いてやると、少年は喜んで帰って行った。スターバックスの店内は、僕を見て何かしらの有名人かと思っっているのだろう。

しかし年配者は誰も僕の顔は分からない。別に気にはしてないさ。

この国で1番売れている漫画の作者だからな。それだけで十分だ。

「ROHAN先生？」

「なんだ、まだ居たのか」

「まだ仕事の話は終わってないですよ。サイン会はこの書類通りでいいとして、屋内展示をどうするか」

「そんなの適当でいいよ。あ、コスプレとかさせてみたらいいんじゃないかな。そういうの外人は盛り上がるだろ？」

「それいただきです！」

「それじゃあ僕の仕事は終わりだ。用事があるのでこれで失礼するよ」

「ああ！ちよつと待って私も！」

僕は荷物を持って出口へ向かう。

ドアを開けると、僕の周りを薄暗い藍色を溶かしたような大気が包

む。

これがリアリティってやつなんだよ。

その中に浮かび上がる白熱灯の色をした国立オペラ劇場。そして振りかえれば、少し先にシユテファン寺院。

「あー、ROHAN先生？」

「ん、なんだい？」

「ケルトナー通りがどうかしましたか？」

「・・・いや、別に、かな。あー、君さ」

「はい？」

「幽霊の話は聞いたことあるかい？シユテファンの」

「オットー（2011年に亡くなった最後の皇太子）の、ですか？」

「・・・もういいよ」

その親父に聞きたいことが有るんだよ。

出版業はつくづく役に立たない人間が多いな。

まあいいさ。

とにかく、今夜に備えて晩飯を食べないとな。

リンクス（旧市街の中）なら、なんだつて備えてある。

そう思つて足を向けた。

リンクスに入ると、奇妙な高揚感に襲われる。

まるで自分がファンタジー世界の中に入ってしまったかかのような、

錯覚に陥ってしまう。

未だに石造りの街並みは、流石旧市街と呼ばれるだけある。そして今も、ここはウィーンを中心なんだ。

ここを歩きまわるだけで、インスピレーションが沸いてくる。特に夕暮れ時の街明かりは、心が落ち着く。

僕は歩きながら、夕飯の場所を探した。

街に並ぶレストランは、地元の間も良く使うのだろうか。それとも観光客だけ？

どうせなら地元の間が行くようなレストランに行きたい。だったら、と僕は裏路地に入る。

きつとこういう場所の方が地元の人に評判が良いに違いない。しばらくして眼に入ったのは、郵便局を過ぎたところにある【Bonzogoes To Bitburg】という名のイタリア料理屋だ。

友人の勧めで、杜王町のイタリアンに入ることはあったが、なんだかそれが懐かしくなってくる。

「なるほど・・・」

この店の扉を掴んで初めて分かったが、この店はリンクスの端に位置するのだ。

そしてその裏は、ドナウ川か？

橋の向こうには遊園地、プラーターが見える。

僕の好きな映画、第三の男の名シーンは、あの場所で撮影されたんだ。

「お一人様ですか？」

声をかけてきたのは若いウエイターだ。

これまた淡い顔をしている。

いかにもゲルマンという顔をした人間はウィーンでは見ない。
民族が違うのか？

それともイタリア人？

まあいい。

兎に角飯だ。

「ああ一人だ。窓際の席いいかな。それと、ボルチーニ茸のピッツアよろしく。間違ってもマルゲリータなんか出すんじゃないぞ？僕はあの如何にも手を抜きましたっていうようなシロモノが嫌いなんだ。豪勢なやつ頼むよ」

現在時刻 PM19:20 ウィーン リンクス イタリア料理店
【Bonzo Goes To Bitburg】

歳は行かない青年が窓際の席に座って、河を見ていた。

どنگりのようにくりくりとした眼をキョロキョロと動かし、ピッツアマルゲリータをほおばる。

頬をリスのように膨らませ、うまそうに涎も啜っている。

「こちら、ムール貝のスープになります」

そこへ置いておいてくれと青年は手だけでジェスチャーした。

相変わらず頬にピッツアを押しこむのに忙しそうだ。

「気に入っていただけましたか？」

「んぐぐ……勿論ですよ！やっぱりピッツアはマルゲリータに限

りますね！あれやこれやゴテゴテしたのはナンセンスですよ！」

「それは光栄です」

若いウエイターはそう言つて厨房へと戻つて行く。

青年は再び眼の前の食べ物を平らげることには修身した。

ピッツアはモツツアレチーズが新しいのか、口に入れた端から爽やかにコクが広がる。

その下に引いてあるトマトソースは、ペーストにしても未だ酸味が衰えず、甘みも深い。

だが生地も良かった。

ピザハットの生地は食べたものじゃないが、ここの生地はそのままでも食べられるほど豊かな小麦の味がする。

まるで上等のパンを食べているかのようにだった。

ムール貝も青年の口に合った。

果実のように水分を含んだ身、その味もさることながら後に残るうま味が凄まじい。

簡素に味付けされたようで、何度も魚介出汁を重ねたのだろうと思われるスープもまた、下を唸らせた。

それら食べ始めて20分ほど。

食べ終わって見渡すと、客が既に誰も居なかった。

さっきまで2組のカップルが居たはずだが、もう帰ったらしい。

本当に美味かった、と思う。

もっと流行つても良いものだが、と青年は素直に思った。

再び河に眼を向けると、人通りが意外と多いことに気付く。

これならやはり、呼び込みでもして客を入れるべきだ。

青年は店内を見渡すが、店の雰囲気もいい。

古い家屋をそのままリストランテにしたようだ。

こうやって古い物を長く使っていく。

これがウィーンの良いところだと思う。

「・・・なるほど」

青年は感心しながら見回していると、一ツ気になる物を見つけてしまった。

扉のガラスから看板が透けて、【OPEN】という文字が見える。つまりその看板の裏が道路には向いている訳で、そこには【CLOSE】と書いてあるに違いない。

「なるほどなるほど」

そう一人ごちると、厨房に向かつて声をかけた。若いウェイターが、顔に笑顔を張り付けてやってくる。

「御用でしょうか？」

「御用でしょうか、だって？こんな料理を出して、御用が無いとでも思ったのかい？」

そう言うと青年は、虫の入ったムール貝のスープを見せた。ウェイターの笑顔が張り付く。

「シェフ、出てきてくれるかな。説明が欲しいんだけど」

ウェイターは頭をガクガクと揺らして頷くと、厨房へ引っ込んだ。他に1人ウェイターが居るが、彼は右往左往しているだけだ。

直ぐに奥から中年のシェフが出てくる。歳は40程だろうか。

細身だが神経質という印象はない。

それより何より、眼がカバのようで印象的だった。

もう一人奥から出てきたのは若い料理人だ。

客のクレームにオドオドしている感じが、如何にもド新人って感じがした。

彼は中年のシェフに隠れるよう縮こまっている。

「スープに虫が入っていたようで、申し訳ありません」

「本当だよ！まさか狙って入れたとかじゃないよね？」

「めっそうもございません！」

「じゃあなんで入ってたんだよ。アンタじゃ話にならないよ。もしかしてウェイターか？ウェイターが入れたのか？」

「いいえそんなはずは・・・」シェフは後ろを見た。

「じゃああれか？誰か別の奴がやったのか？」

「そんなことは・・・店内に居るのは、ここに居る人数だけで全員ですし・・・」

「あ、そう。じゃあこの店に居るのはウェイター2人にシェフ2人なのね」

【ジリリリリリリリリン】

【ジリリリリリリリリン】

青年が人数を確認した瞬間、店の奥から電話が鳴る音がした。

古いタイプの呼び出しベルだったが、ウィーンでは珍しくない。

それがけたたましく店内に響いた。

「電話、鳴ってませんか？」青年が聞いた。

シェフはキョトンとした顔をして青年を見ている。
ウェイター達も同様だ。

しかし、【若い料理人だけが電話の方向を見てい】る。

「おいマヌケ。君のことだよ若い料理人君」

青年はテーブルの上にあつたナイフを持って、料理人に踊りかかった。

彼は電話に気を取られていたため、すぐに青年に捕まる。

そのまま青年は若い料理人の首筋にナイフを当て、「全員テーブルに座れ」と命令する。

「さて君、僕の顔は知ってますよね？」

「・・・我が君」若い料理人は苦しげに言った。

「他の者へ連絡は？」

料理人は首を振った。

ウェイター達とシェフは、二人の問答がさっぱり分からないようだ。
しかし、キョトンとした顔で青年を見ている。

それに比べて若い料理人の顔は蒼白だった。

電話のベルに反応した、その浅はかさを思い、取り返しのつかない
ことをしたという気分なのだ。

あのベルは、【スタンド使い】以外には聞こえない。

「店をわざわざ締めて僕を確保しようなんて用意周到だと思っけど、

君この席に座った事はある？CLOSEの看板が見えるんだよね。
この席から」

料理人は顔を赤くする。

「あ、他の人は全員手を上げて伏せていただけですか？そう、そんな感じ。」

さて、実は僕も君に会いたかったんだよね。この店になら誰か組織の人間が居るとは思ったけど、こんなにマヌケな手に引掛かってくるとは思わなかったよ」

「我が君・・・シュトロハイム氏が探しております。僕らも血眼になつて。貴方を・・・」

「シュトロハイムはまだ追ってきてるのか。でもあれだろ？君が連絡をしていないなら、僕がウィーンに居ることはバレて居ないはずだ。違うかい？」

料理人は頷く。

青年は満足そうに眼を輝かせると、だったら、と続ける。

「このウィーンに【大勢の同士が集まっているのはなぜだい？】」

ピクンと料理人の身体が反応する。

あからさまな反応だったが、後ろに居る自分の主人が相手では、その信仰心もあつてかなり動揺しているようだ。

事実、このウィーンには青年の所属する組織の同士が大勢押しかけていた。

驚くべきことに、それはカフェ、教会、店舗、教員として、かなりの数が自然に導入された。

ある者は出張と称して、ある者は転勤として、またある者は下宿人としてウィーンの街へと溶け込んだ。

青年は、誰が組織の人間なのか。

その把握の仕方を知っていた。

どうやったか、つまり片っ端から電話をかけたのだ。

【スタンド使い】にしか聞こえないベルで。

案の定ケルントナー通りの中心部で試してみると、3、4人が振りかえる。

組織の人間は【スタンド使い】でなければならぬ。

それが返って青年には好都合だったのだ。

それから青年は、この街のあちこちに身を潜ませながら、電話を鳴らして行った。

「同士が集まってる理由は・・・自分みたいな末端には・・・」

「ほう。なるほど。じゃあ質問を変えよう」

「お願いです我が君。自分は何も知らされて・・・」

「いや知って居る筈だ。たかだか一週間前の事、いいか？よく聞いて答えてくれよ？一週間前の話だ。」

【漫画家に、槍を奪われたんだな？】

料理人の身体が震えた。

それだけで青年は応えを得たようなものだった。

To be continued...

46話【岸部露伴は動かない4】（後書き）

【Bonno goes to Bittsburg】

RAMONSの曲からです。ドライブに丁度よさそうな曲かも。

47話【岸部露伴は動かない5】（前書き）

よろしくお願いします。

47話【岸部露伴は動かない5】

一週間前 PM 21:06 ウィーン シュテファン寺院前

僕は確信を持ってこの寺院の前に立っている。

間違いない、というのが僕の見解だ。

出て来る信者に逆らって、僕は中へもぐりこんだ。

中へ入ると、案の定礼拝客は誰も居ない。

まだ拝礼する人間がいるかと思っただが、その辺は彼ら任せってところか？

だが係員と聖職者は居るらしい。

「まだ出てこないのか？」

返答は無い。

聞こえているのかどうなのか。

僕にはわからない。

だが出てこないってところがいい。

それでいいんだよ亡霊諸君！

僕はおもむろに、扉の裏へ身を隠した。

そこから壁際に沿って、ジリジリと歩み寄るのは聖職者の出入り口だ。

普段はポールが立っていて、そこからは誰も出ることが出来ない。けどどそんなこと関係ないだろ？

僕は扉の前に立って、昨日僕が襲われた場所に視線をやる。

しかしそこには大きな柱が2本邪魔して、向こう側が見えなかった。それでいい。

昨日幽霊たちは、確かに【柱を避けて】動いていた。

つまり、奴らにここをすり抜ける力はない。

「こんばんは。我々に御用ですか？」

しばらくそこでチエックをしていたら、一人の聖職者が寄って来た。

「あー、神父さん？こんばんは実は相談したい事が有りまして・・・僕の身の上の話なんですけれど」

「構いませんが、明日おいでいただくことにはなりませんでしょうか？そろそろこの寺院を閉めたいと思うので・・・」

「そんな事を仰らずに神父様！僕の！僕の余命の話なのです！僕は死ぬのが怖い！」

大げさに泣いたふりしてやった。

その声に警備が「どうしましたか？」と寄ってきたが、その実「つまみ出しましょうか？」と言った意味だろう。

これを神父は「先にながさってください」と言って追い返した。それでいい。

どうにも宗教者って奴は、その使命感と言うか自尊心のようなやつをくすぐってやると、100%断れない人種だ。

あさましい。

だがありがとう神父様。

「ここはどの道施設せねばなりません。とりあえずここから出ましよう。隣にお話する為のスペースが有ります」

「おお！ありがとうございます神父様！」

ついでにヤボ用もあるんだ。
よろしく頼むよ。
僕の為にね。

一週間前 PM22:00 ウィーン シュテファン寺院内 椅子
の上

今だから白状するが、この時僕は少し脅えていた。
相手の幽霊も、数が多すぎる。

失敗したら、それこそ僕が幽霊になるかもしれない。
僕が寺院内を見回すと、蝋燭の火が目にとまった。

そういえば昨日は消えていた蝋燭が、今日は点いている。

もう集合時間は過ぎているのだが、それでも彼らが来ないのは蝋燭
の所為じゃないかと思った僕は、それを消しに行った。

席を立てて蝋燭を見る。

全部で12本。

これを右から一つづつ消していく。

ふっ、と粹を賭けて消す度、この寺院の中から温度が無くなって行
くような気がした。

たかが蝋燭一本の話なのだが、僕は消える度身ぶるい起こしそつに
なる。

「・・・もしも私たちを思って蝋燭を消しているなら、礼を言おう。
しかしそれは必要ない行為だ旅人よ」

背後で温度の無い声が聞こえた。

振りむくと、やはりそつだ。

青白い顔をしたカール1世が立っている。

どうにも苦手なんだこいつは。

側に居るだけで【死にたくなつて】くる。

体中の全ての幸福が吸い取られるとでも言おうか？

だけど今日の僕は違う。

こいつらを、ぶっ殺してやるんだ。

「こんばんは閣下。火がお嫌いかと思ひましておせつかいを」

「つまり小芝居を覚えたようだな」

「いいえ。今日は皆さまは？」

「居る。まだ姿を貴殿には見せていないだけだ」

そうですか、と言って僕は礼拝堂の中央へと歩き出した。

足が震えているのは演技だ。

虚勢を張ったフリ、ってところかな。

どかりと椅子に座り、カール1世を見た。

「引き受けてくれるのだな？」

「こいつを外してくれるのが先ですよ」

僕は自分の服を手繰って見せた。

黒い手の形をした影は、今にも僕の首をわしづかみにしようとしている。

「外したら逃げるだろう？」

「お言葉ですがね閣下。僕はこの寺院に火を付けたっていいんです」

よ。アンタ達の亡骸を焼いて、おまけに王宮近くに安置してある心臓も焼き払ったってね。それが槍を見つけた瞬間焼き払ったっていい」

「そう脅えるな。勿論外そう」

「頼みますよ。コイツの所為で夜も寝られなかった。呪いが残っているようならいつだって僕はウィーンに火を放ちますからね」

「想像していたより貴殿は小さい人間だな」

その言葉づかいに腹は立ったが、カール一世は自分の手を近付けて、僕の鎖骨辺りに触れた。

その瞬間、肩に合った重みの様なものが取れ、確かに呪いが解かれたのだと僕は感じた。

礼を言った後、僕は槍の話を聞いてみる。

「それで、貴殿に頼みたい事なのだが」

「僕も少し調べましたよ。そいつは【ロンギヌスの槍】、ですね？」

カール一世は頷いた。

ロンギヌスの槍ってのは、ちょっと前に流行ったアニメの類のもんじゃない。

キリストが死んだ後、本当に死んだかどうか確かめる為に差した槍の事だ。

ただの槍。

そりゃキリストの血でもついてりゃ話は別だけど、ついてたって槍は槍だ。

それ以上でもそれ以下でもない。

まあ宗教者たちには神聖視されるんだろうけど、主に権力者たちにはシンボルとして求められたようだ。勿論この眼の前に居る髭の旦那も同じ。

16世紀頃か、一時はナポレオンの手にも渡ったようだが、それからはハプスブルク家にあつたらしい。

EUの覇権を握るハプスブルク。

フランスの皇帝ナポレオン。

時の権力者たちは、その槍を手に入れればとんでもない力が手に入ると思ったようだが、そりゃ全くの勘違いだ。

とんでもない力を持った人が、その力に宗教的な正当性を持たせるために槍を手にしたんだ。

順序が逆なんだよ。

もう一度言おう。

槍は槍以上でもなければそれ以下でもない。

そんなものに死んでもご執心なんだから、天下のハプスブルク家も大したことはない。

「槍は我が家にあつた。幼き頃は疑いもしたが、今ならわかる。あれは恐ろしい代物だ」

「で、そいつを僕にどうしろって言うんですか？」

「悪しき者の手に落ちようとしている」

そりゃ既につて話だろ。

調べはついてるんだよ。

【誰が持って行った】のか、そして【誰が持ってるのか】ってのはな。

「それを取り返せばいいんですか？」

「そうだ」

「解せませんね。閣下には悪いですけど、あれはただの槍だ。別にメシアを殺した代物でもない。死んだ後つついただけの木の棒に等しい。なんかの力が得られるなんて考えるのは勘違いなのでは？」

ここいらが潮時かなと思ひ、からかってみる。
しかし、カール1世は怒りもせず、諭すように僕に言った。

「そう思う人間も多い。だが物質が【あるエネルギー】を持つとしたら、君はどう考える？」

「放射能とか？それともオカルティックな？あり得ません。科学的じゃない」

「君は【精神エネルギー】を実体化出来るようだか？」

ギクリとした。

駄目だ。

売り言葉に買い言葉じゃ通じない。

でもなんだ？

エネルギー？

スタンド能力を持つ道具なんてありえないぞ。

スタンド能力つてのは、人の脳が紡ぎ出す精神力が物体かした超能力のことだ。

第六感とも言えようか。

物質に生じるわけじゃない。

僕はそう口答えした。

「ではロンギヌスという青年もまた、精神エネルギーを物質化出来る人間だったとしたら？」

眼がカッと開いた。

まさか。

いや、でも大昔の人間にも居たつていいはずだ。

【スタンド使い】は大昔から居たはずなんだ。

僕はそれを否定できない。

だがロンギヌス自身が【スタンド使い】だなんて、ちょっとした暴論だぞ。

確かめるすべは無い。

しかし、あり得ない話でもない。

「わかりましたよ。槍に関する議論は後にしましょう。で、どこから取り戻せばいいんですか？」

「槍を我が家から奪った人間を知っているか？」

「【アドルフ・ヒトラー】、ですね？」

20世紀初頭、ナチス党を第一党にしたドイツは、オーストリアと併合。

欧州の中心だったハプスブルク家を散々コケした後、名だたる貴族たちからお宝をかつさらったつて話だ。

流星社会主義。

しかもヒトラーはオカルト趣向があったようで、これに限らず世界中の魔術品を集めて立って話だ。

ならロンギヌスの槍は？

「欲しがらない訳ないですもんね」

「違う」

僕は驚いて、腰を上げてしまった。
今、彼と対峙する格好になっている。

よくよく彼を見れば、その輪郭はおぼろげで、大気との境目が分からない。

改めて自分の話している相手が幽霊だと言う事に気付いた。

「真犯人は全く別の人間だ。【ハインリヒ・ルイトポルト・ヒムラー】。知っているだろうね？」

おいおいまさかヒトラー擁護理論に走るつもりじゃないだろうなこのオッサンは。

安い陰謀論だ。

ヒトラーはヒムラーの操り人形にすぎない。

だがその説明に何の意味がある？

あの頃ナチスがユダヤ人虐殺や人体実験に明け暮れたのは何故だ？
ヒトラーがGOサイン出したからだろう？

その時点で同罪なんだよ。

「この件については詳しく話す必要があるだろうね。経緯についてだ」

「臨むところですよ。閣下」

夜は長くなりそうだった。

To be continued...

47話【岸部露伴は動かない5】（後書き）

今篇も長くなりそうな予感・・・

すみませんいつもいつも。

48話【岸部露伴は動かない6】（前書き）

遅れてすみません。

若干回を増すことにホラーっぽさが無くなって行くよじな・・・

48話【岸部露伴は動かない6】

現在時間 AM 11:13 飛行機内 席番号 6-C

ファーストクラスの席に、東洋系の顔立ちをした女性が座っている。髪型はロングで、ウェーブがかかっている。

肌はやや白い、健康的な肌色。

まなじりはきりりと上がり、鼻が少し上向いて、それがネコ科の動物を思わせた。

美人という事よりは、しなやかな強さを携えた横顔に人々は注意がいった。

彼女がジョー・スター家の切り札にして、パツシヨーンの幹部を奪い取った【静・ジョー・スター】である。

その横に座る野球帽を被った少年は、髪の毛がカールしており、それがあどけなさを残す。

顔立ちは意外に端正で、あまり天然パーマが似合っていない。それを隠すように防止で押さえつけているというようだ。

全体の雰囲気としては、酷く腹の据わった様な印象がある。不思議と体重が見た目より重そうに見えた。

聡明そうな瞳は爛々として、眼の前の映画に見入っている。

「ねえエンポリオ」

静は横の少年に話しかけた。

しかし映画に集中しているのか、全く聞こえてないようだった。

「エンポリオってば」

今度は思い切り太ももをつねった。
なんだよ、と少年は飛び上がって静の方を向く。

「アホのイタリア人がやかましいから、ちょっとぶっ殺してきてよ」

「アレックスのこと？自分でやんなよ」

「いやよ。アホがうつるでしょ」

通路を挟んで反対側の窓辺では、アレックスというスーツを着た少年と、ジャケットの袖をまくって粹に着る女の子が、座っている。女の子の方は、少し小柄だが大人びた雰囲気がある。飾らないその態度が魅力的に光る。

その彼女に対して、身振り手振りで冗談言っては機嫌を取ろうとしている。

女の子の方もまんざらでもなさそうで、時折的確な合いの手を入れては身もだえして笑っている。

その雰囲気、静は何故だか気に食わなかった。この臆病なお調子者がめっぽうム力ついたので。

「別にチンピラの件はいいじゃんかー」

「駄目に決まってるじゃないアンタ何言ってるの！？アタシはね、襲われかけたのよ？なんでアイツは一人でボソボソと飯食ってるのかって話なの！まだ謝って貰ってないし！」

「だって静、超強いじゃん」

「アンタ女の子が虐められてんだから、命を捨てて男は守りなさいよー」

「もーいいじゃん。あいつ前からああいう奴じゃん。薄情でお調子者で女の子大好きで。イタリア人なんだからしょうがないじゃん」

エンポリオは「付き合ってられないよ」という顔で、再び顔を映画に向けようとする。

その顔をガツシリと静は掴み、再び自分へと向かせた。

「アンタあいつと友達なんだから謝らせなさいよ」

「フーゴさんに頼めばいいじゃん。ほら、またジャッキーのカンフーシーン見逃しちゃたじゃん」

すると向こう側のお調子者から静に能天気な声が飛んできた。

「ウーイイ静アー！おーいゴリラー！ハハッあいつ類人猿だからさ、英語わかんないんだよ！多分呼んでも来ないぜ！」

流石にいさめようとすするアリシアだったが、このお調子者はいつまでたっても静をおちよくる事を辞めない。

静の中で何かが切れる音がする。

多分、それは人としての最後の良心だったのかもしれない。

「あーら呼んだアーアレックスうー？」

そう言つて静は席を立つ。

微弱に揺れる航空機の中、しっかりとした足でアレックスに近づき、アリシアに「ちょっと席代わってくれる？ごめんね」と囁いた。

アリシアは了承してアレックスに手を振る。

お調子者は静が横に座ることに文句があるらしく、ぶーぶーと文句

を垂れている。

「まあそう言わないでアレックス。あたし前から貴方に言わなきゃいけないことがあったの」

そう言っただけでアレックスの耳を誘う。

アレックスは興味津津で横の席に身を寄せ、その見た目は、一人獲物を狙う鷹の様な眼で見ている。

これからアレックスの身にかかる不幸を予感しているのは、エンポリオしかない。

しばらくして肉が弾ける様な鈍い音がした後、それっきりお調子者のイタリア人は静かになった。

アリシアは「いつもあなの？」とエンポリオにクスクスと笑いながら聞く。

「きっと世界が変わっても、アイツらだけは変わらないよ」

エンポリオはため息交じりに答えた。

ウィーン到着まであと二時間。

一週間前 PM 22:00 ウィーン シュテファン寺院内 椅子の上

幽霊閣下は「元凶はヒムラーだ」と言いきった。

「奴はヒトラー率いるドイツを千年王国にするべく、あらゆる手を使った。反対勢力の処刑、ユダヤ人虐殺、障害者の排除、優性遺伝子の確保。しかしそれだけでナチスはああまで信望を集められただろうか？」

「別の要因が必要だと・・・？」

僕は訪ねた。

眼の前の幽霊、カール・ハプスブルク＝ロートリンゲンは大仰に頷く。

僕、つまり岸部露伴は彼の話に的確な相槌を入れながら、話を促した。

夏とは言え、少し教会内は肌寒い。

「尊敬が必要なのだよ。分かるかね旅人よ。恐怖政治が人々を魅了したのではない。魅力的なナチスが恐怖政治を行ったのだ。だからこそナチスは第二次世界大戦後も信望を集めることが出来る。【ロングヌスの槍】もその一環だった。あれが何処にあったかわかるかね？」

「いいえ？」

「我が家だよ。我が家にあつたのだ。あのホーフブルク王宮にな。私の一族が槍を手に入れたのも、やはり求心力を手に入れるためだった。それを持つだけで、欧州諸国の人々は尊敬を我々に向けた。あの家には神の子を殺した槍がある。そして我が一族を畏れる。無くともいい。しかしあれば、確実に信望を担保できるのだ。人心とは科学的ではない」

「ヒムラーはそれを狙っていた？」

「彼は賢い男だ。槍だけでなく、全てのオカルティズムをナチスに集める気だった。【金棍干ヴァジュラ】、【アーサー王の剣】、そして手にした者は世界を制すると言う【ロンギヌスの槍】。畏れを集めれば、おのずと信仰心は神へのそれと近くなる。誰もナチスへ逆らおうとは思わないのだ。ヒトラーのオカルト趣味を、手段として昇華させた男だよ。奴は」

その口ぶりからは、まるでヒムラーを評価しているようだ。カール一世は一度口を止めた。

暗い教会の中、重苦しい沈黙が空間を支配する。鉛を飲まされたような気分だよ全く。

「講釈ありがとうございます。でも何故それを取り戻したんですか？大戦後槍はホーフブルクにアメリカ軍が返したらしいじゃないですか」

「違うのだよ。返されてはいない。何度も言うが、あれはただの槍じゃない。ヒムラーは最後までそれを渡す気は無かったようだ」

「つまりアメリカ軍は偽物を掴まされたと？」

「そうじゃない。戦後確かに槍は我が家へ戻った。しかしその後なのだ」

虚空を睨むカール一世。

まるでそこに、憎むべき敵でも居るかのようじゃないか。いや・・・？

脅えているのか？

「槍は・・・消えたのだ」

畏れた。

畏れがその瞳に宿っていた。

なんてこった。

こんな大物がまるで、神を前にした聖職者のようじゃないか。

こういう白人の傲慢なところが嫌いなんだよ。

結局神様の威光を振りかざして運命とか契約とか言いながら諦めたり攻撃したりするんだ。

「愚かな発言だと思うかね？」

一瞬冷や汗が垂れる。

心を見透かされたような物言いだ、その真意は槍が消えたことを尋ねる質問だと一拍遅れて気付く。

「いえ、ただ混乱して。どういう意味です？僕はホーフブルクの博物館で実物を見ましたよ？」

「それは、【実体としての槍】だ」

「物には精神はありませんよ」

「浅はかな旅人よ・・・良く聞け。ロンギヌスは君と同じく、【精神エネルギー】を実体化出来る人間だった。もっとも、幼い頃から盲目だった彼には、その時まで分からなかったろうがな。時に【精神力】とはどのような人間が高いと思うかね？」

謎かけか？

【精神エネルギー】の強さは、そのままその人間の精神力と比例す

る。

では一体これまで誰の【スタンド】が一番協力だったろうか。

【ザ・ハンド】・・・？

いや、待て待て待て。

億泰？

あんなバカも見たことが無い。

精神力とかどうこうという前の問題だ。

「思いつきません」

「それは【信条】の強い人間だ」

億泰はそれには当てはまりそうも無かった。

億泰・・・死んでも馬鹿にされ続ける可愛そうな奴め。

「例えば牢屋に何十年と入れられて発狂しない人間は居るだろうか。それをやりのける人間が居たとしたら、それはひとえに【信条】の強さに他ならない」

「じゃあキリストなんかはまさに強力な【スタンド使い】だったでしょうね？」

どうだ！自分だけが知ったフリしやがって！

カール一世は見せ場を奪われたように少し黙った。

偉そうな人間の鼻先を蹴つり飛ばしてやるのが僕の趣味なんだ。だが話が見えてきたぞ。

「・・・さよう。キリストの【精神】は槍を伝い、ロンギヌスのそれと同調した。そしてキリストとロンギヌスを繋ぐ一つの槍、それが意思を持った。神の力が、人の精神と同調したのだ」

僕は知らずのうちに興奮していた。

手に握った汗が、逆流しそうになるのを感じる。

神の力かどうかはさておく。

キリストは病人に手を当てるだけで治したと言うから、【精神エネルギー】を実体化でき、それが人々の身体に影響したのだろう。

仗助がそうだ。

裏切り者と神の子を同列に扱うのは気が引けるが。

「そして【ロンギヌスの槍】は、ロンギヌス自身の【精神エネルギー】が宿り、それが神の子の血によって覚醒した・・・時折死んでもこの世に残る存在がある。我々もそうだが、ならば扱う者がこの世から消え去ったとしても、【精神エネルギー】が残ってもおかしくはないだろう」

仰る通りだ。

じゃあ、消えたと言うのは？

「その【精神エネルギー】が【ロンギヌスの槍】の本体。それが消えたと言う事ですね」

カール一世は笑う事は無かったが、満足げに頷いた。

話はまだまだ込み入りそうだ。

時刻は11時半を回る。

僕の計画までは、引き延ばさないと、だ。

To be continued...

49話【岸部露伴は動かない7】

一週間前 PM23:02 ウィーン シュテファン寺院内 椅子の上

時計の針が動くには、内部に仕掛けてあるカムが時間によって針の歯車を動かす必要がある。

そのカムが何度か振り子のように振れば・・・ほら、針が動いた。ガコンという時計の針が動く音に反応してしまう。

普通に話していればいいんだ。
普通に・・・

「ではその【槍】は何処へ消えたのですか？」

「実はな」

カール1世は僕に背中を向け、階段を上るように、空中へと歩みだした。

一歩一歩、螺旋階段を上るようにその脚は2mほどの高さを歩いている。

「消えたと言うのは正しく無い」

そう言うと、カール1世はこちらを振り向いた。

そっちな。

心当たりはあるはずだ。

何を隠そう、アンタの【孫】が持っているんだからなッ・・・

ここで一言説明を付け加えておいた方がいいだろう。

カール1世の孫にあたるカール2世は、現職のオーストリア国会議員である。

僕は最初にカール1世に会ってから、急いでSPW財団と連絡をとった。

支援を頼んだんだ。

ちなみにジョースター家とは何の関係もない僕が、何故財団を利用できるかと言うと、ジョースターさんが僕に恩があるからだ。

と言っても大した内容じゃない。

僕が所有していた、1960年代のアメコミを、彼に上げたんだ。

それこそ死ぬほど喜んでいたよ。

ようやくスーパーマンの原本が全て集まった、ってね。

勿論奥さんには内緒。

それで、僕が財団に聞いた内容は、次のような内容だ。

すなわち、「【ロンギヌスの槍】は誰が所有しているか」だ。

ホーフブルクにある槍が本物なら「博物館が所有している」と返すてくだろう。

だが財団からの答えは、「現王位継承者が所有している」ということだった。

それがどのような形で所有しているのかは分からない。

僕の予想だと、博物館にある槍は偽物で、現王位継承者が保有していると思っていたんだけどな。

どうやら違ったようだ。

現王位継承者であるカール2世は、槍を【スタンド】として所有しているらしい。

まあなんだっていい。

11時半まで、あと少し。

「実はそれを宿している人間は、既に何年も前から私は知っている。正しくは、消えてはいないな」

「なるほど。そいつから取り返せと。そついつことなのですね?」

「その通りだ」

「それを、断つたら?」

カール1世の眼が光った。

冷たい、呆れたような顔だった。

何かを言い淀むように口を開けている。

多分、何と言っていていいか迷っているんだろう。

「貴殿は、どうしてそんな事を聞く?」

「興味の問題ですよ閣下」

「・・・矮小な輩め。逃げられるとでも?」

「すみませんね。軽口叩くのが悪い癖で」

11時半まであと何秒だ?

駆け引きをするには早かっただろうか・・・

カール1世は、空中2mほどのところを浮いたまま、こちらへ歩いて来た。

徐々に僕を見下ろす目つきは、生前人間を相手に生きていなかった事を容易に想像させる。

僕を人とは思ってない。

駒の一つにしか考えていないんだきつと。

クソッ!

僕は見下ろされるのが死ぬより嫌いなんだよッ・・・!

「貴殿は・・・何を謀ろうというのだ？」

口の中が渴いて仕方ない。

これはタイミングを間違えた。

何が上手くいかなかったんだ！？

歯車か？

仕掛けか？

「そういつつもりじゃありませんよ。気に障りましたか？」

「頬が引きつっているぞ」

「そんな事は・・・」

「声が震えている。残念だ。貴殿なら力になってくれると思っていたのだが」

カール1世は空中の階段を更に取り上がり、両手を大きく開いた。

それから何かを唱え始めたようだが、僕には聞こえなかった。

その代わり、何が起こっているのかは分かる。

小さく人の声が聞こえる。

先日教会で聞いた、あの嘆きと恨みの叫び声だ。

それが段々大きくなってくる。

カタコンベから、声が登って来る。

寒くて仕方が無い。

「旅人よ、思いなおすことを推奨するが」

カタコンベから顔を上げると、カール1世がこちらを見下ろしてい

る。

そして下からは幽霊の大群。

2人程、明らかに身体が青白く透明な存在が僕に近づいてくる。

その眼は闇を落としこんだかのように真つ黒な穴が開いており、顔には弛緩した笑みを浮かべている。

そんな彼らが、ゆっくりと僕に近づいてくる。

1人、2人が3、4人へと増え、実にゆっくりとこちらへ寄って来る。

急に来ればパニックにもなれたのだが、じわじわと寄ってこられるだけなら純粹な恐怖が掻き立てられる。

まだか、まだか・・・

「・・・クソッ！」

みつともなく逃げた。

焦ってつまずき、椅子に衣服が引っかかる。

ドタン、という音がして身体がひっくり返る。

関係者入り口のドアまであと少しというところだったのに。

カール1世が空中から近づいてきて、僕の顔を覗き込んだ。

後ろには何体ものハプスブルクの亡霊が控えている。

思わず側頭部を床に押し付け仰け反った。

近くで見るカール1世の顔は、瞳は闇を湛えて、人の生気を吸い取るような面構えだった。

それが醜く歪み、目は闇色一色に、口はねじれてそれでも笑っていた。

僕は初めてドス黒い恐怖を感じた。

「もう一度問おう旅人よ。貴殿は我々に協力する、のかね？」

「きよ、協力したら、助かると・・・？」

「勿論だとも。さすれば貴殿は呪われることもなし、祖国に帰れる上、完追した暁には褒美すらくれてやろう」

カール1世は先ほどの顔のままニタリと笑った。

上品なだけに、更におぞましが沸く。

死、を予感させる笑顔だった。

それが近づいていることを知らせる様な。

そして引き込まれそうな死の魅力。

それが僕の返答を待っていた。

なるほど。

だから僕はあらん限りの声で、こつ怒鳴ってやったんだ。

「だが断る！」

しばらくの静寂が空気を満たす。

時間が止まったかのように両者動かない。

しかし次の瞬間カール1世の顔が、それが明白に怒りと分かるほどで歪んだ。

「貴様・・・予を馬鹿にしておるのか？もう少し賢いと思ったがな」

「いいや賢いんですよ閣下貴方の何十倍もね！1000年寝ている間に脳みそ腐つちまつたんじゃアないですか！？この岸部露伴はお前みたいなビチクソ野郎が勝ち誇っている時に、NOと鼻面へ叩きつけてやるのがよりの生き甲斐なんだよッ！」

僕は床に押し付けながら怒鳴った。
燃えるような感情が、初めてカール1世の瞳の中で揺らいだ。
怒ったのか？
馬鹿め！

「狼藉にも程がある！今すぐ我らの仲間入りをして貰おう！」

「その予定はありませんよ閣下！これが、僕の切り札だッ！」

ドダンッ！

言いきつたと同時に、僕が逃げ込もうとしていた扉が開いた。
カール1世は扉の方を向いている。

驚いたような眼で扉の先を見て、呆然としていた。

「ご苦労だったな神父ッ！」

そこには昼に出会った聖職者ともう一人、男が立っていた。
僕がここへ来るよう、【ヘブンス・ドア】でプログラミングしておいたのだ。

その神父は地べたに這いつくばる僕を見て、憶えたような表情をしていた。

すかさず立ちあがり、神父を押しつける。

カール1世も僕を捕まえようとしたようだが、よほど驚いたのか、更に動きが止まった。

誰かが来たことにじゃない。

何故コイツが来たのかという事にだ。

「ヘブンス・ドアアアアアアアアアアア！！！」

空中にピンク・ダークの少年を描くと、神父のツレが羊皮紙のようにバラバラになり、一冊のパピルス本が出来た。

「動かないでいただこう閣下！これで形勢逆転だッ！」

僕はポケットに隠していたライターを、本になった男へと近づける。ご紹介しよう。

彼こそが現ハプスブルク＝ロードリンゲン家家長であり、正当な王位継承者、そして眼の前におわすカール一世が孫、カール・ハプスブルク＝ロードリンゲンだ。

To be continued...

49話【岸部露伴は動かない7】（後書き）

あー、早く書きたいけど時間が無い・・・

50話【岸部露伴は動かない8】（前書き）

長くなって済みません！

50話【岸部露伴は動かない8】

一週間前 PM23:32 ウイーン シュテファン寺院内

形勢は決定的に逆転した。

僕が本にしたカール現国会議員は、まるで【幽霊でも見たかのような顔】をしていた。

実にすがすがしい気分だ。

パピルスで書かれた巻物のように、カールの身体は解ける。

そして気付くと、僕の身体を【槍】が【貫通して】いた。

「……ッ!？」

これは……ああ心臓だ。

心臓から肩口にかけて、一気に貫かれている。

これで形勢逆転って訳だ。

僕はZippoライターを落とすと、そのまま床に倒れ込んだ。

リンゴの皮のように、細長く一枚に解かれたカール議員の身体は、

僕が能力を発動した時の、いつも通りの様子だ。

だが【槍】はバラバラになることはなく、一本の確かなエネルギー

として僕を貫いた。

その事実を理解しようと脳裏で僕は反芻していたのだが、カール議員の一言で現実へと引き戻される。

「これで【目的は達成】ですか、先代？」

氷柱が脳天をブチ抜いたかと思っただ。

「ああ、どんな形であれ、目的は果たせた」

カール議員の身体が、シウルシウルという音を立てて、人の形へと戻って行く。

「手順にはかなり違いが出たようですが」

「こやつめ造反しかけてな」

「まさか、呪いは？」

「解いていたのだ」

「紳士が過ぎますぞ。結果的には満足行きましたが」

「ふむ……して、どうしてここへ？」

「ああ、彼が私をここへ呼んだのですよ。そこで失神している神父を騙して……いや、何らかのトリックを使ってそうさせたのかもしれません。彼から『お父上の御遺体に傷が』とかなんとか言われて、ここへ急いでせ参じたのですが……」

「なるほど……驚いた。君が来るとは」

「なんにせよ、手順が省けて良かったですよ。ポジティブに考えましょう。ともかくもこの者が【槍】の保有者となったわけですし」
二人は最初から事情を知っていた、というよりは……ハメられたのは僕の方だったのか？

間違いない。

コイツらは最初からグルだったんだ！

カール議員は確かに【槍】の保有者だった。

だがコイツがカール1世とグルだったなんて……誰が想像出来たツ！？

現職議員が【スタンド使い】だっただと！？

僕の想像力不足の結果だ！

クソツ……

愚かなのは僕の方だった。

この僕がドマヌケだったんだツ！

この僕、岸部露伴が！

このナポレオンがツ！

このアイゼンドルフがツ！

この……がツ！

この……がツ！

この……がツ！

この……がツ！

この……がツ！

この・・・がッ！
この・・・がッ！
この・・・がッ！
この・・・がッ！

がッ！

がッ！

がッ！

がッ！

がッ！

「先代、始まったようですよ？」

「推測は正しかった」

「そうですね・・・今はどの辺りまで遡っているんでしょうか？ゴ
ルゴダの丘まであと何時間で辿りつくんだろう」

「君は？」

「2日程度でしたよ。頭の中にいくつもの人格が介入してきて、今
までの持ち主らの感情が嵐のように吹き荒れるんです。脳が着いて
行けなくなったのが翌々日でした」

「ではその程度待たねばなるまいか。しかしこの旅人は【スタンド
使い】と呼ばれる、自己の精神を実体化できる能力を持つ人間だ。

ひとつの身体に二つの精神が流れ込むのだから、互いに反発し合い、
自我が崩壊すると言う事はあるまいか」

「私自身が【スタンド使い】ではないのでなにともしかし、駄目
なら次を探せば良いことです。どのみち私では【槍】が居着いてし
まい、他の【槍】は探せません・・・ああッ！」

僕の頭の中で、嵐が巻き起こっていた。

それは今までの【槍】の保持者達の感情だ。

ごうごう鳴って、自我と他人の感情との境界線が引けなかった、が、
思い出した。

僕は岸部露伴じゃないか。

気付けば既に両足は地に立ち、葦のようにしなやかに、僕は立っていた。

眼は焦点が合わず、宙を見つめている。

わかっている。

わかっているさ。

頭の声に何度も頷いた。

僕は渦巻の中グルグルと下る。

漠然と、誰かに会いに行くのだと感じている。

そして嵐の最深部へ超特急した僕を待ちうけていたのは、およそ聖人とは言い難い男だった。

背の低い、伏し目がちな男。

だがそれが、僕の中へと流れ込んできた【槍】の本体だと無意識に理解した。

『やっと私の声が聞こえる人間が出てきた』

【槍】が語りかけて来る。

『次は君が持ち主かい？』

そうだと頷いた。

『ここ200年ほど、私の声が聞こえる人間には会えなかった。嬉しいよ』

じゃあ持ち主に感謝してくれ。

『だが君はまだ完全な持ち主じゃない』

そうなのか？

いや、【そうなの】だ。

無意識に理解できる。

だが・・・ああ駄目だ。

頭がガンガン痛む。

ぼーっとしてきた。

『君の自我で君を支配しなさい。君は自我とその精神とも言える人格が別個として併存しているからこそ私の声が聞こえるのだ。君は君の自我と君の精神のものだ。私は君ではない』

へブンス・ドアー・・・

『それがもう一人の君の名だと言うなら呼び続ければいい』
へブンス・ドアー。

それはもう一人の僕。

『私の姿をイメージし、私の声に意識を向けなさい』

彼の言葉を聞く前に、何故か頭で理解が出来ている。

どこかこれから僕が為すべきことまでが全て。

そしてそれを僕が断れないことまで全て。

その理由、事象それらすべてが瞬時に把握できる。

膨大な情報というスープを飲みほした気分だ。

味覚が全ての情報を同時に処理できる。

そして嚙下した時に、僕はさも昔から知っていたかのように、それらすべてを理解している。

『もう既に理解していると思うが、君はどうしたい？』
決まってる。

【槍】を探さなければ。

『本当に良いのかい？』

馬鹿にするんじゃない。

そうでなければ・・・僕は死んでしまっじゃないかッ！

血管に溶けた鉄を流し込んだ様だ。

体中の細胞が沸騰する。

クソッ！また僕は誰かの言いなりにならないのかッ！

結局ハメられたままかかよッ！

クソッ！クソッ！

『そうだね。そうしなければ君は死んでしまっ』

わかってるよッ！

身体が溶けるイメージ、メルトダウンの様子が全て流れてきたよッ！

わかりやすい映像付きでなッ！

DVDにして人権団体に突きつけてやるぞ僕はッ！

『さあカウントダウンは始まっている。外へ出かけよう。君には私

の力を貸してあげる。もう一つの【槍】の暴走を止めてくれ
わかってるッ！

わかってるよッ！

じゃあどうすればいい!?

お前の力を借りるには、哀れにも片割れを奪われた【槍】が、その力を発揮するにはッ!?

『僕の【スタンド】の名を呼べばいい。僕の名前は【ロンギヌス】、スタンドの名は【Man With A Mission】』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!」

喉が張り裂けるかと思うほど、僕は突然吠えた。

混濁した意識の坩堝の中より戻ってきたのだ。

何にせよ急がねばならない。

僕には時間が無い。

「おはよう露伴君。彼には会えたかな？」

「・・・」

「どうした、彼から何か聞けたんじゃないのか？」

僕は近づいて、彼の腕を握った。

そのあまりの速さに、カールは反応できなかつたようだ。

「握手かね？これはこれは、我々の意思に賛同していただけるのだね？」

「・・・ああ」

「聞きましたか先代!?!やはり杞憂だったのですよ!全ては上手くいっていた!」

「そして感動すらしているよ」

「感動？なるほど、ありがたい話じゃないですか先代！彼が、感動だなんて！」
そう。

実際感動してるよ。

今僕は誰も体験した事の無いリアリティを味わっている。

そしてこれは、その感謝の気持ちだ。

是非僕の感動を、君も味わってみてくれ。

「ありがとう、の気持ちだ」

こめかみの血管が揺れる。

調子に乗った罰を食らえ。

「借り受けるぞ！【Man With A Mission】ッ！」

カールの手を握り締めて叫んだ。

ところで人は、感動を覚えると身体が熱くなるのを感じる。

それは、脳内シナプスの電流によって統制された脳が、アドレナリンと言う物質を出して肉体を興奮状態に陥らせ、筋肉を発熱させてほぐすのだと言う。

さて感動とは、擬似的に起こしうるものである。

それはただ素晴らしい絵を見た、とか素晴らしい音楽を聞いた、という以外の方法でだ。

その方法は、その場にあつた熱、湿度が鍵となって来る。

これらが揃う時、人の脳は判断機能を劣ろわせる。

この瞬間、脳は興奮状態に自分があるのだと錯覚し、アドレナリンを分泌する

すると、擬似的に興奮状態へと陥ったことになる。

人が人に感動を伝えるのは難しい。

しかし例えば、熱と湿度の両方を一定条件で人に与え、感動の内容を伝え聞かせたとするならば、人は感動を共有できるだろう。

神の子の【感動】を共有したい。

人に伝え歩きたい。

そういつた強い思いが、【ロンギヌス】の【スタンド】となって具現化したのではないだろうか。

瞬間、ボコボコと膨れ上がる皮膚。

身体じゅうにまとわりつく水滴。

カールの遅れて叫ばれた悲鳴。

ザマあみろ。

これが僕からの感謝の気持ちだ。

「何をしてくれた貴様ッ！」

「御大は黙ってるッ！」

睨みつけて僕は言う。

「最早生きては返せぬな。我が家族よ聞こえるか！我らが愛しき子孫の命が、狼藉の手によって奪われようとした！生かしておけるかッ！？」

カール1世が叫んだ。

まずい。

脱兎のごとく、僕は神父たちが出てきたドアを抜けて逃げ出す。

「追えッ！」

後ろから滑るように迫って来るのは、奇形の子どもと、やたら顎の長い青年だ。

両者ともに、足が無い。

「だからどうしたッ！」

シユテファン寺院右奥にある、関係者出入り口を蹴破り、外へ出る。遠くに何人かの人通りが見えるが、流石に日付をまたぐと若者すらいない。

特にリンクの中でもここ、重要文化財がある中心部は、店も少ないため観光客がいなければ人は寄りつかない。

ホームレスが眼の前にあるリンク内唯一の地下鉄駅に居る以外は。

僕は兎に角扉を出ると、真っ直ぐ大通りに直面するよう走った。

シュテファンの正門は大通りに面している。

その正門を横切れば、あとは僕のホテルまで一直線だ。
5km位あるけど。

ともかくも逃げおおせた僕は、彼らの支配下から出れた高揚感から、そのまま走ってシュテファンの脇を走り抜けた。

そうして左へと曲がると、正門が左手に見える。

ざまあカンカン。

どうせお前らはその寺院から出られない。

一生そこで寝ている。

・・・かと言っていつまでもここに居るのも気が引けるから、正門を走って横切ろうとした時だった。

何かに躓いて、僕の身体が宙へと放りだされる。

「寺院の中は落ち着く。しかし、外へと出てみるのもまた、悪くは無い」

僕の躓いた先に、手があった。

そして手の先には・・・先ほどの幽霊たちが。

身体を起こして後ろを見る。

すると、正門からワラワラと幽霊たちが出てくるではないか。

ある者は泣き叫びながら、ある者は放蕩に笑いながら。

各々虚ろな眼を宙へ向けながら、だらしなく開いた口元から涎を垂らしながら歩いてくる。

先ほどまで僕の周りを伝っていた冷気が、外にまで及んできた。

「我々が外に出られない性分だとも思ったかね？」

全力を込めて僕はリンクの石畳を蹴りあげた。

僕の【スタンド】は、彼ら幽霊には効かない。

ここは、逃げるしかない。

全力で閉店したカフェの前を横切り、サラマンダーというブランド店の前を横切る。

すると道の中央に置かれたベンチがこちらへ飛んできた。

「なにッ！」

幽霊たちの足は速い。

僕も遅い方ではないが、それでも何人・・・いや、後ろこそ見ていないが、それこそ何百人と言う幽霊たちが、僕を追ってきている筈だった。

「コオオオツチダヨオオオ~~~~ン」

右手からは、ピエロの恰好をした幽霊が、大道芸人の残した木の椅子を投げて来る。

巧みに避けて、更にH & a m p ; Mの前まで走り切ると、横切った小路からトラックのような影が、轟音で背後を走り抜けていった。

「陛下アア！！陛下アアアアアアア！！」

横眼でチラリと後ろを見ると、まぎれも無い、黒い馬にまたがった、騎士の幽霊がこちらに向かって走ろうとしていた。

「クソッ！！」

進路を右にとり、カフェがやってるであろう商店街を目指す。

だがああ・・・なんてことだ。

なんでこんな日に限って店はどこも閉店しているんだよッ！

時折ぶつけられる障害物を背に、僕は国立オペラ劇場の裏を目指した。

後ろを見れば、行く数人の亡霊たちが、走って僕を追ってくる。

死だ。

死が僕を追ってきている。

『死は神の国の入り口。それは喜ぶべきこと』

・・・何をいきなり悠長な事をこの聖人は。

お前が出る幕じゃない！

僕はそのまま走り続ける。

今噴水を越えた。

大通りまで・・・あと200メートル！

『しかし後ろから追ってくるのは死ではない』

うるさい黙ってる！

『あれは闇。永劫の闇を歩く者たち。それが彼らの業』

だから黙ってるよ！

段々足ももつれて来る。

もう限界だと僕は悟ろうとした。

『光を探しなさい。光こそが闇を払う唯一の救い』

だからうるさいんだよ！

勝手に身体の中に入ってきて、その細胞をメルトダウンまでさせて。

しかも時限爆弾まで僕の身体に組み込みやがって！

光なんてある訳ないだろ！

『いいえ、そこには必ず光がある。光を探しなさい』

亡霊は直ぐそこまで迫っていた。

「貴様アアアアアアアツ！！」

金属音にも似た亡霊特有の金切り声が僕の耳元でする。

ほら、もう僕は襲われる。

光。

ありもしないそんなもの、この僕を救えはしない。

光。

ひかり。

光？

『光で闇を被いなさい』

・・・光だな！

見つけたぞ！

今、僕は理解できた！

これが光だった！

50話【岸部露伴は動かない8】（後書き）

Man With A Mission

日本のロックバンド。オカミ頭で有名ですね。私自身はこれも含め、日本のロックは結構好きなサウンドなのですが、今一つジャニーズやAKB、韓流に押されてこうしたバンドが出てきません。これは悲しい。日本の音楽界ももっと盛り上げたいですね。ちなみに私はFACTとか10-FEETとかも好きです。

今回引用した理由は、神の子を刺したロンギヌスは、彼の教えを広めると言うミッションを持っていたこと。またキリスト系をミッション、なんて言いますよね。ちょうどいいかと。まあSoul'd outもジョジョ本編に出てるし、Perfumeも出てるし。いいですよね。

51話【岸部露伴は動かない9】（前書き）

あ、今回露伴出てこねえや。

51話【岸部露伴は動かない9】

二日前 パツシヨール本部近くのホテル 302号室（広瀬康一・マキャベリの部屋）

マキャベリは広瀬康一のことを、「康一さん」と呼ぶ事は無い。大概「Sir」と呼ぶ。

これは康一、そしてその向こうにある億泰への最大限の敬意であり、決してこの関係は崩れなかった。

ある一方で、康一はあくまでも恩人である億泰から自分を引き取ってくれた、副次的な恩人であるがため、億泰は敬意と親しみを込めてファーストネームで「オクヤスさん」、康一に対しては名字で呼ぶのは他人行儀過ぎるがファーストネームで呼ぶのは躊躇われると、感謝を込めて「サー」と距離を取り差別化している。

この度「ピンク・ダーク」という名前で呼べと言われた時には、多少の違和感があったものの、しかし通名でわざわざ呼ぶことが必要なのなら拒否する事も無いとして、「ダークさん」と呼んだのである。

またこれは、マキャベリと康一の間接関係を希薄にするような狙いもあった。

決して彼らは、【後見人関係】を知られたくないのだった。

そんな彼らも、プライベートな二人の間では、いつもの呼び方に改める。

だからやはりマキャベリも、康一からの問いかけには「アイアイサー」と答えた。

「向こうには話は通してある。言葉づかいに気をつけるよ」

「アイアイサー」

「空港から直接本社に向かうだろう。Tシャツは駄目だ」

コーン新聞社へ面接へ行くのだ。
殆ど縁故入社に近い。

おそらく、これは康一の考えなのだが、マキャベリはそこで働き大学へと通うだろう。

何年かかってもいい。

いずれ学歴を備えてくれればと思っていた。

対するアリシアは、既に奨学生としてコロンビア大学への進学が決まっていた。

彼らにもまた、生活があるのだった。

「アリシアはこのまま静達に着いて行ってくれ」

「わかったよ、コーイチパパ」

「良い子だ。だが十分気を付けてくれ。そしてお前自身の能力にも気をつけるんだぞ」

アリシアは眼を伏せて、口の端だけで笑いながら「分かったよ」と答えた。

「愛してる、パパ」

アリシアが康一の眼を見て言った。

康一はしばらくその眼を真顔で見っていたが、やがて口の端だけ笑い、自分より背の高いアリシアを抱きしめながら「僕もだ」と言った。

「俺もだ。アイラービュー・サーああああああああ痛い痛い痛い痛い痛い痛い」

再びマキャベリが足を押さえて騒ぎだす。

二人を見ながらアリシアはこう考えていた。

この仇討が終わったら、大学へ進学するのを一年待ってイタリアで暮らそう。

時には眼の前の二人を呼んで騒いでもらい、由花子とイタリアの街を見ながらゆっくり語りりたい。

これからのこと、そして自分の身体の事を。

そう思っていた。

現在時間 ウイーン シュベヒャート空港 女子トイレ

3時間程度のフライトだったが、いささか足が疲れた。少しタイトなミュールを履いていたのが悪かったか。

そう思いながら、洗面台の大きな姿見を見る。

ハンカチを小さく噛みながら、濡れた手で長時間のフライトで乱れた髪型を直していく。

別に見る人も見てほしい人も居ないのだが。

しかしなかなか髪型は決まらず、垂らしたりウェーブを作ったり、ときにそれを鼻の下に当てて変顔を決めてみたりと自由だ。

トイレの外で、ドイツ語によるアナウンスが聞こえる。

この雑多な雰囲気、静は嫌いじゃなかった。

ある程度髪型が決まりかけたとき、後ろで右から三番目の個室ドアが開く。

中から出てきたのは、紅いハイヒールを履いた、アングロサクソン系の女性だった。

簡単なサマーセーター、ホットパンツ、下品にならぬようホットパンツの下に黒いタイツ、そして大きなペンダントをしている。

しかもかなりの美人であった。

静の視線に気づくと、彼女はにっこり笑って「髪型？」と英語で聞いた。

「ええ、ちよつと決まらなくて」

「そのままでもキュートよ」

女性は笑いながら手を洗った。

確かに静ははた目から見ても十分可愛い。

日本人特有の幼さと、気の強そうな上向いた鼻先が、彼女の健康的な魅力だった。

「ありがとう」と照れながら礼を言う。

「でも決まらない？」

「うん・・・でもしつこいですよね」

「そんなコトないわ。女の子にとってお洒落は何よりも大事なコトよ。アタシがやってもいいかしら？」

そう言つて女性は髪のを触るジェスチャーをした。

鏡の中で目が合い、静は照れた。

それほど美人だった。

「じゃあちよつと来て？」

素直に静は従つた。

顔は少しだけ紅く染まっている。

「ウェーブかけてるのね」

「学校で流行つてて」

彫刻のように美しい顔立ちをした女性は、静の毛先をもて遊びながら、しばらく考えたように黙つた。

「ウェーブはね、それだけで量があるように見られちゃうから、いっすすつきり後ろに回すの」

そう言つて毛束を後ろへ持つてきた。

「そこでこう、ゆったり結ぶ」

そうして毛先を指でぐるりと巻いた。

勿論そのままでも十分可愛かつたのだが、後ろで束ねることにより見えたらなじが、色つばさを演出した。

ひつつめるところか、少々ルーズにまとめた髪は、一定の方向性を持つて後ろへ流れる。

「あとは分け方ね」

そう言つて手を離す。

「まず前髪を・・・右と左どっちに分けたいかしら？」

「じゃあ・・・右で」

「良いアイディアだわ。そうね、じゃあこうして7：3位にしてみましよう。それから7を三つ編みにして、毛先はもう一度後ろへ戻す。どう？これなら簡単だし、色つばくない？」

実際女性の手際とセンスは洗練されていた。

長く美に対して意識を傾けてきた人間のなせる業だろうか。

静は雰囲気の変わった自分の顔を見て、なんだか居ても立っても居られないような居心地の悪さを感じた。

恥ずかしかったのである。

「似合ってるわよ！じゃあここでこうして・・・ヘアゴム持ってる？」

「あ、シュシュなら」

女性は束ねた髪を静に見せて、それから渡されたシュシュで毛束を止めた。

それからその毛束を、左肩から前へと垂らす。

この動作一つで、まるで5歳は大人びたように感じた。

「気に入った？」

静は黙ってコクコクと頷いた。

「でも物足りないわね・・・薄くルージユでも引く？」

そう言うとき女性はホットパンツのポケットから口紅を取り出した。

もう静からすれば、自分がモデルになった様な気分である。

「ルージユを引く時のポイントはね、こう唇のラインに沿って、少しでも上乗せする感じ。わかるかしら？」

そう言っただけで引く。

ヘアメイクだけでここまで変わるものかと静は実感した。

「あら、可愛くなったじゃない！」

「そんな・・・ありがとうございます！」

女性は後ろから両腕を静の首へと回し、甘えるように身体を預けてきた。

背は静よりも高い。

ドギマギしながら静は女性と、鏡越しに目を合わせていた。

「綺麗よ」

「あ、ありがとうございます・・・」

「本当に綺麗。アタシ、日本人って特有の美しさを持ってると思うわ。わび、さびに裏打ちされる繊細な文化。一方で決して折れない

心

「そ、それはどうも……」

「美しい。美しいわ……裏切り者のイタリア人とは大違いよ静さん……」

「……え？」

「私の尊敬する一族よ……次は【イタ公抜きで戦争しましょう】」
女性の眼が、熱を帯びて狂気に色づく。

静はハイスクールでの歴史の授業を思いだした。

……【Japan, German, Italy】(日独伊)

自分が今、窮地に居ることを察した。

t o b e c o n t i n u e d . . .

52話【岸部露伴は動かない10】（前書き）

この小説、ユニーク数こそ少ないものの、アクセス数が多いと言っ
のは、これはとっつきにくいですが、一度読んだらそのまま最後まで読
んでいただけている、という事でしょうから、励みになります。

呪いを掛けるだのなんだのとお茶を濁し、この岸部露伴に触れようとすらしなかった。

その上、物を投げて間接的に僕へ攻撃しようとする。

つまり、亡霊が生命に触れると、何らかの支障をきたすに違いない。考えられる問題は二つ。

一つは、何も影響が出ない。

これは騎士の亡霊が突っ込んでできていることから、何らかの影響が生命にあるということがわかる。よってこの線は無い。

二つ目は【生命に影響を与えることが出来る】にしても、【何らかのペナルティが起こりうる】ということだ。

その証拠に、亡霊はホームレスや生き物の身体に吸い込まれるようにして入り、ゴロゴロと追ってきたスピードのまま転がった。

どころか苦しんでいるようですらある。

やはり、【光】が僕に手を伸ばす闇を払ってくれた。

このまま、と身体を低くし、更にスピードを上げる。

僕の膝が限界だと叫ぶが、あと数メートル我慢してくれさえばいい。後ろを見ると、それでも亡霊が追ってきている。

クソッ！クソッ！

逃げ切つてやるッ！

あと9メートルッ！

あと8ッ！

あと7ッ！

「だがここで行き止まりだ」

国立オペラ座の横から、ちょうど道路の縁石の上にカール1世が歩み立ちふさがるのが見えた。

進路を変えるか？

いや、その間に後ろから亡霊が襲い来るだろう。

「さあ私の胸へと飛び込んでくるがいいッ！旅人よッ！貴様の旅はここで終わりだッ！」

残り3メートルッ！

2メートルッ！

止まるか？

いや、このまま突っ込むんだッ！

「では」

針を通した時のような、小さな穴が心に開いた気がした。

疑念、という穴だ。

一つの疑念が僕の意識を奪う。

唾を飲み込み、0.1秒目が泳いだ。

・・・だがいい。

これで死んだら、それが運命なんだッ！

「遠慮なくッ！」

身を低くして突っ込む。

その瞬間、僕はジャケットの胸元に手を突っ込み、そこに入ってい

た物を思い切りカール1世へと投げた。

「ニヤアアアアアアアアアッ！！！」

猫が、彼の身体に触れる前に鳴いた。

意思があつて鳴いた訳じゃないし、これから起こることを予測して

鳴いた訳でもないだろう。

ただ鳴いただけの猫が、宙を舞う。

「お、おおおおおおおおおッ」

カール1世の身体が、僕の投げた猫にブチ辺り、身体が【混ぜる】。

カタコンベの中で脳味噌腐っちゃったのか？

そしてそのまま、カール1世の真横を、トップスピードで駆け抜ける。

「この勝負、僕の勝ちだアアアアアアアアッ！！！！！」

恨めしそうな声、風が僕を追おうとしている。

しかし、ここまでだ。

圧倒的に、疑いも無く僕の勝ちだ。

永劫の闇を歩く者は、永遠に歩けばいい。

夜のウィーンに、小路の隙間、石畳の割れ目に染みわたる雨の様な遠吠えが聞こえる。

それは濁流のように僕を包み込み、しかし勢いは優しく、むしろ何かを失った悲しみを備えて柔らかかった。

カール1世達は、それに気付いた様子はない。僕にしか見えない。

『聞こえるかい？』

「ああ、聞こえるよ」

背後で車が走っている。

あの独特のふぁーんという通過音が、やけに耳朵へ響いた。

「あれがか？」

聞くまでも無かった。

そう確信しているのだから。

『そうだよ。君が得るべきもう一つの【槍】、その姿さ』

通りの人が僕を見ている。

なんとなく気配で分かった。

だがこの身体を動かさうとは微塵も思わなかった。

動けなかったのだ。

恨めしそうに、リンクと車道の間で僕を睨む亡霊たち。

その遙か後方、シュテファン寺院のテッペンに坐するタテガミを持った獣。

僕はリンクの中へ、再び戻ることになる。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

52話【岸部露伴は動かない10】（後書き）

短くて済みません。ちょっと話の都合上、ここで切つといた方がいいかと判断しまして。

ちなみに年末年始をまたぎますが、仕事上休みなんかないので（笑）、仕事の合間に書かせて頂きます。正月に合わせてアップ、という事はあるかもしれませんが、基本的に早く書き上がれば書き上がった端からアップさせて頂きます。いつもご愛読ありがとうございます。

53話【岸部露伴は動かない1-1】（前書き）

申し訳ありません・・・

年末に更新すると言いながら・・・

結局仕事に追われると言っ・・・

53話【岸部露伴は動かない11】

PM14:02 ウイーン シュベヒャート国際空港 1F女子ト
イレ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

地鳴りのような耳鳴りが聞こえる。

自我と身体がズれているのがわかる。

動かなくては、と思うほど身体は動かない。

「付き合う人たちは選んだほうがいいわよ？」

年下の妹に言い聞かせるような温度で女性は言った。

「イタリア人はフランス人と同じくらい血が好きで女たらしで脳みそが足りないの。だから間違ってもつるんだりなんかしちやだめ」

まだ静は動けなかった。

脳が現状に追いついて行けない。

ただわかるのは、死神が自分の首へ大鎌をかけているということだけ。

「ねえ・・・アタシ達お似合いだと思わない？」

突然女性が話を変えた。

「静さん、綺麗よ。一目ぼれしちゃう位。でもアタシと居ればもっと綺麗にしてあげられる。もっと、もっとよ。そして二人でウィーンに住みましょう。アタシが仕事から帰って来ると、貴方が部屋の中で食事を作っているの。エプロンはアクアマリンを溶かしこんだ様な薄いブルーが良いわ。そして貴方はアタシを見て言うの。『おかえりなさい、シエーア』って笑顔で」

そう言うと、女性は自分の身体を抱きしめ、身もだえするようになつた。

「アタシの名前は【シエーア】、スタンドは【アイ・パラライズ】。

貴方はこの口紅を塗られた時から、アタシに恋をするの。ずっとアタシに【痺れて】しまうの」

いたずらっぽく笑うシェーアは、舌を出した仕草まで可愛かった。

「も、目的は何なの？」

「あら、痺れてる筈なのに喋れるの？流石だわぁ・・・いいわ。教えてあげる。アタシの目的は、貴方を虜にして、【SPW財団】を乗っ取ること。でもそんな組織の目的なんてどうでもいいわぁ・・・アタシと逃避行する気は、ない？」

そう言つてシェーアは、再び静の唇にルージュを塗った。

今度こそ静の四肢から力が抜け、身体は完全にマヒしていた。

そのくせ触感だけはあるから、静は気が狂いそうだった。

シェーアの手が静の身体を服の上から撫でる。

それから太股を何度も手のひらで、指先でつたう。

そのうちその指先はスカートの中へと、ゆっくり伸びていき、静の恥部へと登る。

声の出せない静は、なされるがままであった。

「静さん・・・アタシと良いことしましょう・・・」

そう言つてシェーアは眼をウツトリとさせる。

シェーアの右手は自然と静の背中へと手が回り、頭が下がって仰け反ってしまう。

彼女は静の身体に夢中だった。

だから静しか気付いていない。

仰け反った状態から、静の眼には、トイレの壁に背を持たれかけて立つアリシアの姿が逆さまに映った。

そのアリシアの口元がニヤリと曲がる。

カール議員が何者かに暴行されたというニュースは、今日大々的に報道されていた。

犯人は報道されてないが・・・まあ僕だと話は着いているんだろう。僕はテレビを消して、ホテルのソファに身体を投げた。

朝の8時位だったか。

支配人が警察官と一緒に来たが、「ヘブンス・ドア」で僕が岸部露伴ではなく日本人旅行者だと信じ込ませ、追いつ返すことに成功した。

相手に漫画さえ見せられれば、入口が一つしかないこのホテルも案外僕にとっては有利な隠れ家となった。

今はドアの外に漫画の原稿を張っている。

部屋の前を通る人間は、僕が岸部露伴だと言う事を完全に忘れている。

だからこれだけのんびりしている訳で。

トゥルルルルルルル

電話か。

面倒くさい、いったい誰だこんな時に。

そう思う反面、肝を冷やした。

電話口では、「ヘブンス・ドア」の能力は使えない。

しかし鳴らしておけば踏み込まれる可能性も高い。

そうなったら能力を発動できるかどうか・・・

ここは出方を窺っておくか。

僕が大人しく出れば、身柄拘束もあるまい。

受話器を取った。

「Hallo?」

女の声だ。

捜査員か?

「ROHAN先生ですよね?」

「………ああ、キミか」

「ああじゃないですよ！」

数日前にサイン会の打ち合わせをした女性編集者だった。ということは……しまったな。

今何時だ？

「なんでまだホテルなんですか！？いい加減にしてくださいよ！」

「すまない……警察に事情を聞かれていてね」

あながち間違っちゃいない。

「ポリツアイならこちらにも来ましたが……何かしたんですか？」

「いや、心当たりは無いんだ。警察はどうした？」

「昨日は私と居たと言っておきました。詳しい話はサイン会の後聞くと言ってますよ！もう兎に角早く来てください！編集長も困りますよ！」

「文句は警察に言ってくれ。場所は？」

「ホテル・ザツハーのロビーですよ！何度説明したと思ってるんですか！ここ貸し切るの莫大な金額がかかってるんですからね！」

「ああ、そうだったっけ。直ぐ行くよ。15分待っててくれ」

受話器を置くと、身支度を始めた。

ちよつとみつともないけど……まあ外国人ってこういうの好きだろ。

あとは財布持っていけばいいか。

どっかでカール議員と会えればいいんだが……

ブツブツと呟きながら部屋を出る。

そう言えばホテル・ザツハーって、リンクの中じゃなかったか？

一週間前 AM10:27 リンク内 ホテル・ザツハー一階

ホテル・ザツハーは由緒正しいホテルだ。

何年やってるんだろう……

だがヨーロッパの要人、それも歴史を動かしてきた革命家、議員、文豪が滞在し、ここで交流を図ってきた事は間違いない。

オーストリア独立運動の拠点だったというのも有名な話だ。

ヨーロッパを動かす拠点、とも言えるかな。

そんなところでサイン会っていうのもどうなんだろう。

編集長とホテルにコネがあったらしいが・・・僕の漫画ってそんなに売れてるのか？

まあいいんだが。

「やつとご到着ですか、ROHAN先生？」

藍色のスーツ姿をした女性編集者が、ファイルケースを肩でトントンしながら僕を見て溜息をついた。

名前？

覚えちゃいない。

杉本美鈴って名前じゃないだけありがたい。

「ああ、会場はそっちかな」

「ええ・・・でも、その格好で？」

そう言うとな彼女は僕の服装を見た。

でも外人ってこういうのが好きだろ？

この、【ピンク・ダークの少年】のTシャツ。

「せめてジャケットを着てもらわないと・・・ファンにもそういう対応を求めていますし」

冗談じゃない。

僕は【ピンク・ダークの少年】を【見せていないと、能力が使えない】んだ。

「これでやる。じゃなきゃ無しだ」

「困ったこと仰らないでくださいよ。これは・・・バンドデシネ（コマの大きな本の事）がこのような文化的価値を認めてもらえるのは、奇跡なんですよ！？早く着替えてくださいー！」

冷や汗がつつた。

会場には警察官が居る筈だ。

僕を捕まえようと、な。

そして昼だから幽霊たちは出てきていないが・・・何処かで僕を狙っている筈・・・

『困ることはない』

・・・いきなりどうした。

『着替えるといいだろう』

お前は僕が捕まってもいいののか？

何をいきなり言い出すんだ。

『君の能力は使えなくなるかもしれない。でも室内なら、』【Man

With a mission】が手を貸せる』

どういうことだよ。

『信じるんだ。今この場を逃すことにメリットはない』

この僕が能力を捨てて、2000年前の能力に頼れって言うのか？

『モメてしまえば、君の体は拘束されるだろう』

困る。

『そうだろうね』

・・・どうすればいい。

『着替えるんだ。僕の本当の力を見せてあげよう』

タキシードに身を包んだ僕が会場へ足を踏み入れると、またたく間にシャッターが焚かれる。

同時にどよめきと、拍手が僕を包む。

手を上げて対応するが、笑顔なんてどうやって作ればいいんだ。

そう思い、真顔のまま椅子へ座った。

女性編集者が横に立っている。

ああ、そうそう。

こいつ日本語が達者だったんだっけ。

まあ僕はドイツ語が喋れるから関係ないけどね。

「それでは、ROHAN KISHIBEの新作発売記念、またウ

「イーン文化賞受賞記念会を開きたいと思います」
アナウンスがあった。

「誰だ？」

「知らない女だ。」

「っていつか僕、そんな賞いつ取ったの？」

「今からですよ！」

「ああ、授与式なのこれ。」

「だとすれば、なるほど。」

「国家的な文化勲章授与と考えれば、確かにホテル・ザッハーでやるか。」

「なるほど、なるほどね。」

「日本の編集者に言われるがままウィーン迄来たけど、そんな理由だったのか。」

「そう言えば東京の出版社がなんか言ってたっけ？」

「憶えてないけど。」

「それで、その後サイン会か。」

「なるほどどうして、警察も大人しくする筈だ。」

「文化勲章じゃあな、その授与式一つ潰すマネなんか出来ないだろう。それで、終わった後に事情聴取と言う事か。」

「それではROHAN先生から一言頂きたいと思います」

いきなり言われた気がしたが、どうやらあらかたの紹介が終わっていらしい。

「女性編集者が通訳に入ろうか戸惑ってた様子だった。」

「彼女を手で制して、僕はマイクを握る。」

「喋りやすいように喉元のネクタイと首の間に少し隙間を開けると、」

「周りが見えてきた。」

「警官が・・・全部で12人か？」

「警備なのか捜査なのか・・・まあ僕を逃がさない為なんだろうけど。」

「ええ、どうも。岸部露伴です」

「拍手が起こる。」

「本日はこんな名誉ある賞を頂き、本当に嬉しく思っています。また、ウィーンに來られたことも私の人生の中で大きな転換となりそうです。非常にインスピレーションを掻き立てられる街ですね。次の作品はウィーンが舞台になるかも」

再び拍手が起こった。

その後ある程度適当にスピーチをすると、マイクを置いた。

司会の女性は満足そうに、ゆっくりと頷いた。

紅い唇が浮いて見えない。

良く見れば美人だった。

「それでは授賞式へと移りたいと思います。本日はご多忙の中、自他共に認めるROHAN先生のファンに來ていただいております！本人曰く、僕がウィーンで一番【ピンク・ダークの少年】を読み込んでいるという事ですから、その熱意は秤しれません！」

そんな奴居るのか？

気持ち悪い。

仕事しろよ。

「それでは登場して頂きましょう！現国会議員、カール・ハプスブルク＝ロートリングゲンです！」

嘘だろ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

53話【岸部露伴は動かない11】（後書き）

次回、アリシアの正体が明らかに!？（嘘）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8750m/>

ジョジョの奇妙な冒険第6部 TO THE NEXT JOJO「チェンジ・ザ・ワールド

2012年1月6日17時54分発行